
バグキャラを継いだチートキャラ

yuuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バグキャラを継いだチートキャラ

【NNコード】

N3692X

【作者名】

yuuuki

【あらすじ】

麻帆良学園に教師としてやってきた英雄の息子。新しい生活に胸を躍らせるネギだが、実は麻穂良ではもう一人の英雄の息子が高校生として暮らしていた。英雄である父に憧れるネギと、英雄を嫌いする彼が出会った時、新しい物語が始まる。この物語は魔法先生ネギま！の二次制作作品です。登場人物の立ち位置や性格が違つたり、アンチがあつたりするかも知れません。それを理解したうえでお読みいただければ幸いです。後、気軽にご感想や評価を頂けると嬉しく思います。

プロローグ 始まりの日の前日（前書き）

始めまして、yuuuki（何の捻りも無い名前）と申します。
ここでの投稿は初めてですので、始めのうちはかつてが分からず
右往左往してしまうかもしませんが、よろしくお願ひします。
追伸、主人公の設定どうを乗せた方が良いという意見が有れば、載
せます。

プロローグ 始まりの日の前日

太陽が隠れ月が顔を出してからもう何時間もたつたころ、麻穂良学園女子中等部一年の綾瀬夕映は大鬼に追われていた。

「ほらほら、もうええやろ嬢ちゃん。痛くせえへんから止まりいや止まれといわれて、止まる馬鹿はいなーのです！」

夕映は叫びながら振り返りかかる。その足は止まらずに、背後に気を付けながら走っていく。

目の前にはどう見積もっても自信より格上の敵、こん棒を持つた大鬼がせまっていた。

「（のどか、パル、ごめんなさいです。私は今日、死んでしまうかもしだせん）」

逃げられないと悟った夕映はそつ、心の中で謝りながら足を止めた。

もし夕映が死んでしまつても、その死因は公にされることはない。科学が発展を遂げた現代で妖怪に殺されたなんて誰も信じてくれないだろう。

それはとても、悲しいこと。

「ん？ なんや、やつやく諦めたんかい

「はー。もう、逃げるのは止めです」

「そか、なら、『ごめんな。これもし』」となんや「いえ、諦めたわけ
ではないです」はい？」

クルワ・クルクル・クルクルリ　来たれ水精10柱

「魔法の射手　連弾・水の10矢！」

「ぬおおつ！」

夕映の手に持つ杖から放たれた矢が大鬼に一直線に向かっていく。
はじけ飛ぶ水飛沫の後、大鬼の方をみるが大きな傷はおつてはいな
い。

動じることなく大鬼を睨む。

「それでも、足搔かせて貰うです」

「はっ、ははは！ええなあ、その眼、戦う者の眼や…逃げまわるの
を追うのは嫌やつたが、向かつてくるのを潰すのは、嫌いやないで。
さあ、嬢ちゃん。死合おつや！」

大鬼のこん棒が夕映の身体に迫る。
なんとかかわして、呪文の詠唱を試みるが

「クルワ・クルクル・クルクルリ　まほうせんせものみな　焼き尽
くす　淨北の炎　破壊の王に　して再生の「遅い！」　つく、」

それよりも早く大鬼のこん棒が振り下ろされた。

「がつはつは！そんなもんかい、西洋魔術師！」

「つー戦いの歌！」
カントウス・ベラーグス

魔法で身体能力を上げて、敵の懷に潜り込む、拳は抉りこむよう打つ。

「師匠直伝！羅漢適当に左パンチ！！」

「・・・殴り合いも出来るんかと感心したが、なんや、その蚊に差されたみたいな拳は」

殴った夕映の拳の方が痛む。

「（師匠ーー）の技、全然効いていません！」

そう思いながら敵を睨むが、もう打つ手は残されていなかつた。

「終いや、嬢ちゃん！」

「かつはつ！」

大鬼のこん棒が夕映の体を吹き飛ばす。

小さなその体は「ゴロゴロと転がつて、樹の幹にぶつかつてとまる。

「がつはつはーやっぱ、西洋魔術師は打たれ弱い！」

大鬼の笑い声が夜空に木靈する。

コンビを組む筈だつた魔法生徒の人人が、定時になつても来なくて、一人で警護しなければならなかつたことを恨みながら、夕映は目を瞑つた。

「このか、パル。」めんなさいです。私が居なくなつたら、哲学の素晴らしいさを少しでも多くの人に伝えてください」

「じゃあな、嬢ちゃん」

大鬼のこん棒が迫る。

そして、そのままこん棒は振り下ろされた。

「、、、誰や、兄ちゃん」

「えつ？」

「、、、テメエ、、、」

夕映の頭はこん棒に潰され、熟れて地面に落ちた柘榴のよつになる。そう、そうなる筈だつた。そうなる運命を変える者がいた。振り下ろされた、こん棒を片手で受け止めている男が夕映の目の前にいた。

魔法も氣も使つてゐる気配はない、身の丈二メートルを超える大鬼の力に、筋肉だけで拮抗しているとでもいうか。ありえないことだつた。

「テメエ、なに俺の弟子ぼこつてんだ。殺すぞ」

男の怒りに満ちた声が冷たく響く。

「ああ？なんや、偉い威勢のいい兄ちゃん、、、ラカン直伝。羅漢適当に左パンチ！！」ぐはらべだつ！

大鬼は星になつたのだ。光線の様なものがパンチを喰らつて吹

き飛んでいった。

夕映はあんまりの展開に敵ながら同情してしまってしつになつた。

「、、チートキャラです」

「なに訳わかんない」と言つてんだ?大丈夫か?」

そう、地面にへたり込む夕映に手を差し伸べるこの男こそ、夕映の魔法と体術の師匠にしてこの物語の主人公。

「羅漢狂氣!^{らかんくるき}人呼んで、^{バクキャラ}理解不能を継いだ^{チートキャラ}ご都合主義です!」

「だからなに言つてんだよ。遂に本物の馬鹿になつたか?馬鹿ブラツク」

大鬼に襲われていた「テ」弟子（「テ」の広い弟子）を助けた後、狂氣は世界樹広場に腕組んで立つていた。

隣には「テ」弟子が、「馬鹿布拉ック」、「バカレンジャー」は師匠の高校にまで伝わるほど有名ですか、などと言つて落ち込んでいるが、狂氣は放置するようだ。

幸い、骨が折れてなかつたことに安堵しながらも、狂氣は苛立ちを募らせていた。

「狂氣君。少しばかり着いたらどうだい?」

「落ち着けだと?」

類を搔きながらダンディもどきの高畑が話しかけてくる。

狂氣はその言葉に思わず睨み返してしまった。

「ふざけるなよ。俺の弟子が死にかけたんだぞ? というより、俺が助けなきや死んでたぜ? 大体さ、夜の警護は一人一組が基本だろ。なんで、俺の弟子は一人だけで駆り出されてるわけ?」

広場に集まっている魔法先生と魔法生徒、もとい、正義の魔法使い（笑）を見据えながら狂氣は言つ。

大半の奴は顔を逸らす。答える気すらないことだらう。

「（ふざけるな）」

狂氣の怒りは高ぶっていく

隣に居る夕映が狂氣に小声で耳打ちする。

「定時になつても人が来なかつたのです」

「はつ、なるほどな。そりや、夕映が一人で警護するのも当たり前だは、はははははは、今日、夕映と組む筈だった奴、前出でこいよ」

一人の男子生徒がオズオズと前に出てきた、弁解しようと口を開くが聞く耳持たずに狂氣はその男子生徒をぶん殴る。

さらに倒れた処に追撃で蹴りを入れようとする狂氣を止める者がいた。

影で出来た人形に足を掴まれた狂氣は、苛立ちを込めて一人の女子生徒を見る。

「氣色悪いな。離せよ、高音」

「そこまでになさい。やり過ぎですわよ」

「やり過ぎだと？ふざけるな。夕映は死にかけたんだ、なら、死ぬ寸前までやつてやつとあいこだろ」

「つ、なんて暴力的なっ！貴方はそれでも立派な魔法使いを目指す者ですか！」

高音の言葉に狂気は嘲笑を返した。

「立派な魔法使い？はつ、連續殺人鬼を信仰するような魔法使いなんざ、目指したことねえよ」

「なつ、あ、あなたつて人は！毎回毎回、そのようなことばかり言つて！」

「やんのかコラー！」

高音の影から人形が作りだされていく、対抗して狂気は拳に氣を込める。しかし、両者がぶつかり合つこと無かった。

「師匠、私は大丈夫ですから落ち着いてください。地の口調が出ていますよ」

「高音君も落ち着きなさい。確かに殴ったのはまづかったかもしないが、彼がさぼった所為で夕映君が怪我をしたのは事実だ」

夕映と高畠が一人の間に入り仲裁される。狂気は拳に込めた氣を四散させる。

それを確認した夕映が俺の隣に戻つて來た。

「・・・悪かった。止めてくれてありがと」

「いえいえ、慣れますから」

弟子の言葉に狂氣は「そばゆきを感じ、冷静にならうと努める。

「（弟子に斬められる師匠つて何だよ。あの話題が出ると、熱くなる性格はいい加減に変る努力をしないといけないな）」

「ふおふおふお、いやいや、若者は元氣だのお。結構結構」

そんなことを考へていると、耳障りな笑い声と共にぬらりひょん型エイリアン「人間じやつー」、「自称人間な後頭部が異型な妖怪があらわれた。

「酷いの。結局人間じや無いじやん」

「爺がじやんとか言わないでくれませんか？気持ち悪いんで。全身の関節曲げて逆にカツコいいみたいな体格にしますよ」

「こわいーーの高校生、怖つーーーー、狂氣君、今日は荒れとるのよ」

「当たり前です。話は聞いていたでしょう？可愛い弟子が死にかけたんだ、黙つてなんて居られませんよ」

そう宣言する隣で夕映の頬が赤くなっていたことを狂氣は知らない。

「まあ、そうじゃう。狂気君の怒りはもつともじや、やこで氣絶している彼には仕事をさせた罰を与えるから、安心してくれ」

「それだけじゃ足りませんよ。今後また、こんなことが無いように夕映とコンビを組む奴は選んでください。間違つてもムカつく俺に敵わないからって、弟子にあたるような自称正義の魔法使い（笑）とは組ませないでくださいね」

狂気は舌打ちしながら周りを見る。

「（俺に言いたいことがあるなら直接言えば良いものを、根暗な奴らだ）」「

此処に居るのでまともなのは龍宮と刹那くらいかもしれないと狂気は考える。

瀬流彦先生はまだましだが、その他の殆どの魔法生徒、魔法先生は狂気に取つて信用なんて出来る人間ではなかつた。
立派な魔法使いを目指している者の殆どは正義と言つものがある一面から見た物でしかないことを知らない。

教師としてはまともな高畠も魔法関係者としては熱烈な英雄信仰者だからこそ、信用は出来ない。

学園長は妖怪だし「関係無くねつー。」

「ふむ、狂気君の意見はわかつた。善処しよう。では、本題に入つてもいいかの？」

「ヽヽヽああ」

素つ気なく返事をして、狂気は学園長から距離を取る。

他の魔法生徒から離れる為、だいぶ下がるが夕映はトコトコと後ろをついてくる。

「（結構可愛い奴だな）」

「はい、ラブ臭ですか！」

「キャラも違うしそれも違う

ふざけたことを抜かすデコ弟子に狂氣は、デコピンしてから、学園長の話に耳を傾けることにした。

「さて、みなも知つておるじやうつが、明日、麻穂良学園に教師としてネギ・スプリングフィールド君がくる。あの、ナギ・スプリングフィールド君の子供じや

「　　おおー　　」

「（連續殺人鬼の息子が来るのがそんなにうれしいか？）」

「そのネギ君はオックスフォードを主席で卒業するほどの実力を持つているが、いかせん、10才の少年じや。先生としてやっていくるかは不安じやが、まあ大丈夫じやうつ

「　　セーですねっー。」

「（10才の子供が教師つて、幾ら学園結界の認知誤差が働いても、異常だつて気づく奴が出てくるだる。そして10才の子供に教師が務まるとは思えない）」

「まあ、しかしのぉ、フオローはしなければならん。魔法と仕事諸々で。そこで、ネギ君を魔法と私生活の両方で支える補佐を付けようと思つておる」

「……モーですねー。」「

「（当然だな。田舎から出でたなら、その分、魔法の秘匿にも疎いかもしないし）」

「モードじや、頼んだぞ。狂氣君」

「……はい？」

「つむ、了承してくれるのじやな。ではこれで解散！」「ちょっと待て、爺！」、「なんじやい」

わけわからぬえ、分け分かんぬえ、ワケワカンネエ、狂氣の頭が混乱していく。

「ぞけんじやねえぞ。なんで俺がそんなことしなきゃいけねえんだ」「師匠、地が出でているのです」「いけないんですか！」

「そうです！こんな暴力的な男に任せたら立派な魔法使い候補の末来が閉ざされてしまします！」

高音は声を荒げながらさういう。顔は赤くなり、興奮していた。
狂気にとつて今回ばかりは、高音の言葉はありがたかった。
子供のお守なんて、やりたくなかつた。

「ふむ、それはのぉ。狂氣君が、中立だからじやよ」

「、、、じうじう意味ですか？」

疑問符を浮かべる高音にふおふおふお、と耳障りな笑い声を出しながら近右衛門は言つ。

「もし、狂氣君以外の誰かがネギ君を見ればきっとその者は英雄ナギ・スプリングフィールドの息子として見る。それでは、駄目じゃ。偏見と偏見を生む。ネギ君の為にならん」

「それは、」

高音が唸る。学園長は笑つ。狂氣は言葉を吐く。

「なら、学園長。俺がネギ・スプリングフィールドを連續殺人鬼ナギ・スプリングフィールドの息子として見るかもしけない危険性に關しては、じうお考えで？」

「（最悪、復讐で殺すかも知れませんよ。）」

言外に、やう叫げる。

「ふおふおふお、君はそんなことはせんよ。もし、君がそういう考えの持ち主ならワシの孫は今日まで無事でおらんかった」

舌打ちをしながら狂氣は睨むのを止めた。

「、、、どうあれ、子供のお守なんて御免ですよ。学校だつてあるんです。時間を割いている暇なんてありません」

「常に着てこる必要はない。必要な時、少しだけ手を貸してくれ
ればよい」

「……」

「あれこの、お皿付役がいなことワシ、贔屓しけりよ~。」

ワインクをしながらいつの間にか衛門に狂気は苦立ちを募らせた。

「ウハハハ、ハ、の、糞爺」

「ふむふむふむ。まあ、やつこひ訳で、頼んだぞ。狂氣郎」

「ハハハ、狂氣はネギ・スプリングフィールドの物語へと引き込まれていくことになった。

明日から碌なことにならないことになりとは確定だらう。

「取りあえず、学園長。月のなに夜は背後に『反』を付けて歩けよ」

狂氣はハハハつて、その場を去つていった。

プロローグ 始まりの日の前日（後書き）

とりあえず、プロローグの終了。次回からネギ君が登場します。た
ぶん、、

もうじて一人は対峙した。一瞬だけだけどね（前書き）

主人公の生活環境を書こうとしたら、ぐだぐだになってしまった。
低クオリティは否めませんが、楽しんでくれたら幸いです。

そうして一人は対峙した。一瞬だけだけね

麻穂良学園。埼玉県の何処かにある学園都市。

バイク通学スケボー通学キックボード通学ローラースケート通学が許可される何でもありの学園である。

冷静に考えれば中学・高校になつてローラースケート通学とはどうだろうか。

スケボーにしたつて改札口を飛び越えるつて程の跳躍を見せる生徒が何人もいるとは、常識を超越しているではないだろうか。プロか、プロなのだろうか。

そして、極めつけは麻穂良学園の象徴、世界樹。

「「異常だろ、この学校。ん?」」

狂気が重なつた声がした方を見ると、丸眼鏡をした大人しそうな女の子がいた。中学生くらいだろう。夕映が着ている制服と同じ制服をきていた。

「おはよー」

「えつ、はー。おはよーじやこます」

挨拶もそこそこに狂気は高等部の方へ、女の子は中等部の方へと歩いて行く。

学園長から新任の先生の出迎えを頼まれたが、狂気は断つた。新任の先生乃向かう先である麻穂良学園女子エリアは狂気の通つている高校と反対方向だから、効率的に考えて、非常にめんどうだったのだ。

「はあ、糞めんどうくせえ」

狂氣はめんどうなのが嫌いだ。

「（なんで俺は高校生なんてやつてるかな）」

「それは私のセリフだろ。なんで私は女子中学生なんてやつてているんだ」

前から金髪少女が現れた。腰に手を当て、堂々と道の真ん中に立つその姿はある種の威厳に満ちていた。

「（心を読むなよ。エターナルロリータ）」

「誰がエターナルロリータだ！」

本日一度田のため息をつきながら、狂氣は田の前で飛び跳ねている幼女？と着き従つている従者を見る。

「おはよー、茶々丸」

優しい口調で微笑みながら狂氣は挨拶をする。

「おはよーござこます。狂氣様」

「いい天氣だな」

「はい。洗濯物がよく乾くでしょー」

着き従つている従者、絡繆茶々丸は表情こそ変わらない物の、温か

な口調でわう返す。

「ああ、そうだな。じゃあ、学校があるからもつ行くな。また、今夜にでも」

「はい。お待ちしております」

一礼した茶々丸に笑顔を送つてから、狂氣は足を踏み出した。

「さてと、早く行かないと遅刻するな」

「ヽヽヽ、おい、従者に挨拶して主は無視とさどうこう了見だヽヽヽ」

ブルブルと震えながら無理やり笑顔を造つている少女、エヴァンジエリン・A・K・マグダウェルを見て、狂氣は冷や汗をかく。
「こ」はひとつ、フォローを入れておかないと後が怖いと。

「ヽヽヽ、早く行かないと遅刻するぞ？今週は遅刻者ゼロ週間つて知つてるだろ？」

「ななあああつー貴様はあ！他に言つことは無いのか！」

キレたエヴァを置いて、狂氣はその場から逃げた。

「（悪い、茶々丸。フォローを頼む）」

と、田配せをしながら。

時間は過ぎて、大して問題も起きないまま（当然か）いつも通りに

授業が終わった（日常だな）あと、『弟子。もとこ夕映のケータイに狂氣は電話を掛ける。

「『弟子。今、少しいいか？』

『その呼び方は、師匠ですね。何の用でしょ？』

「ああ、今日からお前のクラスに来た例の蓮根『ネギです』、ネギは上手くやつてるかと思つてな。どんな感じだ？人参『ネギです』、葱は『

『、、、師匠、一つ聞きたいのですが、ウォールズという場所では魔法は秘匿されていないのですか？』

「ん？まあ、たしか山奥の田舎だからな。日本よりはフランクだと思つが、、、問題があつたのか？」

『ネギ先生。黒板消しが落ちてぐるのを魔法で止めていたのです

「、、、、馬鹿か？』

思わず起ひる目眩に苛立ちを覚える。

「ばれたのか？魔法」

『いえ、けれど私のクラスの神楽坂明日菜さんは何かに気付いたようですし、長谷川千鶴さんは苦笑いを浮かべていました』

「、、、そつか、わかつた。悪かつたな。こんなスパイみたいな真似をさせて

『 いえ、今後も何かあつたら連絡します』

「 ああ、頼む」

電話を切つて狂氣はため息をつく。

「 ふざけてんのか？ その子供先生とやらは？ 魔法の秘匿も出来ねー
なんて、フォローする以前の問題だ！」

けど、幸いにもまだ誤魔化せる範囲だと気を取り直して、取りあえず学園長に進言して注意を促してもうつかと考えた狂氣は学園長室へと足を向けた。

学園長室へと向かう為、狂氣は女子中学エリアへと向かっている。なんで学園長室が女子中学の校舎の中にあるのだろうか、いきすりいことこの上ない。

狂氣が当然の疑問にイラつきながら歩いていると、前に大量の本を持つた女の子が階段を降りているのが見えた。

「 （危ないな、あんなに大量の本を持ちながら歩いてたら、落ちるんじやないか？ ）」

狂氣が心配をしていた傍から、女の子は足を滑らせた。

「 あつー。」

そのまま階段から落ちる。

「（魔法で助けるか？いや、見られたら不味い。なら、）」

「間に合えよっ！」

「え？ きやつ！」

狂気は階段の縁から飛び降りて、空中で女の子をキャッチする。これなら、まだ人間の域を出ない超人的動きで誤魔化せるだろと思いましょう動いた。

女の子を無事救えたことに安堵のため息をついてから、狂気が顔をあげると

「、、、、、」

「、、、、、」

そこには見るからに魔法の杖ですよと主張する馬鹿でかい杖を構えた子供がいた。

「（ああ、わかつたよ、分かりましたよ、ワカツチマツタヨッ！）」

狂気は当然のように子供の正体に気づく。

杖を構えたその姿は十中八九、誰が見ても、魔法使いの姿だった。

「（なるほどね～、魔法を秘匿する氣すらないんだ。はっはは、舐めてんじゃねえぞ、ガキ）」

「あ、あの、、、あれ、ネギ先生？」

「え？ わつ、わわつ！」

狂氣が腕に抱えた女の子が狂氣の顔をみた後、目の前の子供を見てそう言つた。

子供、ネギ・スプリングファイールドは慌てて杖を隠そうとしていた。

「（取りあえず、）この子を降ろすか。いつまでもお姫様抱っこは俺も恥ずかしい」

「ショット、怪我とか無いか？」

「あ、ははははい。あ、ありがとうございます」

狂氣の腕から解放された少女、富崎のどかはようやく事態を飲みこんで、顔を赤くしながら何度も頭を下げた。

「いや、無事なら善かつた。次から気を付けるよ。本持つて歩き過ぎだ、馬鹿」

「あうつ、す、すみません」

最後に忠告を加えた後、狂氣はネギの方を見る。

「ちよつと来い、ガキ」

「へつ？ わわつー」

取りあえずOHANASIでもしようかと木陰へ向かつた狂氣の前に鈴の髪飾りを付けたツインテ少女、神楽坂明日菜が現れた。

「（なんだよ、このエンカウント率）」

思わずため息がでる。

「な、なんなのよ、アンタ達。アンタは杖構えて何しようとしてたのよー。アンタはなによ今の動きー。アンタ達、普通の人間じやないでしょー。何者なのよー。」

「え、ええーーーそ、その僕は決して魔法使いじゃなくて「縮地だ」え？」

動搖するネギを置いて、狂氣はまっさきつとしゃべり出す。

「縮、地？」

「ああ、俺の今の動きは縮地っていう武術の一芸だよ。疑うなら武術を嗜んでいる奴にでも聞いてみる。そこガキはどうだか知らないが、俺は普通の人間だよ」

それだけ言つて、狂氣はその場を後にすることにした。
もういいめんどうだという感情が狂氣の心を締めていた。
ネギが助けを求めているが、狂氣の知ったことではない。

「（自分で起こした問題だ、自分で何とかしろ）」

明日菜に問い合わせられるネギを無視して、狂氣はその場を去つていった。

ネギ・スプリングフィールドが麻穂良学園に来た日。夜。
狂気はエヴァの家を訪ねていた。

ベルも鳴らさずに扉を開けると、待ちかまえていたよう屹立ちで狂気を迎えるエヴァの姿があった。

「来たか狂気。さあ帰れ。即帰れ。すぐ帰れ！」

「唐突にどうしたんだ？」

狂気は首を傾げる。

「マスターは今朝、狂気様に冷たくされたので拗ねておられます」

「拗ねてなどおらんわー！ふざけたことを抜かすなよ、茶々丸！巻いてやるぞ、このつ、このー！」

「ああ、いけませんマスター。そんなに巻かれでは

「はいはい、テンプレル」

いつも通りの光景を横田で見ながら狂気はズカズカとエヴァの家へと上がっていく。

人形が溢れたとてもファンシーな家。
溢れる人形の一つに狂気は挨拶をした。

「元気だつたか？チャチャゼロ」

「ケケケ、イツモドオリ、動ケネエンダ。元気モクソモネー！」

「そりゃそうだな。髪、といてやるからじつとしてろよ

ソファーに座る人形、チャチャゼロを膝に抱えて鞄から櫛を取りだす。

「ヤサシクシャガレヨ」

「ふつ、当たり前だろ」

丁寧な手つきでチャチャゼロの髪をすいていく。

その様子をみたエヴァはブルブルと震え、激昂しながら叫ぶ。
「、、、だから、なんで貴様は主である私を無視して従者と異様に仲が良いのだー！」

「なんでもって、、チャチャゼロも茶々丸もエヴァの家族なんだから、優しくするのは当たり前だろ」

狂氣はエヴァに笑顔を向けながらそう言つ。
エヴァは毒氣を抜かれたように静かになつた。

「お、おおふ。そ、そうか」

「ケケケ、ウマク誤魔化サレテルゾ御主人」

余計なことを言うチャチャゼロの髪を狂氣ぐぢやぐぢやにする「オイ」まあ、またとかし直すのだが。

チャチャゼロの髪をとかし終えた後、狂氣はようやくエヴァの方を向いた。

「エヴァ。悪いけど、今日も別荘を借りても良いか？」

「ん？ああ、使え使え、私の為にもな」

ニヤリと笑うエヴァを見た後、一同は別荘へと向かった。

エヴァの別荘に入った後、狂氣は紅い宝石の前に佇んでいた。

「左腕に魔力、右腕に気。合成」

その言葉と共に狂氣の身体を謎のオーラが包み込む。
その様子見てエヴァは笑いながら囁く。

「ふんっ、毎度のことだが究極技法である咸卦法をその年で完全に
扱うとはな、タカミチの奴が見たらなんといつか。流石は奴の養子
だよ」

「集中するから、黙つていってくれるか」

「ああ、邪魔をして悪かったよ。存分にやってくれ。茶々丸、茶の
用意をしろ」

「はい、マスター」

エヴァは椅子に座りニヤニヤと狂氣の様子を見る。

狂氣は集中しながら紅い宝石へと咸卦法の力を送っていく。

「収縮、注入、還元、飽和、浸透、」

力の流入が安定するまで呴き続ける。

そしてようやく、狂氣の身体から宝石へのバイパスが通り、流入が安定化した。

後はこのまま一日、外の時間では一時間の間、力を送り続ける。

「よくもまあ、飽きもせずに毎日続けられるな

「約束しただろ？お前の呪いは俺が解いてやるって。、、、三年間、この宝石に力を送り続ければ無限登校地獄をぶつ壊せる位の力は溜るはずだ」

エヴァにかけられた呪いを解くため、これが毎日に続けられている。

「サウザントマスター以外は解くこと出来ない」と言われた呪いをぶつ壊すとは、流石はバグキヤラを継いだチートキヤラだ理解不能〔都合主義〕

「俺より、俺が三年かけなきや解けないと掛けた奴の方がご都合主義者だろ。天才を通り越して、天災だよ」

忌々しそうに狂氣はそう言つ。

エヴァはまずいことを言つたと思い、話の流れを変える。

「それもそうか、それより、本当に呪いは解けるんだな？」

狂氣と出会いつてから一体何度目になるか分からぬ疑問を、エヴァは問う。

「俺を信じられないか？」

「いや、信じているぞ。今年こそ、卒業をせてくれるのでうつ。」

「ああ、必ずな」

汗をかきながら狂氣はエヴァに笑顔を送る。

顔を逸らしたエヴァの顔が紅くなっていることを狂氣は知らない。

「後、たつた一年だ。待っていてくれ」

「後一年か。貴様と出会ってから、もう一年もたつたのだな」

「そつ、だな」

互いに思い出すのは、初めてであつた日の夜。

『お前が闇の福音、エヴァンジョン・A・K・マクダウェルか?』

『そう言つ貴様は新しく入学した魔法生徒か?何の用だ。悪の魔法使いを倒しにでも来たか?立派な魔法使い候補』

『勘違いしないでくれ。俺はお前の敵じゃない。味方だ』

『お前が私の味方だと?』

『ああ、敵の敵は味方。ただそれだけの話だ。大嫌いなんだよ、英雄も正義の味方も。だから、俺はお前の味方になれる。誇り高き悪の味方にな』

『、 、 、 貴様、 名は何といつ

『羅漢狂氣だ』

それが一人の出会いだった。

そうして一人は対峙した。一瞬だけだけどね（後書き）

ネギ君登場！そしてすぐ退場！

スマセン、石は投げないでくださいっ！

勘違いすれ違つ（前書き）

勘違いものと言つものを書いてみましたが、難しい。
そしてだんだん本文が短くなつていく恐怖。怖い、、、

勘違いすれ違つ

狂氣は田の前に座る学園長を睨みつける。

「学園長。魔法が一般生徒に露見したと云ひのは、本当にですか？」

たつた一言のその言葉にどれだけの危険が込められているのか、田の前で温和な笑みを浮かべる近右衛門はわかっているのだろうか。魔法がばれたということは、一般人が此方側に足を踏み入れたということだ。

現実と平和の世界から、幻想と危険な世界へと。

「ふおふおふお、つむ。ネギ君が暮らすことになつた部屋の子にばれてしまつたらしくてのお。まったく、困つたものじや」

「（同じ部屋で寝泊まりしてくる時点で、ばれるのは時間の問題だつてことがわからんねえのか？）の痴呆爺が」

狂氣は内心でそんなことを思いながらもなんとか自制する。

「それで、これからどうする気ですか？俺としては、話合の上、魔法についての記憶を消してしまおうのが一番だと思つが」

「ふむ、しかしの。どつにも魔法を知つてしまつたその女子生徒は、魔法が効きづらい体質の持ち主の様でお」

「（魔法が効きづらい体質だと、黄痴の姫御子じゃあるまじし、下手な言い訳だな）」

近右衛門の態度に狂氣は苛立ちを募らせる。

「な、り、その女子生徒には魔法の危険性を教えて、身を守るくらいのことは出来るよつになつてもらわなきやなんねえよな。師匠を着けるべやだ」

「ふおふおふお、わかつておる。君の弟子、綾瀬君と同じよつな境遇だし、その通りにするよ。歸事するのはネギ君にまかせよつと思ひ」

「、、、、、一〇才の子供に師匠が務ると、本氣で思つてゐのか?」

「成り行きを、見守るしかないのぉ」

髭を撫でながら、学園長に向かって殴打しながら、狂氣はもつなり言わずに学園長室を後にした。

苛立ちを募らせながら歩く狂氣。ただでさえ、此処は男子禁制の女子中等部の校舎だといつのに年頃の男、しかも明かに機嫌が悪い狂氣は目立ちまくっていた。

無論、悪い意味で、である。狂氣があるく先々で女子生徒達は怯えながら道を開けて行く。

そんな中、果敢にも狂氣の前に立つ女子生徒が現れた。

「あんた、此処は男子の立ち入りは禁止つて知つてゐでしょ。なにしてんのよ」

「あ？」

「な、なによ、やめやれ」

苛立ちを募らせていた狂気の口調は悪くなる。
女子生徒は少しおびえながらも「ぐく」とは無かつた。

「（つて、またよ、）この子。確かネギに詰め寄つていた子だよな）」

狂気は昨日のことと思つ出し、氣づいた。

「（魔法を知つてしまつた女子生徒つて、）この子か）」

思わず、狂気は悔しむで拳を握りしむ。

「（あのとき、もう少し俺が気にしていれば）この子が魔法界なんかに引き込まれることは無かつたんだな）」

「おー、お前。名前はなんて言つんだ？」

「か、神楽坂明日菜よ！文句でもあるのー！」

「神楽坂か。俺は羅漢狂気。なにか、困ったことがあつたらいつてくれ。出来る限りのこととする」

「へつ？」

喧嘩になると思つていたら、こきなり心配されて訳が分からないと
いう表情を浮かべる明日菜を置いて、狂気はさつと校舎から出で
行つた。

朝から見たくも無い近右衛門の顔を見て、苛立ちを募らせていた狂気が遂に怒り狂うことになつたのは、そのすぐ後のことだった。夕映のケータイから連絡があつたのだ。ネギが作つた惚れ薬の所為で、女子生徒達が暴走していると。

『あの、師匠』

「ああ？」

夕映はケータイごしでも分かるほどに激怒している狂氣に内心で怯えながらも言葉を続ける。

『その、どうすればいいのでしょうか？』

「放つておけ。禁制薬である筈の惚れ薬なんて使つた時点で、ネギはもう犯罪者だ。関わつたって碌なことになんねーよ」

『しかし、です。私の親友も薬の毒牙にかかつてしまつたようじて、放つておくことはできないかと、』

不安げにそう言つタ映に狂氣ははつきりとした口調で説明する。

「いいが、惚れ薬つてのは大抵長続きしないもんだ。人の心を操るなんて真似、簡単には出来やしねえ。あのガキが幾ら天才だからって、それはかわんねえ。時間が立てば、薬の効力は失せるよ」

『悉うですか。安心しました。ありがとうございます。師匠』

「いや、夕映こそ報告ありがとな。上には俺から報告しつくから、お前は自分と友達がこれ以上面倒事に巻き込まれない様にしろよ」

『了解です』

ケータイを切った後、狂氣は苛立ちの赴くままに壁を殴る。

「ふざけんなよ。あんなガキが「師匠」「先生」だと。どう考えてもおかしいだろ。ヽヽヽん?」

壁を殴りつけた狂氣が横を見ると、同じような姿勢で壁を殴つている女子生徒がいた。

丸眼鏡をかけたその女子生徒は昨日の朝、駅の改札の近くで出会つたあの女子生徒であった。

そのことに気が付いた狂氣が軽く会釈をすると、呆けた様子で女子生徒も会釈を返す。

「ヽヽヽヽヽヽヽ」

「ヽヽヽヽヽヽヽ」

「じゃ、また、」

「あ、ああ」

互いに気まずい沈黙の後、狂氣はそう言つてそそくさとその場を立ち去るのだった。

その場に取り残された女子生徒、長谷川千雨は立ち去る狂氣の背を

見ながら思つ。

「私以外にも、この学園の異常性に気づいている奴って、いるのかな」

そう、淡い期待を抱いた千雨が狂氣の殴りつけた壁を見て、落胆したことは言つまでも無い。

「コンクリが拳の形に陥没してやがる。あいつも変人の仲間かよ、」

「

弟子を怖がらせ、見ず知らずの女子生徒に痴態を見られた狂氣は反省していた。

幾ら、苛立ちが抑えられないからと書いて他人に当たるのはよくない。

もう、高校生なのだ。いや、実は狂氣は実年齢から言えばもっと上、成人も既に迎えたいい大人。

大人として、毅然とした態度で振る舞おう。怒りに身を任せることで子供のすることだ。そう考え、前を向いて狂氣は歩き始めたが、ふと、考えてしまう。

しかし、果たして怒りを我慢する必要などなるのだろうか。

自分がこんなにも苛立つてているのは近右衛門とネギの所為、そしてその苛立ちは正しいものではないだろ？

そう考えてしまつたらもう、止まらない。

再び狂氣の内でふつぶつと怒りのマグマが煮えたぎり始める。

「とつとと帰つて、不貞寝しよつ」

怒りを他人にぶつけないようになると、早急に寮に帰らうと心に決めた
狂氣は近道をしようと中庭を横切る。

何やら中庭で女子中学生と女子高生が揉めているが、そんなものい
まの狂氣の目に入らない。

一刻も早く帰り、この苛立ちを鎮めることこれが今の狂氣には肝要
なのだ。

真っ直ぐと、最短ルートを進んでいく。

さて主觀を変え、見てみよう。

ある日の昼休み、女子高生と女子中学生は争っていた。

争いの原因是取るに足らない理由。遊び場の取り合い、先に場所を
確保し遊んでいた女子中学生に対し女子高生がその場を退くようにな
と言つたのだ。

もし、この場にエヴァガいれば、「まるで幼稚園児の砂場の取り合
いだな」と鼻で嗤つていただろう。

しかし、そんなくだらない争いにも関わらず、両者は一歩も引くこ
とはなく。

あわや掴みあいの喧嘩になる事態になつていた。無論、それを止め
ようとする教師はいた。

ネギである。しかし、力不足も甚だしく結局は火に油を注ぐ事態に。

「今時、先輩風ふかせて物事通そんなんて頭悪いでしょあんたたち

！」

「なによ、やる気、このガキーッー」

「あ、あの、せやめつ」

明日菜が女子高生の一人に掴みかかる、ネギがそれを止めようとしていたが止まらない。

遂に喧嘩になる。誰もがそう思つた時、その男子生徒は現れた。男子禁制のこの場所で、あまりにも堂々と歩くその姿に誰もが目を向ける。

そしてその身から滲み出る感情に身体を振るさせた。

怒り、怒り、怒り、その男子生徒は怒りに満ちていた。

「、、、、、」

「、、、、、」

誰もが息を飲んだ。男子生徒が向かう先は争つっていた明日菜と女子高生の元。

怒気に当たられ動けなくなつていて二人の前で、男子生徒は立ち止まる。

そして、無言で女子高生の方を見る。いや、睨んでいたといつてもいいかもしない。

しかし、男子生徒としてはそんな気はなかつたのだ。ただ、女子高生の着ている制服が、自分と犬猿の仲である一人の女生徒と同じだなど、少し見ただけのつもりだった。

だが、見られた女子高生はそんなことは知らない。無言で睨んで来る男子生徒に、ただただ圧せられた。

一步、二歩、と後ずさり、怯えた様子でその場を後にする。取り巻きの女子たちも、続くよろしくその場を去つていった。

女子高生が居なくなつたその場所で明日菜たちは無言で場を治めた男子生徒を見る。

「あ、あんた、今朝の」

明日菜が何か言つが、渦中の男子生徒はなにも言わずにその場から立ち去つて行つた。

『なにか、困ったことがあつたらいってくれ。出来る限りのことはする』

最後まで無言のまま立ち去つて行つた男子生徒の背を見て、明日菜は今朝に掛けられた言葉を思い出す。

「助けて、くれたのかな？」

勘違いに満ちたその言葉が、中庭に静かに響いていた。

勘違いすれ違つ（後書き）

といひうぢいの面識がある主人公とネギ先生です。
本当の意味で知り合つのはまだ先かな?
今はまだ、顔見知り程度ということで。

暁下がりのテート（前書き）

平平凡凡な日を書いてみた。
主人公、エヴァ、夕映の日常です。
お楽しみ頂ければ、嬉しいです。

昼下がりのテート

太陽が真上に登る時刻、12時を過ぎたころだらうか、狂氣は麻穂良学園に隣接する商店街を一人で歩いていた。
無論、それだけなら特に何の問題もないことなのだが、問題は今日が平日であるということだ。

そう、狂氣は堂々といつそ清々しいまでに学校をさぼっていた。

「そつか、エヴァがサウザントマスターに惚れてるってのは、ホントだったんだ」

平日の正午と言つて学生たちはいないが、商店街には麻穂良で暮らす人の影がちらほらと見える。

そのほぼ全員が、狂氣に異様な目線を向けていた。
当然だらう、学生服を着た男子生徒が学校も行かずにならフラとしているのは唯でさえ目立つというのに、まるで誰かに話しかけるよう一人ごとを呴いているのだから。
しかし、別段狂氣が痛い人と言つ訳ではない、狂氣はしつかりと“誰か”に話しかけていた。

「ケケケ」

そう、頭の上に乗る人形、チャチャゼロに。

、、、頭の上に人形を乗せた男子生徒が一人ごとを呴きながらフラフラしている。
なにも知らない人から見れば、とても痛い男に見えるということに狂氣は気づいていなかつた。

「イイコト教エテヤツタンダ。ナンカ寄コシヤガレヨナ」

「酒か？悪いけど、戸籍上は未成年つてことになつてゐるから、酒の類は買つてやれないぞ」

「チツ、ジャア内臓ヨコセヨ」

「わかつた。今度、モツ煮でも作つてやるよ」

「血ガネエジヤネーカ」

「鼈の生き血ぐらいなら用意するが？」

「テメーノヨコセヨ。タマニ御主人ニ飲マセテンドロ、俺ニモヨコセ」

「なんだ、嫉妬してんのか？」

「ケケケ、ヤツチマウゾ」

一人と一体は笑いあいながら商店街を歩いて行く。

もしチャチャゼロが人であつたなら年頃の二人のデートにも見えたかもしけないが、如何せん現実では人形に話しかける変人にしか見えないので悲しい。

「ソオイヤ、モウスグテストツテノガアルツテ妹カラ聞イタケドヨ、
テストツテナシダ？」

「拷問や尋問の類だな、狭い部屋に集団で押し込められて長い時間沈黙を強要されるんだ」

「オモシロソウジャネエー力。俺モ連レテケ

「別に良いけど、絶対に喋んなよ？」

「約束ハ出来ネーナ。ケケケ」

そんな会話を続けながら歩いていた一人?は、休憩しよう適当な喫茶店に入つていつた。

こじんまりとした店内にアンティーク調の家具が並ぶ落ち着いた雰囲気の店。

ターゲットは学生達なのだろうかお昼時だといつのて店内には狂気とチャチャゼロ以外に客はいなかつた。

窓際の一人掛けの席に狂気とチャチャゼロは向かい合つて座つている。

狂気の前にはコーヒーとモンブラン、チャチャゼロの前には苺のショートケーキが置かれていた。

この店のマスターは狂気が一人分の注文をしても一切顔を曇らせないとても出来たマスターだつた。

「ヨクヨク考エリヤ、動ケネエカラ、ケーキガ食エネー」

「後で持ち帰りにして貰うか」

そんなどかな会話と共に、今日という日は過ぎていいく。

今日は日が昇つてから一度も苛立つていない、狂気にとつてはとても幸せな日であった。

場所は変わり、狂氣が学校をさぼりチャチャゼロと喫茶店に入っていた頃、エヴァもまた授業をさぼり優雅に紅茶を楽しんでいた。学校の屋上で。

「マスター。学園長先生からの伝言で『いい加減に屋上に椅子やらテーブルやらパラソルやらを持ちこむの止めてくれんかの。ぶつちやけありえない』と、言つてゐるのですが返答はどういたしましたよう」

「ふんっ、そんなもの無視しろ無視。文句を言つ前に自分の後頭部をどうにかしようとでも伝えておけ」

「わかりました。マスター」

エヴァはそれだけ言つと空を見上げた。
澄み渡る青空を所々浮かぶ白い雲のコントラストが美しく、小鳥達の鳴き声が耳に届く、春特有の温かさもまた心地よい。

「今日はいい日だな

エヴァは頬を緩ませながらティーカップに口を付ける。

「はい。姉さんも今頃は狂氣様と一緒にこの空を見てることでしょう

「ぶつ」

「マスター、それは少し、お行儀がわるいかと」

顔に紅茶を吹き掛けられた茶々丸は表情一つ変えることなくそう言

う。

だが、口調に怒りが籠っているように思えた。

「げほっ、げほっ、ちょっとまで、それはどういう意味だ！」

「姉さんが言つていました。今日は狂氣様と出かけると。一般的にデートと言われるものだと推測されます」

「私は何も知らんぞ！？」

「マスターはまだ寝ておりましたので」

エヴァが机を叩きながら叫ぶが茶々丸は平然と答える。

「でーと、デートだと？チャチャゼロと狂氣が、二人きりでお出かけだと？ま、まさかあのふたり。、、、いや、いやいや、そういうことから最も遠いのがあの一人だろ。心配ない。まあ、元から心配なんてしないがな！私には別に関係無いしな！なあ、茶々丸！」

「はい。マスター」

そう返答する茶々丸に満足したのかエヴァは何度も頷く。

「今朝、姉さんにいつもとは違つ服に着替えさせてほしいと頼まれましたが、何の心配も無いでしょ？」

茶々丸の言葉でエヴァは額をテーブルにぶつける。

「自分から服を着替えたいなんていうチャチャゼロは私も見たこと

無いぞ！」

「そうですか、私は今日みました。マスターはまだ寝ておりましたので、見ていませんね」

表情こそ変わらないが自慢げに聞こえる茶々丸の言葉を聞いて、エヴァは「くそお、明日から早起きしてやる」と呟いていた。

「姉さんと狂氣様の関係が気になるのですか？」

「、、、まあな、普通の奴なら気にもしないんだが、相手は狂氣だ。チャチャゼロが人形だからという常識も、あいつには通用せんだろうし、、チャチャゼロは私の家族だぞ、気にもなる」

「大丈夫です、マスター。私の知っている狂氣様はマスターの大好きな者を奪つたりはしません」

温かな口調でそういう茶々丸を見て、エヴァは不貞腐れたように紅茶をする。

「ふん、知った風なことを言うようになつたじゃないか。お前といい、チャチャゼロと言ひ、アイツに出来つてから少し変わつたな」

「マスターもお変わりになられたと思いますが」

「アイ・カメラが壊れたか？600年を生きた真祖の吸血鬼である私がたかだか数年で変わる筈がないじゃないか」

「しかし、以前のマスターなら食事の際、私に席に着くように命令はしませんでした」

茶々丸の言葉で、エヴァは向かい合いつつ椅子に座る茶々丸を見る。

そして、呆けながら呟いた。

「やういえば、そだつたな」

場所はまた変わる。麻穂良学園女子中等部2年A組の教室。そこではある噂が実しやかに囁かれていた。

「突撃リポーター朝倉和美は見た！幻の不良高校生！…今週のまほら新聞の一面向はこれで決定ね～！」

「いや、アンタ。まだ見てもないのにその見出しあまざいでしょ。大体、本当に居るの？その不良高校生って」

書き上げた原稿を自慢げに掲げる女子中学生、朝倉和美を見ながら明日菜は呆れたように呟く。

「明日菜に朝倉さん、何の話してん？」

「朝倉のじょーもないねつ造記事の話し」

「失礼ね！ねつ造じやないわよ。これから取材するのー。」

「で、結局何の話なん？」

首を傾げて いるのほほんとした印象の少女、近衛小乃香の言葉に答えるように朝倉は何処からかマイクを取りだし説明を始める。

「今、噂の幻の不良高校生の話だよ。授業中抜けは当たり前、学校をサボつて街を徘徊。夜はコンビニの前の目撃情報あり。こんな絵に描いたような不良でありながら、時にはナンパされている女生徒を救い、時にはお年寄りの荷物持ちをする。そんな、幻の不良高校生を突撃リポーター朝倉が追います！」

「どどーん、という効果音がする気がするポーズを決めた朝倉に小乃香はパチパチと称賛を贈る。

明日菜は空に向かつて呆れたよつたため息をついた。

「この学園つて面白い人が多いわー。その人、他に特徴とかあるん？ よかつたら、ウチも探すの手伝うえ？」

「ありがと、近衛さん。えっと、特徴はねー」

朝倉はポケットから手帳を取り出し、パラパラとページをめくる。

「目撃情報では服装は何時も黒い学生服。頭に人形を乗つけて歩いていることが多いみたい。あと、これは確認とつてないけど、拳を振るうだけでパンチが光つてナンパ野郎を吹き飛ばしたりするみたいよ」

「パンチが光るって、なによ？」

「すごい人がいるんやなー」

「まつ、あくまでも噂だけねー」

「何の話して居るアルか？強い奴の話アルか？」

「光るとは面妖な。興味深いで」¹『ざい』

カンフーとか忍者とかが集まつて、さらに騒がしくなつた教室の端でプルプルと震えている夕映がいた。

「夕映ー、震えているけど、大丈夫？」

「え、ええ、大丈夫です。ありがとうございます、のどか」

親友の一人、宮崎のどかになんとか笑顔で答え、手に持つた抹茶コーラを飲みながら夕映は考える。

「（常に学生服を着て、頭に人形を乗せていて、パンチが光る。心当たりがありすぎるです。師匠、、）」

「そう言えば、知つてる。夕映ー」

はつ、と夕映が我に返つた時にはもう一人の親友、早乙女ハルナが隣に居て、話の流れは既に変わつて居るようだつた。

「なにをです？」

「のどかに、好きな人が出来たみたいよなのよ。ねー、のどか

「なつ、本当なのですかーのどか」

「（男性恐怖症の親友に思い人が出来るなんて、いや、いやいやで

す。もしかしたら、男性所ない可能性も、まさか、女性の方ですかーっ！」

夕映は混乱しながらのどかの方を見る、そこには顔を真つ赤にしたのどかが居た。

「パル。ち、違うよー。ただ、この間、助けてもらつたからお礼が
言いたいって言つただけでー」

「あれー、そーだけ？」

「な、なんだです。まったく、紛らわしいことを言わないでください

「あははー、『めーん』

「やつこつことなら私もその人を探す手伝いますよ。のどか

「本当? ありがとう、夕映」

今田も一年A組の教室は賑やかだ。

暁下がりのテート（後書き）

書き終わった後に気づいてなんですが、
主人公も魔法完全に秘匿出来てねーじゃん
ガビーン

(口 111)

図書館戦争　主人公は不参加です（前書き）

親切な人のおかげでタイトルの文字が間違っているという大変な事態に気づきました。

、 、 まあ、仕方ないですよね。変えられないみたいですし。
諦めます（ 、 、 ）ソンナー

図書館戦争 主人公は不参加です

麻穂良学園近くにある森。

動植物が盛んに生息し、狼のような獣がいて、熊もいて、滝が流れ、岩魚が釣れる。

そんな、とても危険な森の中に羅漢狂気の姿はあった。時刻は既に夜、もうすぐ7時になる。狂気は苛立ちを感じながら夜の森に立っていた。

「・・・、遅い。夕映の奴、なにやつてんだ」

右腕に付けた腕時計を見ながら狂気はそう呟く。

今日は夕映との修行の日、新しい魔法でも教えてやるかと思いわざわざこんなところにまで来たといふのに、約束の時間になつても夕映の姿はなかつた。

「わざわざこんなところに來たつてのに、日時もアイツが指定したんだぞ。遅れんなつてんだよ」

そう文句を言いながら、狂気はふと思いついた。

「（そう言えば、来週の月曜から定期テストだつたな）」

もしかしたら、その所為で遅れているのだろうかと狂気は考える。しかし、日時を指定したのは夕映の方。遅れる道理はない。

大体、弟子は狂気の通つている高校にまで名前が届く馬鹿レンジャーの一人、馬鹿ブラック。

勉強するから狂気との約束をすっぽかすとかそういう思考の持ち主じゃないだろう。

狂氣との約束の為に勉強をすっぽかすといつなら、分からなくも無いのだが。

「もしかして、なんかあつたのか？」

狂氣が心配を始めた時、携帯が鳴り始めた。
確認すれば、夕映からだ。

「もしもし、テメー。今、何処で何やつてやがる」

『す、すいません。師匠。実はですね、＼＼＼＼＼』

夕映からあらかたの事と次第を聞いた狂氣はキレた。
おもむろに拳で大木を殴る。大木は音を立てて折れ、倒れた。自然
破壊だ。

「ああ、わかつた。悪かつたな、お前を責めて。お前に非はない」
『いえ、はい、ありがとうございます。それで師匠、私はこれからどうす
ればいいのでしょうか？』

『図書館島に行く友達が心配なんだろう？なら、ついて行ってやれ。
あそこは危険だからな、冗談抜きで。だた、魔法使いだってことは
ばれない様にな』

『わかりました。それと、師匠にお願いしたいことがあるのですが

「なんだ？」

『もし、私達に何かあつたら地上に残っている一人を寮まで送り届

けて欲しいのです。その一人は私の、親友なのです』

「わかった。任せておけ。後、“お前に何かある前に”俺を呼べ、絶対に助けに行つてやるから』

『つつ、は、はい！』

何故か最後に大声で返事をした夕映の声の所為で聴覚を痛めながら（キーンという音がした）、電話を終えた狂氣は夜の森を後にするのがだつた。

麻穂良学園に戻りながら、狂氣は電話を掛ける。相手は近右衛門。

『はいはい。』ちりり学園長じゅよ』

「よおお、ぬらりひょん。テメーの孫が魔法の本探しにダンジョンに潜つたらしいんだけどよ。今頃、死んでんじゅねえか？」

『ふおふおふお、最初から口調が最悪じやのあ、狂氣君』

「反応が無いってことは、知つてたのか？」

『ふおふおふお』

耳障りな笑い声の所為で携帯電話を握りつぶしそうになる手を止める。

『心配せんでも、危険はない。』ロロロロロロ『いらねんがの』

「当たり前だろ、もし俺の弟子になんかあつたら学園長室を校舎」とぶつ飛ばしてやるよ」

『狂氣君がいつと「冗談に聞こえないから恐いのお』

「（冗談じゃないからな）」

そう、心の中で呟きながら狂氣は続ける。

「で、どうとか説明してくれるよなあ？」

『ふむ、実はの。これはネギ君の修行の一環で「あ、やつぱーいわ。もう切るな」のおつて、ちょ！まだ話は終わつとらんぞー。』

「テーマの話より弟子との約束の方が大事なんだよ」

電話の向こうで何かを叫ぶ学園長を無視して、電話を切った狂氣は遠目で図書館島の裏口近くに居る女の子一人を確認した。
ばれない様に少し離れた場所に着地した後、彼女達の方へと歩いて向かつて行くのだった。

宮崎のどかと早乙女ハルナは困惑していた。突然、魔法の本を探しに言った図書館島探検隊と連絡がつかなくなつたのだ。最悪の事態も考えられる。

「みんなー、ビックリしたのー。」

「へ、返事をしてくださーい！」

叫んでみるが、返事はない。

「かのじめのうがく」

だ、誰かに連絡を、、、でも、こんな時間じゃ

そんな時、その場に狂氣が現れた。

「なんだと？」
なにせんてなんだ？

٢١

ג'נ'ע

その声を聞いた時、一瞬一人には闇の中から声が聞こえたように思えた。

当然と言えば当然だ。黒い服、黒い髪、黒い眼。狂気の印象色は黒。闇に紛れるには最適だつたし、狂氣自身足音一つ立てずに一人に近づいて行つたのだから。

「そつ、幽靈にあつたみたいな反応をされると流石に傷つくな」

「あ、、え、男？」

「、、お、男の人、、、」

闇の中から姿を確認したハルナは少し身構えながら狂氣を見る。しかし、のどかは最初こそ怯えていたが狂氣の顔を確認すると安心したように声をだす。

「あ、この間、助けてくれた人、ですよね」

「ん？ ああ、そう言つてお前は階段から落つこちた子か」

のどかの顔を見て、狂氣はネギ・スプリングフィールド個人に初めて苛立ちを覚えた日のことを思い出した。

「あ、あの、名前は富崎のどか、です」

「そりが、俺は羅漢狂氣だ」

「へ？ あれ？ 自己紹介とかする感じ？ ジヤ、私も。早乙女ハルナだよ、のどかとは親友やつてまーす！」

俯きながらの自己紹介と、淡白な自己紹介と、無駄に元気な自己紹介が終わつた後、狂氣は一人を見ながら話を戻す。

「最初の質問に戻るが、こんな感じでなにやつてるんだ？」

「え～、えっとそれはですねー。その、あははー」

「えつと、その、あの、ん、」

「いや、もういい。面倒は省こう」

なんとか誤魔化そうとするハルナと不安そうに足元を見つめるのど

かを見て、狂氣はため息をつきながら呟つ囁つ。

「お前達が魔法の本なんて馬鹿なものを探しに来たってことは知つてこる」

「うづつ、バレテル」

「あづう」

「もう、遅い時間だ。さつやと帰れ」

「ま、待つてー中に友達が入つて、それで、連絡も取れなくなつちやうのや」

だから私達は探しに行くの、と続けるハルナの言葉を遮るように狂氣は言つ。

「知つている。それは俺の方から学園長に連絡しておいた。学園長から図書館島の司書長の方に連絡するらしいから、お前達の友達は無事だよ」

「へ？ それ、本当？」

「嘘ついてビリある

「やつか、よかつた。ね、のどか」

「ヽヽヽヽヽ」

狂氣の言葉でハルナとのじかは安心したのか、ペタンと地面に座り

込む。

その後、二人は狂氣に頭を下げてきた。

「ありがとうございます。羅漢さん」

「その、また助けて頂いて、すいません。羅漢さん」

「・・・出来れば、狂氣と呼んでくれ」

「え、で、でもー」

「好きじゃないんだ。『ラカン』の奴は」

「あ、は、はい」

苦い顔をしながらそつそつ狂氣を見て、のどかは頷くしかなかつた。

そんなやり取りを終えてから狂氣は言つ。

「じゃあ、後は司書長に任せてもつ帰るぞ。寮まで送つていいくから、支度をしろ」

「え、私達一人でも帰れますよ。子供じゃないんだからー」

「こんな夜遅くに、こんな人気のない場所に居ようとする女を、大人とは言えないな。何かあつたらどうするんだ?馬鹿」

「あー、『みんなさー』

「ほら、行くぞ」

有無を言わせない狂氣に一人は大人しく付いて行く。狂氣が先頭を歩き、その少し後ろにのどか、ハルナが続く。会話は無い。元々、狂氣ものどかもお喋りな方ではないし、ただ一人喋るのが好きなハルナは「むむ、ラブ臭が、」とか言っているので、会話が無い。

三人はほぼ無言で女子寮まで歩くのだった。

「じゃあ、狂氣さん。送つてくれてありがとう」「さこました」

「ま、ましたー」

「礼はいいが、一つ言つておきたいことがある」

笑顔でお礼を言うハルナと、何故か赤くなりながら小声で喋るのどかの一人を見ながら、狂氣は言つ。

その顔はとても真剣で思わず一人の背筋が伸びた。

「富崎、前にも言ったが馬鹿なことはするな。女の子が一人で15冊もの本を持つて歩くことも、夜に図書館島に忍び込もうなんて考えることも“普通”じゃないんだ」

「え、あの、どういう意味ですか？」

「・・・」

首を傾げるハルナとのどかを見て、狂氣は苛立ちを募らせる。やつぱり、この子たちも可笑しくなってしまっているのか、と。

「藪を突いて蛇が出るならまだいい、もしかしたらお前達を殺す鬼が出るかもしないっていう話だ。覚えておけよ、好奇心は猫を殺すぞ。実際に、平穏を殺された猫もいる」

そういうて、狂気はその場を後にした。

残された二人は、最後まで首を傾げたままだった。

図書館戦争　主人公は不参加です（後書き）

日刊掲載つて大変ですね。

この作品の倍以上の文量で一日、二三話上げている人たちが信じられないません。

日刊掲載を諦めるか、文量を減らすか、迷います。
まあ、しばらくは大丈夫だと思いますけど。

2年A組！ 、 、 、 、 、 、
(前書き)

学校が違うから接点のないネギの生徒たちと絡ませたいな
と、考えたらかなり強引になってしまった。（ - ” - ）

2年A組！ 、 、 、 、

「どうしてこうなった」

ネギ達が図書館島で遭難した次の日、狂氣は麻穂良学園女子中等部2年A組の教室の前に居た。

苛立ちに満ちた狂氣の問いかに答えれば、全ては学園長の所為であつた。

昨日の夜、のどかとハルナを送り届けた後のことを、

狂氣は学園長室へと呼び出されていた。

「何の用だ？」

「ふおふおふお、そうカリカリせんでくれ。お茶飲む？」

「要りん。とつと事件を言え」

「つむ、実はのお。ネギ君が今、図書館島に居ることはじつておるだろ？その所為でのお、ネギ君が受け持つていいるクラスの授業で英語を担当する者がいなくなつてしまつたのじやよ。そこで、狂氣君にお願いしたいとおもひのじやが、やつてくれるかの？」

「、 、 、 、 また、シッ ロミ所があすぎるだろ？ネギが居なくなるのを知つていてなんで代理を立てなかつた。英語の授業を普通の高校生である俺がするつていうのは問題があるだひ。そして、俺は明日も普通に学校があるんだ。そんな暇はない

「まあまあ、狂気君なら中学生に物を教えるくらい何の問題も無いじゃん。それに狂気君の通っている学校にはワシの方から社会学部とこいつ」とで話を通しておくから安心してくれ

「ふざけんな。俺はもう帰るからな。痴呆爺」

やつはうとうと学園長室を後にしきりとある狂気の壁に、近右衛門はボソッと言へ。

「……、誰がせひおおうかな~」

「……、」

「狂気君、学校サボりまくってんじの~。ワシ、麻穂良で一番偉い学園長じゃしの~」

「……、それが、教育者のする」とか、

「ワシ、痴呆爺じゃもん」

ギギギ、まるで油の切れた機械人形のよつて振り返る狂気に近右衛門は一瞬ながら言つ。

「やつてくれるの? 狂気君」

「……、わかった。だがな、一つ聞いておへだ、学園長

「向じせじ?」

「どうしてテーマがそんなに俺をあのクラスに闇らせたいかは知らないが、俺はネギと違つて英雄の子として生きる気なんだ、さらさらねえからな」

「‥、そつか、残念じや」

そうして回想は終わり、冒頭へと戻る。

「どうしね」うなつた

「ケケケ、諦メロコ。モシクハ、ヤツチマヒ」

ため息をつく狂氣の頭に乗つているチャチャゼロが答える。

「チャチャゼロ、お前がいてくれることだけが支えだよ。なんかあつたら助けてくれよな」

「約束ハ出来ネーナ」

いつも通りの答えに苦笑しながら、狂氣は教室の扉を開け教室へと入つていく。

すると、扉を開けた傍から仕掛けられていたトラップが発動する。狂氣はチャチャゼロを庇うように黒板消しを殴り飛ばし、足元のヒモを蹴り千切り、バケツを受け止め、矢を全て避けてから教壇の前に立つ。

「さて、色々言いたいことがあるだろうが授業を始める。ノートの

準備を「お待ちくださいー」、お前は、委員長の雪広あやか、か。なんだ？」

手に持つたクラス名簿と見比べながら狂氣は雪広の名前を呼ぶ。

「ネギ先生はどうしましたのー?それに、貴方は誰ですか?見た処、学生のようですが、あら?そつ言えばどいかで見たことがあるような気も、」

「ネギ先生はこのクラスの馬鹿レンジャーと一緒に勉強合宿中で来られない。俺はその代理だ。お前の言つ通り、麻穂良で高校生をやつているが、文句は学園長に言つてくれ」

「は、はい。わかりましたわ。処で、何処かでお会いしたことが」「幻の不良高校生」」つづき、みなさん、騒がしいですわよ!」

言葉の途中で邪魔をされた雪広は耳を押さえながら怒鳴る。

「だつてだつて、委員長ー!噂の不良高校生だよー本当に居たんだー!」

「本当に頭に人形乗せてるね」

「本当に学生服きてるね」

「本当に髪が黒いよ」

「待て、最初の一人以外が言つてるのは別に普通だ。『パンチが光るつていうのは本当ですかー』なに訳の変わらないこと言つているんだ?光る訳がないだろ?。お前達、少しほ静かにしろ」

少し洒落にならない疑問を平然と受け流す狂気に朝倉がマイクを突き付けながら詰め寄る。

「まあまあ、ここは報道部であるこの私が仕切らせてもらひよーーー、三問質問に答えてくれればみんな静かになると想つか」

「三問だけだぞ」

「はーーー。じゃ、まず一つ目、名前はなんて言つの？」「ノーノメントで」じゃあ、なんで高校生が臨時教師なんてしているのかな？「学園長を通してください」「うう、じ、じゃあ、このクラスに居る中で恋人にしたいとしたら誰？「チャチャゼロ」へ？誰、それ？」

クラスのほぼ全員が首を傾げていたが、エヴァは額を机にぶつけ、茶々丸は「姉さん、羨ましいです」とぼやき、当の本人は狂氣の頭の上で「ケケケ」と笑っていた。

「質問には答えた、全員席に着け」

狂氣の言葉で全員が泣々ながら席に着く。

「さて、さつきも言つたがネギ先生の都合で今日一日の英語の授業は俺が受け持つことになった、正直あまり気乗りはしないんだがやるからにはしっかりとやってやる。ネギ先生や学園長のことでお前達に当たるのは筋違いだからな」

そつ話しながら狂氣は黒板にびっしりと何かを板書していく。クラスの面々は首を傾げながらそれ見ていたが、次に出た言葉に驚くこととなる。

「ほら、これが次の期末テストの問題だ」

「 「 「えつ、えーーーーー」

「り、臨時先生 一幾ら、テストでいい点取らせたいからってそれは不味いんじや」

「い、いけないことですう」

「お前達は、鳴滝姉妹か。何を勘違いしてるかは知らないが、別に不味いことは何もしていなーぞ。これは昨日の夜、このクラスの絡繰茶々丸から聞いたネギ先生の前の英語担当教師、つまり期末テストを作る教師の性格と今回のテスト範囲を考えて作った俺の予想問題だ。まあ、ほぼ合っているだろうからこれを覚えるだけで90点は取れる」

堂々とそつ言う狂氣を見て、黙っていたクラスの面々だつたが徐々に笑いが溢れてくる。

「ま、まっさかー」

「冗談でしょ？」

「テキトーな」と言わないでくださいよ」

「お前達は、チアリーディング部か。一つ言つておくが、学校の勉強は無駄が多すぎるんだよ。必要な部分を見極めれば、テストでやることなんてたいしてない」

そう言い切る狂氣に、遂にクラスの全員は黙り込む。

「IJOに来る前に職員室で聞いたが、お前達万年最下位なんだってな。新田先生と瀬流彦先生はそうでもなかつたが、他の先生達は嘗つていたぞ。恥ずかしくないのか？悔しくないのか？恥ずかしいなら、悔しいなら、学年一位くらいとつて見せる。道は俺が示してやるから、どうするかはお前達次第だ」

「「「「、「、「、「

「ずっと最下位なんて取つているお前らは、どうせ努力なんてしてなかつたんだろ？この学校はエスカレータ式だからあんまり関係ないなんていい訳をしながらな。甘えるな、社会に出れば必ず努力をしなければならない時が来るんだ。学校のテストなんてその時の為の練習なんだよ。だからこそ、努力をするべき時は何時だ？今だよ」

「「「、「、「、「

それだけ言つと、クラス全体を睨みつけていた狂氣は深い息を吐く。

「俺が言いたいことはそれだけだ。努力をしようと思う奴は黒板を書き写せ。その後、残りの10点を上積みする方法を教えてやる」

そう言つと、クラスに居る全員が一心不乱にノートへ鉛筆を走らせるのだった。

全員が黒板の内容をノートに写す中、狂氣に話しかけてくる女生徒

がいた。

「いやー、IJの予測問題はす”じこ”IJ。これを覚えれば9割点が取れるところのもあながち間違えじゃないかもネ」

「お前だって、やひりと思えば「れぐらごの」とは出来るだひつへ。
麻穂良最強頭脳」

「貴方の様な人がいるなら、最強を名乗るのは早かつた力ナ?」

そう言つて顎をかく少女、超鈴音はすつと眼を細めながら言つ。

「少し聞きたいことがあるんだが、いい力ナ?」

「授業中だ、おしゃべりは後にしる」

「わかつた」

『貴方に聞きたいことがある』。羅漢狂氣^{ハグチ}。いや、クルキ・ラカンと呼んだ方がいいか?理解不能を継いだご都合主義殿^{チート}』

教卓の前に立つ狂氣の頭の中に直接声が響く。

「(念話か)」

そうポソリと呟くと狂氣は超を睨むが超は笑顔を向けたままだった。

『お前は魔法を使えないと聞いていたんだが?』

『使えないと使わないは違う』。でも、このことは黙つてくれ

るとありがたい』

『そつか、茶々丸のことでお前には世話になつていいからな。黙つていてやる。それで、俺に聞きたいことと言つのは何だ?』

『君はなに者なのかナ?』

その言葉に狂氣の中の何かが苛立ちを覚える。

溢れだしそうになる怒氣を教卓の下で血が滲むほど拳を握り抑える。

『私の知る歴史の中にクルキ・ラカンなんて言つ人物はいないヨ。君は一体、なに者なのかナ? もしかしたら、君は私と同じ『黙れ、小娘』、、、怒らせたなら、謝るヨ。君と争いたくはないネ』

『俺を怒らせたくねえなら、もう一度とくだらねえ質問なんざすんじやねえ。俺は俺だ。それ以外のあり方なんざ、俺自身が許さねえ』

『そうか、すまなかつたヨ。私はただ、もしかしたら同士になれるかもと思つただけ、他意はないネ』

超の声に悲壯が混じる。

狂氣は少し表情を濁らせながら言つ。

『、、、お前の予想は大方あつてるが、俺はお前とは違う。俺はただ、逃げてきただけだ。あの時代から。まあ、結局、何処に行こうが悲劇はあるつてことを20年前の大戦で知つたがな』

『君はやはり未来を知つてゐるのか。なら、わかるハズ。この世界の不正と歪みと不均衡が正されるべきだと。ならば、やはり、私の同士になつてはくれない力? 悪を行い、この世界に対し僅かながら

の正義を成そつ』

狂氣は感じる、揺れる己の心を。
狂氣は正義の魔法使いが嫌いだ、けれど、今までただの一度も正義
の味方に憧れを抱いたことが無いという訳じゃない。
人並みに正義を信じていた頃もあった、正義を尊い物だと信じてい
たこともあった。

「（悪を行い、この世界に対し僅かながらの正義を成す）」

それはとても偽悪で偽善的だが、とても“かつて”ことなんじ
やないだらうか。

「（ふつゝ、）」

狂氣は騒ぐ、そんなことを考えてしまっている自分を。

「（なにを馬鹿な。これじゃ、こんな押し付けた善意。立派な魔法
使いの連中と変わらないじゃないか。それに）」

狂氣が思い浮かべるのは、此処に来て出会った人達。

「（答えは、考えるまでも無かつたな）」

『悪いな、同胞。この世界（幻想）、壊すには大切な者が増えすぎ
た』

『そうか、残念だ、同士。気が変わった時は何時でも声を掛けて欲
しいね。超包子で待つていいのカラ』

『そんな時が、来たのならな』

『待つているヨ。さて、同士。もう20分も経つ、みんなに10点上積みする方法を教えてあげるヨロシ』

『なぜ、いきなり命令口調なんだ?』

『ははは、だつて君はなんだかんだ言って私の同士になる気がするヨ。そうしたら私が上司ネ』

『いやな予言だな』

互いに笑いながら念話を解く。

狂氣は教鞭を振り始める。超はそれに耳を傾けた。

この教室でそう遠くない未来、とてつもなく大きな事件の伏線が張られたことを当人達以外、誰も知りはしなかった。

「時間だな。これで授業は終わりにする。全員、内容を頭に叩き込んでおけよ」

「「「「ありがとうございました!」」」

色々あつた授業も終わり近右衛門への報告と職員室へ出向いての今日一日の謝罪、（新田先生は君が謝ることじゃない。と言ってくれた）を終えた狂氣が廊下を歩いていると、そこに一人の少女の姿があつた。

「狂気さん、少しよろしこでじょうか」

少女の名は桜坂刹那。麻穂良学園に居る狂氣の数少ない友人、だと狂氣は思つてゐる。

出会い方こそ最悪だつたものの、刹那も狂氣に敵意が無いと分かると謝罪してきたし、狂氣自身、刹那のように何かを守るために努力をする者は嫌いじゃなかつた。

「聞きたいことはわかつてゐる。近衛小乃香のことだろ？」

「はい。学園長から危険はないと聞いていますが、一応狂気さんにも確認をと思いまして。すいません、迷惑でしたか？」

「いや、いいよ。信用できないからな、あの学園長は」

「い、いえ、そういう訳では、、、」

「俺からの忠告だが、あの爺を信用なんてするなよ。魔法から遠ざけるとか言いながら、孫娘の部屋に魔法使いのガキを送り込むような狸だ。いい迷惑だろ、上から近衛に魔法を知られなによつにしろと命じられてるお前からしたら」

「はい、実はそのことについては私の方からも抗議をしたのですが、聞き入れてもらえませんでした。、、、私の力不足の所為で、お嬢さまの元にあのような子供を」

悔しそうに竹刀袋を握りしめる刹那に「お前が気に病む」とじやないだい」と声を掛けてから、狂氣は仕切り直す。

「話が逸れたな、悪い。それで近衛のことだが、心配は要らないだ

る。万が一何があつても、俺の弟子が傍についているからな、大概の事には対処できる

「そうですか、安心しました。御配慮のほど、礼を言います」

「頭を下げるなら、夕映にしてやつてくれ。何かがあつても近衛を守るのはアソシだ。俺は何もしていない」

「はい。しかと、」

夕映の名前を出すると、表情に影を落とす刹那に狂氣は諭すよつて言う。

「自分で守つてやりたいなら、傍についてやればいいだろう。護衛本来のあり方はそれだし、夕映から聞く限りの近衛なら受け入れてくれると思うんだが」

「それは、そうかもりませんが、、、、」

「いや、悪い。今のは俺の失言だ。ごめん、俺みたいな部外者が口を出すことじやなかつた。忘れてくれ」

「いえ、狂氣さんの言つことは最もですから。全ては、不甲斐ない私が悪い、、」

落ち込む刹那にため息をつきながら、狂氣は刹那の頭を撫でる。サラサラの髪が気持ちよかつた。

「あ、あの、狂氣さん? なにを、」

「全部一人で抱え込もうとするなよな。何かあつたら言え。少しくらいは力になる」

「しかし、これは私の問題です。狂氣さんを付き合わせるのは、悪いですから」

「安心しろ、好きで手をかすんだ。俺は刹那みたいな奴が好きだからな」

「なあつーす、好きいー」

突然奇声を上げて赤くなると、慌てて頭を下げ去つていった刹那に狂氣は首を傾げる。

そんな狂氣の頭の上に居て、今の今まで空氣だつたチャチャゼロは動かない箸の手を動かして狂氣の髪を引っ張る。

「痛いぞ。チャチャゼロ」

「浮氣シテンジャネーョ」

「浮氣、なんのことだ?」

「ウワ、コイツマジデワカツテネーノカヨ。同情シテヤルゼ、刹那。狂氣ハヤラネーケドナ。ケケケ」

「何のことだか分からぬけど、あんまり喋るなよ」

チャチャゼロにそつ忠告してから、狂氣は校舎を後にした。
こうして、色々と内容の濃かつた狂氣の一 日臨時教員は終わるのだった。

そして、週が明けた月曜日に行われたテストで2年A組は見事に学年一位を取り、ネギは見事?に試練をクリアし、正式な教員として麻穂良学園で働くこととなつた。

学年一位を取つたことでネギ祭り上げられ、クラスのみんなもそれに同調したが馬鹿レンジヤ 達（ - ）以外は本当の意味で期末テストに貢献したのは誰だつたかを理解していた。

ちなみに、そのことをエヴァと茶々丸から聞いた狂氣が隠れて喜んでいたことは、狂氣を盗撮していた茶々丸しか知らない。

おまけ

狂氣の通り高校での期末テスト。

「羅漢、期末テストだから珍しく学校に来たかと思えば、その頭の人形は、何だ?」

「ただの筆箱です。気にしないでください。先生」

「ケケケ」

「いま、喋つたような気がしたんだが」

「ただの腹話術です。気にしないでください。先生」

「ケケケ」

「わかつた、もういい、テストを始める。全員席に着け」

「ケケケ」

「羅漢。テスト中は静かに！」

「はい。先生」

2年A組！ 、 、 、 、 、 、 (後書き)

なにやら重要なフラグが立つた！？
かもしだい。

次回からエヴァ 戦闘編に突入です。

H7A (前書き)

H7A 編開始！まあ、多分二三話で終わるけど。

ある日の放課後のこと、狂氣とタ映は喫茶店のオープンテラスに居た。

周りには結界が張られ、中での会話は外から聞けば当たり障りのない物に変換されるようになつていて。

「そう言えば師匠、あの噂の犯人はやはりエヴァンジェリンさんなのですか？」

「あの噂？、ああ、桜通りの吸血鬼の噂か。そうだぞ。何でも学園長に頼まれたらしい。ネギの相手をしてやつて欲しいとな。その為の下準備だる」

「やはりですか。しかし、珍しいですね。エヴァンジェリンさんがそんな面倒な真似をするなどとは。何か目的があるのでしょうか？」

「さあな、暇つぶしかなんかじゃないのか？」

狂氣は興味がなさそうにそう言って、自分の前に置かれたアイスコヒーを飲む。

その様子をタ映は意外そうに見る。

「意外です、師匠はネギ先生が嫌いですから、もう少し興味があるのかと思つていたのですが」

「俺はネギを興味が出るほどに嫌つてはいない。ゴキブリと同じだ。目の前に出てきたら叩き潰すけど、探してまで潰したいとは思わない

い

「、、、食事中の元気の話はしないでください

「、、、悪い」

不快そうに眉を顰める夕映を見て、流石にジトロカシーが無かつたな
と思い素直に頭を下げる。

夕映は仕切り直すように水分を含んでから喋り出す。

「では、今回の件、私達はノータッチとこいつでここのですか？」

「少なくとも俺は静観するつもり。別にお前は好きにしてもいいぞ。
ネギに手を貸したいというならそれでもいい。正し、「エヴァンジ
エリンさんを本気で怒らせないこと」、「こと、「ああ、わかつてゐるな
い。まあ、少しちょつかいを出すくらいなら、修行になつて良いか
もしけれなが」

「いいえ、止めておきます。エヴァンジエリンさんは女子供には手
を出さなこと聞いていますし、心配も要らないでしようから」

「そりが。懸命な判断だな、と」ひたひたといづつと氣になつてた
んだが、「

「なにがです？」

狂氣はお茶を濁すよびよびよび。

「お前、なにを飲んでいるんだ？」

「ペプ〇キュウカンバー。まあ、キュウリ味のペシです。これ、

まだあったのですね?とつぐに製造中止になつてゐると思つていました」「

「、、、美味しいのか?」

「飲みます?」

「いや、こりない」

ある満月の夜。エヴァは桜通りで宮崎のどかを襲つていた、いや、正確には襲おうとしたが止めた。

「そういうえば、この娘は狂氣の弟子の友達だったか。ふむ、魔力もそう濃くないし、見逃してやるか

なぜ、エヴァがこんなことをしているかと言つと、一重にただの暇潰しだつた。

封印で魔力を封じられたエヴァが公認で暴れられる、しかも相手はあの男の息子。

暇つぶしにはもつてこいだつたのだ。まあ、狂氣と余う前ならネギの血を吸い封印と解こうとしたかも知れないが、狂氣いるのならその必要も無い。

あと一年、ただ待てばいいだけだ。封印されて十五年も待つたのだから、後たつた一年待つくらい、エヴァには何でもなかつた。

「僕の生徒になにをするんですかーっ」

「ほひ、来たか。どれ、少しほ楽しませてくれよ？」

エヴァはネギの父、サウザントマスターの話を引き合つて出しネギを挑発する。

激情に駆られるネギは何も考えずにエヴァへ魔法を放つていく。わかつているのだろうか？放たれる魔法が魔力任せのござり押しで、エヴァ程の術者でなければ怪我では済まないということを。

「どうしてこんなことするんですか！先生として許しませんよー！」

「（わかつている筈も無いが。無知すぎる。狂氣がこの件から手を引いたのは正しかったな）」

自分と同じようにネギの相手をして欲しいと近右衛門から頼まれたもう一人の顔を思い出して、エヴァは苦笑する。

「（つまらん。終わりにするか）」

「紹介しよう。私のパートナー。3・A、主席番号10番。魔法使いの従者、絡繰茶々丸だ。パートナーの居ないお前では、私には勝てんぞ」

狂氣の知らないところで夜は暮れて行つたのだつた。

エヴァとネギの初戦から数日たち。

その間に色々あつたことを狂氣は夕映から聞いていた。ネギが落ち込んでいて授業が成り立たなかつたり、ネギが連れてきたオコジョの妖精が下着ドロを働いたり、ネギが一般生徒に何も知

らせぬまま仮契約を結ぼうとしたり（未遂）。
狂氣とネギは随分前に会って以来、顔も合わせていないんだが狂氣
の中でのネギの評価は下落に下落を重ねている。

まあ、ともかく、そんなある日のこと。

チャチャゼロは狂氣の前で呪いの踊りを踊っていた。

「ケケケ、狂氣ノ血ヲ飲ンデ動ケルヨ 二ナツタゼ」

「元々、エヴァの魔力不足の所為で動けなくなっていたんだし、俺
の血を飲んで魔力を補充すれば動けるのは当たり前だな。なんで今
まで気づかなかつたんだろ？？」

「シラネー。マツ、アリガトヨ。礼ハ言ツテ置クゼ」

「素直なお前も可愛いな」

そつとひて狂氣はチャチャゼロの頭を撫でようとするが、

「ウルセー、ヤツチマウゾ」

かわされた後、手を蹴られる。
狂氣は苦笑しながら手を引いた。

「ジャア、俺ハ町ニクリダシテクルケドヨ、一緒ニ行クカ？」

「いや、今日はやることがあるから。」「めん、俺は帰るよ」

「ソウカ、ジャ、マタナ」

「ああ、あんまり目立たないようにしてよ」

「此処ノ奴ラハ妹ガ動イテテモ疑問ニ思ハネー、人形ガ動イテルク
ライ平氣ダヨ。ケケケ」

そう言って飛び跳ねながら街に向かつたチャチャゼロを見送つてから、狂氣は自分の寮へと帰つていった。

「アーチ、人混ミウゼー、ヤツチマイテー」

狂氣と分かれた後、チャチャゼロは物騒なことを言いながら街を徘徊していた。

「ヨクヨク考エリヤ、狂氣ガイネート金ガネーカラ遊ベネー。カツ
アゲテモスルカナー」

エヴァと共に長く生きた殺戮人形も15年の間、ぬるま湯と言える麻穂良に居た所為か、思考が不良になっていた。

そんな、少し残念なチャチャゼロが公園の前を歩いていると知つている後ろ姿を見つけた。

「オ、妹ジャネーカ。ケケケ、アイツマタ猫ナンカニ餌ヤツテンノ
カヨ」

チャチャゼロは笑いながら公園で猫と戯れる茶々丸の姿を遠くから見る。

なぜだらうか、空っぽの筈の胸の中から何か温かい物を感じる気が

した。

「ナンダ？俺、コワレチマツタカ？ヤッパ、御主人ノ魔力ジヤナキヤマズカツタカ？」

突然の違和感にチャチャゼロは首を傾げるが、原因は分からぬ。チャチャゼロが久しぶりに戦い以外のことで考え方をして「マツ、イーカ」という結論に辿り着いている間に何故か茶々丸とネギが口論をしていた。

「ナニヤツテンドア？ケケケ、殺シ合イナライーナ」

茶々丸の元にチャチャゼロが向かおうとしたその時、明日菜が茶々丸に向かつて行く。

突進の上に「コロ！」。驚いた茶々丸は一瞬動きを止めた。ネギはその隙を付いて茶々丸に向けて魔法を放つた。

普通に避けられる筈のそれを、茶々丸は避ける気配が無い。後ろに居る猫達を庇おうとしているのだと気づいた時、チャチャゼロは飛び出していた。

「え？人形？」

「ちょ、何なのよー！」

「ね、姉さん！」

突然登場したチャチャゼロにネギ、明日菜、茶々丸が反応するが構つていい暇はなかった。

飛んでくる魔法の射手を手に持ったナイフで叩き落とす。

一本、二本、三本、、、六本目を落とした所で、チャチャゼロは氣

づく。

「アア、コリヤマズイジヤネエ力」

元々、チャチャゼロが狂氣から供給してもらつた魔力は普通に一日出歩ける程度の量。

戦闘を行うことなど、想定されてはいなかつた。

「ア ア、ナサケネー」

七本、八本目を打ち落とす。

チャチャゼロの体が重くなる。

九本、十本目を打ち落とす。

チャチャゼロは何時も通り笑いながら、妹の方を見た。

「マア、無事デヨカツタジヤネーカ。妹ヨ」

「姉さん?」

「ケケケ」

動けなくなつたチャチャゼロの身体に、最後の一本が突き刺さつた。公園に爆発音が響きわたる。

「え、ヽヽヽ、姉さん? ネエエサン? neesan?」

煙が晴れた先にあつた物は、片腕と片足が壊れ、焦げたチャチャゼロの姿だった。

「あ、ああ、」

トトロ　トトロ

茶々丸の身体から出る警告音が公園に鳴り響いた。

Hiraku (後書き)

やつひつたゞ、ネギ先生。^v(ーー^v

Hirachimaku (前書き)

茶々丸視点とか書いてみようとして、どうかの感じにすれば良いのかな？

と、悩んだ末にロボット風にしてみた！

なんか読み難くなっちゃったぜ！（ローラー）

Hラ一します

ピー ガガガ

現状を確認、ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜との戦闘中、追尾型魔法至近弾多数が接近。

回避は可能。しかし、背後に居る動物、個体名・ネコに被害が及ぶ可能性大。回避は不可能と判断。

当方に回避行動なし。腕、足、腹部への被弾を想定。行動不能状態へ追いやられる物と判断。

「すいません、マスター、、、もし、私が動かなくなつたら、猫の工サを、、、」

「ケケケ」

「姉さん?」

前方に戦闘への介入者あり。視覚的情報により個体名・チャチャゼロ。姉さんと確定。当方の味方であると判定。

ネギ・スプリングフィール及び神楽坂明日菜 対 チャチャゼロを想定。勝敗を計算します。

計算終了。機動力及び経験値は当方が圧倒的有利。勝率99.99%と判断。

援護の必要性を計算。計算終了。必要性は認められず。機動力の差により、足を引っ張る可能性大。

このまま待機を推奨。推奨を選択。現状維持のまま待機します。

「アア、マズイジャネエ力」

不確定要素の発生を確認。当方、姉さんの機動力が元来の数値と隔絶している可能性あり。

原因は不明。今一度、援護の必要性を計算。計算終了。必要性有りと判断。

援護行動へと移行。移行不可能、当方の機動力では追いつきません。

「アーア、ナサケーナ」

現状確認の為、視覚的情報へと移ります。

当方味方、姉さん、第10弾までの迎撃に成功。

続き第11弾が接近、迎撃行動へと移行。機動力低下、迎撃行動停止。第11弾、迎撃不可能。

「マア、無事でヨカツタジャネー力。妹ヨ」

「姉さん?」

「ケケケ」

当方、姉さんの言動を確認。思考・試算した結果、該当件数あり。俗称、死亡フラグなる物と判断。直ちに救援の必要性有り。

第11弾、個体名・チャチャゼロへの着弾を確認。

視界、良好。当方に被害なし。当方が受ける筈の被害を、姉さんが受けた物と判断。

「え、ヽヽヽ。姉さん。ネエサン。neesan?」

返答はなし。左肩、右足への被害を視覚にて確認。危険レベルの損傷を受けた物と断定。

「あ、ああ」

エラー エラー

言語レベルでの エラー を確認、原因を解析。原因解析不能。

「この人形って、なんなんですか！ エラー しちゃいましたよー！」

「わ、私に聞かないでよー！勝手に飛び出してきたんじゃない！」

現状を確認。ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜に現在戦闘の意思はなしと判断。

離脱を推奨。推奨を却下。姉さんを置いての逃走は不可能と断定。

第二次案を計算。計算終了。姉さんを連れての逃走を推奨。

推奨を却下。ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜への当方からの敵意を認識。

感情プログラムへの追加。俗称、憎悪という物が感情プログラムへ追加されました。

「よくも、姉さんを。ネエサンを。neesan?を。 エラー します。 エラー します」

ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜への エラー を推

奨。
推奨を選択。

全身のリーサルウェポンを展開。使用目的、ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜のエラー。

「行動を開始します。行動を開始します。行動を開始します」

「え？ ちや、 茶々丸さん？」

「ミサイルに、機関銃つて、本気なの？」

「当方には敵意あり。ネギ先生の使用した魔法と同等の殺傷力を持つ武器を選択」

「じゅ、銃を降ろしてください茶々丸さん！明日菜さんは一般人なんですよ！」

「当方への攻撃行動に及んだのはそちらでしょう。迎撃行動を非難される言わはないと判断します」

「それでも、銃を使うなんてやり過ぎですよ！明日菜さんが怪我をしたらどうするんですか！人を傷つけるなんて、駄目ですよ！」

「理解不能」

ネギ・スプリングフィールドの言動を解析。

アスナサンガケガヲシタラドウスルンデスカ。

神楽坂明日菜への被害を恐れているものと判定。理解不能。

「当方への攻撃及び私の姉を
るんですか？」

「でも、明日菜さんが傷ついたら血を流す人なんですよ。茶々丸さんはロボットだし、エラーしたのはただの人形じゃないですか！」

ネギ・スプリングフィールドの言動を解析。

タダノーンギミウジヤナイ元又が

理解したくも無い言葉と糾葛を中止

感性一回りもこなす性悪の鋸久を研詰

新たに感情プロセラムへの追加、俗稱「無関心が追加されました」。今後、ネギ・スプリングフィールドの行動の全てに「関心無し」という判断を下します。

「姉さん、行きましょう。マスターならきっと直してくれます」

「あつ！逃げる気ですか！卑怯ですよー。」

ネギ・スプリングフィールドの言動は理解する必要性もなし。

「貴方など、戦う価値もありせん」

「なつー・じういつ意味ですか！」

飛行装置を使っての離脱を推奨。推奨を選択。離脱しました。

「チャチャチャゼロー！」

エヴァからの連絡を聞いて、駆け付けた狂氣が見た物はベッドに置かれているチャチャチャゼロの姿だった。何時も空いている筈の眼も閉じられ、普段では考えられないほど静かに寝ている。

「、、「H」、チャチャチャゼロは」

「安心しろ。無事だ。間接部がやられて、中に魔力が入り込んでいただけだからな。元々チャチャチャゼロは頭部さえ無事なら復活できるよう頑丈に作ったんだ。一二三口もあれば眼を覚ますぞ」

「そう、か。よかつた」

安堵のため息をついた瞬間、狂氣の全身から力が抜け、床にへたり込む。

普段では考えられない情けない姿を狂氣は晒す。

それほどまでに狂氣はチャチャチャゼロのことを心配していた。

「狂氣様。御茶をお入れしました。どうぞ」

「あ、ああ、ありがと。茶々丸」

お茶を口に含んで、心を落ち着かせると狂氣は何時も通りの様子に戻る。

そして、それを見て安心したエヴァは切りだした。

「チャチャゼロこんなにしたのは、ボーヤか？」

「はい。私が公園でネコに餌をあげているさい、氣を抜いてしまい襲われてしまいました。その時、姉さんが私を庇い。このような損傷を」

「ふ、ふふふ。あはははー本当に立派だよ。ネギ先生は、悪を倒す為なら昼間に魔法を使うことも生徒を襲うことも躊躇しないというのだからな」

エヴァが大声で笑いながらそうい。だが、眼は笑っていない。眠るチャチャゼロを見ながら、口元を歪に吊り上げる。

「そちらが本氣で来るといいうなら、私も本氣を出さなければならん。なあ、茶々丸」

「はい。マスター。前回のよつて手は抜きません。全力で潰しましょう」

「くつくつく、当然だ。あのガキ、氷漬けにしてやるー。」

バンッ、とエヴァが床を踏みつめると部屋に冷気が四散する。茶々丸は何時も通りの無表情だが、瞳は鋭く細められていた。

「エヴァ、茶々丸。俺も「狂氣は手を出すな」、だが！」

「元々、私がボーヤを調子づかせたのが原因だ。この決着は、私が付ける。いくらお前でも手を出せば、許さんぞ」

「・・・わかった。だが、大丈夫なのか？封印状態でもエヴァがネギに負けるとは思わないが、外野が手を出してたらまずいだろ。最悪、高畠や学園長が出てくるかも知れないと」

「それ付いての策はある。なあ、茶々丸」

「はい、マスター。実はマスターの魔力を抑え込んでいるのが、サウザントマスターのかけた無限登校地獄ではなく学園に張られた結界ということが判明しました。この結界は科学の産物、電気によって動いています。なので、2日後の大停電の日、予備電力を落とすことマスターの魔力は回復します」

「なつ、無限登校地獄以外にもエヴァを縛る呪いがあつたのか！」

「ああ、そちらしい。ハイテクという奴だな。私も10以上気付かなかつたよ」

驚く狂気に、忌々しそうなエヴァ。
虚空を握りつぶしながら言つ。

「まあ、そういう訳だ。大停電の日、私は魔力が戻り次第ボーヤを襲う。全力さえ出せれば、私の前に敵などいないさ。タカミチが出ようが爺が出ようが、潰すだけだ」

「そうか。エヴァが全力を出せるなら心配はいらないな」

「当たり前だ。お前はチャチャゼロを見てやつていてくれ。言つておぐが、間違つても、手は出すなよ？」

「ああ、約束する」

ネギは誤つた。他人から見ればただの人形に見えるかもしれんチャチャゼロが誰かにとつては家族であり、大切な人であるということを理解していなかつた。

ただ、子供だったからでは済まされない。

誰かを傷つけたのだ。なら、自分が傷つけられることを覚悟しなければならない。

ネギにその覚悟があるのかどうか、全ては大停電の日の夜。明かされる。

エヴァの家を出た狂氣は、その足で超包子に向かつていた。

「超、頼みたいことがある」

「突然、なにかナ？」

「機械関係、ハイテクならお前が誰よりも詳しいから。

そういう訳で、潰して欲しいんだ、学園長が掛けているだろう保険を」

「ふふ、なるほど、理解したね。同士の頼みなら、聞いてあげてもいいアルヨ。けど、私は安い女じやないヨ？」

「一つ貸し、でせどりうだ？」

「アイ、お買い上げありがとうネ。同士

こうして、大停電の夜。あらゆるイレギュラーが起こる可能性は消えた。

ヒラーします（後書き）

次回、エヴァ無双！

エヴァ無双1　主人公は留守番中（前書き）

エヴァ無双！としか言えねえぜ、 、 、

エヴァ無双1　主人公は留守番中

運命の大停電の夜。狂氣は一人、エヴァの家に居た。

目の前にはベッドに横たわり、眠るチャチャヤゼロの姿があった。

無言の静けさが部屋を包む。時計の針が進む音のみが木靈していた。

チツチツチツ

そして、時計の長針が12を短針が8を指示した瞬間、部屋の電気がきえた。

暗闇の中で用意しておいた蠅燭に火を灯す。

狂氣は窓から外を見ながら、呟いた。

「始まつたか」

エヴァにとつては待ち焦がれた夜が始まろうとしていた。
この夜が訪れる間に色々なことがあった。

チヤチヤゼロの修理に没頭しすぎて風邪をひいてしまったり、風邪の上に花粉症を患つてしまったり。

ネギが謝罪したいと言つてきたから、話くらいは聞いてやるかと家に招き入れたら果たし状を付きつけられたり。

その時はその場で殺そうかとすら思つてしまつた。

だが、耐えたのだ。我慢した。全てはこの日の夜の為に、ネギを完全な絶望へと誘い為に。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 光の精霊、集い来りて、

、魔法の射手 連弾11矢！！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 氷の精霊12柱 魔法の
射手 連弾・12矢！！」

相殺しきれない1本の魔法の射手がネギの身体を穿つ。
幾らネギがその身に障壁を展開しているからと言って、衝撃の全て
は無効果出来ない。

ネギは乗っている杖を揺らしながら、痛みに耐える。

「ぐつ、ま、まだです！ラス・テル ラ・スキル マギステル 雷
の精霊28柱 魔法の射手 連弾・28矢！！」

「ハハ、雷も使えるとは！だが、詠唱に時間がかかり過ぎだぞ！リ
ク・ラク ラ・ラック ライラック 魔法の射手 連弾・闇の29
矢！」

またしても相殺しきれない1本がネギの身体に突き刺さる。
何度も、何度も、何度も、当たる一本の矢がじわじわとネギの身体
を傷つけて行く。

蛇の生殺しのように、痛みが、苦痛が、出来るかぎり続けばいい。
エヴァはそう考え口元を吊り上げる。

「くう、つつ、「

「アハハハ！苦しめ、ボーヤの苦しみが私の蜜となるーさあ、もつ
とだ！もつとー！」

「（ス、スゴイ力だ。とてもかなわない。でも、あと少し、あと少
しでの場所が、見えた！）

ネギが目指していた場所がわかると、エヴァは鼻を鳴らし嘲笑う。

「ふつ、なるほどな。ここの橋は学園都市の端だ。私は呪いによって外には出られん。ピンチになれば学園外へ逃げればいい、か。、、意外とせこい作戦じやないか。え？先生」

無様に転がるその姿を見てエヴァは愉悦の笑みを浮かべながら前に進む。

無論、足元に仕掛けられた捕縛結界には気づいているが避ける必要すらなかつた。

パシィイイイ！

捕縛結界が発動し、エヴァを包む。

「や、やったー！へへへ、ひつかかりましたね！エヴァンジョンジエリンさん。もう動けませんよ。これで僕の勝ちです！さあ、大人しく観念して悪いことはもうやめてくださいね！」

「……で？これがどうしたのかな？ボーヤ」

捕えられてなお笑みを浮かべたままのエヴァを見て、ネギは困惑する。

「私を捕えた後、ボーヤは私をどうする気なのかな？」

「え、ど、どうするって、悪いことを止めてもうつりますー。」

「ここの結界では永遠に私を閉じ込めて置くことは出来んぞ。どうせ

つて私が行つ悪行とやらを止める？殺すか、この私を

「！」、殺すつて、、そんないと出来る訳がないじゃないですか！

「何故だ？ボーヤは茶々丸を殺そうとし、事実チャチャゼロを壊しちだらう？」

「それは、茶々丸さんは口ボットだし、僕が壊したのはただの人形だから問題はないって、カモ君がいいました！」

杖を握りしめてそう断言するネギを見て、エヴァは思う。

「（ああ、これは、茶々丸が感情を抱いたのも当然だな）」

「無辜、無常、無用、無知蒙昧。ああ、極まればいつそ清々しい。良いだろ？、認めてやろ？。ボーヤのその理論。人間だから、人間じゃない者を殺すことに罪はないと。そういうのだな！いいだろ？なら！」

エヴァの身体から魔力が溢れ出る。縛っていた結界が音を立てて崩壊する。

「私もボーヤと同じように、人間を壊そう。なに、問題あるまい？私は吸血鬼なのだから」

「あ、ああ、あああ！」

空間に満ちた冷気にネギは震え、生れて初めて死の恐怖を感じた。そして、生れてはじめての死地にネギの魔力は暴走する。呪文も無く、ただぶつけられる為に放たれた魔力の塊を前にしても

エヴァは笑みを絶やさない。

「ああああああああああ！」

「無駄だ、ボーヤ。怖れで私は殺せぬよ」

ネギの全力魔法もエヴァの前で霧散した。

知りたくないでも押し付けられるように認知させられるほど圧倒的な力。

突如として溢れ出た魔力は直ぐに麻穂良に居る魔法関係者へと伝わった。

無論、それは狂氣と近右衛門にも伝わってきた。

「エヴァ、どんな結果になつたとしても、俺はお前の味方だ」

「な、なんじや。この魔力は！」

狂氣はチャチャゼロを見ながら薄く微笑み、近右衛門は学園長室の椅子に座りながら瞠目した。

それがそのまま彼らの違いであり、根幹にある意思の強さの違いでもあつた。

男は恐れを抱かない。恐れる必要性も感じられない、あの魔力は味方であり友だから。

そしてもし、あの力が自分に向いたとしても対抗する覚悟はある。

戦いから逃げてきたからこそ、戦いが何たるかを知り覚悟している。

対して老人は人を知るが故に楽観していた。闇の福音が誇り高き悪であり、女子供を殺さない主義であるということに胡坐をかいていた。

理解をしてなどいなかつた。誇り高き悪であろうと、悪であり。主義は何処まで行つても主義でしかないと。

「ケ、ケケケ。随分ト思ワレテルジャネーカ、御主人ハ。焼ケチマウナ」

「つっ！ 気が付いたのか！ チヤチャゼロ！ 治つたか！ 違和感があることとかないか！」

「大丈夫ダカラヨ、身体ユスルノヤメロ」

「そつか、よかつた。ホント、よかつた」

そう漏らしながら抱きついてくる狂氣を見て、チヤチャゼロはため息をつく。

「（ナサケネーナ、俺。狂氣ニ心配ヲ掛ケルナンテヨ）」

「コレジヤ、守ラレルダケジヤネーカ」

「チヤチャゼロ？」

『チヤチャゼロ、お前がいてくれただけが支えだよ。なんかあつたら助けてくれよな』

思いだすのは、日常で言われた狂氣の言葉。

なぜその言葉をずっと覚えていたのか、チャチャゼロ自信も分から
ない。

だが、なぜだろうか。空っぽの筈の胸に響くようにその言葉が木靈
する。

チャチャゼロは生みだされて初めて、殺す為に戦うではなく守る
ために戦いたいと思つた。

今まで芽生えなかつた感情が何故芽生えたのか、それは誰にもわか
らない。

「ナア、狂氣。俺ト仮契約シテクンネー力？」

「、俺とお前が仮契約、だと？」

「アア、仮契約シテ、バイパスガ繫ガレバ、オ前から送ラレル魔力
デ俺ハ自由ニ動ケル様ニナルシヨ。、。イヤ力？人形ト仮契約ナ
ンテヨ」

唚然とする狂氣にチャチャゼロは普段では考えられないほど静かな
口調でそういう。

「馬鹿、嫌な訳ないだろ。けど、出来るのか？チャチャゼロはエヴァ
と正式な人形契約しているだろ。幾ら仮の契約でも色々と不味い
んじやないのか？」

「変なことを聞くな？出来るに決まってるだろ、チャチャゼロはチ
ヤチャゼロなんだから。そんなことより、チャチャゼロが俺とエヴ
スル所ダロー！」

「変なことを聞くな？出来るに決まってるだろ、チャチャゼロはチ
ヤチャゼロなんだから。そんなことより、チャチャゼロが俺とエヴ

ア、二人の従者になることが出来るのかがだな「ソリヤ！」、「」
痛い。なにすんだよ」

チャチャゼロは笑いながら狂氣の頭を叩く。
狂氣は不満そうにチャチャゼロを見た。

「勘違イシテソジヤネーヨ。誰ガ才前ノ従者ニナンテナルカヨ。俺
ガ従者ニナルンジヤネー、才前ガ俺ノ従者ニナルンダヨ。ソレナラ、
問題ネー」

「俺が、チャチャゼロの従者か」

「嫌力？」

「まさか、嫌な筈がないだろ?」

狂氣によつて仮契約陣が引かれる。

蠟燭の光とは比べ物にならないほどの灯りが部屋を照らす。

「い、行くぞ」

「柄ニモナク緊張ナンテシテソジヤネーヨ」

「うるさい。初めてなんだよ」

「ケケケ、俺モダゼ」

光の中で、狂氣とチャチャゼロの影が重なる。

人形の主と人間の従者。なんとも珍妙な主従関係が出来上がつた瞬
間だった。

エヴァ無双1　主人公は留守番中（後書き）

エヴァは最強だと思うんですね、個人的に。
スクナを瞬殺出来ちゃうんですね？

チャチャゼロとの仮契約は「都合主義」です。
でも、茶々丸もできるんだからチャチャゼロだつてできるでしょな
いかなあ？

エヴァ無双2（前書き）

エヴァ対ネギ戦。決着。

エヴァ無双2

たとえば彼の一生が、定められている物だとしたらどうだろ？人生における選択、些細なものから重要な物のまで、選んでいるのではなく選ばされているのだとしたらどうだろ？
与えられた環境、与えられた試練、与えられた従者、与えられた戦い。

そして、与えられた勝利。

富める者は富めるように、貧しき者は飢えるように、英雄は善人として、罪人は悪人として。

英雄の子は英雄に。

ただ流されるままに生きる人生。その流れを作る者、流される者。英雄の子はなにも知らずに、ただ戦い、勝利する。
それが誰かが引いたレールの上であるとも気づかず。

「うむ、まずいの。まさか、エヴァがネギ君相手に本気を出すとは、此処までじゃな。高道君、聞こえておるの。予定より早いが停電を復旧させるのじゃ」

『はい。学園長』

遠見の魔法で様子を見ていた近右衛門は残念そうに高道へそう伝える

全ては定められた結果。

美しき者醜き者、弱き者強き者、不幸な者幸福な者。

そして、勝者と敗者。

全てはそうなるようにそれ以外にはならぬよう定められてることにしたらどうだらう。

一人の英雄の子とその他多数。己の意思で決めたのではなくさうさせられているだけだとしたら。果たして、それを許せるか?

否、断じて否

『が、学園長。停電の復旧が出来ません!』

「なつ、ビ、ビツコウ」とじゅー

『わかりません。しかし、全システムが深夜1~2時丁度に復旧するよう強制的にプログラムされています。ハッキングし返そうとも、何者かによつて阻害されています!』

「な、なんじゅと。一体誰が、こんな真似を、、、いや、それよりもネギ君が、このままで未来の英雄が、、高道君…そこはもう良いい、至急ネギ君とエヴァの元に向かうのじゅー」

『はい!わかりました!』

「、、、高道君がエヴァを止められたと善いが、しかし、一体誰がこんな真似を、、、」

「学園内の電力プログラムを全てハッキングしました。けど、こんな真似して良かつたんですか？例の作戦を開始するまでは目立つ行動は控えた方がよかつたんじゃ」

「仕方ないネ。同士との約束だ。それに、たったこれだけのことで同士に貸しを作れた。とても安い買い物ヨ。あと、私達は何も悪いことしてないヨ？ただ時間通りに停電が終わるようにしてだけネ」

エヴァとネギの戦闘は一方的なものになっていた。

橋の上を逃げ回るネギを追うようにエヴァは魔法を放つ。ネギの唯一の希望であつた結界外への逃走も、作られた氷の壁がそれを阻む。

「どうした、ボーヤ。この程度でもう負けを認めるのか？お前の親父ならばこの程度の苦境、笑って乗り越えたものだぞ！」

「くっ、ラス・テル マ・ステル マギステル 来たれ雷精風の精

！」

「ふつ、それでいい。リク・ラク ラ・ラック ライラック 来たれ氷精風の精！」

橋の上でエヴァとネギの魔法が衝突する。

方や勝利を約束されていた筈の英雄の息子と、方や負けることが決まっていた伝説の吸血鬼。たつた一人の男の介入によつて、運命は変わる。

「雷をまといて吹きすべき南洋の風」

「闇を従え吹雪け常夜の氷雪」

「雷の暴風！！」

「闇の吹雪！！」

互いの魔法は一瞬だけ拮抗し、吹雪が暴風を包んだ。吹き荒れる冷たい夜風の中でエヴァは刃を背にしながらネギを見下ろす。

「まあ、よく頑張ったよ、ボーヤ。結局、私の足元にも及ばなかつたが、最後まで一人で戦つたことは褒めてやるわ」

捕えていた茶々丸の腕を抜けだして、ネギに駆け寄る明日菜を見ながらエヴァはそう言つた。

途中でネギと合流し、仮契約を交わした明日菜の介入をネギは拒絶した。

もし、ネギがエヴァとの初戦で死の恐怖を感じていなかつたら助け欲しいと頼んでいたかもしれない。

だが、死の危険を感じたネギは、残つていた最後の理性で明日菜を遠ざけた。

その点だけは、確かに評価できることだつた。

「どうして、どうしてこんな酷い」とするのよー。エヴァンジェリン

！」

「酷い？笑わせてくれるなよ、神楽坂明日菜。これは戦いだぞ。酷いも何もないだろう」

「ね、ネギはまだ子供なのよ…」

「戦いに歳など関係あるか。それに果たし状を叩きつけてきたのはボーヤの方だろう」

「それはアンタがクラスメイトを襲つたりするからでしょ…」

「ふん、そのクラスメイトに闇打ちを掛けたのは誰だつたかな？」

「そ、それは、、そうだけど」

「あまつさえ、私の家族を傷つけたんだ。殺されないだけありがたく思え」

「、、、家族つて、ネギが壊したあの入形のこと？」

「そうだ」

エヴァは倒れてボロ雑巾のよつになつたネギと、それを庇う明日菜をみながらいう。

「貴様らにとつてはただの人形だつたかも知れんがな、チャチャゼロは大切な私の家族だ。私は私の家族を傷つける者を誰だろうと許さない。大体、口ボットだから人形だからと覚悟も無く傷つけること自体が傲慢だ。貴様の勝手な価値観を押し付けるなよ、小僧」

「な、なら、僕は一体、、どうすればよかつたんですか？エヴァン

ジエリンさんを止める為には、僕は戦わなきゃならなかつた…ひとつすればいいっていうんですか！」

「簡単だ、覚悟を持つて戦えば良かつた。私はボーヤのそこが気に入らん。たいした覚悟も無いくせに闇打ちして、謝罪と共に果たし状だと？ふざけるなよ、卑怯に徹する覚悟も無ければ誠意を見せる気すらない。半端者だよ、親父とは大違いだな」

「……とう、さん？」

「ああ、アイツは大雑把な奴だつたが曲がりなりにも真つ直ぐだつたぞ。私のことも最後の戦いで此処に封じ始めた。抵抗も出来ぬほど大きな呪いを植え付け、自由を奪つてな。ボーヤにはそんな覚悟も無いのだろ？」「

「……」

「なら、奴の後を追うことは諦めるんだな。ボーヤでは奴の影も踏めんよ。もつとも、この弱さではそれ以前の問題か。アーハッハッハ。あー、おかし！」

「マスター、せつかくのシリアスな場面が台無しですよ」

「おつと、失敗、失敗。だが、まあ、シリアスになどなる必要も無かつたな。奴の息子がこんなにも弱いとは、封印状態でも圧勝だつたか。結界を解く必要などなかつたな。さて、もういい、行くぞ、茶々丸」

「よろしいのですか？」

「ああ、此処まで言つてまだ立ち上がれないボーヤなど、戦つ価値も無い」

「そうですね、マスター」

何時までも地面を見つめるネギを一瞥してから、エヴァと茶々丸は夜の闇へと消えて行つた。

仮契約を終えた狂氣とチャチャゼロは居間で休憩していた。

狂氣とチャチャゼロを繋ぐバイパスは問題なく繋がったようで、チャチャゼロは自由に動き回り、エヴァ秘蔵のワインを勝手に開けてカパカパと飲んでいる。

「へー、コレガ仮契約カードッテヤツカ。ケケケ、良ク出来テンジヤネーカ。ソレニシテモ、ナンテ描カレテル狂氣ハ上半身裸 NANDA? 变態ダカラカ?」

「この格好は、魔法界で拳闘士をしてた頃の服だ。変態とか言つな」

「ナンドヨ、人形トキスシテ顔赤クスル奴ハ变態ニ決マツテンジャネーカ」

反論できない、と思ったのだろう、狂氣は開き掛けた口を塞ぐと息を落ちつけながら「一ヒーを飲む。

「ふう、まあ、いい。それより、早く俺にスペアカードをくれ」

「アア、ホラ弔」

受け取ったカードを見れば確かに、上半身が肌蹴る黒を基調とした拳闘士服を着た狂氣が立っている。

空手無刀で両手には何も持っていない、とういうより服以外には何もない。

絵の中には無駄な装飾品も武器も描かれていない、ただ四角く描かれた地面に拳闘士服を着た狂氣が立っているだけである。

「これ、可笑しくないか？普通は何らかのアーティファクトが描かれてる筈だろ？着ている服がアーティファクトなのか？いや、けどこれは俺が魔法界出来ていた服だし」

アーティファクト名は 勝者こそが正義を語る場ラスト・バトル

「なんだかカツコイイ名前だな。少し痛い気もするが。出してみるか？」

「ヤメトケヨ。ソロソロ御主人ガ帰ツテクルゼ」

時計を見ればいつの間にか十一時を過ぎていた。

「そうだな。疲れてるだろうから、紅茶でも入れてやるか

そう言って、狂氣は台所に向かうのだった。

その頭にチャチャゼロは飛び乗つて何時も通り笑う。
大停電の夜は、こうして幕を閉じた。

エヴァ無双2（後書き）

結構あつさじ終わってしまった、

ヒガア 無双 幕引き（前書き）

エヴァ 対ネギ戦。
これにて幕引き！

エヴァ無双 幕引き

大停電から一夜明けた早朝。まあ、早朝と言つても時間はまだ3時。そんな深夜と言つてもいい時間帯にもかかわらず世界樹広場には麻穂良に勤める多くの先生と一部の学生達が揃つていた。

男性、女性、人種、背格好、それは全員がまちまちに違つていた。一般的な教師のなりをした者もいれば聖職者の衣に身を包んだ者、果ては堂々と刀剣の類を持った者までいる。

何もかもが違う彼らだが、ただ一つの共通点があり、その名の元にここに集つている。

そつ、此処に居る全員が魔法という神秘を知つてゐる者たちだった。あ、真名。お前も来たのか

集つた生徒の内の一人、輪の端に居た刹那は近づいて来た女子生徒、龍宮真名を見てそう言つた。

表情にこそ出さないが、その声色には安堵や喜びが感じられる。

「ああ、刹那か。流石にあれ程の魔力を感じてもなお、寝ていられるほど楽観的にはなれなくてね」

「そうか。どうあれ、来ててくれてよかつた。・・・どうにも、この場は居づらくて」

「全員殺氣だつているからね。まあ、あの魔力だ。闇の福音が復活したのかと勘ぐっているんだろう。当然と言えば当然だよ」

「だからと言つて、抜き身の刃物や銃器を持っているのは問題だろう。夕凪を持つてゐる私が言えた義理じゃないが」

「確かにね。ガンドルフィー二先生以外は闇の福音を樂觀視していたようだし、今回の件で氣を引き締めて、引き締め過ぎてしまつたところじゃないかな？もしくは、この場に居る闇の福音と半分は同じである私達への牽制かもね」

「なるほど、、、露骨に感じじる居心地の悪さの正体はそれか」

龍宮からそう聞いた後、周りを見れば確かに自分達を周りが避けている様に思える。

無論、刹那自身自分から輪の端へと身を置いていたのだから、被害妄想である可能性はぬぐえないが、あながちあり得ないことじやないと刹那は思つ。

「まあ、居心地の悪さで行つたら私が一番です」

「うひやー！だ、誰だ！、、って、綾瀬か。いきなり後ろから声を掛けるな！」

「まつたく、心臓に悪いね」

突然現れた夕映に刹那は奇声を上げて身を跳ねさせ、龍宮も驚いたが少し眼を大きく開くだけにとどめた。この辺が経験の差と言える。夕映は驚いた刹那の様子にピースを向けたが、刹那はこめかみをピク付かせるだけだった。

「ふふ、あまり刹那をからかってくれるな。これでも意外と恐がりなんだ」

「なつ、誰が恐がりだ！私は断じて臆病者などでは「そうですか、

わかりました」納得するな！」

「恐がらせて下さいません。桜咲さん」

「謝るな！頭を下げるな！」

桜咲刹那、龍宮真名、綾瀬夕映、この三人は同じ3・Aのクラスメイトであり仕事仲間でもあった。

表では各自の事情で表立つて仲良しと言つ訳ではないが、裏ではそれなりに仲良くやつっている。

最近では色々な諸事情により三人でコンビではなくトリオを組んで仕事をすることもあり、前よりも碎けての会話が可能となっていた。三人でいる時のギャグ要員は刹那であるが、「私はギャク要員ではない！」本人は認めていない。

「まあ、コントはそれぐらいにして「コントではない！」。綾瀬に聞きたいことがあるんだが、良いかな？」

微笑みながらそういう龍宮に夕映は何処からともなく取り出しあ紙パックのジュースを飲みながら首を傾げる。
無視をされた刹那は涙目で龍宮を睨んでいる。

「なんですか？」

「今回の件、君の師匠が関わっているんじゃないかと思つんだけどね。何か知つていてるかい？」

「ん~、私は今回の件に関しては関わらないと師匠から聞いていますから、関わっていないと思いますが、師匠は少し気分屋というか、怒りっぽいところがあるのでしかしたらという可能性は捨てきれ

ません」

「そうか。ん？今回の件というと、綾瀬は闇の福音の封印が緩むのを前から知っていたということかい？」

「ええ、龍宮さんは聞いていないのですか？元々、ネギ先生とエヴァンジエルンさんの戦いは学園長が与えたネギ先生への試練の一つだと師匠から聞いていたのですが」

「聞いていないな。刹那、君はどうだい？」

「いや、私も聞いていない。それに、あの様子では一部の魔法先生達以外も聞いていなかつたのだろう」

刹那が目を向けた先には多くの魔法先生に詰め寄られる近右衛門の姿があつた。

抑えに回っているのが高畠くらいしかいない様子から、それが秘密裏に行われたことだとわかる。

「秘密裏に、というのは余りいい気分ではないが、学園長がどういう積りだつたのか。それは彼らに聞けばわかるのかな」

そう言って龍宮が目を向ける先には、吸血鬼とロボットに人形と人間という性別や人種どころか種族さえバラバラな四人の姿があつた。

12時を過ぎた頃帰ってきたエヴァと茶々丸を迎えて、紅茶を出すついでに色々な話を聞いてから、布団に入ったのが一時間前。

丁度気持ちよく寝はじめた頃に呼び出され、狂氣はとても機嫌が悪かった。

「眠い、眠いぞ」

「私は眠くないぞ、吸血鬼だからな。調子が良い位だ」

「俺モ眠クネー、人形ダカラヨ。ケケケ」

「私も、睡眠は必要ありません。ロボットですから」

愚痴を零した狂氣だったが周りに誰も援護してくれる者がいなくて、仕方なく眠い目を擦りながら呼び出した元凶の方へと向かう。周りを見れば、弟子や友、それに敵意を含んだ視線を向けてくるその他大勢がいる。

狂氣としては面倒にならなければいいな、すぐに帰つて寝たいなどと考えているが、隣を歩くエヴァと頭に乗つているチャチヤゼロの笑みを見れば面倒に巻き込まれるのは確定していた。

「で、爺。私達を呼びだしたのは何の用だ」

「ふむ、実はのお。ネギ君との件を此処に届ける旨に説明して欲しくて」

「

エヴァと近右衛門が色々話をしているが、どれも狂氣の耳には届かない。

眠いのだ。猛烈に、眠いのだ。こんな時間に呼び出された苛立ちよりも、眠気の方が圧倒的に勝っている。

狂氣は耳に入る会話を全て聞き流しながら、エヴァの隣で立つたまま寝ていた。

「 ！ ！」

「 ！」

「 ぐう」

「 オイ、オキロ。終ワツタミタイダゼ」

「 、 、 、 ん、 そつか。 なら俺は帰る」

チャチャゼロの言つ様に話し合いは終わたらしく、近衛門は疲れたようなため息を付いていて、その横では高畑が苦笑いを浮かべながら煙草を吹かしている。

エヴァは何時もと変わらぬ様子で悪い笑みを浮かべ、それを睨んでいるガングロ、 Gandolff 。

彼らの姿以外、もうあまり人は残っていなかつた。もう帰つたのだろう。

狂氣ももう寮に帰ろうと、頭の上のチャチャゼロを茶々丸に預けて足を寮へと向けるが、

「 待ちなさい！」

それを止める声がした。

狂氣は面倒そうに振り返る。声の主はさつきまでエヴァを睨んでいた Gandolff だった。

「 なんですか？ Gandolff ！」先生

「君は悪である闇の福音の手下になってしまったのか！ネギ姫と同じ英雄の子である姫がなんでそんなことを…」

いきなり脈絡も無い言葉をぶつけられて、『英雄』といつ言葉に普段なら怒りを覚える狂気も一瞬、呆けた。

「別に俺はエヴァの手下になつた覚えはない」

「ならなんで親しげにしているんだ！」

「友達だからですよ。だいたい、なんで親しげにしちゃいけないだ？敵対するならともかく、仲良くするのはいいことだろ」

「ヒグアンジエリン・A・K・マグダウェルは悪の魔法使いだぞ！君のように光を歩く者が関わっていい相手ではない！君も正義の魔法使いなら付き合つ相手を選ぶべきだ！」

そしてガンドルフィーーの態度に怒りを通り越して呆れを覚える。

「はあ、いい大人が悪だと正義の味方だとか言うなよな。そんな夢を抱いていいのは子供までだろ。魔法も使えない一般人だつて、大人になるころには気づくんだけ？正義も悪もただの言葉遊びでしか無いつて」

出来る限り言葉を選んで、親切に分かりやすくそう伝えた積りの狂気だったが、いまだに自分を睨みつけてくるガンドルフィーーにい加減苛立ちを覚える。

「だいたいよお、もし仮に正義つて奴がこの世にあつたとしても、

それはテーマなんかが口にしていい言葉じゃない筈だぜ？なあ、そううだろ。一般人の女を魔法で脱がすような変態小僧を庇つてゐる露出狂信者さん？

「なあっ、あ、君は何を言つんだ！」

「あれ？違つの？俺はてつきり自称正義の魔法使いは子供が女の服を剥ぐのが見ていて楽しいからネギを放置してんだとばかり思つてたんだけど。そうじゃないのか？むつりスケベ」

「ふざけるな！そんな理由でネギ君の罪を見逃すか！私達は彼が英雄の息子だからこそ、彼の悪行を、、、はつー！」

しまつたと、あわてて口を塞ぐガンドルフィーーを見て狂氣はにやりを笑う。

「なんだ、気づいてるじゃないか。結局、正義も悪もただの言葉遊びだって、なら、あんたにもまだ救いはある

「へへ、」

「せこせこ、仲良くやつましょつよ。俺は別に、アンタ達と無理にでも敵対したいわけじゃないんだ。やられたらやり返すが、誠実な態度と相応の報酬を渡すなら手を貸すのも吝かじやない。なあ、エヴァ

「まったくだ！アーハッハッハ！」

「マスター、最近よく笑いますね」

「仕方ないだろ。見たかあの正義馬鹿の顔！あーおかしー！」

「ケケケ、ザマアネエナア」

思い思いの捨て台詞を吐いて去っていく四人をガンドルフィーは歯を噛みしめて見送るしかなかった。

おまけ

弟子と狙撃手と護衛ちやん。

「なぜ、師匠はヒガーンジーリンさんの家の方に向て帰つていへのじょり。寮は反対側の筈ですが」

「何かやることでもあるんじやないのかい？夜じやなきや出来ないこと、とかね」

「まつまさ、え、えつちな口ト、ヽヽとか？」

「ヽヽヽヽ、桜咲さんもむつリストスケベですか、、意外です」

「へ？」

「ふむ、意外だ。刹那がむつつづだつたとせ」

「！」これはその、ち、ちがーうー。違つねんー。みゆ、話聞こへー。ウチを置いてどつかいかんとこへー。」

真実はいつ

「あ、やばい。ノリでいつちに来ちました。。今から戻つたらかつ
こ悪いよな？」

「ケケケ、イイジャネーか。モウ遅イシ、ウチニ泊マッテケヨ」
「チャチャゼロがそいつならそいつするか」

「なんだ、貴様ら? 仲が良すぎて少し気持ち悪いぞ。なんかあった
のか?」

「「なんでもねえ(ナン)トモネエ」」

エヴァ 無双 幕引き（後書き）

二話で終わったエヴァ編（：――）
次は修学旅行編か、、すぐ終わっちゃいそうだぜ！

修学旅行の約束（前書き）

ネタがない・・・（ ； ）！

と言う訳でこれが終わつたら修学旅行編に突入します。

修学旅行の約束

麻穂良学園の空気が浮かれたものへと変わっている。ただでさえ普段から騒がしい麻穂良学園がさらに活気立ち、姦しい。そんな麻穂良の様子を外から見る一団がある喫茶店のオープンテラスに居た。

「騒がしいな。何だといつのだ？」

「マスター。もうすぐ、修学旅行ですか？」

「ああ、そう言えばそうだったな」

茶々丸の言葉を聞いたエヴァは思い出したように不貞腐れながら紅茶を啜る。

眼に映るのは楽しそうにお菓子をまとめ買いするクラスメイトや子供な先生を引っ張り回すクラスメイト、クラスメイトを尾行するクラスメイトなど。

「ふん、修学旅行」ときど浮れあつて、まだまだ子供だな

「羨マシイナラ、素直ニソウ言エバイイダロ、御主人」

「羨ましいのか？エヴァ」

「つらやましくない！だいたい、私は15年も中学生をやつしているんだぞ！修学旅行だつて五回目だ！京都だつて二回目の時の行先だ！だから羨ましくなんてないもん！」

「羨ましいのですね。マスター」

「羨マシインダロ、御主人」

「羨ましいのか、エヴァ」

まあ、考えてみれば中学生を15年もやつて置きながらただの一度もエヴァは修学旅行に行つていないので、うらやましいとしても仕方がないことなのがもしかれない。

「と、とにかく狂氣。貴様の高校の修学旅行は一体どこに行くのだ？」

三人に図星を付かれたエヴァは話題を逸らそうと必死になる。いまいち、逸させていないのは御愛嬌。

「ウチか？ウチは、確かハワイだったな

「ふーん、ハワイか。やはり高校ともなると国内ではなく海外に飛び出していくのだな。まあ、良かつたじゃないか。狂氣は英語も出来るのだろう？存分に楽しんでくればいいさ。お土産はマカダミアナッツのチョコでいいぞ」

「俺ハ、パイナップルワイン」

「私はマカダミアナッツオイルと言つものを」

「あー、いや、期待に添えなくて悪いが、俺は修学旅行には参加しないぞ」

「は？ どうして参加しないんだ？」

「いや、だって俺、クラスに友達いないし。不良なんてやつてると、友達が出来ないんだよ」

狂気の言葉で、一瞬にして場が凍つた。
エヴァの飲んでいた紅茶はいつの間にかアイスティーになっていた
し、茶々丸は何時もより身体の調子がよくなつた。
首を傾げたまま固まるエヴァは突き刺さるような二つの視線を感じ
る。

見れば、自分を睨んでいたのは一人の従者だった。

「…………」

「（まつ、まて、私が悪いのか！）」

「（他に誰かいりますか？）」

「（ア ア、狂気ノ奴、可愛ソウダナー）」

「（だ、だが、別に奴に友達がないのは私のせいではないぞ！）」

三人はそんな言い合いを念話でやつていたのだが、それを見て何を勘違いしたか分からぬが狂気は言葉を続ける。

「あー、なんだ。だからさ、俺は修学旅行には行かないんだ。ああいうのって、班作つて行動したり寝泊まりしたりするだろ？ 友達グループの中に仲がいい訳じやない俺が入つて、いまいち盛り上がりない様子とか見たくもないしな」

「（マスター。狂氣様がとても悲しい言い訳を言い始めてしまいました。どうしてくれるんですか？）」

「（いや、どうあるといつても、私にはどうも出来んぞ）」

「（…………まったく、使えないマスターです
ね）」ボソッ

「（茶々丸！今、何を言つた！私の聞き間違いだよな！？）」

「アー、狂氣。意外ダナ、才前ガ他人ニ氣ヲ使ウナンテヨー」

「その言い方は心外だ。俺も他人に氣を使うぐらにする。蔑にするのは敵対する奴らだけだ」

氣丈に振る舞う狂氣を見て居られなくなつたチャチャゼロはなんとか話題を逸らす。

「（流石は姉さん。それに比べてマスターは、はあ）」

「（今、ため息をついたか！ついたな！…）」

「まあ、それに」

「ソレニ、ナンダ？」

「修学旅行に行くのは、エヴァが卒業した後、みんなで一緒にけばいいしな」

狂氣は笑つてそういつた。

言い合いをしていたエヴァ、茶々丸は顔を見合せると声を合わせて答えるのだった。

師匠である狂氣が爽やかに笑っていた頃、弟子である夕映は困惑していた。

どれぐらい困惑していたかと言えば、自販機の前でその話を聞き、間違つて鳥龍茶を買ってしまつほど困惑していた。

「（なぜです。何故なのです…）」

声が震える。田の前で囁かれる現実を直視できない。

鳥龍茶を持つ手も震える。あり得ない筈だった。

そうなる道程を世界は明確な意思を持つて潰していったといふのと、これが運命だとでもいうのだろうか。

だとしたら何たる無体、世界は総じて厳しくなる。

「ねえ、聞いているのー？夕映。のどかつてばネギ君が好きなんだつてー！」

「ぱ、パル。違うよー。わ、私はネギ先生のことは、その、少ししか、」

「（神よおおー…）」

夕映は思わず頭を抱えて跪いた。親友であるのどかとハルナが何事かと騒いでいるが夕映の耳には入らない。

それほどまでに、現実は厳しかった。

「（の、のどかがネギ先生に惚れている…どうして…年上の好きな人が出来たと言っていたではないですか！）」

なぜ、のどかがネギに好意を持つてしまったのか、その原因を言えば一重にエヴァと狂気に責任があった。

エヴァとの戦いに敗れたネギは、途方も無く落ち込んだ。

『父親とは大違い』『ネギではナギの影すら踏めない』

エヴァの言葉は、次代の英雄候補として褒めちぎられていたネギには堪えた。

ネギの潜在的才能、努力をみて周りに居る誰もが言ったのだ。

『英雄の息子は英雄になると』

ネギ自身、その言葉を信じていた。有体に言えば、奢っていたのだ。自分は父の様な英雄になる。だから、たとえ相手が誰であろうと完敗なんてことはないだろうと。

そんな思い込みが無ければ誰が伝説の吸血鬼、闇の福音になど挑もうと思うか。

けれど、戦った結果は惨敗。勝負にすらならなかつた。
現実を知つたネギは、落ちに落ち込んだ。

それこそ、教師という職業に支障が出てしまうほどに、そして、そんなネギを励ましたのが明日菜であり3・Aの生徒たちだった。心優しい彼女達に助けられ、ネギは立ち直つた。元々が子供なのだから、落ち込むのも早いが立ち直るのも早い。

そしてそんな時、学園長から告げられた。

父への手掛かりが修学旅行先の京都にあると。

ネギは、完全復活を遂げた。悪い意味でも、いい意味でも。

そんなネギの様子を見て、のどかはネギに少しだけ想いを抱いてしまつた。

元々、10才の先生などといつまるで小説の主人公の様なネギに興味を持っていたのどか。

そこに何で落ち込んでいたかは知らないが、健気にもたちあがつたネギに好意を持つてしまうのも仕方がないことなのかも知らなかつた。

「（だとしても、）これはあんまりの仕打ちではないですかー。」

「ゆえゆえー、どうしたのー。お腹、いたいのー？」

「だ、大丈夫です。の、ののどか。少し考え方をしてるだけです」

「いや、全然大丈夫に見えないんだけど」

無論、夕映としても、親友の恋は応援したい気持ちもある。けれど、相手がネギというのは問題だ。別に夕映はネギのことが嫌いという訳ではない。

師匠である狂氣は厳しいことを言うが、弟子である夕映はネギは10才なりによくやつてていると思つていて。

魔法秘匿力の低さや仕事に私情を持ちだすことは否めないが、それでも生徒としてネギに接している夕映にはネギが日に日に成長しているのがよくわかる。

もう10年、いや5年もすれば夕映が知る仲でもマトモな部類に入る男性になるだろう。

そうなれば親友の恋を応援することに何の躊躇も抱かない。

けれど、今は駄目。

偉そうな言い方になつてしまふかもしれないが、まだ、ネギは親友を安心して預けられるほどの男じゃない。

何より、未だ成長過程のネギではのどかに何も知らせないまま、魔法の世界に連れ込んでしまうかも知れない。

それだけは、本当に避けなければならないこと。

こんな危険と冒険に満ちた^{ファンタジー}非日常を生きるのは自分だけでいい。親友たちには何も知らないまま、幸せになつて欲しい。夕映はそう願つていた。

だからこそ、夕映は気持ちを落ち着けて口を開く。

「のどか、その、とても言い難いことなのですが。のどかがネギ先生を好きになるのは、少し問題があるとおもつのです」

「え？ あ、、その、ど、どうして？」

「先生と生徒、といふこともありますし。それにのどか、前に好きになつたかもと言つっていた人はどうなつたのです？ 嫌いになつてしまつたのですか？」

「ううん、そういう訳じゃないけど、、その、最近は全然会えないし、名前しか知らないから、」

「もしかしたらのどかは、その人に会えない寂しさをネギ先生で埋めようとしているだけなのではないですか？ それは、ネギ先生にとても失礼なことですよ？」

「…………」めんなさい

本を抱えて俯いてしまったのどかを、夕映は眉を顰めて悲しそうに見つめる。

夕映には分かつていて、目の前に居る親友はとても乙女なのだ。

物語に登場するキャラクターのように、素直に恋をする。そして誰

かを好きになってしまったたら、きっと周りが見えなくなってしまう。その結果、訪れるのはシンデレラの様な幸福かロミオとジュリエットの様な悲哀だらう。

夕映はそつとのどかの頭を撫でた。

「私達はまだまだ子供です。人を愛すという行為は初めてのこと、わからないことだけだからこそ、迷いながらゆっくりと歩いて行きましょう」

「あ、うん。ありがとう。夕映」

夕映には自分の行動が正しいのかはわからない。
もしかしたらネギに好意を持つことでのどかが成長することがあったかもしれない。

けれど、今はまだ言葉通り、夕映自身にもわからないことだけだ。
ゆっくり考えて行こう。

夕映はそう胸に誓った。

ほんわかした空気が流れる中、ハルナはひとつ咳く。

「私、マジ空気」

修学旅行の約束（後書き）

潰した筈なのに復活するのどかへのネギ君フラグ。
これが主人公補正か・・・

まあ、アレです。

チートアイレムである『いどねえにっき』を潰したくなかったんですね。

綾瀬夕映の冒険 修学旅行開始！（前書き）

昨日、忙しくて投稿出来なかつたので連投します。

修学旅行編開始！飛ばします。

そしてしばらく主人公の出番が有りません！…？ 「」・（）！

ホエー！！

だって主人公は高校生で、女子中学生の修学旅行になんて参加しませんから！

綾瀬夕映の冒險 修学旅行開始！

休日をはさみ、週が明けた。今日は修学旅行の日。京都へ向かう新幹線の中で、刹那はため息を付いていた。手には関西呪術協会へと渡す筈の親書が握られている。

「まさか、こいつも容易く親書を奪取されるとは」

「まあ、優秀と言つてもまだネギ先生は子供ですし」

地面に転がる二つに裂けた紙型を拾いながら言つ夕映の言葉は確かに射ている。

先に起きた式神力エルの大発生を曲がりなりにも治めていたネギに、期待しすぎていたのかもしれない。

(自分は一体、何を期待していたのだろうか。まだ10歳の子供に)

だが、と、そう考えて居ても刹那はネギに期待を向けてしまう。

自分が知る中での英雄の息子というカテゴリーに入っている彼は、かくも凛々しく、理不尽なまでに強いのだ。

なら、同じく英雄の息子であるネギ先生だって、もしかしたら。

「狂気さんなら、この程度のことに動じもしないといったの！」

「まあ、師匠ならまず問題すらおこさないでしょう。というより、こんな依頼受けもしないでしちゃうが。その点でいれば、ネギ先生には社交性がありますね。力量は否めませんけど」

「しかし、ネギ先生だって狂氣さんと同じ英雄の息子で、「ストップです」

「ネギ先生と師匠を比べてはダメです。元々、師匠が規格外すぎるのですから、それに子供であるといつ点を除けばネギ先生の魔法は優秀な物だと思いますよ?」

「・・・そりが、同じ魔法使いである綾瀬がいうなら、そうなのがもな」

「まあ、適度な期待を持つて行きましょう。第一、ネギ先生の手を借りずに私達だけで木乃香を守ることが出来るのが最善なのです」

「ああ、わかった。すまないな、綾瀬。元々、護衛は私の役目だといつのにつき合わせてしまつて」

「いえいえ、木乃香は私の友達でもありますし、桜咲さんだつて友達ですから。友達の為に手を貸すのは当たり前ですよ」

笑いながら、そういう夕映に刹那は一瞬呆けながらもすぐに微笑みを返す。

「ありがとう、タ「待て！」、「ん？」

「あ、あれ？貴方達は、桜咲さんに綾瀬さん？」

そんな時、お約束のようにセリフを被せながら登場するネギ。刹那は紙型の残骸を拾い終えた夕映がもう行こうと促しているのをみて、頷く。

「あの・・『レ・・落としものです」

「え、あー！」これは僕の大切な親書！－！ありがとうございます、助かりました！」

「気を付けた方がいいですね、先生。特に、向こうについてからはね」

「あ、どうも『』に・・」

「いえ、それでは。行きましょう、綾瀬」

「はいです」

颯爽と去つていく刹那に続き、夕映は歩いて行く。そんな一人を見送りながら、ネギは首を傾げていた。

「あれ？あの一人って、あんなに仲良しさんでしたっけ？」

「あの一人、メツチャ怪しいじゃねーか。もしかしたら、奴らが西からのスパイかも知れないぜ！」

「え、えー！まさか、そんなわけないよ、力王君。一人ともクラスメイトなんだよ」

「じゃあ、どうしてあの一人が親書をもつてんだい？なんかの拍子にペーパー『レムを倒しちまつたとしても、残骸がねえ。きっと、あの一人のどつちかが術者で消してしまったに違ひねえ！』

「そ、そんな。クラスメイトの綾瀬夕映さんと桜咲刹那さんが、ス

パイだなんて・・・

ネギの勘違いを余所に、新幹線は京都へと到着し、遂に修学旅行は始まった。

そして当然のように関西呪術協会？の妨害工作？が行われる。

縁結びの神が祀られる神社の恋占いの石では落とし穴が仕掛けられ、

「（つづーのどか、それは誰との恋を成就される気ですか！・・・

・・あ、落とし穴）」

「「ややーーー」

「いいんちょとまき絵が落ちたーー？」

清水寺では音羽の滝に酒樽が仕込まれ、

「な、滝の上にお酒が！一体誰が・・・」

「（その前に屋根の上に登るのはどうかと想うのですよ。ネギ先生）

」

そうした妨害工作？の所為で、3・Aの一一行は予定より早く嵐山にあるホテルへと向かうのだった。

ホテル嵐山の廊下のこと。

夕映と刹那は一人で今日のことを話し合っていた。

夕映は首を傾げ、難しそうに眉を寄せながら手に持った紙パックのジュースを飲む。

「桜咲さん。とても聞きにくいことなのですが、呪術協会の人達は、お馬鹿ですか？」

「いや、いやーそんなことはありませんーま、まあ、今日行われた妨害はなぜか頭の悪い物だったが。・・・敵は、何がしたかったんだろ？」「

「んー？一般人に被害を出したくないから、悪戯程度の妨害に収めたのですかね？」

「あるいは、警告かもしれない。邪魔をするのならば、これ以上のことをするぞ。とか？」

だとしても、いたせか幼稚すぎるのではないだろうか？

夕映はストローを噛みながら考える。

始めのカエルパニックは此方の出方、つまりネギ先生の力量を見る為のものだったとして、次に仕掛けられていた落とし穴には何の意味が？

そこまで深い穴ではなかつたから、怪我をしたとしても足を挫く程度のもの。

それぐらいの怪我で起こる弊害は怪我をした生徒が観光できなくなってしまうことくらい。

そんなこと、何の意味も無いのでは？

次の妨害は音羽の滝に仕掛けられていた酒樽。

毒ではなくあくまでもお酒なのだから、飲んでしまったとしても酔

つてしまつだけ、それが敵の狙いなのか？

酔わせることが敵の目的として、起きる弊害は。

酔つてしまつたら、まあ、観光は出来なくなつてしまつ。

だが、それくらいの嫌がらせの為に、妨害なんて。

「いや・・・まさか、観光をできなくなることが敵の狙いでは？」

「ん？ どういう意味だ、綾瀬」

「始めて起きたカエルパニックは別として、恋占い石の落とし穴、そして音羽の滝に仕込まれた酒樽。その二つに共通していることです！ 刹那さん！」

「いや、だから、もう少し分かりやすく話してもらえないか？」

「ですから、落とし穴に落ちて怪我をしたら無論、観光なんてできなくなります。お酒を飲んで酔つてしまつても同じです。最悪、飲酒がばれて宿に強制送還されるです。つまり、敵の目的はこの宿に私達を追い詰めること！ 「きやーー！」 と、『氣づくのが遅かつた』うです」

「今の声は、木乃香お嬢様！ 方向は脱衣場か！ 行くぞ、綾瀬」

「はいです！」

まずい、と二人は焦る。

もし夕映の考えが当たつているとしたら、この宿に追い詰め、逃がさないことが敵の狙いだとしたら、木乃香の身が危ない。

もう、敵は幼稚なふざけた罠など使ってこないだろう。本気で、来る筈！

その思いが、一人の足を急がせる。

「木乃香…」

「お嬢様！」

そして、ようやくたどり着いた脱衣場で見た物は、

「いやああ～ん！」

「なんかおサルが下着を一つ！」

「な、ななんですかこれーー！」

「だから、これはスパイ一人の妨害だつて、アーキーうつは、最高
！」

下着を剥かれる明日菜と小乃香、そして手で眼を隠しているネギに、
大喜びしているカモだった。

「・・・これが、敵の本命ですか？」

「・・・とりあえず、斬る！」

「え、えーーーお二人は西のスパイなんじやなかつたんですか！」

「・・・ネギ先生、驚くのもいいですが、もう少し静かにしてくだ

「あい

「あ、す、すいません」

旅館のエントランスにあるソファーの上でことの次第を説明していた夕映は眉を顰めながらネギを見る。

少しだけ不機嫌なのは仕方がないことだらう、何を勘違いしたか知らないがネギは夕映と刹那のことを西のスパイだと思っていたのだから。

真面目に木乃香を護衛していた一人からすれば、ネギの勝手な思い込みは失礼なことこのうえない。

風呂場で起こった事件は、刹那が全ての猿と淫獸を斬ることで場を治めた。

その後、刹那は木乃香の前から逃げ出し、一日は夕映から離れたが今は隣に座っている。

木乃香には話があるということで先に部屋へと帰つてもらつているが、そのことを伝えた時、夕映と共にいる刹那を見て、寂しそうにしていた木乃香の顔が印象的だった。

後でフォローをいれておかなれば、と考えている夕映の横では刹那がその場に居るネギ、明日菜、いつの間にか復活した淫獸に陰陽道についての説明や、木乃香に対する自分の気持ちなどを語つている。

「3・A防術部隊結成ですよー」

「えー、何その名前

「関西呪術協会からクラスのみんなを守りましょー」

「（おや、いつの間にやら面倒なことになつて）いるのです。完全に乗りました」

盛り上がるネギと明日菜、恥ずかしそうにしながらも参加している刹那を見ながら夕映は呑気に京都限定もみじ茶を飲んでいた。一頃りの決意表明が終わつたのだろうか、明日菜は呑氣にしている夕映を見て、首を傾げる。

「ねえ、聞いてなかつたけど、桜咲さんと一緒に居るつてことは綾瀬さんも京都神鳴流つていう組織の人なの？」

「ん？ いえいえ、違いますよ。私はネギ先生と同じ、魔法使いです

「え、えー！ 綾瀬さんつて魔法使いだつたんですか！」

「・・・ネギ先生、ですからもう少し静かに」

さつきした注意をもう忘れているネギにやれやれとため息をついてから、夕映は話し始める。

「一年ほどに魔法と言つ神秘を知る機会がありまして、それ以来の付き合いです。ですが、ネギ先生と違つて魔法学校を出たわけではないので、あまり戦闘では期待しないでください」

「あ、そなんですか。なら、夕映さんはさがつてもらつていた方がいいですね」

「ふーん、魔法学校を出なくとも魔法使いになれるものなんだ」

「アニキほどに強くはないってことか。・・・なあ、綾瀬の嬢ちゃん。そんな嬢ちゃんにぴったりなチヨー簡単なパワーアップの裏技があるんだが」

「ん、んん。ネギ先生、明日菜さん、それにそこの淫獸。言つておきますが、夕映の捕縛術、結界術は一流です。攻撃するといふことだけが戦いではありません。全体を補佐する後衛と言つては綾瀬はとても強い。けつして、足手まといではありません」

悪気はないだろうが、夕映を下に見た三人に少し怒氣を感じながら刹那は言つ。

「夕映も夕映だ。そんな自分を下に見る言い方をして、もう少し自信をもつたらどうなのですか」

「まあ、はい。ですが、まだ師匠に免許皆伝も貰つてしまふし、私は半人前ですよ？」

そう言つて飲み物をする夕映自身が気にしてもいい様なので、刹那は何も言えなくなつてしまつ。

夕映としても刹那が自分の為に怒つてくれるのは嬉しいが、事実未だに自分は自分の身すら完全に守れるか怪しいのでそこまでの自信は持てない。

少し淀んでしまった空氣を変える為か、カモは煙草を吸いながら状況の分析を始めた。

「つまり、桜咲の嬢ちゃんは前衛タイプ。綾瀬の嬢ちゃんは援護タイプってことだよな。そこに前衛の姫さん、後衛のアニキが加わるんだからバランスとしては悪くねえ」

「まつ、そうよね。前衛一人に後衛一人だもん。ゲームみたいに考えればいい感じじゃない」

明日菜を始め、自分の言葉に頷きを返す一同を見て、力モの眼はキラソッと妖しく光る。

「けど、綾瀬の嬢ちゃんは攻撃魔法が得意じゃねえんだろ？ チョイ火力不足は否めねえな。そこでだ、チョー簡単なパワーアップの裏技があるんだが」

「それ、さつきも言つていましたが、なんなのです？」

「仮契約だよ、仮契約！ アニキと仮契約すればパワーアップ間違いなしだぜ！」

「なつ、力モ。アンタねえ！」

「え、僕と綾瀬さんが仮契約！ ？ で、でもそれって、キ、キスするつてことだよね・・」

本人をそっちのけで騒ぎ出した力モに明日菜、顔を赤らめて俯きながらもチラチラと顔を見てくるネギに夕映はため息を付く。何故か自分が仮契約をする方向で話が進んでいるが、夕映の意思は尊重されないのでどうか。

「さあ、綾瀬の嬢ちゃん！ アニキとぶちゅーと仮契約を！ 「いやです」 つて、ええ！ なぜでい！」

「仮契約をするとこうことはネギ先生とキスをするとこうことです

よね？なら、いやです。私は好きでもない人とキスしたくありません

ん」

詰め寄つてくるカモを鬱陶しそうに払いのけながら綾瀬は不快そうに眉を顰める。

「ただキスするだけでパワーアップ間違いなしなんだぜ！いいじゃねえか！キスくらい」

「よくありません」

言い合いを続ける二人を見て、ネギは夕映を見ながらおずおずと言ふ。

「あ、あの、綾瀬さんは僕のこと、嫌いなんですか？」

「いえ、別に嫌いではありませんが「な、なら」好きでもあります。どうして私が好きでもないネギ先生とキスとしなくてはいけないのです？」

「そ、それは・・その、」

「木乃香の嬢ちゃんを守るためだろ！それにアーニキはまだ10才のガキだぜ？いいじゃねえか、キスくらい。初めてって訳でもねえだろ？」

そういうカモには打算があった。

木乃香のことを引き合いに出し、ネギがまだ子供だとこいつを利用する。

その上で初めてじゃないんだろう？と夕映を煽れば、仮契約するだろ

うと考えた。

明日菜もそれで落としたのだから、今回も上手くいくだろ」と考えていた力モの作戦は、しかし、失敗に終わる。

「私は初めてですよ？つまりはファーストキスです。だからこそ、好きな人に捧げたいんじゃないですか。木乃香のことは心配ですが、私の初めても大切です」

「（が・・・あ、姉さんは違つ。）の嬢ちゃん、本当の意味で大人だ！？」

彼らも恥じることなくそういう夕映に力モは衝撃を受けた。明日菜はその言葉にバツが悪そうに耳が傾けていた。

「（確かに、彼ら相手が子供だからって、キスってそう簡単にするもんじゃないわよね）」

夕映の言葉に、色々と考えさせられる明日菜だった。

その後、力モとネギは逃げるように外の見周りに行くと言つて出て行ってしまったので、明日菜と刹那、夕映は班部屋の守りに着くことにした。

「よし、取りあえず、私達の役目は木乃香の護衛ねーって、なにしてるの綾瀬さん？」

夕映達三人以外が寝静まつた部屋で何やら作業をしている夕映に明日菜は声を掛ける。

「いえ、旅館の周りには刹那さんが結界を張りましたが、念のために部屋にも結界を張つておこうかと思いまして」

「へー、綾瀬さんはそんなこともできるんだ。でも、大丈夫？見周りの先生とかも入つてこれなくなつちゃうんじやない？」

「そこは考えて、敵意がある人が入つてきた場合のみ発動する術式ですので心配無用です」

「そつかー、便利ね。ちなみに発動したらどうなるの？」

「まあ、簡単に言えば・・・爆発します」

「爆発！？なにが！？」

「色々と」

「そ、そつか」

表情が読み取れない夕映に恐怖を覚えた明日菜だった。

ちなみに、夕映の用心が功を奏し、刹那の張つた結界を潜り侵入してきた敵が部屋の前で立ち往生したことを明日菜達は知らない。

「ちい、此処にも結界かいな。表の奴はカワイイ魔法使いのお陰で抜けらましたけど、これは厄介やわあ。西洋魔法のようやし、あの新入りを連れてきた方がよかつたか」

綾瀬夕映の冒險 修学旅行開始！（後書き）

なんだか、ネギ君がただのエロガキに見えてきたぜ・・・（一、一、一）
フツ

修学旅行編の開始、そしてだんだんストックが切れてきた。
まあ、取り合えず修学旅行編が終わるまでは持ちそつなんで、基本
日刊掲載でいければ良いな」とおもいます。

ちなみに修学旅行編はエヴァ編よりは長いです。 （ノノ”パ
チパチパチ！！）自画自賛

過去編 千の刃と英雄嫌いの息子（前書き）

祝！総合評価1000pt越え！

ひやつほーーー！とか思つて上げた狂氣の過去編。

これを読むと今まで謎に包まれていた？狂氣の正体がわかります、英雄達を毛嫌いしている理由も。

追伸

戦闘描写を書くと厨二病が再発するのは俺だけじゃないですよね？

過去編 千の刃と英雄嫌いの息子

拳と拳がぶつかりある。

両者は一瞬だけ拮抗し、小さい拳の方が押し負け吹き飛ばされた。

俺は吹き飛ばされて、地面を転がる不甲斐ない姿を見て、笑い声を抑えられなかつた。

「HAHAHHA！相変わらず弱ちいな、狂氣ー！」

「なつ、うつせーぞ！ジャック！俺だつて本氣を出せばお前なんて！見てるよーはああ「親父と呼べと書いてんだらうが！」ひー・」はふでびばつー・」

「たつく、学習力のねえ奴だな」

「あ、あんたに言われたくはねえ」

「HAHAHA！」

「笑い」とじゃねえよー終こにも死ぬぞー！？」

もづ少しからかつてやりたい気持ちを抑えながら、涙ぐみながら睨んで来る狂気に眼を落とす。

そう

こいつは何も知らない。

自分がどういう立場にあるのか、そして俺がここにひとつてビツ二う存在であるのかも。

悪気があつた訳じゃない、ただ巡り合わせが悪かつただけだ。

俺は狂気にとつて、恨むべく存在。育ってくれた祖父と祖母を奪つた、大戦の殺戮者^{英雄}。

英雄なんて呼ばれちゃいるが、こいつから見れば俺は罵倒されて当然の存在。

あの馬鹿^{ナギ}と共に戦つたことを、今さら悔こちやしない、けれど、こいつに真実を伝えたくはない。いつか、ばれてしまふとわかつても。

だからせめて、今だけは。なあ、俺はお前のことを、

「どうしたんだ、ジャック？ 腹でも痛いのか？ つらつらだ？」

「へ、おおふ？ いや、そんなことはねえが・・・俺、変な顔でもしてたか？」

「ああ、泣きそうな顔だつたぞ。どうしたんだよ、似合わねえ。ジャックが涙ぐんだつてキモいだけだぞ」

「・・・たつく、お前は」

「いたい、誰のせいだと思ってんだ。

内心憤慨ものだったが、楽しくなつていてる当たり俺も救いようがねえ。

「親父と呼べって何回言わせんだ！」

振るつた拳がかわされる。いつの間に、俺の拳がかわせるほど強くなつたんだよ。

「はははー！いつまでもやられっぱなしじゃねえんだよー。」

「ほほう、それは俺様への挑戦か？」

「なんだよ。俺がこんなこと言つのは生意氣か？親父

「・・・ああ、そうだ。まったく、偉そつて。糞ガキが」

ああ、頼む。

もう少しだけ、もう少しだけ、俺に時間をくれ。

血もつながってねえ、お前と親子でいられる時間を。

ジャックが孤児を拾つたと聞いた時は、あやつに子育てなど出来るものかと笑つたものじゃ。

すぐにはやつの不甲斐ない姿を身に行きたかったが、いかせん、私は王族、時間は直ぐには取れなかつた。

ようやく出来た休暇の日に、隠居している奴の別荘を訪ねてみれば、あやつにまとわりつくように懐く子供の姿があつた。

ジャックに習つたのか、訳も分からぬ気の応用で拳からビームをして遊んでいたのを見た時は思わずこけそうになつたが、あのバグキヤラの息子だというなら何故か納得もできた。

いや、それ以前に時には殴り合いの喧嘩をしながらも笑いあう一人を見ていた、本当の親子以外に見えなかつた。

信じられるか？私にはあのジャックが人の親に見えたのじゃぞ？

私が祝いにと用意した肉の量が違うとかどうだとか、おやつのケー

キの種類がそつちの方がいいとかなんとかと、何かにつけて喧嘩をする「一人を見ては思わず笑顔が浮かんだものじゃ。

そうして喧嘩をした後は、どちらからともなく笑っていた。

狂気が笑う声を聞いて、ジャックは私も見たこと無い笑顔を作る。羨ましいと思った。接している時間は私の方が長いのに、狂気は私よりジャックの心の奥に居た。

どうしてなのかと考えて、これが親子といつものなのかなと納得した。

狂気が遂にジャックを親父と呼び始めた時、「一人はこの関係は永遠に変わらないものなのだとそう信じていた。

だから、私には今、目の前で繰り広げられる光景を信じることが出来ない。

なぜ、どうして、狂気は目を血走らせて、ジャックは苦渋の表情を浮かべながら、殴り合っているのだ？
いつもとは違う、笑顔が無い、笑い声も無い、怒りと、悲しみがそこにはあった。

「・・・やめよ」

「ジャックくうう！」

「狂気いいいいー！」

「もう、止めるのじあああ！」

「「「うああああああああ！」」」

幾ら叫んでもみても、私の声は一人には届かない。

ある時、ふと気づけばそこに居た。

目に映る物は腕を流れる赤い色。駆け抜けた戦場。

辿り着いたのは無想とした安息。けれど、それはただの休息に過ぎなかつた。

手にしたと思った物は、鉄色の手から簡単に零れ落ちた。

要らない。もう、嫌だ。

生きる為に、振るうしかなかつた。

白銀の弾丸である右腕を、軋む戦車を思わせる左腕を、敵と呼んだ誰かは俺の腕でかくも容易くはじけ飛んだ。

戦いが避けられないなら、ただ一度も迷わない様に殺戮をくり返すしかなかつた。

戦いを終わらせたいのなら、戦つ俺を俺は殺すしか無くて、けれど俺は死にたくなかつたからそんな真似は出来なかつた。

だから、俺は逃げ出した。戦うことからも、その時代からも、逃げ出した。

手を貸してくれたのは、子供の俺をこんな体にした祖父さんだけだつた。

けれど、逃げ出した先もまた戦場だつた。

俺がいた時代とは違う、科学ではなく魔法で争う人たち。

俺達は領土を得る為に戦つた、不毛な大地から逃げ出す為に戦つていた。

この時代の人達は、一体何のために戦つてゐるんだろう？？そう考えて、笑つてしまつた。

ああ、逃げた処で、逃げる場所なんて何処にもなかつたんだと。諦めて、絶望して、行くあても無く歩いていた俺を拾つてくれたのは、一組の老夫婦だつた。

「どうしたんだい？坊や。獨りでこんな場所にいるなんて、なにかあつたのかい？」

「逃げてきたんだ。戦争から、結局、逃げられなかつたけど」

「そうかい・・辛かつたねえ。お父さんとお母さんはいないのかい？」

「うん。もう、此處にはいない。俺は、逃げてきたから。俺が、逃げてきたせいで・・」

「そうかい・・なら、私達と一緒に来るかい？」

この世界に来て、初めて差しのべられた手はとても温かかった。

その日から、俺はこの人たちと暮らし始めた。

老夫婦が住む村は、山の中にあつて戦火もそこまでは届かないといふほどの田舎だつた。

便利な機械も無く、とても不便な生活だつたけど、この人たちと暮らすうちに慣れていた。

朝から畑に出て、無理をしようとするお爺さんの代わりに畠仕事を手伝つた。

最初は戸惑つたけど、俺の体は強いから、頑張れば出来た。

終わつた後には、頭を撫でてもらえた。初めてだつた、頭を撫でてもらつなんて、あの世界では幾ら頑張つても誰も頭なんて撫でてくれなかつた。

夜になつて家に帰れば、お婆さんが温かい食事を作つてくれていた。美味しいと感じた、あの世界では温かい食事なんて食べられなかつたから、本当に美味しくて、残さず食べた。

そしたら、また、偉いねと頭を撫でてもらえた。どうしてだかは分からなかつたけど、嬉しくて久しぶりに笑顔が零れた。

そんな俺を見て、二人は孫が出来た様だと言つてくれた。
どうしてだらう、嬉しいのにどうして涙が零れるんだらう。

俺はここでの生活が、好きで好きでたまらなくなつた。

よつやく、俺は逃げられたのだと思つた。

けれど、世界はそんなにも優しくなくて、ありふれた悲劇は本当に何処にでも溢れていた。

気がつけば、何もかもが燃えていた。耕した畠は吹き飛んで、温かいご飯を食べた家は崩れていた。

あとから思えば、あれはよく見知つた光景だった。戦争に巻き込まれた、小さな村。

たつたそれだけのこと。

けれど、その時の俺は忘れてしまつていたから、涙ながらに問う。

「どうしてなの？」

答えてくれたのは、優しく微笑むお婆さん。

「『』めんね、戦争から逃がしてあげられなくて」

その言葉を聞いて、俺は気づいた。

ああ、まだ俺は戦争におわれていたのかと。

みんなもえてしまったむらで、おれはひとりいきのこつた、つよかつたから。

戦争から逃げ出して、逃げ込んだ先は戦争で燃えてしまった。

「どうしてなの？」

問うてみても、もう誰も答えてくれない。

仕方がないから、自分で考えよう。そう思った。

戦争ってなに？大切な人が殺されてしまうもの。

誰が殺すの？俺みたいな人間。

俺みたいな人間をなんていうの？わからない、最近は名前しか呼ばれなかつたから、昔は別の呼ばれ方をしていたんだけどな。

思い出そうよ。あの世界で俺は何と呼ばれていたの？ああ・・・・・英雄だ。

俺はあの世界で、英雄って呼ばれていたよ。

じゃあ、英雄が悪い奴なの？うん、そうだよ。

最初から、わかつていたのに忘れていたの？うん、忘れていた。

最初から、俺は言つていただじやないか。

戦いを終わらせたいなら、俺が英雄を殺すしかないって。

英雄 俺

「ん？ おい、坊主。どうしたんだ？ こんなところに迷い込んで」

考え方をしながら歩いていた所為か、よくわからない場所に俺は居て、誰かが話しかけていた。

「何処から來たんだ？」

「火星。」

「ふーん。いろんな奴を見てきたが、火星人を見たのは初めてだぜ。所で坊主、お前、一人なのか？」

「うん」

「父親とか母親とか、保護者はどうした？」

「いない、戦争から逃げてきたから、逃げた所為でいない」

「・・・そつか、なら、坊主。俺に着いてこいーこのジャック・ランカンがお前の面倒を見てやるぜ！ HAHAHAA！」

差しのべられた手は、力強くて少し痛かつたけど、とても温かかった。

ジャックに出会って、俺は変わった。

たぶん、頭を叩かれ過ぎてどっかの螺子が飛んじまつたんじゃねえかと思う。

ボーッとしてたら元気出せ！って叩かれて、走り回ってたらうるせえっ！って叩かれて、料理をしてみたらよくやつたーって叩かれた。痛かったけど、それ以上に温かかったから嬉しくて、そのことを話したら引かれた。

「お前、その年で痛いのが好きって、きめえな」

「…………やつこいつ意味じゃねーよ」

「なんだ？最近、口が悪くなってきてねえか？」

「誰のせいだ！誰の！テメーのせいだらうがジャック！」

「親父と呼べと言つただろうガアー！」

「うひせんだよ。筋肉達磨！」

その時、初めて殴り合いのけんかをして俺は初めて誰かに負けた。ぼろぼろになつた俺を見て、ジャックは笑つていて、全身が痛い筈なのに俺も思わず声を上げて笑つてしまつた。

ジャックの傍は、お婆さんやお爺さんの傍と違つ意味で、とても温かつた。

ジャックに自称最強の拳法を教えてもらひ、何が言いたいのかわからんないと言つたらジャックに殴られて。

二人分のご飯を作つて、このおかず嫌いとか抜かすジャックを殴り。

たまに来るテオドラの前で試合と並んで名の喧嘩をした。

その生活はとても楽しくて、嬉しくて。
もしかしたら俺はようやく戦争から逃げられたのかもと勘違いして
しまうほど、平和な毎日だつた。

けれど、勿論、そんなことはなかつた。逃げられてなんていなかつ
た、忘れてなんていなかつた。

だから俺は、いま、拳を握つて親父の前に立つ。

「なあ、親父。本当なのかよ、親父が大戦に参加してたってのは…」

街に買い物に出て、耳に挟んだ話。大戦の英雄、紅い翼。千の刃、
J・ラカン。

ああ、だめだ。それだけは、駄目だ。親父が英雄だつてことだけは、
あり得ちゃいけない。

「うそ、だよな。親父みたいなチャラソボランナな奴が、英雄にな
んて慣れる筈が無いもんな。きっと、同姓同名の別人なんだよな！・
・・なあ、親父。答えてくれよ」

何時もの様な陽気な笑顔も無く、親父はただ愕然と何かを悲しんで
いる表情をしている。

やめてくれよ、それじゃまるで、隠したかった何かがバレたみたい
じやないか。

「親父・・・嘘でもいいから、嘘だって、言つてくれよ」

その言葉に親父は覚悟を決めたように口を開ると、重い口を開いた。

「俺は、俺は、赤い翼の千の刃。大戦の、英雄だ」

「嘘だアアあアアあああああ！」

親父の顔を見て、堪え切れなくなり嘔吐した。

「俺を、騙してたのか？ずっと、今まで、何年も！」

「・・・・・」

「あ、ああ、違うよな。俺が考えなかつただけだ。考えない様にしてただけだ。俺より強いアンタが、英雄じやない筈がないもんな！」

崩れそうな身体は、脅迫概念によつて動かされる。根幹に根付く想いが拳に宿り、俺に囁く。

英雄が悪いんだよね？うん、そうだよ。
もう、忘れないよね？うん、忘れてないよ。
じゃあ、やるの？うん、やるよ。

「俺は、お前が好きだ。狂氣」

「俺は、英雄が嫌いだ。ジャック」

ジャックは悲しみ、俺は笑っていた。

本当に、どうしてこうも反りが合わない。

こつなつてはぢやつても水と油で、何度もやってももう交われない。

一人の拳は、戦意に呼応して淡い氣の輝きを放つ。
けれど、ジャックのそれは何故か泣いているように見えたのは何故
なのだろうか。

「俺は英雄アンタを殺す」

「そんなこと、俺は認めねえ」

この日、俺は久しぶりに戦争から逃げなかつた。

テオドラが泣く中で、二人の姿はぶつかり合つ。
互いの拳が拳をはじいて、血に塗れながら割れていく。

「ジャックうう！」

「狂氣いいいい！」

自戒と自嘲と多大な自虐が身を貫く、こうして殴り合つてゐるだけ
じゃ殺せない。

この英雄の頑丈さは誰よりも自分がよく知つてゐる。

「ラカン・インパクトオオ！」

「ラカン・インパクトオオ！」

全力の氣をぶつける技も、同等の物によつて相殺される。

「クルワ・クルクル・クルイ・クルウ　　来れ　　深淵の闇　燃え盛る
大剣！！闇と影と憎悪と破壊　復讐の大焰！！我を焼け　彼を焼け
其はただ焼き尽くす者」

「プラ・クテ　ビギナル　　来れ　　深淵の闇　燃え盛る大剣壞！！闇
と影と憎悪と破壊　復讐の大焰！！　我を焼け　彼を焼け其はただ
焼き尽くす者」

「奈落の業火！！！」

「奈落の業火！！！」

ならばと、唱えてみた魔法も、同系の物によつて相殺される。

当然のことだらう。

自分の扱う技も魔法も、全ては目の前に居る英雄から教わった物なのだから。

互いに、手の内は知れている。これではどちらも決定打を叩きこめない。

いや、師匠と弟子と言つて此方の方が劣つてゐるだらう。

「氣を抜いてんじゃねえぞおお！」

「かつはつ！」

拳を腹に受けて氣道から血があふれる。

それを見て、一瞬だけ動きを止めた英雄の拳を蹴り飛ばし距離を取

る。

このままでは勝てない。なら、田の前の英雄も知らぬ魔剣を出せばいい。

自分の身では倒せぬ敵ならば、「口が世界に縋ればいい。

祖父さんが俺に授けた剣を抜く。

昔は祖父さんの所為で戦場に引きずり出されることを恨んでいたけど、もしかしたらこうなることを予感していたのか？

「英雄」・ラカン。俺を目覚めさせた英雄にこの弾丸と砲弾を捧げよう。俺を止めたくば、全てを打ち落として見せろ。英雄を越える者英雄でなければ、俺は誰にも従わない

誰も俺の攻撃からは逃れられない、俺の攻撃を受けたら誰もが倒れるしかない。

ああ、今思えばなんて青臭い『都合主義』。口にするのが恥ずかしい。

「ああ、わかつたぜ、糞ガキ。ぶん殴つてお前のことを止めてやる。あと、一つ言わせてといてくれ。なんで真実を黙つていたつていってな？恐かったんだよ！狂気に嫌われるのが！嫌だつたんだよ！息子を失うのが！眞実を言って嫌われるなら、騙し続けてやろうつて思つたんだよ！文句あるかああ！」

英雄の咆哮を受けて、眠りから覚めた魔剣が疼く。
英雄。今こそお前を、殺して見せよう。

形成はを殺す

アデアット
「来たれ」

「右腕 ライトアーム を殺す。 左腕 レフトアーム を殺す」

ホーロース・メキーリオーン・ブロゾーポーン
「千の顔を持つ英雄」

拳が、身体が、魂が、戦争をする兵器へと变成する。
それは不毛な戦争を彩る為に作られた一種の芸術。
血と硝煙に染まつた空の下で、ただ戦いを強いられてきた肉と機械
で出来た英雄。

虚空から剣が、斧が、槍が溢れだす。

その場は剣爛舞刀が舞う場であり、英雄の舞踏。
生半可な銃弾では追い越し打ち砕き喰らい尽くす、千の武器を操る
英雄。

「行くぞおおおー！」

「行くぞおおおー！」

兵器の英雄と武器の英雄はいま、此処にぶつかり合つた。

大地が割れ、湖が乾き、空が碎けたその場所で兵器の英雄は武器の
英雄に魔剣を突き付けていた。

「どうして、本気をださなかつたんだ？」

「馬鹿野郎。 息子相手の喧嘩に、本気になる親父がいるかよ」

「俺は英雄を殺すんだぞ」
アンタ

「ああ、好きにしてくれ。悪かったな、殺さなきゃなんねえほど糞
つたれな親父ですよ」

「いやだよ。俺、親父を殺したくなえよ

「たつぐ、どうだよ。殺すならなるべく痛くね？」
ねえなら、武器は下せ

青年は武器を落とした。

「うつ、うああ、うああああー！」

「あー、よしよし、わかつたから泣くんじゃねえよ。まつたぐ、随分遅い反抗期だつたじやねえか」

「俺は、俺は、兵器なんだよ。だから、だからあ、英雄を殺さなきやいけなんだ。けど、けどお、親父を殺したくなえよ。じうすれば、どうすればいいんだよお」

「はあ、悪いいな。俺、ちゃんとお前のこと見てなかつたわ。お前に必要なのは戦う力じやなくて、教育だつたか。ヽヽヽ、息子よ、学校に行つて來い」

「がつじゆ?」

「ああ、魔法界じゃ俺の息子つて」と色々メンディングから、旧世界

の麻穂良がいいな。俺の知り合いも要るし。そこで、ちゃんと自分を探してこい。いいな？」

「う、ん

過去編 千の刃と英雄嫌いの息子（後書き）

狂氣の本氣、それは」・ラカンと殴りあえるレベル。
パねえぜ・・・・（* ）フツ

綾瀬夕映の冒険 上めりれなかつた悲劇（前書き）

前のは記念作品といひうて、今日の分を投稿

綾瀬夕映の冒險 止められなかつた悲劇

修学旅行初日の夜も過ぎ、今は二日目の夜。

昼間の間は奈良公園で鹿に鹿煎餅をあげたり、観光もしたのだが、特に珍しいことも無かつたので飛ばさせていただこう。

強いて言うなら、木乃香を護衛する為について来たネギにハルナがのどかをけしかけ様としていたことくらいだ。

そんなわけで始まつた二日目の夜。その夜の嵐山ホテルは何故だか喧騒に満ちていた。

『修学旅行特別企画!~くちびる争奪!~修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦!~!』

いや、もう騒がしい理由は明確すぎるほどに明確だが、特に説明は要らないだろう。

そうやつてホテルが盛り上がりつてゐる中、刹那と夕映はホテルを出た街道の見周りをしていた。

「なあ、夕映。なんだかホテルの方角が騒がしくないか?」

「そうですね。なんだか魔法の気配もしますが、敵意のある物ではありませんし、大丈夫じゃないですか?私達の身代わり人形も置いてきましたし」

「それもそうだな。神楽坂さんもいることだし、何かあつたら連絡がくるか」

夜風の吹く中、歩いて行く一人。静かな京都の夜が、少し不気味に感じられた。

ふと、気付けばどちらともなく立ち止まる。

「・・・・・刹那さん」

「ああ、流石にこれは静かすぎる」

「人払いの魔法か何かでしようか？」

「私の符術を西洋魔術なんかと同じにせんぐれます？」

夕映の言葉に答えたのは、刹那ではなく誰かの声だった。
刹那は背負っていた夕凪を抜き、夕映は懷から銀の指揮棒タクトを取りだす。

「あんさんらが、宿に結界を仕掛けている張本人でいいんやろうか
？そしたら、少しの間眠つていてもらいますえ」

闇の中から現れたのは、熊と猿の着ぐるみを従えた黒髪長髪の美人。
天ヶ崎千草だった。

目の前に現れた明確な敵に目を凝らす。美人、と呼んで差しさわりのない大人の女性。

従えている善鬼と護鬼は随分ファンシーで可愛らしい外見ですが、それなりに強力な物だと見受けます。

特にクマさんの方、あの手に付いている爪は普通に凶器です。

「刹那さん。私が一人の鬼の動きを止めますから、ひとつきやすそうな方から還しちゃってください」

「ああ、わかった」

刹那さんとそう話している間も、女性は笑みを浮かべて此方の出方を待っています。

どうして動かないのでしょうか？余裕綽々と言つものでしょうか？だとしたら、なんて滑稽。戦場で余裕な態度というのは、師匠クラスになつて初めて出来る物。

目の前に居る女性も、それなりに高位の呪術者なのでしょうが、師匠とは雲泥の差。

力不足も甚だしいです。

「お姉さん。お決まり」とことじことで、聞いておきましょ。どうしてこんなことを？」

「そうだ。貴様は何のために木乃香お嬢様を狙つ…」

「何のために？そんなの、決まっていますわ。復讐の為に…行きますえ、猿鬼！熊鬼！」

動き出した二体の鬼に対するよつに、刹那さんが剣を振るつ。流石です。たつた一人で二体を相手にしてくれている。

ならば、この隙に私は詠唱を終わらせる。
エヴァンジエリンさん曰く、魔法使いという物は究極的に言えばただの砲台。

ですから全ては火力が命。けれど、私には火力も無ければ、砲弾す

らありません。

ある物はただの鎖だけ。

「クルワ・クルクル・クルクルリ
イニミークム・インウォルウアイダホー
蝸　火を以てして　敵を覆わん」

カブトウス・フランメウス
紫炎の捕らえ手！！！

生れた焰が大火の綱となつて二体の敵を縛る。リミットは解除。
敵を捕え、溶かし拘束する我が鎖の前に跪けばいいのです！

「ナイスだ！夕映！はあああ！斬岩剣！！」

乗りに乗つていると捕えていた一体の鬼、猿鬼の首を刹那さんが跳ね飛ばす。

・・・・血が出ないからまだいいですが、あのファンシーな姿での還され方はトラウマものですね。

「もう一体も！」

「させませんえ！お札さんお札さん、敵を倒しておくれやす」

お姉さんの手から離れた札から、大量に水があふれ出す。

クマさんを縛っていた大火の綱は音を立てて消火されてしましました。

羨ましい限りですね、あのような攻撃手段も持つているなんて、ですか。

「それくらいで、私の鎖から逃げられると思わないでください。誰も、私の手からは逃げられません！」

クルワ・クルクル・クルクルリ
メルガゾトアルウェウム
に敵を沈めん

エクス・ソムナー・エクシスヌタマダンス・ウンディーナニミークム・イン

目醒め現れよ浪立つる水妖 水床

「前衛がいれば魔法が唱え放題。いいですね、最高にハイってやつです！」

「 ウィンクトゥス・アクアーリウス
流氷の縛り手！！」

「なあつ！？炎だけじゃなく水も操るんか！」

溢れ出た水を凍らせながら、流氷の楔を敵に打ち込み動きを止める。フハハハ！天の鎖よ！・・・ごめんなさい、トリップしてしまいました。

「斬空閃！」

「くまつ！？」

そうして一瞬にも、刹那さんがクマさんのお腹に大穴を空けて還しました。

いや、いいのですよ？いいんですか、もう少し倒し方を考えてもらえるとトラウマにならずにするのです。

とりあえず、もうサルとクマのぬいぐるみは買えません。

「つひ、お札さんお札さん。うちを逃がして「遅いです。魔法の射手 戒めの水矢！」なあつ！」

水で作った縄でお姉さんを縛りつける。束縛系の小規模魔法なら、無詠唱で使うくらい簡単ですよ。

符術は詠唱なしで使うことが出来て便利ですが、いちいち行つ動作が面倒ですね。

動きを止めてしまえば、それで終わりです。

「終わり、ですね」

「ああ、案外呆気なかつたな」

「な、ななんで、ガキがこんなに強いんや・・・」

「お決まりのセリフを言えば。復讐などに囚われる者に負ける訳にはいかぬのです」

「木乃香お嬢様に手を出すというのなら、手を抜く必要もありません。さあ、大人しく本山に送られて貰いましょ」「えーい！」なつ、「新手か！」

「刹那さん！」

お姉さんに手を伸ばした刹那さんを斬り飛ばすよつて、一人の少女が現れた。

ゴスロリといふのでしょうか、随分ファンシーな服装です。

「この剣筋、まさか神鳴流か！」

「はい～。どうも～、神鳴流です～。おはつに～」

「こんなものが神鳴流剣士とは、時代も変わつたな・・・」

「よ、よくきててくれた！月詠はん！」

やはり、といつか当然このタイミングで現れたこの人はお姉さんの味方のようです。

刹那さんに奇襲とはいえ一撃を浴びるとは、一体、どれ程の実力を有して・・・って、ん？

何故、お姉さんに顔を向けた「ゴスロリさんは顔を赤らめてくねくねしているのでしょうか。

「や～ん。千草さんもやつこつ趣味だったんや～。ウチとお揃いやね～」

「ちやうわー好き好んで縛られてるんぢゃ」つーセーの嬢ちゃんに無理やり、「

「はあ、ええなあ。その無理やりが気持ちええんよね～。」

はうー止めてくださいー！そんな熱っぽい目で私を見ないで！

「せ、刹那さん！あの子は危険ですー！やつちやつてくださいー！」

「は、はあ。まあ、敵だといつなり倒すが」

そんな、どうしたんだ？みたいな目で見ないでくださいー！

刹那さんは分からないんですかー！？あの「ゴスロリさん」の危険度が！本当に、危ない人です。だつてほり、さつきまで私を熱っぽい目で私を見ていたのに、今は刹那さんを見て顔を上気させています。刀身を舐めながら。

「ほな、遊びましょ。刹那センパイ？」

「どうして、私の名を？」

「ふふ、それがウチの楽しみやから～」

「意味が不明だ！」

斬り合いを始めた二人。取りあえず、援護にでも入りましょうか。お姉さんはもうしばらく戒めの水矢が働いていて動きが取れない筈です。

たぶん、ゴスロリさんと刹那さんの力量は同じくらいでようから、私が援護に入れば時間も掛らずに倒せる筈です。

「こきます」

「油断大敵つて言葉、知ってるか？チビ助」

「なつ、後ろ！？かつ、つう、」

くそつ、です。油断しました。まさか、もう一人援軍が居たなんて・
・

首に腕を回され絞められる。

顔は見えませんが声からして男性。背丈は私より少し大きいくらいでしようか。

「俺は女は殴らん主義や。なるべく痛めつけとうない。せやから、なあ、大人しく千草姉ちゃんを解放してくれんか？」

胸に爪を突き立てられながら脅されます。

「・・・まったく、女性の胸倉にいきなり手を突っ込むなんて、マナーがなってません！」

師匠直伝 気合い爆破！

「なつ、自爆！？」

出来ればこの技は使いたくなかった・・・本来の意味で。気と魔力を合わせて、わざと反発させる爆破技。

捕まつた時に逃げられるのと爆風によつて移動できる利点があります。

まあ、基本自爆ですから肉体な多大なダメージを受けますが。

「胸倉に手を突っ込むエロガキに捕まつているよりはマシですか」

「誰がエロガキや！ チビ助！ あんな有るか無いか分からんもん触つても嬉しくないわ！」

カツチーン。

「ふ、ふふ、お仕置きが必要みたいですね」

「いいぜ、来いや、チビ助」

と、言つてみた物の冷静になつて考えればかなりまずい状況ですね。刹那さんはまだゴスロリさんとやり合つてますし、お姉さんを縛つている戒めの水矢ももうそろそろ効力が切れてしまします。

それによより、私は肉弾戦が得意ではありません。目の前のエロガキは見るからにバトルジャンキーみたいです。

「仕方がありませんね、奥の手を使わせてもらいましょう。刹那さん！」

「つーああ、承知！」

「あー、逃がしませんえ。センパーイ」

「ちっ、前衛も姉ちゃんかい。やりづらい！」

三十八計逃げるに如かず。刹那さんが一人の攻撃をしのいでくれている間に、さつさと逃げましょー。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り笑う 無駄知恵の根よ 敵を捕えて役目を果たせ！」

「およ？」

「たゞやーなんやこれ！？」

地面から伸びる根っこがゴスロリちゃんとヒロガキの足を縛りつける。これぞ私が誇るオリジナル必殺魔法の一ツ！

悪知恵で縛りつけるものー（ヒヴァ命^{レーティング}）

「此処は退きましょう。刹那さん」

「ああ、わかった。月詠とやらー決着はいざれ必ずー。」

「はーい。また遊びましょう。センパーイ」

「またんかコラ、卑怯やぞー!」助 ！

敵の叫びを背に、私達は嵐山にあるホテルへと戻つていきました。

そして、旅館に戻つて私が見た物は

「あ

「え

んちゅ？

「やつりーあははー！」

ハルナに足を引っ掛けられてネギ先生とキスしている親友の姿でした。

「なああああああー!?

「ちょ、大丈夫かー夕映ー!?

綾瀬夕映の冒險 上めりれなかつた悲劇（後書き）

この作品の夕映は原作の夕映とは異なつております。

綾瀬夕映の冒險 現われたモノ（前書き）

主人公が動かない分、夕映が頑張ります。
しかし、変わらない現実が・・・これが歴史の修正力か！？

綾瀬夕映の冒険 現われたモノ

千草や月詠、小太郎との戦いがあつた夜から一夜明けた日。夕映はネギや明日菜と共にエントランスのロビーにいた。

なんといふことでしょう。信じられません。まさか、のどかがネギ先生と仮契約をしてしまつなんて。

昨日の夜に帰つて止められなかつた自分をぶん殴つてやりたい気分です。

そう考へながら、夕映は落ち込んでいた。

「ねえ、綾瀬ちゃん。大丈夫?」

「大丈夫ではありませんね。まさか、ネギ先生とのどかが仮契約をしてしまつなんて。最悪の事態です」

「確かに、あの本屋ちゃんをこいつちに巻き込むのは不味いわよね。戦うなんて出来そうもないし。たくつ、ネギーアンタ何やってんのよー。」

「え、で、でもあれは事故で『言い訳しない!』うわーん。すいません!」

明日菜さんに叱られて涙を流しているネギ先生。もう少しちゃんとしていてくれれば、のどかを任せようつとこつ氣にもなるのですが、無理ですね。

所詮、まだ10才の子供ですし。
夕映はため息をついた。

「神楽坂さん。もうそれくらいにしてあげましょ。過ぎたことでも
すし、今さらなにを言つても仕方がありません」

「でも、それでいいの?」

「じょうがなことですし。それに、聞いた限りではネギ先生は旅
館であんなことが起きているとはしらなかつたのでしょうか?」

いつまでも叱られているネギ先生に助け船を出す。
見ていて哀れだつたから。

「は、はい。僕はパトロールに出ていたので。カモ君が朝倉さんと
組んで勝手にあんなことを、してしまつて・・・」

「なぜ朝倉さんに魔法がばれたかとか、ペシトの問題は飼い主の責
任だとか言いたいこともたくさんあります、情状酌量の余地はあ
るでしょ?。ネギ先生はネギ先生なりに生徒を守つとしていて、
起きてしまつたことなのですから」

「それも、やつか。まあ、今回だけは大目に見てあげるわよ」

「はい!ありがとうございます、明日菜さん・綾瀬さんも!」

「ちよ、御礼は受け取りますから抱きつかないでください。私は神
楽坂さんではないのですよ」

「あつ、す、すいません」

まつたく、委嘱されたやまき繪さんの影響でしょうか、やじし馴れ馴れしきぎです。

「ねえ、綾瀬さん。その言い方だと私が何時もネギに抱きつかれているみたいじゃない？」

「違うのですか？」

「・・・否定はできな」「けどせ」

不貞腐れてしまつた明日菜さん、けれど、仕方がない評価だと思いますよ？

木乃香から聞きましたが、毎日ネギ先生と一緒に寝て「いのうじゅうじゅう」といふんですか、幾ら子供といえど、好きでも無い人と男女同衾はどうかと思うのです。

言いませんよ？そんなこと、喧嘩になつたら嫌ですし。

「まあ、取りあえず、ネギ先生の件はそれでいいとして、次に主犯格の朝倉さんとカモさんについてですが、これは底いきれませんね。私にはどうすればいいかも分かりませんから、修学旅行が終わつた後、学園長に指示を仰ぎましよう」

「指示を仰ぐつて・・・もしかしてカモ君と朝倉さんに何らかの罰を下さるつてことですか！」

「やうですか？当然じゃないですか」

「そんなのだめです！力王君は僕の友達で、朝倉さんは僕の生徒なんですよ！」

そう憤慨するネギ先生を見て、空いた口がふさがらないというのはどういう意味なのか教わりました。

私が怒られる意味が分からないのですが？何なんでしょうね？

「ネギ先生の友達だらうと生徒だらうと関係ないんじゃないですか？魔法に秘匿義務があるということは私よりネギ先生の方が詳しいでしょう。魔法をむやみに露見させてしまった者がどうなるのか、しっていますよね？ネギ先生」

「……オゴジヨにされちゃいます」

「はい。その通りです。法と正義。罪には罰を。それが人類普遍の大正義なのですから、仕方がないことです」

「……」

黙ってしまったネギ先生。子供には少し重い話だつたでしょうか？しかし、わかつてくれたというのならそれでいいでしょう。

さて、本題に入りましょつか。え？今までのはなんだつたんだ？前ふりです。

「ネギ先生。回りくどいことは無にして言いますが、のどかには近づかないでくれませんか？」

「え？どういう意味ですか？」

「そのままの意味です。教師と生徒という立場なら、別にいいのですが、それ以上の関係にならないで欲しいのです」

私の言葉に、ネギ先生は不快そうな表情をしました。

「それは、別に綾瀬さんと言わることじやないと思います。僕とのどかさんの関係は、僕とのどかさんが決める」とです

「確かに、そうでしょう。いくら親友でも口を出してはいけない関係という物はあります。しかし、そこを曲げてお願いしたいのです。お願いします。ネギ先生」

私は、ネギ先生に頭を下げました。ネギ先生と神楽坂さんは驚いているようですね。

「のどかは、とても優しい性格をしている子です。虫を殺したことだってあります。そんなのどかが、魔法の世界で生きていけると思いませんか？」

「・・・・・・・・・・・・」

「もし、ネギ先生が絶対にのどかを守ってくれると、断言してくれるのなら私はもう何も言いません。断言できますか？・ネギ先生」

「・・・・・できません」

ネギには断言できる筈がなかった。

心の中に残る、Hグア戦での惨敗。

勝負にすらならなかつたあの記憶があつては、絶対に誰かを守れるなんてもう奢ることもできない。

「なら、わかつてくれますか？」

「……はい。わかりました」

「ありがとうございます。そして、『めんなさい』

「いえ、いいです」

沈んでしまった空氣の中、一回は朝食を取るためその場を後にした。

「……………」

夕映は田の前の光景に只ならぬ怒りを感じながら呟く。
田の前には、仲睦まじいネギとのぞかの姿。

明日菜は恐る恐る夕映に話しかける。

「『めんね、綾瀬さん。ネギの奴、何にもわかつてなかつたみたい・
・』

「い、いえいえ、明日菜さんが誤ることではないです。それに、まあ、百歩譲ればあれも先生と生徒の健全な関係に見えなくもないです」

「じゃ、次はプリクラ撮ろうかーのぞかとネギ先生は一緒にね」

夕映は手に持っていた紙パックジュースを思わず握りつぶしてしまった。

「あ、綾瀬、さん」

「ふ、ふふふふ。なるほど、元凶はパルですか。ふははっはははー。」

壊れたように笑い始めた夕映を置いて、明日菜はみんなの元に向かつて行つた。

正しい判断だつたろう。今の夕映は危ない人にしか見えなかつた。

そうして、何もわかつていなかつたネギがのどかと仲よくするのを心配そうに見つめていた夕映。

そこに現れたなにを勘違いしたか分からぬ親友、ハルナのたわけた戯言『なになに、ネギ君とのどかの仲が心配なの? あんた、もしかして?』に青筋を立てていた夕映は、今、そんなことがどうでもよくなるくらいに動搖していた。

あ、ありのまま、いま起つたことを話しますよ?

『ネギ先生とのどかの心配をしていたら、ネギ先生とのどかに神楽坂さんがなにを言わずにじつかに行きました』

な、なにを言つてゐるか分からぬと思いますが、私も何をされたのか分かりません。

頭がどうにかなりそうです。

子供だとか、魔法先生だとか、そんな小さな問題じや、断じてありません。

もつと恐ろしい物の片鱗を味わいました。

「せ、刹那さん。どうしましょ、ネギ先生と神楽坂さんが居ません。のどかも居ません。確実に面倒な方向にことが進んでしまっています」

「・・・確かに、ネギ先生にも困ったものだ。おそらく親書を渡しに行つたのでしうが、声ぐらい掛けてから言って欲しい」

「ど、どうしましょ?」

「夕映は三人を探しに言つてください。言い訳は私がしておきます。木乃香お嬢様のことは、私がしっかりと護衛しますので心配は要りません」

「は、はい。それでは、お願ひします」

頭を下げる、走つていく夕映の背を見ながら、刹那は呟く。

「いつも冷静な夕映があそこまで動搖するとは、いや、仕方がないことか、親友が此方側に来てしまうかもしれないのだから。私も、このちゃんが危険に晒されるかもと思えば、冷静ではいられないからな」

夕映は走つた、関西呪術協会本山に向かつて。
のどかを此方側に巻き込まない為に、自分と同じ立場に立たせない
為に。

「駄目です。のどか、私と同じ過ちを、繰り返せなごくください」

けれど、そんな思いを踏み躡るよつてソレは現れた。

「ねえ、君が、千草さんの言つていたやり手の封印術師さんかい？」

「・・・誰ですか？貴方は」

「ああ、そうだね。名を聞くときは此方から名乗るべきだった。非礼は詫びるよ。」

ソレは一礼してから夕映の正面に立つ。
その顔に表情はない。

「ボクの名は・・そうだね。フライと呼んでくれるかい。ボクは君に興味を持った、同じ束縛者として」

修学旅行、三日目のお題。

その時、私は、自分の命運を悟りました。

綾瀬夕映の冒險 現われたモノ（後書き）

次回、夕映に最大のピンチが到来！く（” ” 0 ” ” ）くなんてこつ
た！！

綾瀬夕映の冒險 届かない力（前書き）

フェイント無双。

そして、夕映、覚醒の時！（――ノヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ――！）

綾瀬夕映の冒険 届かない力

「僕の名は・・そうだね。フェイトと呼んでくれるかい。僕は君に興味を持った、同じ束縛者として」

目の前の少年の眼が私を捕えた瞬間、天が落ちてきたように感じました。

「 ガツ」

押しつぶされる大圧力。骨まで砕けそうな魔力の存在感。天が落ちてきたとしか思えませんでした。

身動きが取れずに地に押し付けられ屈服させられる。ひび割れいくアスファルト。

「・・あ・・あ」

少年に目を向けて、恐怖を感じたのは初めてでした。

私が直立すれば同じ程度の身長。銀色の髪に白い肌の顔には造形上何の欠点も見つけられない。

切れ長で、涼しげで、地獄の底めいたなにも映していない赤い瞳。

疑いようも無く、私は確信しました。この人は、師匠と同じ。バケモノじみています。

逃げなければ、逃げなければ、逃げなければ。

一刻も早く、脇目もふらずに、何を置き去りにしても良いから逃げるべきです。

だというのに、身体が動いてくれません。

「君は、聰いね。賢すぎるのかな、ボクという存在を完全にどうえ過ぎてしまつていて。意外だよ、まだ彼も育つていらない状態で、君みたいな子がいるなんて」

フェイトさん、が何か言つていますが耳には入らない。
どうして、身体が動かないのでしょうか。
逃げなければいけません、知らせなければいけません、こんなバケモノが居るなんて聞いていません。
すぐに師匠、に連絡して、助けに来てもらわなければ、のどかが、襲われてしまうかもしません。

「あ

親友に害が及ぶかもしれない。そう考えた瞬間、夕映の頭が弾けた。

「へえ、立ち上がるのかい」

身体が軽い。先ほどまで感じていた、圧力が無くなっています。

人間脳にはリミッタ　が付いている。

幸せも苦しみも快樂も痛みも全ては上限があり、それを越えるとなにも感じられなくなつてしまつ。感覚神経の麻痺。
無論、それは恐怖にも準ずる。

夕映が幸福だつた点は、人格が壊れてしまつ前に限界を超えたこと。
不幸だつた点は、恐怖と共に知性すらも麻痺してしまつたこと。

「縛るもの、止めるのも、私の特権です。私がアナタを止めてみせます」

普通に考えれば、それは正常な行動じやない。
敵わないと分かっているのに挑むのは勇氣でも何でもない、ただの
蛮勇に過ぎない。

それが、いまの夕映には分からなくなっていた。

「いいね。ボクに負けぬと、良く吠えたよ。その魂、敵に値する。
ただの仕事だつたのだけれど、それなりに本気で行くよ。封印術師」

「綾瀬です。綾瀬、夕映です」

銀の指揮棒を構えてそういう夕映を見て、フェイトは頷く。

「もう一度名乗ろう。ボクはフェイト・アーウェルンクス。
として造られた、曰く、土くれの様な人形らしい」

フェイト・アーウェルンクスの名乗りをして、夕映は一步も動かない。

ネギが小太郎と戦い、刹那が月詠から木乃香を守っている時、絶望的な夕映の戦いが始まった。

「ヴィシュ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト
ボドーン・カヨイン・オノマトイン
の蜥蜴邪眼の主よ 時を奪う毒の吐息を」

バー・シリスケ・ガムナー・ヨー・クト
ブノエーン・トウツシイク由ノン・パライルーサン
小さき王ハつ足

ブノット・ペトラス
石の息吹！！

迫る煙はかの有名なメドウーカの呪い、触れてしまえばどうなるか、考えるまでも有りません。

ならばどうしまじょ？これもまた、考えるまでも無いでしょ？。跡方も無く、吹き飛ばしてしまえばいい。

「気合い爆破！」

轟音を立てる爆発が起る。

驚きは私とフロイトさん、二人の物。
巻き起こった爆風は、石の息吹ブノット・ペトラスを吹き飛ばす感じか、フロイトさんの身にすり届いていました。

「へえ、これは」

「な、これは」

フロイトさんは無表情のまま事態を呑みこんで、私は黙った。

「暴走かな？」

「ところよつ、貴方がやつわせたのでしょ？。フロイトさん

私の身体から、力が溢れてくる。土壇場での覚醒、なんていう都合主義。

けれど、負荷はあるようで、その全身は悲鳴を上げて、秒刻みに壊れていく。

「『』のボクと共に振っているのかい？面白しね、今、君の魂は作りかえられているよ。原因は、なんだか『』やつぱり、同じ束縛者だからだらうか？」

夕映の成長は止まらない、体をむしばみながら、徐々にプラスへと向かっているのをフロイトは感じていた。

「これではいずれ、今の僕を上回るかもしれない」

フロイトはまだこのか楽しそうにそいついた。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り笑う 無駄知恵の根よ 敵を捕えて役目を果たせ！」

悪知恵で縛りつけるもの！
レーディング

大樹の根がフロイトさんの全身を縛りつける。いや、縛りつけるだけではとどまらず、その身を音を立てながら締め付ける。

だといつのこと、フロイトさんは表情一つ変えない。

「やつぱり、可愛い顔をしていてもバケモノですか」

「酷いことを言つね。たしかにボクは人ではないけれど、それは君も同じじゃないかな。このボクを拘束している君も、十分バケモノじみているよ」

「女性に向かつてバケモノと言つたです！ 魔法の射手 連弾 水の58矢！」

バーシリスケ・ガリオメタ・コードター・ボドーン・カコイン・オンマトイン
トライ・カコーカ・デルダラモサト
災いなる 眼差しで射よ

「 石化の邪眼！！」

221

放たれた光線で全ての矢が石化し地面に落ちて砕け散る。
捕えていた根も碎かれた。魔法媒体なしでの魔法行使にあの速度での超高速詠唱。

やはり、バケモノはあちらではないですか。

「オリジナルの拘束魔法。根源は魔狼を縛る神々の罠か。素晴らしい拘束力だ。これだけの力を持ちながら、綾瀬君。どうして君は、こんなところに居るんだい？ 君なら、もつと上を目指せるだろう？」
「上、というのは魔法界での地位ということですか？ そんなもの、要りません。私はただ厄介事を捕まえて、私に近づかないようにしたいだけですから」

知的好奇心の所為で踏み入れてしまった非日常。

そんなものに私は縛られたくない、自由で居たい。だから、私は縛り返す。私が縛らない様に。

「危険から逃げだすのではなく、捕えたい。どうしてだい？嫌なら逃げればいい、誰も文句なんて言う人はいないだろ？。言う人はきっと頭がおかしい」

「理解してくれて嬉しいです。けれど、逃げる訳にはいきません。もし、私が逃げてしまったらそれは獲物を狙う猛獸がまだ徘徊しているということ。もしかしたら、私の大切な人が食べられてしまうかもしれないじゃないですか」

好奇心は猫を殺す

こんな過ちをしてしまうのは、私だけでいい。
失つてから初めて分かる物の大切さ。
だから、ファンタジー非日常で生きるのは私だけでいい、親友たちには何も知らずに日常生活を生きて欲しい。

「優しいね、そして酷く傲慢だ。君が言つ親友とやらも、君を心配したいんじゃないのかい？」

「傲慢じやない人など居るのですか？少なくとも、私はあつたことがあります」

「確かに、ボクもあつたことがない」

話しながら行われる魔法と魔法のぶつかり合い、ふと、疑問が浮かびました。

どうしてフェイトさんはあの場から一歩も動いていないのでしょうか。私と同じように、接近戦は得意ではないのでしょうか。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り
笑う 千切られるたび繋ぎ直せ 永劫永遠 捕えるまで縛り直せ
第一の鎖よ」

「ヴィシュ・タル リ・シュタル オオ^{オーバルタローイ} 地の底に眠る死者の宮殿^{ケイメンノン・バシリオン・ネク}
ヨ^{ローン} 我らの下に姿を現せ」

阻止するもの（Hバア命名）

ホ・モノリート^{トモオーン}・トウ・ハイドウ
冥府の石柱

フェイトさんの魔法で現れたのは大量の巨大な石の塊。
その一つ一つを無限とも思える長さを持つ極太の鎖が縛つていく。
そして、その鎖は術者自身も捕えて止める。

「捕えました。その鎖は貴方のあらゆる行動を阻止します」

身体に巻き付いた鎖を興味深そうに見ているフェイト。
油断している間に、なんとか捕えることが出来ました。
これは私の想像ですが、出会った時の大圧力は接近戦も師匠レベル
だと言っていた気がします。

もし、最初から魔法での勝負ではなく肉弾戦を挑まれていたら、私

は1秒も持たずに倒れていたことでしょう。

今、この瞬間を逃したらもう私に次は無い。
おそらく、この現状でフェイトさんを止められなければ、今後もう
このようなチャンスはない。

「止まつてください。フェイトさん！」

阻止するものにありつたけの魔力を注ぎ込む。

けれど、そんな私をあざ笑うかのようにフェイトさんは最初から変わらぬ表情のまま言いました。

「ボクを止める？無駄なことだ。何故なら僕は最初から止まっている。動いてすらいないボクを止めたいといつのなら、あと20万は鎖を持つてきた方が良い」

その時、耳と目を疑いたくなる事態が起きました。
音が鼓膜を蝕んで、目が映像を映す。

「君は、一つ勘違いをしているようだから教えておこう。君は逃げないといった、けれど、君は戦わないといった。後ろにも前にも進まず立ち止まる君は、とても滑稽だよ」

私は、私は、私は何も出来なくて。
この化物に何ら太刀打ちできなくて。

ビキリと、鎖に亀裂が走ります。

「君は、弱い」

絶対と信じた鎖が碎け散った様子を見て、私は意識を失いました。

「ん・・・私は、生きているのでしょうか？」

眼が覚めて、気が付けば、フェイントさんは消えている。

壊れた筈の鳥居も、碎け散ったアスファルトも全てなにも無かつた
かのように元通り。

全ては、夢だったのかと思いました。

しかし、股から感じる寒気が事実だったと伝えています。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」とりあえず、替えの下着を買わなければ

綾瀬夕映の冒險 届かない力（後書き）

フェイント君が中二病を発病しました。

綾瀬夕映の冒險 後悔の夜（前書き）

修学旅行の最後の夜、開始！

いい加減、主人公を出でなきや不味いな……（…）
ん

綾瀬夕映の冒険 後悔の夜

綾瀬夕映は慌てていた。

明かに自分の力量以上に重い事体に困惑します。

私はただ親友である木乃香を護衛するだけよかつた筈です。なのに、何故、私は木乃香と一緒に関西呪術協会の本山に居るのでしょう？

いや、まだそれはいいでしょう。

私自身、木乃香にいつまでも魔法を隠しておくのは難しいと思つて、いた者の一人ですので。

木乃香が何故かネギ先生が“秘密”の任務を行つているこの場にて、魔法が露見してしまつても仕方がないこと。だが、どうしてここには私や刹那さん、ネギ先生や明日菜さん以外にも魔法を知らない一般人が居るのです？

これは非常にまずい事体なのでは？

もし此処に居る全員、こんな大人數に魔法が露見してしまつたとすれば、オコジョの刑にさせられるかもしません

そう考へて、綾瀬夕映は慌てていた。

綾瀬夕映は悔やんでいた。

全てはあのとき、フェイトさんと戦つた時に自分が負けたのがいけなかつたのです。

恐怖と疲労で氣絶してしまっていう失態を何故犯してしまったのですか。

もし、私がもつと早く動けて居ればこつなることを事前に防げたはずです。

「え、考えてみれば、最初から間違っていたのかもしません。舐めていました。関東魔法協会と関西呪術協会の確執を軽視していました。

まさか、ネギ先生と木乃香の敵があんなバケモノを雇うほど、本気だつたなんて思ってもみませんでした。

師匠クラスの戦闘力を持つ魔法使い。あんなものに私やネギ先生が太刀打ちできるはずがない。

どうしてこうなってしまったのでしょうか？

この茶番じみた関東と関西の友好は、ネギ先生への試練の一つだった筈では？

そう考えて、綾瀬夕映は悔やんでいた。

綾瀬夕映は怒っていた。

どうしようもなく腹が立つ。頭の中で考える前に口に出てしまうまどい。

「これは、どうこう」とですか。ネギ先生」

怒氣を含んだ、いや、怒氣しか含まない声で夕映は言つ。ネギが親書を渡すまで夕映はずつと堪えていた。

大切な任務を邪魔するほど恥知らずにはなれないし、一般人の前で問いただすほど馬鹿にもなれない夕映の怒りは今ここで爆発する。この場所には自分とネギ、のどかの他には誰もいない。もう、我慢する必要も無かつた。

「どうして、のどかが魔法のこと知っているのですか？」

「あ、それは・・ここに来る途中に敵に襲われてしまつて。その時に、のどかさんにたすけてもらつたんです！」

「助けてもらつた？ 一般人ののどかにですか？」

「はい… そりなんですよ、綾瀬さん！ のどかさんのアーティファクトはすごいんですよ！ 人の心が読めちゃうんですね！ とてもレアなアーティファクトだって力王君も言つてました。のどかさんの力があつたから敵に勝てたんですね！ これからものどかさんがいれば、きっと誰にも負けませんよ…」

興奮気味に話すネギと、褒められて赤くなっている親友を見て夕映は愕然とする。

まで、どうしてこうなつた。

私が言いたいことをネギ先生は微塵も理解していません。

私は一般人であるのどかの力を借りざる負えない状況に陥つたネギ先生を“責めた”のに、どうして目の前のネギ先生は嬉しそうに飛び跳ねているのです。

その上、これからものどかの力を借りる？ ふざけるなです。命の危機があつて、のどかの助けがなければネギ先生が死んでしまつていたというのなら、のどかの力を借りたのも仕方のないことだと思いましょう。

けれど、それは一回限りに収めるのが普通です。

罪悪感もあるでしょう、やりたくはなんてありません、けれど、それを押し殺してのどかの記憶を消してしまつことが結果的にのどかを救う最良の手段なのは明白です。

「・・・ネギ先生。私とした約束、覚えているですか？」

「へ？ 約束？ なにか約束なんてしましたつけ？ すいません、長さんに密書を渡すことで頭がいっぱいです！」

笑いながらそうこうネギに夕映は失望した。

あらうことか、忘れたと言つたのだ。

夕映が頭を下げて頼んだことを、こんな簡単に忘れたと、悪びれる風も無く。

「それで、なんのことですか？」

「・・・あんまりです」

夕映は思わず涙を零しそうになつて、なんとかじぐめる。

「・・・任務が果たせて嬉しいのは分かります・・・けれど、その言い方はあんまりではないですか・・・私と約束した筈です。・・・のどかを・・・巻き込まないと」

「それは・・・でも、のどかさんが勝手について来たんですよ？」

ネギのその言葉に、夕映はついにキレた。

泣き掛けていた瞳は怒りに歪み、大声でネギを攻め立てる。

「ふざけるなです！ 勝手について来た？ そうさせたのは誰ですか！ なにも言わずにいなくなつたのは誰ですか！ 一言、言つてから出で行けば私もフォロー出来たのに、それすらしなかつたのは誰ですか！」

夕映の思いを理解していなかつたネギには怒声が突然の怒りに思えた。

理不尽な物に思えた。

自分は悪くない、だつてそうじやないか。

僕は立派に学園長先生から依頼された任務を果たしただけ、それにまたまのどかさんが付いてきちゃつただけじやないか。

むしろ、善いことをしたんだから褒められるべきなのよ。

「僕はしっかりと任務を果たしたんですけど…どうして怒られなきやならないんですか！」

「ウニ」

夕映は手を振り上げる。

怒られる理由はその理由が分からぬからだ。

夕映がネギに向けて振るつた平手は、ネギには届かなかつた。ネギを庇つたのは、巻き込みたくなかつた親友だつた。

「・・のどか」

「痛いよ。夕映」

「・・・」ねえ、です

痛々しそうに頬を抑えるのどかを見て、夕映は罪悪感に苛まれる。のどかは悲しそうに夕映を見た。

「ねえ、夕映。どうしてネギ先生を叩こうとしたの?」

「それは、ネギ先生がのどかを巻き込んだから」

「私は、巻き込まれたなんて思つてないよ。ううん、嬉しかった。ネギ先生に魔法のことを教えてもらえた時、嬉しかったよ。ネギ先生の秘密を知ることが出来たんだって思えて嬉しかった」

「そ、それは間違つた解釈です。確かに好意を持つ人のことを知るのは嬉しいかもせんが、危険を伴「それでね。夕映。悲しかったよ」・・・なにがです」

「夕映が魔法を知つているってネギ先生から聞いた時、すごく悲しかつた。ねえ、ゆえゆえ、どうして教えてくれなかつたの？」

のどかの瞳はとても悲しそうに夕映を見続けていた。
夕映は首を振る。

違う、悲しませたかつたわけじゃない。
だた、巻き込みたくなかつたんだ。

優しいこの親友を、危険にさらしたくなかつただけなのに。

「違う、違うんです。私はただ、のどかを危険から遠ざけたくて」

「・・・我が儘だよ。ゆえゆえは傲慢だよ。・・・そんなの寂しい

そう言つて肩を振るわせる親友を見て、夕映には掛け言葉がない。ネギはそんな一人を見て、のどかの肩に触れた。

「行きましょう。のどかさん」

「・・・・・」

無言でネギについて行くのどかに声を掛けたくても、夕映にはどうすることもできなかつた。力なく震える夕映の手から、紙パックのジュースが落ちる。零れた滴が床を濡らした。

夜になり、食事が終わつた後、夕映は一人で部屋の天井見上げていた。気分が悪いので独りになりたいと言つて借りた部屋、隣からは楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

「どうしてこうなつてしまつたのでしょうか？」

そう、小さく呟きながら夕映は考える。

私はただ、親友に泣いて欲しくなかつただけなのに。
結局は泣かせてしまつた。

どうすればよかつたのでしょうか。

魔法を知つたあの日に、全てを話してしまえばよかつたのでしょうか。

けれど、そうしてしまえば親友たちを巻き込んでしまつっていた。そんなことはしたくなかった。魔法は確かに素晴らしい物だけど、同時に危険すぎる物だと師匠に教えられた。

火薬も何も使わずに爆発が起こせる、自由に記憶を操ることだつてできると聞かされた。

それを聞いた時、素直に怖いと思つた。

もし、街を歩いている時に隣に居るのが魔法使いだつたら突然殺さ

れてしまつかもしれない、そして記憶を操られて何をされたかも分からぬまま身体を弄ばれてしまつかもしれない。

そう思つと、怖くてどうしようもなかつた。しばらくの間、怯え続けていた。

だから、私以外の誰かには何も知らずに笑つて居て欲しいと思つた。

「私は、間違つていたのでしょうか？」

問い合わせた処で、答えなんて返つて来ない。

布団をかぶつて、目を閉じる。

嫌なことなんて全て忘れててしまつた。これ以上何も起こらないで欲しい。

今、この瞬間に時が止まつてしまえばなにも悩まずに済むの。

「のどかに、嫌われてしまつました」

嗚咽が漏れる。枕が涙で濡れた。

どれくらうとうしていただろうか、夕映が目をこすつていると不思議なことに気づく。

あれだけ騒がしかつた隣の部屋から、何の物音もしなくなつていた。不思議に思つた夕映は隣の部屋を覗いてと向かう。

「みなさん。もう眠つてしまつたのですか？」

そう言つて、覗いた先に広がっていたのは不思議な光景。

みんなが一歩も動かず、固まつてゐる。

一瞬、何かの遊びかと思つたが、良く見て、違つと気づく。

「みな、さん？のどか、ぱる？」

石化していた。

自分が泣いてなんている間に、きっと敵が来てみんなに石化の魔法を掛けたのだと気づいた時、夕映の目からまた涙が零れた。

「私が、泣いてなんて居たから。・・私は、また、・・あやまちを・・ひつぐ・・うう、あうああ」

泣いている場合じゃないことぐらい分かつていい。

すぐにも石化している親友たちを助けなきやいけない。

けれど、夕映には高等魔術である石化を解呪することなんてできなかつた。

なら、誰かに頼るしかない。

夕映が頼れる相手なんて、一人しかいなかつた。

携帯電話を取りだす。電話帳を開いて、何度もかけた所為で覚えてしまった番号を選ぶ。

プルルル　プルルル　ガチャ

『もしもしし、何の用だ。テコ弟子』

いつも通りの口調を聞いた瞬間、涙腺が緩んで涙があふれる。

「ひつぐ、ぐすっ、じ、じしょー」

『なんだ？どうしたんだ？』

「助けて、ください」

色々と説明をしなければいけない事くらい頭では分かっている。だけど、舌が回らない。口が動かない。涙と嗚咽ばっかり出でてくる。

けれど、夕映が言った一言に帰ってきたのは力強い返事だった。

『わかった。すぐに助けてやる。だから、待つてろ』

それだけ言うと、電話は直ぐに切られた。

夕映は安堵する。

師匠がすぐに助けてくれると言った、なら、本当にすぐ来てくれるだろう。

師匠さえ居てくれれば、もう大丈夫だ。

石化も解いてくれる、あのバケモノじみた少年が出てきても、師匠なら勝てるだろう。

狂気が負ける様子なんて夕映には想像できなかつた。

夕映は、じっと涙を袖で拭く。

師匠が来てくれると言った、なら、もう大丈夫です。だから、私も自分に出来ることをしなければ。

立ち上がるともう一度電話を掛ける。相手は、仕事で何度も組んでいる相手。

お金はかかるけど、信用も信頼もできる相手。

『龍宮だ。なんのようかな?』

「仕事に依頼です。」

「わかった。引き受けよう。助つ人も何人か連れていくよ

パ
チ
ン

電話を終えると夕映は自分の頬を両手で叩く。浴衣から制服に着替えて銀色の指揮棒を握る。

戦いの歌
カントウス・ベラーグス

「・・・行きましょう」

夕映は部屋を飛び出して行つた。

綾瀬夕映の冒険 後悔の夜（後書き）

ストックが消えていく・・・
取り合えず修学旅行編終了までは持つとゆづけ、それ以降は田刊
掲載無理だな。

（ ）、（ ）、（ ）、（ ）、（ ）

綾瀬夕映の冒險 その如きを語る（前編）

特に書くことは無いかな……（ ） バイヤア

綾瀬夕映の冒険 その名を呼んで

関東呪術協会本山を飛び出した夕映は林の中を走っていた。

その後、石化した親友達が居る部屋から飛び出した後、本山内を探しまわつたがある物は石化してしまった人達の石像だけでした。まさか呪術協会の長さんまで石化してしまっていたことには驚きましたが、それ以上に居なくなっていた刹那さん達のことが心配です。長までもが石化していたということは、おそらくネギ達だけで敵を倒しに行つたのでしょうか。

勝てる訳がない。夕映はそう確信する。

「敵が一日目に出会つたお姉さん、ゴスロリさん、エロガキの三人だけならなんとかなるかも知れませんが、あの白い少年が居るとすれば勝ち目なんてありません」

取りあえず、ネギ達を探しに行かなければいけない。

そう思い急ぎ屋敷を出た夕映だったが、思いの他早くネギ達を見つけることが出来た。

湖の中で巻き起こっている竜巻。それを囲むようにして立つて居る鬼や鳥族達。おそらくはあの竜巻の中にネギ達が。

そう考えた後、様子を確認できる茂みの中で身を隠める。

あれだけの数の鬼に真正面から挑んで勝てるなどとは驕らない。

「やつ、勝つ」とはできません。けれど、止めることなれば

高揚する精神、それに続くように高まっていく魔力。

この修学旅行で確実に高まった自分の力、夕映は目をつぶり集中する。

想い描く者は、いつも最強の自分。

現実で勝てないのならば、せめて、幻想の中で勝てる自分を想い描け、です。

「今の私に止められない物は、ありません。・・・いえ、師匠クラスのバケモノは別としてです」

最後は弱気になってしまったが、夕映の中でイメージ固まる。ならば、あとはそれを現実のものとするだけ。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り笑う 無駄知恵の根よ 敵を捕えて役目を果たせ！」

悪知恵で縛りつけるもの！
レ
ティング

泉の中から突如生えてきた根っ子に鬼達は困惑した。
その根が身を縛り、動きを阻害する。

「　　な、なんじゃこりゃーー！」

縛られた鬼達が一斉に両手の掌を見つめながら「こう様に夕映は
こけそうになった。

「ノリが良いです。随分、古いネタですが」

「ワシらは長生だもんでな。で、これをやつたのはチビちゃんかい」

鬼達の中でも一回り大きく、肩に狐の面をかぶった女性を乗せている大鬼がいう。

夕映はむつとしながら頷いた。

「おチビとは失礼な鬼です。背丈が可愛らしくて話してください」

そういう夕映に鬼は値踏みをするような目線を向ける。

命の危機を味わった夕映は今さらそんなこと取り乱しなどしないが、不快そうに眉を顰めた。

「悪かった、確かにワシら全員を一瞬で縛るなんていう真似出来る術師がただのチビな訳ない。恐ろしい嬢ちゃんやな」

そう言って笑う、笑う大鬼の横を通り過ぎて、未だ渦巻く竜巻の前に立つ。

「ネギ先生。聞こえますか？」

『え、その声は綾瀬さんですか！？』ついして外から綾瀬さんの声が

『アニーキ。気を付けるよー敵の罠かも知んねえぞ！』

『そ、そつのかな？』

「・・・呆れました。私の声も覚えていないのですね。まあ、いいです。もう、魔法を止めて大丈夫ですよ。鬼さん達は全部、私が止めましたから」

『あ、綾瀬さんが全部倒しちゃったんですか…』

「いえ、あくまでも止めただけです。ですが、しばらく危険はあります」

『ネギ先生。夕映が言っていることなら信用できます。結界魔法を解きましょう!』

『け、けどよ。まだ、刹那姉さんとアーニキの仮契約が終わってねえじゃねえか!』

『ぐじいぞ、淫獣。私はネギ先生と仮契約をする気はない!』

「（何やら）ちやんちやんやっていますね。というが、刹那さんが仮契約をしてしまつ前に間に合つてよかったです（）」

竜巻が消えて現れたのは、ネギとカモ、刹那と明日菜だった。200体を越える鬼が泉から生える根によつて捕えられている様を見て、各々に驚く。刹那が感心したように咳いた。

「流石は、夕映だな。あの人の弟子だけのことはある」

「いえいえ、今回は集中して詠唱する暇がありましたから。普通の戦闘ではこうはいきません。それより、状況から考えるに木乃香が攫われたと考えていいのですか?」

一瞬、その光景に呆けていた刹那だが、夕映の堅い言葉でぐに自分を取り戻す。

「はい。私が不甲斐ないばかりに・・すぐに追いかけた所為で夕映に伝える暇がなく。すまなかつた」

「いえ、誤らないでください。私だって親友たちの危機に気づけなかつたのですから。それよりも、早く木乃香を追つてください。此処は、私が受け持ちます」

この大鬼達を独りで食い止める、無茶を止めようとした刹那だつたが、夕映の顔を見て思いどじまる。

「・・・分かりました。行きましょう。ネギ先生、明日菜さん」

「え、で、でも」

「ちょ、刹那さんー本気なの?そりや、綾瀬さんが強いのはよくわかつたけど、流石にこの数は・・・」

心配そうに自分を見る明日菜に、夕映は笑顔を送る。

「神楽坂さん。心配してくれてありがとうございます。私は大丈夫ですから。木乃香を、頼みます」

「う、うん」

有無を言わせないその姿に明日菜は頷くしかなかつた。

「ああ、行つてください!」

「すいません、夕映」

「あつがとハヤリこますー綾瀬さんー。」

「無茶しちゃ駄目だからねー。」

そう言つて去つていくネギ達を背中で見送つた後、夕映は鬼達の方へと向き直る。

「さて、では動けない間に、半分ぐらには減つてもらいましょうか」

そう言つた夕映の顔には薄く笑みが浮かんでいた。

「しかし、ホンマにす”いな嬢ちゃんやな。いくじ縛られて動きが鈍いからつて、たつた3分で150体も還すとは」

肩に狐の面を被るアヤカシを乗せた大鬼は感心したようになつて。夕映は肩で息をしながら答える。

「普通、動きが鈍るのではなく動けなくなる筈なのですが、動いている貴方達は別格どころかとですか？」

「ハ」の程度では別格も名乗れんかも知れんがな、一応、某し達は高位といふことだ

「まあ、そう言つて訳や。けど、嬢ちゃんの所為で動きが鈍つて、強さで言つたらその辺のアヤカシと変わらんよつになつてもうつたけど

「弱つた私達に苦戦していることは、アナタは余り戦いは得意じゃないのかしら？ 束縛専門の西洋魔法使いなのかしら？」

「・・・良くおわかりで、弱点を見抜かれてしまいましたか」

「じゃあ、嬢ちゃん。今、ピンチなんか？」

鳥族、大鬼、狐面の言葉に領きを返しながら夕映はため息をつく。「元々、私は援護要員なのですよ。前線に出て戦うのは本業じゃありません。ですから、本来はこの様に味方が居る状況で力を発揮するのですよ」

そう言つた瞬間、鳥族の顔が吹き飛んだ。

「ぬおおっ、しまった、新手か！？」

「遅いですよ。龍宮さん。もひ、半分終わってしまいました。これでは、依頼料は半額ですね」

茂みから現れた龍宮は銃を抱ぎながら苦笑する。

その後ろには興味深々と鬼達を見渡すクーフェが居た。

「いつになく厳しいね。何か良いことでもあったのかい？ 夕映」

「うひあー。私、本物のオバケ見るの初めてアルよ。こんなに一杯居るの半分を夕映が倒したアルか？ 夕映は強いアルねー」

クーフェを見て、驚いた様子の夕映が龍宮を見るが、微笑を浮かべるだけでなにも言わない。

仕方ない、と夕映はため息をついてから銀の指揮棒^{タクト}を構えなおした。

「クーフェさんが来てしまったのは予想外ですが、戦力が多いに越したことはありませんし、ありがとうございます。一人とも、私が足を止めますから止めを頼みたいのですが、」

「了解だ」

「わかつたアルよ」

「では、行きましょう！」

一方的な攻撃が始まった。

夕映が足を止めた鬼達にクーフェが拳を叩きこんでいく、時折、夕映の魔法から逃れる別格達は龍宮が後方から狙撃し還して行く。前衛、援護衛、後衛、三拍子そろつたそれは夕映や龍宮がいつも仕事をする時と同じだった。

まあ、前衛が刹那からクーフェに変わつてはいるが強力なことに変わりはない。

鬼達は次々に還つて行き、最後の大鬼を真名が狙撃した所で、全ては終わつた。

「終わりましたね」

「ああ、そのようだ」

「いやー、早かったアルね。6行くらいで終わつた気がするアル」

若干危険なことを言つクーフェを龍宮が笑い、夕映もつられて笑おうとした。

その時、天が落ちてきた。

「うう、」

突如として駆ける悪寒、頭髪が皮膚に擦れるのを不快に感じる、全身の産毛が逆立つて行くのがわかる。

『死』の感覚。

あの時に味わった、あの感じ。

全身の神経が針のように研ぎ澄まされていくのがわかる。
嫌で嫌で、逃げ出したくなるあの感覚。
思わず、涙が溢れてくるあの温度。

夕映だけが気づいて、龍宮とクーフュはまだ気づいていない。
そっと空を見上げると、そこには白い少年。フェイト・アーウェル
ンクスの姿があった。

「あ、ああ」

フェイトの姿を確認して涙を零す夕映、それを見て初めて龍宮は異
変に気付き空を見上げた。
そして、フェイトの姿を見た瞬間、叫んだ。

「夕映！クー！逃げるぞ！」

龍宮が感じたものも夕映と同じ感覚。

いや、戦場に居た経験が長い分、龍宮のソレは夕映のソレより濃いものだった。

圧倒的すぎる力の差、死に対する絶対の恐怖。

アレと対峙すれば、奥の手を使つたとしても危うい。

瞬時にそう判断し、離脱を叫んだ。

龍宮は煙幕弾を打ち走つた。夕映は瞬時に戦いの歌を唱えて逃げた。カントウス・ベラーツ クーフェは龍宮に言われるがまま、全力で駆けた。

キルクルス ピロールム・ニグロールム
万象貫く黒抗の円環

けれど、それを阻むように天空に無数の黒い石針が浮かぶ。フェイエは言葉とは裏腹に平然と言つた。

「ごめんね。本当はこんなことをするつもりはなかつたのだけれど、今の戦いを見ていてわかつた。綾瀬君、やはり、君は危険だ。もし、君がネギ君のパートナーになつてしまつたら、ボクの主の計画に支障が出るかもしねー」

「あ、」

迫りくる黒い石針を前に夕映は恐怖で目を瞑つた。戦うことも逃げることもせず、ただそこで止まつた。だから、その体は貫かれ、射抜かれ、縫いとめられ、血が飛び、肉が抉られ、激痛が身体を駆ける。そう、駆ける、筈だつた。

いつまでも来ない痛みに夕映はそっと目を空ける。

目の前に映つた物は、何時かの夜の再現でした。

あれはネギ先生が赴任してくる前の夜。

私はまた、守られていきました。

あの人背中に。

安堵の息が出て、安心しきつた涙腺から涙があふれる。涙声で鼻をすすぐながら、夕映はその名を呼んだ。

「ぐすり、じ、じしょー」

夕映の声に狂氣は答えない。

ただ不動に、夕映を守るように立つ。

そして、自分を見下ろすフロイトを見据えながら言った。

「テメエ……なに俺の弟子泣かせてんだ。殺すぞ」

砕け散つた無数の石針が散乱する夜。

フェイト・アーウェルンクスと羅漢狂氣が対峙した。

綾瀬夕映は冒険を終わらせる（前書き）

遂に主人公対フェイント戦。 開幕！
ヽ(、)ノ

綾瀬夕映は冒険を終わらせる

弟子からの電話があった。

『助けて、ください』

泣いていた。誰かに泣かされていた。

なにも考えずにただ言った。助けてやると。

すぐに学園長の元に向かえば、エヴァの姿があった。
学園長の方にもネギから連絡があつたらしく、エヴァを援軍に送る
ということだった。

影の転移魔法で俺も連れて行つてくれとエヴァに頼んだ。

学園長が何か言つていたが、黙らせた。

送られた京都で、エヴァは学園長との契約だからネギを助けに行く
と言つた。

俺はエヴァと分かれて、弟子の魔力を追つて走つた。

辺り着いて見たのは、泣いている弟子の姿だった。

全身の毛が逆立ち、全身を巡る血が熱くなるあの感覚。
もう、敵が誰だと周りがどうだと考へず、泣いている弟子の
前に立つた。

「テメエ、なに俺の弟子泣かせてんだ。殺すぞ」

突然現れた狂氣。身体の周りからは目視できるほど圧力が生み出
されている。

龍宮はフェイトを見た時と同じ感覚に襲われた。クーフェはその雄々しさに魅入った。夕映はただ安堵の涙を零す。

フェイトは自分に向けられる大地を潰すほどの圧を感じながらも、汗一つかかずに涼しい顔で言つ。

「君の方こそボクの邪魔をするなら消すよ」

夜空を背にして狂氣を見下ろすフェイトと夕映を背に守りながらフェイトを見上げる狂氣。

互いが互いの顔から目を逸らさない。睨みあうだけで大気が狂うほどの魔力と氣がぶつかり合つ。

狂氣は自分の顔がゆがむのを感じた。久々の感覚に戸惑いながらも酔いしれる。

全身が震え、目が血走り、巡る血液は沸騰して、吐く息は熱くなる。ああ、と狂氣は息を吐く。久しぶりの高揚。いつ以来だろうと考えて、親父と殺り合つた時以来だなど結論付ける。

フェイトはなにも無い筈の胸の中で何がが生まれるのを感じた。初めての感覚に戸惑いながらも冷静を保つ。

久しぶりに興味を持つた対象の一人である綾瀬夕映。

不本意ながらも彼女を討とうとした時に現れた男。

彼が現れることで安堵した綾瀬を見て、フェイトは納得した。この男が彼女の師か。なら、彼女の異常な力も納得がいくぞ。

対峙したまま、しばらく動かなかつた一人によつやく動きが見えた。動いたのは狂氣だった。開いていた手を拳に変え、言つた。

「わざわざ人を殺すのに殺すなんて言ってくれんのかよ。優しいな、お前」

「君が最初に言つたのだろう?」

「戦争をする覚悟が足りないな、出直してこいよ。」

フェイトの言葉を聞き終わる前に、右腕を振りきつた。

「ラカン全^{フル}力ストレート!」

夜空に極大の光線が打ちあがつた。

無限登校地獄から抜け出して、京都に降り立つたエヴァは歓喜に震えた。

自分を縛っていた楔が外れ、魔力が身体から溢れだす。

今この時間、夜に君臨するに相応しい力が自分の全身を巡っている。エヴァは力の限りに笑つた。

「フ、フフハハハハ！京都だああ！ひやつほーう！」

「マスター。自重してください」

夜空の中、飛び跳ねるエヴァ。その横で茶々丸は巨大な銃のメンテナンスをしている。

目の前には復活した大鬼神、リョウメンスクナノカミにそれを従える天ヶ崎千草。

空にはほぼ裸の木乃香を抱いた刹那が白い羽を生やし飛んでいて、地面ではボロボロのネギと半裸の明日菜とがエヴァの登場に驚きながら見上げていた。

一見しなくても混沌^{カオス}な状況だった。

「え、エヴァンジーリンさん！それに茶々丸さんもー、びつてしま
こ」

ネギは驚きながら一人を見る。エヴァは下に転がるネギを見下ろし
ながら答えた。

「学園長との契約だよ。京都観光のついでにぼーやを助ける。ただ
それだけだ。そこで転がって見てているといい。本当の魔法使いの力
をな」

そう言いう顔には笑みが浮かんでいる。

しかし、それは別にネギに向けられたものではなく純粋にことが終
わった後の観光を楽しみにしているらしかった。

茶々丸はネギのことを一瞥もせず言ひ。

「マスター。早くあの鬼神を倒して狂氣様と合流しましょう

「む、そうだな。なにも明日一日だけが観光という訳ではないし、
コレを倒した後は夜の観光にでもしゃれ込むか。茶々丸、いい場所
はあるか？」

「万灯囃子展望台という所から見る夜景は美しいと聞きます」

「決まりだな」

笑みを深めたエヴァとどこか楽しげな茶々丸。

戦場に似つかわしくないその光景に対峙している筈の千草は苛立ち
ながら叫ぶ。

「あんたら何なんや！邪魔しに来たんか！無駄話しに来たんかどつちなんや！」

千草の言葉を鼻で笑いながら、エヴァは両手を広げ言った。

「貴様の耳は飾りか？言つただろう。観光をしに来たのだ…やれ茶々丸！」

「了解マスター。結界弾、発射」

巨大な銃から放たれた物はリョウメンスクナノカミを周りの空間ごと包み込み、圧迫する。

直立し不動であつたスクナは怒轟を上げながら身をかがめる。

「ぎゃあああ！？スクナ！どないしたん！？」

その様子を爆笑しながら見ていたエヴァはネギを見下ろしながら指を立てていう。

「ついでだから覚えておけぼーや。このような大規模な戦いでも魔法使いの役目とは、究極的にはただの砲台。つまり火力が全てだ。よく見ておくと良い」

ふはははは、と笑いながらエヴァは空高く舞い上がり、詠唱を始めた。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 契約に従い
クリュスタリナー・パシレキゲネーティヤオーニオン ト・シュンボライオン
氷の女王 来れ とこしえの やみ！ 我に従え
リュステル ようが！－ ハイオーニエ・ク
えいえんのひ

スクナの周りの湖が凍りつき、突き出た氷塊がスクナの身を貫く。

スクナ自身も表面は氷に覆われ、動くことが出来なくなつた。

千草は目の前で起こる大規模魔術を見ていることしかできず、無様な悲鳴を上げた。

「フハハハ！ 雑魚はさつさと散ると良い！ 私と狂氣の相引きを邪魔するなど百年早いわ！ 全ての 命ある者に 等しき死を其は 安らぎ也“おわるせかい” フツ、碎ける」

エヴァアが指を鳴らすと、スクナはいとも簡単に崩れ去つた。千草はその余波で何処かへ飛ばされていき、エヴァアはそれを確認しながらも放置するよう地面へと降りて行つた。

「ふん、バアカめ。伝説の鬼神か知らぬが私の敵ではなかつたな

「あ、流石です。エヴァアンジェリンさん

「マスター。先ほどの発言について聞きたいことが、

「ん？ なんだ、刹那。もう羽を隠すのは止めたのか？」

「え、ええ、はい。お嬢様を救つために・・・仕方なく」「狂氣様との相引きとはどうこうことじょうつか？」

「となると、近衛木乃香も此方側へ足を踏み入れるといふことか。・・・ふん、爺の思惑通りなのかもな」

「エヴァアちゃんて魔法使いやつたんや～。気が付かなかつたわ～。ネギ君はそんな気がしてたんやけど」

「マスター。流さないでください」

「ちゃん付けは止せ。私は悪の魔法使いだぞ」

「無視ですかマスター」

エヴァに刹那が駆けより、木乃香もその後ろに付いている。茶々丸のぐどくどとした問い詰めを聞かない様にしながらエヴァは二人の相手をしていた。

そんな和やかな空氣の中、空氣と貸していたネギは空氣を読まずに叫んだ。

「ま、まだです！エヴァンジエリンさん！まだ長さん達を石化した白い少年が残っています！」

その時だった。

夜空に極太の光線が打ち上がり、何処からか白い少年。フェイト・アーウエルンクスが飛ばされてきた。

光線を防いだだらう両袖の服は焦げているが、その腕に傷は無い。湖の上に立ったフェイトは周りを見渡し、スクナと千草が居ないのを知ると落胆した様にため息をつく。

「やはりネギ君を打ち負かしたからと此処を離れたのは失敗だったね。しっかりとボクが見届けておくべきだった」

フェイトの登場にネギは身体を引き摺りながら杖を構え、明日菜も片手で胸を隠しながらハリセンをフェイトに向ける。茶々丸は無言で銃を持ち直し、刹那は木乃香を庇うように前に出た。

だが、そんな四人など眼中にないとばかりに、フェイトはエヴァだけを見ている。

「闇の福音 ハイ・ディイライトウォーカ 吸血鬼の真祖では分が悪いか」

「心配しなくとも手は出さんよ。貴様の相手はあいつだろ？？」

笑みを浮かべながら夜空を見るエヴァ、その先には湖に降り立とうとしている狂氣の姿があった。

「ああ、そうだね」

フェイトはエヴァに背を向け、正面から狂氣を見据えた。それを見たネギは背後から魔法を放とうとしたがエヴァに杖を飛ばされる。

「不粋な真似をするな」

「で、でも！ チャンスじゃないですか！ あの男の人があの人が誰だか走りませんが、負けちゃいますよ！」

「それは・・・ないと思いますよ」

ネギに答えたのはエヴァではなく刹那だった。

その言葉に木乃香は刹那の背から顔を出し尋ねる。

「せつちゃん。あの人のこと知ってるん？」

「はい。お嬢様の親友である夕映の師匠にして私の知る限りでは最強の男。20年前、魔法界で起きた戦争で名を上げた紅い翼の一員。

大戦の大英雄、千の刃、J・ラカンの息子。羅漢狂気さんです

「羅漢狂氣つて、あの時の男子生徒よね？」

「・・・・僕と同じ英雄の、子供」

刹那の言葉に驚く明日菜とネギに。エヴァは言ひ。

「よく見ておくと良い。あれが本当の英雄の息子という奴だ」

吹き飛ばされたフェイトを追つて、湖まで狂氣は来た。

夕映達は幸いに重い怪我はなかつたので、放置してきた。
一言声をかけても来てもよかつたが、今の狂氣の眼にはフェイトしか映つていなかつた。

フェイトを見詰める。

その後ろにはエヴァと茶々丸、刹那や木乃香や明日菜と、その他一人と一匹が居た。

狂氣はエヴァへ目配せをし、口を吊り上げながら頷いたのを見るとフェイトとの戦闘に集中する。

それはフェイトも同じ様で、背中を氣にもせずに狂氣だけをみつめていた。

互いに立っているのは湖の上、静かに睨みあつていた両者は誰かの汗が地面に落ちた瞬間、動き出した。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル ヴァンゲイト 小さき王八つ足
・ボドーン・カイ バーリスケ・ガムダー・ヨークター

カコイン・オンマトイン
の蜥蜴邪眼の主よ

ブローン・トウチングイウ田ノン・パライルーサン
時を奪う毒の吐息を「

ブロード・ベトラス
石の息吹!!

「 気合い爆破あ !!!」

噴き出た石化の煙を爆風によつて吹き飛ばす。

狂氣はその選択こそ、弟子である夕映と同じだつたが規模が違う。
爆風は石の息吹を吹き飛ばすだけには止まらず、周りの水も上空へ
と巻き上げた。

「 クルワ・クルクル・クルイ・クルウ 来れ 深淵の闇 燃え盛る
大剣!! 間と影と憎悪と破壊 復讐の大焰!! 我を焼け 彼を焼
け其はただ焼き尽くす者」

インケンディナムナエ
奈落の業火!!

狂氣の手から放たれた黒炎の塊が放たれ、爆ぜた。
空へと巻き上げられていた水が一瞬にして蒸発し、一帯は凄まじい
量の水蒸気に包まれる。

「 ヴィンシュ・タル リ・シユタル おお 地の底に眠る死者の宮殿
我らの下に姿を現せ 」
オーラルタローリー
・ケイメン・バシリオン・ネクローン

ホ・モノザオトヌ・トウ・ハイドウ
冥府の石柱

「 羅漢適当にラアアアシユウウウツ!!」

水蒸気の中から現れた強大な石柱を狂氣は拳で打ち碎いて行く。
一撃では壊れない、二撃三撃を入れてから碎かれる石柱。

ぶつかり合つ風圧で視界を覆つていた水蒸氣は飛ばされ、一人は互いの姿を目視する。

誰もがその戦闘を見て息飲んでいた。飛び交う大魔法と大魔法。砲弾のように打ちだされる氣弾を避け続けるフェイト。遠くに居た小太郎や楓にさえ目視できるほど強大な戦い。それはもはや戦闘ではなく、戦争だった。

狂気が動く、振るわる拳は石柱を碎く豪鉄の拳。

しかし、フェイトはその全てを避けきる。

狂気が振るつ拳以上の速度で動き、狂気の背後を取りながら言つた。

「君は強い、攻撃が一撃でも当たればボクでも危うい。けれど君は足りないものがある」

「なんだよ？」

「君に足りない物それは、情熱、思想、理念、頭脳、氣品、優雅さ、勤勉さ。そして何よりも、速さが足りない！」

自分を捕えようとする裏拳を搔い潜り、フェイトは初めて魔法以外の攻撃手段を取つた。

フェイトが振るつた拳はヒュボツ、と拳を振るつた音ではない音を出す。

その拳の直撃を受けた狂気は、口元を歪め、笑つていた。

「そう言つお前は、出力不足だ！」^{パワー}

フェイトは言葉と共に放たれる氣弾を避けて、狂気から距離を取る。二人は三度、正面から対峙した。

「攻撃力と防御力が常軌を逸しているね。まるで重鈍な亀だ」

「そう言つお前は速さしかねえだろ、ひ弱な燕が」

「確かに。君はボクに一撃も入れられない。ボクは君に一撃入れても意味がない。これじゃあ勝負はつかないね。引き分けにするかい？」

「一撃も入れねえで、退けるわけがねえだろーがよお！」

そう言つて狂氣は右腕を水平に持ち上げる。握っていた拳を開き、指を真っ直ぐと伸ばす。

戦闘中に行われた意味のわからない光景。

その動作によつて魔力も氣も変化があるといつ訳ではない。フェイトは狂氣の行動に首を傾げながら言つた。

「なにをするつもりか分からぬけど全では当たらなければどういふこともないよ」

「ああ、わかつてゐよ。だから、（）都合主義の絶対に当たる一撃を放てばいいんだろ？」

「君は、なにを言つてゐるんだい？」

狂氣の言葉に、最後まで分からぬと首を傾げるフェイト。
理解不能。

確かにそうだらう、絶対に当たる一撃。
そんな（）都合主義があり得る筈がない。
しかし、フェイトは知らない。

今、自分が戦つている相手が誰なのかを。

フェイトが避けることのできる攻撃。

本気を出せば超えられるかもしれない防御力。

それしか持たない者が、果たしてかの理解不能を^{バグキャラ}継ぐ^{チートキャラ}都合主義者足り得るのか？

答えは、否。

最後通告、狂氣はフェイトに問いかけた。

「・・・・お前は、英雄か？」

「いや、悪役だ」

「なら、お前は俺には勝てない。英雄以外に俺が殺せるものか。
形成^{Yetzirah} 英雄は俺^{英雄}を殺す^{殺す}」

そう、狂気が呟いた瞬間。狂氣の右腕が割れた。

裂けたのではない、右腕の中指から肩まで一直線の割れ目が走り、開いて行く。

血が滴ることも無く、中から覗くのは骨ではない白い鉄を思わせる何か。

骨格の形が変化し、血肉が何かへと組みかえられていく。

その様子に、見守っていたエヴァやネギ達はおろかフェイトすらも目を見開く。

割れて組みかえられていく腕、一見として不気味に見えるその動きは不思議と嫌悪感はない。

「右腕^{ライトアーナレイブアーツ} 英雄を殺す魔拳^{マッパン}」

そう狂気が言うと、腕の変化が止まる。

現れた物は精巧な機械を思わせる、白銀の腕。

通常の狂気の腕と太さは変わらないが、すらりとした曲線美が何処か脆く儂く見せる。

拳を握ればその腕に青白い文様が浮かびあがる。

フェイ特は柄にもなく戸惑いながら言つ。

「君は・・・人間じゃなかつたのかい？」

「人間だ。ただ、身体の半分は科学に喰われた、はんじんきへい半人機兵ハンジンキヒンだけどな」

空間を圧する圧力が強まる。魔力でも氣でもない何かが空間に広まつていく。

遠い未来、地球人と火星人の生存を賭け起ころる100年戦争で後天的に生みだされた英雄ヨウセイを前に、フェイ特は初めて表情を崩す。

「なるほど人の業はそこまで届くのか。凄まじいよ明日から来た英雄」

「確かに俺は殺人狂だよ。だから、へんやく被害者。黙つて殴られろ」

「殴れるのかい?」このボクを

「やつてやれないことは無い」

「何度も言おう。君のその腕がどれほどの力を持つていようと、当たらなければどうということばあつ!」

突如、腹部に走った痛み。勢いよく襲つた衝撃は身体を飛ばしかけた。

フェイ特は慟哭する。まさか、今、ボクは殴られたのか?と。

しかし、ありえないと首ふる。少し離れたあの場所から、狂氣は動いてもいのだから。

「君は、今、なにをつっ！」

障壁も突き抜けて、次は顔面に痛みが走る。衝撃が襲つた場所を摩りながら、フェイトは確信した。

目の前に居る狂氣は面白そうに顔を歪めている。その白銀の右腕は振るわれていた。

「殴ったのかい？君は今ボクを。その腕で」

「ああ、」

言葉の意味は、当事者である一人にしか通じない。
傍から見れば、フェイトは自分から体勢を崩したようにしか見えなかつた。

「確率変動、つていてもわかんねえよな。難しい説明なんてしてやる気はねえから結果だけ教えてやるよ。要は必中の拳。振るえば絶対に当たる攻撃」

^{無双拳}
（）都合主義の一撃

「良い名前だろ？」

「・・・測りかねるね。けれど、なるほど、理解は出来ないけれど知覚はしたよ。つまり君に勝つには速いだけではだめ。ボクも本気

を出でなきや いけない訳か。 · · · · 顔を殴られたのは、初めてだよ」

殴られた頬を摩りながら、フェイトは田を見開く。
瞬間、湖の水が暴れ出した。

飛沫が飛び、風があれ、蒸発し、電気を伴う空気が生まれる。
荒れ狂う魔力の渦の中で、狂氣はただ不動のまま問う。

「本氣で殺るか？」

狂氣の問いにフェイトは一考してから、田をしづぶる。
零れ出ていた魔力が鎮まつた。

「やめておいで。 ここが焦土になつてしまつ。 今回は君の勝ちだ」

「やうか

狂氣の右腕は元の形へと戻つていぐ。

「やういえば名前を聞いてなかつたね。 ボクの名はフェイト・アーウェルンクス。 君の名を教えてもらつても構わないかな？」

「羅漢、狂氣」

「やうかい」

それだけ言い、小さく頷くとフェイトは立ち去りつゝある。
その背に、狂氣は言つた。

「アーウェルンクス。 僕の弟子を泣かせたこと。 一度田はないぞ？」

「そうだね。もし次やる時は相応の覚悟を持つてやらせてもらひつみ。

羅漢

首を動かし狂氣を見た体勢のまま、フエイトは水の中へと消えていった。

フエイトが消えたことで周りの空気が一気に緩和する。

狂氣がため息を付きながら右肩を動かしているとエヴァが駆けよってきた。

「狂氣！ 終わったのならすぐに観光に行くぞー！」

相當に興奮しているのだろう、まるで子供のように狂氣の腕を引くエヴァを疲れた目で見ながら狂氣は言つ。

「少しくらい休ませてくれ久々に疲れた」

「駄目だー遊ぶ時間が無くなるだろうがー！」

無理にでも引っ張つていこうとするエヴァ、魔力が全開しているせいか狂氣の腕を掴む力が異常に強い。

助けを求めるように狂氣は茶々丸に目を向けるが、茶々丸は微笑んだままだった。

「ああ、狂氣様に甘えるマスター。可愛いです」

「はあ、」

狂気のため息が木靈する。

先ほどまでは打つて変わり、まるで家族の様な微笑ましい光景を作る三人を見てネギや明日菜、刹那や木乃香は呆然とするしかなかった。

ちなみに、父 狂氣 母 茶々丸 子供 エヴァなのは言つまでも無い。

こうして、修学旅行最後の夜は幕を閉じた。

おまけ

主犯であつた千草を捕えたチャチャゼロは空を見上げながら呟く。

「俺、メインヒロインダッテノニ出番ガ少ネーナー」

「私はアンタみたいな人形をヒロインにする変態に負けたのかい

「ケケケ、キザムゾ?」

「ひいい

綾瀬夕映は冒險を終わりせる（後書き）

次回、修学旅行編閉幕。

主人公は少しだけ後始末をして帰るようです。ヽ(ーーヽ)・
（シ一ツ）

綾瀬夕映の冒險 幕引き（前書き）

綾瀬夕映と命を打つておきながら夕映が一切出てこない狂氣による修学旅行のまとめです。

長かったぜーーー（：）ノ やりきった

顔

「で、何の用でしょうか？近衛詠春。俺はとても忙しいので要件があるなら早く仰って頂きたいのですが」

フェイントとの戦いから一夜明けた朝。狂気は関西呪術協会の長、近衛詠春の前に居た。

だだつ広い木目張りの広間に置かれた座布団の一つに正座する狂気は、敬語こそ使っているが顔には笑み一つ浮かんでいない。大体、狂気は目の前に居る人物に敬意など感じていないのだから仕方がないと言えば仕方ない。

敬語を使っているのは、ただここがそういう場所ということを弁えているからにすぎない。

「いえいえお茶でも飲みながらゆっくりと話しあいましょう。どうぞ、お口合えればよろしいのですが」

詠春がそう言いつと周囲で琴やら太鼓やらを奏でていた巫女の内の人、おそらくそういう役割の巫女さんがお茶を用意し、丁寧に差し出してくれる。

それは狂気の頭の上に乗る茶々丸の分も用意され、誠意という物がうかがえる。

しかし、狂気は巫女さんに由礼すると一息でお茶を飲み干し、湯呑を置く。

「で、本題はなんでしょうか？」

狂氣の様子に薄い笑みを浮かべながら詠春は言つ。

「ジャック、彼もこいつた格式ばつた場は嫌いなようでしたがそれは息子である君も同じ様ですね」

「いえ、別にこいつ堅苦しい場が嫌いなのではなくただ純粹に貴方のことが大嫌いなのですよ。殺人狂、サムライマスター」

奏でられていた厳かな音楽の音が少し外れる。
詠春は一瞬目を見開くと、狂氣をじつと見つめながら小さく口を開いた。

「そう、ですね。確かに私はそう呼ばれて然るべき者だ。言動からするに君は紅い翼私達英雄が嫌いなようですが、理由を聞いても良いですか？流石に理由も聞かずに嫌われるというのは辛い」

「理由？言わねば分からぬほど子どもでもないでしょ。しかし強いて言つなら。昔、住んでいた村が吹き飛びましてね。俺以外の全員が死んでしまいました」

「ううー？」

「ええ、それはまあ小さな村でしたよ。いえ、村とすら呼べないかも知れない山の中の集落。上空から見渡してもなにも無いように見えたかもしれない寂れたところです。そこが突然雷鳴と共に消し飛びましてね。残ったのや焼け焦げた村と俺だけでした。まったく、誰がやつたか皆田見当も付きませんよ」

「……その村というのは、何処にあつたのでしょうか？」

詠春の顔から、汗が垂れる。厳かな音楽が何処か空虚に響いて行く。膝に置いた拳を握りしめながら、震えている狂気の頭をチャチャゼロはそっと撫でていた。

「いえ、申し訳ありません。思い出したくも無いことを思い出させまいとしてしまった」「

「・・・ああ、いや、いえ。此方こそ感情が高ぶりました。申し訳ない」

「頭など下げるでください。お願いいいたします」

礼をしようとした自分に対し、より深く頭を下げる詠春を見て狂気は頭を下げるのをやめる。

そのまま、数秒待つてから仕切り直すように狂気は話を続けた。

「それで一体どのような御用で俺を引きとめたのでしょうか。本来なら今頃はエヴァと共に観光をしている予定だったのですが

「その節は、本当にすみません。しかし、私は・・・関西呪術協会の長としても、サムライマスターとしてでもなく、一人の父親として君にお願いしたいことがあるのです」

「・・・大方の予想は付く、いえ、付きます。「辛いなら言葉を崩してもうつて結構ですよ」では、近衛木乃香のことだろ?」

狂気の言葉に詠春は大きく頷き、語りだす。

木乃香に平穏な暮らしをして欲しいと思い魔法を秘匿し続けていた

」と。

反体制勢力から木乃香を守るために麻帆良へ木乃香を送り刹那とい
う護衛を付けたこと。

祖父である近右衛門は木乃香への魔法の秘匿については批判的であ
つたが、まさか自分に断りも無く友の子であるネギに近づけ、魔法
を知つてしまふ可能性を高めるとは思わなかつたことなど。
その全てを狂気に吐露する。

狂気はその話を時折眉を顰めながら聞き続けていた。

「どうか、木乃香をお願いできないでしょうか」

「力になるならあんたの友達、サウザントマスターの息子がいるだ
ろ。なんでわざわざアンタ^{紅い翼}達を嫌つている俺に頼む」

狂気の言葉に詠春は自傷的に微笑む。

「・・・・我が儘、ですかね。ネギ君と君、信用できるのはネギ君
でしょう。けれど信頼できるのは君です。君は強い、一目見れば分
かつてしまふ。未だ成長過程であるネギ君よりも君に木乃香を守つ
てもらえれば・・・安心出来る」

「アンタ、ふざけてるのか?あんたらに爺さんと婆さん殺された俺
がなんでアンタの家族を守なんきやなんねえんだ」

狂気の身体から重圧が溢れ出る。床板がギシギシと嫌な音をたてた。
護衛の為、弓を持って立っていた巫女たちは瞬時に矢をつがえる。

「止めなさい!彼の言つていることはまつたくもって正しい!」

詠春は立ちあがりそう叫んだ。巫女たちは素直に矢を治める。

「申し訳ない」

「いや、今のは俺も場所を弁えなかつた

重圧も消え、再び音楽が奏でられ始める。

詠春はお茶を口に含み、舌を濡らさせ、喋り出す。

「君の言つとも思う所も理解できるつもりです。しかし、此処は親の罪に子は関係ないと思つてはもらえないか?」

思いをこめて、本心を隱さず語る詠春。

「どうか、木乃香を守つて欲しい。この通り

深く頭を下げる詠春を見て、狂氣は歯を噛みしめた。

「親の罪に子は関係ない。親がそれを言つのは・・・反則でしょう」

悔しそうに呟く声を聞いて、詠春は頭を下げたまま安堵の息を吐いた。

「ありがとう」

「面倒ゴトガ増エタナ

「まつたくだ」

詠春から解放された狂氣はため息をつきながらエヴァの元へと向かっていた。

頭の上に居るチャチャチャゼロは何時も通りに笑いながらもどこかソワソワしている。

「デ、コレカラ如何スルンダ？木乃香トカイウ娘ハヨー」

「仕方ないから身を守れるくらいには育てるさ。取りあえずは刹那とも話しあわないとな。今回の件で近衛に魔法を秘匿しておく必要もなくなったんだし、アイツも堂々と動けるようになるだろ」

「マタ、才前ノ傍ニ女ガ増エルノカヨ」

「なんだ？ 嫉妬してんのか？」

「ウルセー。勘違イシテnjジャネーヨ」

そう言つて髪の毛を引っ張つてくるチャチャチャゼロに苦笑しながら歩いていくと、狂氣の耳にエヴァと刹那の声が入ってきた。

おい、もう行くのか？せめてアイツに別れの挨拶くらい

顔を見れば、辛くなりますから

何処か行くあてはあるのか？近衛木乃香はビリするつもりだ？

い、一応、一族の撃ですから、あの姿を見られた以上、仕方がないのです！

「オイオイ、コツチモ面度クセーコトーナッテンゾ」

「……だな。たく、なにやつてんだか。刹那！」

「ひやーー!？」

廊下から出ながら、狂氣は庭からどこかに去ろうとしていた刹那を大きな声で呼んだ。

刹那は情けない声を出しながら振り返る。田に映るのは、呆れたようだため息をつく狂氣の姿だった。

「ぐ、狂氣さん。その、私は、あの、すいません」

狼狽する刹那に、狂氣ははつきりとした口調で言つ。

「刹那。今、関西の長と話しあつてきた。近衛の力になるよう頼まれてな、正直面倒だがひきうけることにした」

刹那はその言葉に安心しながらもどこか影を落とす。

「そうですか・・狂氣さんがお嬢様を守ってくれるというのであれば安心できます。これで私も心おきなく此処を去れ」「だが、断ろうと思つ」な、なんで!」

「近衛木乃香に、守る価値がないからだ

「なつ、どういう意味ですか!幾ら狂氣さんといつてもお嬢様を馬鹿にするのは許しませんよ!」

「特別に親しいわけでもないし、近衛自身に借りがあるわけでもない。そんな相手が俺が守らなきゃいけない対象か？何の関係もない奴に進んで力を貸そうと思つほどに俺は優しくはないぞ」

狂気の言い分にたじろぎながらも、刹那は負けじと言い返す。

「な、なら、どうして一度は受けたのです。後になつて言葉を裏返すなど狂気さんらしくもない」

「簡単だ。お前が居たからだよ」

「へ？」

ポカんと口を空けながら、刹那は顔を見る。

「俺が最初に面倒だが近衛に手を貸してやろうと考えたのは近衛がお前の友達だつたからだ。こんな俺でも、友達の友達を守つてやうと思えるくらいの優しさは持つているつもりだからな」

「…………こんな私と、狂気さんが、友達？」

刹那の目に何故だか涙が溜まつた、たぶん嬉しかったのだろうと刹那は自分で答えを出し頷く。

小さく頷いた拍子に零れた涙を見て、狂気は田を細め歯を擦る。

「あー、なんて言えばいいか、良く分かんないが大体で言つておく。お前が近衛から離れるつてんなら、俺が近衛を守る理由はない。それと、」

言い難そうに、本当に言いたくなむげに狂氣は言った。

「数少ない友達が居なくなるのは嫌だから。何処にも行くなよ、刹那

それだけ言うと心なしか顔を赤らめ、逃げるようになりその場を立ち去る狂氣。

刹那は目を袖でこすると、涙を堪え笑顔でその背を見ながら叫んだ。

「はーーー！」

その様子を見ながら、エヴァはニヤニヤして叫んで。

「まったく、どうして私の周りの奴は誰も彼も不器用な奴らばかりなんだろつた」

エヴァの隣にいつの間にやら腰かけていたチャチャゼロも笑う。

「ケケケ、ソリヤ、御主人ガ不器用ダカラダロ」

「似た物同士は惹かれあうと言いますし、姉さんの言つ通つと

追随する茶々丸。一人を見てエヴァは不貞腐れた。

「それは私が不器用だと言いたいのか？」

「アア」

「はー」

「ひつて、長かった修学旅行は終わるのだった。

おまけ　みんなで京都散策編。

銀閣寺

「どうして銀閣寺なのに銀色じゃないのだ？」

「幕府の財政事情により銀箔を貼れなかつたといつ説や銀箔を貼る前に義政が他界してしまつたせいといつ説がありますが詳しいことは分かつていなよつです」

「なんか、貧相だな」

「蹴ツタラ崩レンジャネーカ？」

金閣寺

「なんだ、この恥ずかしげもなくギラギラした建物は

「さつき見た銀閣寺よりはハイカラで面白いだろ」

「狂氣様は語彙が古いですね」

「目ガ、目ガアア。ツテホド、眩シクネーノナ」

伏見稻荷大社

「見ろー。ここがよく怪奇物で殺人現場になる場所だぞ！」

「本山の入り口に似ていますね」

「真似て作ったんじゃねーの？」

「ケケケ、朱ノ赤ハ血ノ色テナ」

清水寺

「フハハ！ ここが清水の舞台か！… 意外と飛び降りても助かり
そうな高さだな」

「確かに… 思つたより高くありませんね。木に突き刺さつたら
絶命しそうですが」

「落チル間ニ突キ落トシタ奴ヲ三回ハ殺ヤレル」

「このメンバーならスカイツリーから落つこちても死なねーよ」

綾瀬夕映の冒險 幕引き（後書き）

修学旅行編の終了。それは日刊掲載の終了を意味します（――！――！）

まあ、今後も出来る限り早く上げていきたいと願ひついでご容赦を。では、再見！（＊）ノ マタネー

いろいろ紹介と言つ名の話数稼ぎ。

登場人物紹介とかしておこいつ。

主人公サイド

羅漢狂氣（クルキ・ラカン）

ポジション 主人公

身長 186cm

体重 ??Kg

外見はDiesuireに出てくる黒騎士殿を若くした感じが良いなあ。

目つきが悪い。常に黒い学生服を着ている。

幼女から熟女（推定600歳）まで綱羅するにとどまらず、ロボットや人形にまで手を出す男前すぎる主人公。

未来から来た火星人であり、英雄J・ラカンの息子であり、改造人間でもある。

年上には敬語を使おうと努力はするがすぐにボロがでて、苛立ちが募ると口調が一方通行化する素敵仕様。

自他共に不良として認識されているが魔法に巻き込まれた当初の明

日菜を心配したり、弟子である夕映を泣かせた相手にブチ切れるなどしているため、意外と面倒見は悪いと思われる。ネギに対する感情は関わりたくない、であつたがチャチャゼロの一件以来悪化中。

チャチャゼロ

ポジション メインヒロイン

狂気のマスターで在り、狂気との仮契約を一人だけの秘密にしている乙女な子。

でも、狂気が他の女と楽しそうにしていると包丁を振り回すヤンデレもある。

定位置は狂気の頭の上。たとえ描写がなくても大体そこに居る。狂気のおかげで自由に動ける為、現在の戦闘力はかなり高い

綾瀬夕映

ポジション ヒロイン

親友を助けようしたり、強大な敵と戦つて覚醒したりする主人公のような狂気の弟子。

魔法は束縛系統特化型。常に冷静沈着だが親友に危機があつたりすると慌てた様子を見せる。

ネギのことを子供にしては頑張っていると主張するなど、主人公サ

イドでは珍しいタイプ。

エヴァンジル・A・K・マグダウル

ポジション ヒロイン

伝説の吸血鬼にして悪の大魔法使い。

主人公と接している過程で幼児化が見られる永遠の口リ。

ただその戦闘力は群を抜いている。

絡繆茶々丸

ポジション ヒロイン

姉の恋を応援する健気な妹。

狂氣とは何があつても事故で済むほど仲がいい。

戦闘力は本気になると全身から武器が出てくるため、原作より強力になつている。

桜咲刹那

ポジション ヒロイン

京都神鳴流剣士。

狂氣に多大なる羨望の眼差しを向ける少女。
尊敬が恋心に変わる日がきっと来る。

夕映や真名とは仕事仲間。狂気にとっては数少ない友達。

龍富真名

ポジション ヒロイン候補

魔眼持ち。

狂氣とは知り合っている筈だが絡んでいる描写がない。

夕映や刹那とは仕事仲間。守銭奴だが信用できる大人の女性。

近衛木乃香

ポジション ヒロイン候補

ぼややんとした子。刹那の護衛対象。

京都弁が難しい為、あまり出番がない不遇な子。
作者は刹那と木乃香の恋を応援している。

長谷川千雨

ポジション ヒロイン候補

最初のころちよくちよく出番があつたヒロイン候補。たぶん少しずつヒロインに昇格する。

作者が思つにネギまーの世界でも不幸ランキング上位に食い込む救いたい子。

原作主人公サイド

ネギ・スプリングファイールド

ポジション 原作主人公

父を愛するファザコン。母はどうした!と突っ込みたくなるキャラ。夕映に抱きつこうとするなど、3・Aの生徒たちに囲まれていて女性認識がずれてきているハーレム属性。

一応、エヴァと戦つたり小太郎と戦つたりフェイトと戦つたりして居る為、原作通り成長している模様。

アンチしすぎると原作からかけ離れていくため扱いに困るキャラナンバー1。

神楽坂明日菜

ポジション 原作主人公の従者

ネギによって魔法の世界に巻き込まれてしまった不遇な人。

普通の生活をしたかつた筈なのに謀略によつて魔法界に引きずり込

まれてしまった。

ネギを見捨てられないほど優しい子でもある。

作者が思うにネギま！の世界で不幸ランキングナンバー1
救いたいけど、救うと原作からかけ離れて物語が続かないという意
味でも不幸。

宮崎のどか

ポジション 原作主人公の従者

狂気に一田ぼれしてしまったり、ネギに恋してしまったりする恋多
き子。

たぶん、これから狂気に出会うことが有れば立ち位置が変わる。

現在、夕映と喧嘩中。パルが緩衝材になつてゐるためなんとか大きな
喧嘩は起こっていない。

朝倉和美

ポジション 原作主人公の仲間

周りを引っ搔きまわす厄介キャラ。

そのうちに狂気による天罰が下るだろ？。

アルベル・カモミール

ポジション 使い魔

淫獣。諸悪の根源。ここがいなきやネギはもう少しマシに違ひない。

大体犯罪者だろ。留置所帰れよ。

麻穂良学園生徒陣

高音・D・グットマン

狂氣と犬猿の仲の女生徒。
たぶんこれから出番が増えしていくであろう正義の魔法使い。
よべ脱げる。

佐倉愛衣

高音を慕つ百合つぽい子。

高音と敵対する狂氣を怖がつてゐる。

ナツメグとは一人でワンセット

あまり脱げない。

夏田萌 (ナツメグ)

佐倉より百合度が高そうだと语られる子

高音と敵対する狂氣を怖がつてゐる。

愛衣とは二人でワンセット。

あまり脱げない

古菲（クーフエ）

一般人では最強の部類なカンフー少女。修学旅行で狂氣の異常な強さに痺れて憧れた。

原作通りにネギに中国拳法を教えるだろうが、なんとか主人公サイドに引き込みたいなと思っている。

そのうち、ポジション持ちに昇格予定。

長瀬楓

裏の世界の忍者ちゃん。

クーフエと同様修学旅行で狂氣に興味を抱く。

狂氣とネギ、どちらに付くか不明な実力者。

早乙女ハルナ

のどかにネギをけしかけた張本人。

こいつの所為でのどかが巻き込まれてしまつたと言つても過言ではない。

無自覺に被害を振りまく天災。悪意があるわけではないのが厄介。

近衛近右衛門（学園長）

巣鳳と偏見を直す為、ネギに狂氣という監察官を付けた筈なのに自分が巣鳳をする情緒不安定な人。痴呆が進んでいると思われる。

高畠・T・タカミチ

熱烈な紅い翼信者。白いスーツで白いスポーツカーを乗りこなす似非ダンディー。

ネギの応援者筆頭。狂氣曰く、教師としては信用出来るが魔法使いとしては信用できない。

ガンドルフィー二

タカミチ二号。

英雄の息子としての狂氣に期待していたが、その言動や行動に失望して強く当たってしまう。

それほどまでに狂氣には期待していたのだと思われる。

未登場だが、狂氣の言動から狂氣が嫌つていないと思われる数少な

瀬流彦

い魔法先生。

物語に入りたいがどう活躍させたらいいか分からない人。

敵対者サイド

フェイト・アーウェルンクス

中一病を発病した残念フェイト。

当たらなければどうということはない！やボクと君が本気で戦つたらこじら一帯は焦土になる。などと恥じることも無く言つことのできるある意味勇者。

しかし、狂氣の攻撃を完全回避したりするなど原作同様実力は折り紙つき。

フェイトハーレムズ（栞 調 曆 環 焰）

フェイトに恩くす少女達。フェイトが中一病化したのはきっとこの子達の所為。

未登場だがなんとか登場させたいキャラ。

月詠

京都しんめーりゅー剣士

サド、マゾ、レズの三拍子そろった最強の敵。

狗神小太郎

夕映の胸に手を突っ込んだエロガキ。

おそらくこの先の出番が多い。

天ヶ崎千草

おそらくもう出番はないだろつ。

超鈴音

狂氣と同じ火星人。

エヴァ対ネギ戦のときには狂氣に手を貸したり、同士などと呼ぶことから狂氣に対してもなからずの好意があると思われる。

現在、狂氣に対して貸しが一つ。

学園祭に向けて色々と黒い計画を発案中。

葉加瀬

一瞬だけ出番があつた人。

超の協力者にして凶器のマッドサイエンティストらしい。茶々丸関連で狂氣とは面識あり。

その他

ジャック・ラカン

狂氣の義理の父親。

狂氣の口調が悪くなつたのはこいつの所為。

大概の事はH A H A H A ! と笑い飛ばす。

狂氣に殺されかけた時は上手く宥めるなどの意外と父親染みた一面もある。

テオドラ

なにげに狂氣の初恋の人だつたりする。

褐色美人な大人な女性、と見せかけたじやじや馬姫。

武器・技紹介

ライターム
右腕 ブレイブアーツ
英雄殺しの魔拳

使用者 狂氣

狂氣の右腕が改造された兵器。

白く、しなやかなで脆い外見に関らず振れば当たる拳を打ち出す”

都合主義な凶悪さを持つ。

確率変動とか事象の発現原理を歪めるとか作者にも説明できない未来技術がたくさん詰まっている。

レフトアーム
左腕

狂氣の左腕が改造された兵器。
作品には未登場。

ラスト・バトル
勝者こそが正義を語る場

狂氣がチャチャゼロヒイチャコラして手に入れたアーティファクト。
使用されたことがない為、効果は不明。

デストロイモード
リーサルウェポンを開拓

使用者 茶々丸

またの名を茶々丸デストロイモード。

全身からミサイルとか機関銃とかが出てくる。

無想拳
ご都合主義の一撃

使用者 狂氣

命中の一撃。

別段技名といつ訳ではなく、右腕解放時の狂気が右腕で振る全ての拳がこれに該当する。

羅漢適当に左ストレート

使用者 ジャック 狂氣 夕映

拳から光る光線が出るパンチ。
夕映が使えるのは劣化番。

羅漢^{フル}全力ストレート

使用者 狂氣

適當じやないストレートパンチ。
極太の光線が出てとても危険。

ラカン・インパクト

使用者 ジャック 狂氣

尋常じやない規模の光線が出てくる。
巨大戦艦の主砲に匹敵するらしい。

気合い爆破

使用者 夕映 狂氣

混ぜるな危険。

魔力と気を合わせて自爆を起こす。

基本自爆の為、本気で使うには肉体がかなり頑丈じゃないとダメ。

魔法紹介

悪知恵で縛りつけるもの
レーディング

使用者 夕映

夕映が狂氣、エヴァと共に作り上げた専用魔法。
地面から木の根が伸びてきて敵を縛りつける。
特性上、飛んでいる敵には効果が薄い。

阻止するもの
ドローマ

使用者 夕映

夕映がエヴァ、狂氣と作り上げた専用魔法。
一本の太い鎖を呼びだして敵を縛る。太さは込める魔力によつて変わる、長さは測定不能。
縛るだけではなく魔法の詠唱、気を使う技統の使用を阻止することが出来る。

しかし、フェイトが簡単に破っていたことから実力差の大きい相手

には効果が薄いといつことが判明した。

インケンティ
奈落の業火

使用者 ジャック 狂氣

原作で登場した魔法だがその全容を作者は知らない。
この作品では放たれた後に爆ぜる黒炎の塊。
レッドアイズの黒炎弾が一番近い。

パー-ヒー-フレイク（前書き）

知つていましたか？

「コーヒー」と言つ飲みモノによつて途轍もなく解りにくいつラグが立つていたということを。

（。 ） d

パー-ヒーブレイク

麻穂良学園の一部が浮かれていた修学旅行といつ学生生活の中での一大イベントが終わったある日の午後。

友達が居ないという悲しい理由でそのイベントに参加しなかった狂気はひとりである喫茶店の隅に座っていた。

何処の喫茶店かと聞かれれば、狂気は馴染みの所と返すだろう。たまるするチャチャゼロとのデートでは定番の場所だし、外に置かれたオープンテラスではエヴァと茶々丸、弟子であるタ映などと世間話や談笑することもある。

そんな狂気お気に入りの喫茶店に狂気はひとりで居た。

一人ではない、いつも頭に乗せているチャチャゼロが居ない為、文字通り独りで、である。

何故独りなのか？と問われれば、狂気は言葉を濁すだろう。それは狂気が年の割に幼いということよりもそういうことに耐性がないからであり、断じてヘタレだからということではない。いや、何故だが言い訳じみている。簡潔に、簡単に言おう。ようは、誘われたのだ。クラスの女子に。

・・・・・・・・何故だ！

と、叫びたいだろう。だがしかし、それは狂気とて同じこと。どうしてこうなったのか、狂気自身も訳が分からぬ。

呼び出しを受けた女子を知っているかと聞かれれば是であろう。しかし、知っている要素が薄すぎる。

狂気とその女生徒との接点なんてそれこそクラスメイトであるということくらいだろう。

それは一言一言くらいなら話したことがあるかもしれないが少なく

ともいつも通りに遅刻しながら登校をして、授業では惰眠をむさぼつた後、さて帰るかと顔を上げた時、クラスの真ん中で顔を赤らめながら「今日、お暇ですか？よ、よろしければ、一緒に、お茶でも・・・」などと声をかけられる覚えはない。

何故だと首を傾げた処で答へなんて出でこない。

考へることをあきらめた狂氣がコーヒーの入ったカップに口を付けた時、店の扉に取り付けられた呼び鈴が静かに鳴る。狂氣が手に持っていたカップが僅かに揺れた。

「まつたかな？」

「いや、いや来たところだ」

「そう、よかつた」

お決まりともいえるやり取りを終えた後、狂氣は向かい合ひ様に座つたその姿を見る。

白い肌にまるで人形のように整つた造形。柔らかそうな白い髪に映える澄んだ水色の瞳で狂氣を見ているその顔は無表情で顔筋がピクリとも動かない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙の後、狂氣は「コーヒーに口を付ける。カップを握る手はプルプルと震えて居て、今の狂氣の心の動悸をよくあらわしていた。

「ああ。注文をいいかい？」

「はい。なににいたしました?」

「そうだね・・彼と同じものを」

「かしまりました」

そんな狂気などお構いなしに彼はマスターに声をかけ注文を頼む。恭しく頭を下げた初老のマスターは明らかにデートに緊張している男子生徒の前に現れたのが外国人の美少年だったといつことに動搖もせず去っていく。

まあ、常日頃から店に女の子の人形を連れ込むような狂気を相手に商売をしていたのだから、とても寛大な心がさらに深まっているのかもしねりない。

そんなんある意味異常、しかしどこか正常な風景を見て、よひやく狂気は目の前の光景が現実であるのだと納得し顔を上げる。

「落ち着いたかい?」

「ああ、危うく吹くところだつたけどな」

「それは止めてくれ。汚い」

「俺だつてしたくなーよ。で、なんでこんなところに居るんだ? フェイト・アーウエルンクス。だつたか?」

「へえ、名前、覚えていてくれたんだね」

「そりゃ、つっこみ間に殺し合つた仲だからな」

「フフフ」

「ハハハ」

互いに笑い声は出しているが、狂氣は目が笑っていないしフェイトにいたっては表情一つえていない。

「ハハハ」

「フフフ」

何処までも異常な、その席に近付けばまるで異界に迷い込んだような錯覚を覚える空氣を出す一人に対しても洗練されたマスターであるヘルマン（年齢不詳）は動じることなくフェイトの前に「コーヒーをいれたカップと砂糖瓶、ミルクを置いて一礼し離れていく。

二人は一頃り笑った後、コーヒーに口を付ける。

「ミルクはいいのか？ガキには苦いぞ」

「子供扱いは止してくれ、ボクは見た日ほど年の年齢じゃない。君と同じでね」

「・・・なるほど、殴つた時にどこか作り物めいていると思ったが。人形のお前に味のよしあしなんて分かるのか？」

「根拠のない誹謗は止めてくれ。これでもボクは日に7度は珈琲を飲む珈琲党だよ」

フロイトの言葉に一瞬目を見開いた後、狂氣は表情を崩し笑う。さつきと同じ笑いではなく、純粹に感心したようにほおを緩めた。

「へえ、いい習慣だな。コーヒーは精神を覚醒させる。続けた方が良いぞ」

フェイトの目尻がピクと跳ねる。一度目を閉じると、目を細めて静かに語り出した。

「・・・一つ、聞いても良いかい？」

「なんだ？」

「好みの品種は？」

「・・・・地球産のでいいのか？」

「かまわない」

「なら、コナだ。あのたまらない酸味とコク、それに風味がいい。ブレンンドしても美味しいしな」

「コナ。良い選択だ。けど、ボクは断然モカ。独特の酸味にコク、そして何より優れたあの香氣。たまらないね」

「モカか。確かにあの甘みはガキ好みかもな。年相応で何よりだ」

「まったく、子供扱いは止めてくれと言わなかつたかい？」

「ハハハ」

「フフフ」

二人はもう一度、笑い始める。しかしそれはさつきとは違う。狂気は普通に笑っているし、フロイトも僅かだが口元を吊り上げていた。

「まさか、此処に来て初めてコーヒーについて語り合える奴がお前とはな。皮肉だが、僥倖だ。俺の周りにはコーヒーを苦くて飲めないとか抜かす幼女と味覚が狂つてるとしか思えない弟子しかいないんだ」

「ボクも同じような物だよ。珈琲について語るにはボクの周りの彼女達は少し幼い」

「久しぶりだからな、少し付き合つてもらえるか？」

「ようこんで」

一人は喫茶店の隅で珈琲談義に花を咲かせていく、数日前に殴り合つた二人とは思えないほど静かに語り合い、笑いあつていた。

ちなみに、なんだか専門的すぎて理解できない単語が飛び交う中、一つの話題を拾つてみると、

「最近は珈琲より紅茶を好む人が多すぎて困る」

「紅茶か。俺はあんまり飲まないけど、お前はどうなんだ？」

「一応飲むよ、レモンティーをアイスでだけど。それじゃないと、

飲む気にはなれないね。そうそう、中には香り高い銘柄の物をミルクティーして飲む輩もいるのだけれど、信じられるかい？」

「どうせ^{ブリティッシュ}英國人だろ？ あいつ等は味覚が馬鹿なんだよ。元の食材の味を壊す英國式調理法を見ればすぐわかる」

「まったくもって同感だね」

などといつ、何処かの子供先生が聞けばブチ切れる内容があつたりした。

どれぐらい語り合つていただろう。

長かつたような氣もするしあつといつ聞だつたようにも感じる中、いつの間にか姓ではなく名で呼ぶようになった狂氣は言つ。

「意外だつたなフェイト。まさかお前とこんなに話が合つなんて。案外いい友達になれるかもしねない」

「いや。それは無いよ」

即答するフェイト。

その口調には確固たる意志が込められていて、有無を言わせない迫力に満ちていた。

狂氣は残念だと思いながらも仕方がないなと納得する。当然だらう。

狂氣はフェイトが何をしようとしているかなんて知りはしないがお互いの立つ立場が違うということは理解できる。

自分との前のこいつは敵同士。友情なんて生まれる可能性も無け

れば必要もない。

狂氣は自分の馬鹿な発言に嘲笑する。

「・・・その通りだな」

「ああ、なにしろ。友達を持つと人間強度が下がるからね」

真顔のフェイトがそう言つた瞬間、世界が止まつたように感じた。永遠ともいえる一秒だった。永遠としか思えない一秒でもあった。狂氣の頭の中にエコーがかかりフェイトの言つた言葉が繰り返される。

よく考えて、よく考えなくともそれがとても痛い発言であると気が付いた狂氣はフェイトを見るが、フェイトは別段何の変化も無く普段通りの無表情を浮かべるだけだった。

「なあ、フェイト」

「なんだい？狂氣」

「お前をそんにしたのは、そこ隠れてこいつらがいる奴らか？」

指摘しない様にと決めていた場所を指してしまつほどフェイトを氣の毒に思つ狂氣の顔には苦笑いしか浮かんでいない。

「（うふ。ざれてますよー？）どういとですか！」

「（・・・暦、ひめれこ）

「（アンタが無駄に『テカイ所為でバレたんじゃないのー調）

「（こえ、そづ言われましても）」「

「（あの、取りあえずみなさん落ち着いた方が・・・）」

「くわ、ははは。保護者同伴か？何処の授業参観だ？・フェイト」

「はあ、もう善いよ。みんな出ておいで」

渋々といった感じで、5人の少女達が出てくる。

警戒、侮蔑、怒り、恐れ、興味、無心、さまざまな視線を狂気に向ける少女達だが、フェイトに対しても一様に同じ眼差しを向けているように思える。

「ボクは独りで行くと言った筈だが、どうしてみんなは此処に居るのかな？」

「はつーもつしわけありません。し、しかし、私はただフェイト様が心配で」

フェイトの言葉に真っ先に反応したのは金髪ツインテールの少女。跪きながら反省の言葉を並べ立てている。

その様子を見て、狂気は眉を顰める。

「おじおじ、フェイト。感心しないな、店の中で女の子を跪かせるなんて・・・そういう趣味なのか？」

「いや、ボクは『貴様！フェイト様を侮辱する気か！』・・焰、いいから。落ち着いて」

「しかし」の男はあわてるとかフュイト様を、へ、へへ変態扱いしたんです。生かしてはおけません。燃やします」　田から火花が散つている子

「はあ、彼だつて本氣じやないさ。それに彼を燃やすなんて100年かけても無理だと思つよ」　みんなのフュイト様

「まあ、落ちつけよ。取りあえず座つてもらつたらどうだ?」　けつこうの本氣だった人

「火を付けた人がいつことじやないですかね?」　黒髪おかっぱちやん

「…………」　寡黙な子

「お止めなさい、焰。フュイト様の命令ですよ」　一番女の子（主に身体付きが）

「あらあら」　金髪ウエーブ

「一氣に人が増え過ぎだぜ・・・書きにくいんだよおー（」。口。）

「　神の声

何故か一瞬にして混沌に満ちた空間カオスだが、フュイトの「取りあえず座りうつ」という一言によつて場が收まる。

座る席順は

クルキ オススメコーヒー

— クルキオスマスメコーヒー —

調 茶 焼 フェイト 曆 環

である。

何処の企業の圧迫面接だ！と叫びたくなるのを堪えながら狂氣は前を見る。

五人の女の子達に睨まれた。

一体、俺が何をしたんだと考へながら息をつく。

そして目の前のフェイトに向けて、迷惑そうな視線を向けた。

「ごめんね。みんな、良い子達なんだけ少し心配症の気があるようだ」

「いや。心配性どころの騒ぎじゃないだろ。・・・にしても、上手い幻覚魔法だ。角持ち二人に亞人が一人、あと精霊族の末裔なんて何処のびっくり博覧会だ？誰ひとりとしてこの場にはまともな人間が居ないな」

狂気に突き刺さる視線の鋭さが増す。

フェイトはため息をつきながら眉を顰めた。

「無意味な挑発は止めてくれないかな？」

「無意味じゃない。空気の入れ替えた。もう和やかに楽しく笑いながら話が出来る話題じゃないんだろ？」

「・・・せつか、うん。そうかもしけないね」

そして、場の空気が変わる。

フェイトの顔から僅かにあつた緩みが消え完全な無表情になり、狂氣は僅かに田を細めた田つきが悪いものになる。

「それで麻帆良になにしに来たんだ？」

「うん、実はね、今度ボクは此処に悪魔でも送りこもうと思つているのだけど」

「なつ、ー」

「ちょつー」

フェイトの隣に座っている少女一人、焰と暦は驚いた様子でフェイトを見る。

狂氣は動じることも無く頷くと、諭すよつて言ひ。

「なあ、やつこつ」とは普通俺達に言わない方が良いんじゃないかな？」

狂氣の言葉に調、栞、環の三人は思わず頷く。

フェイトはふつ、と微笑すると狂氣の顔を真っ直ぐと見詰める。

「いや、言つておいた方がいいさ。たとえ邪魔をしようとしてもボクが止めるからね。君達が棄権してくれた方が死人が少なくて済むだろ?」

「へえ・・・つまりは・・・」

ピシッと、窓の外にある木が鳴く。

永遠とも思える余韻を含んで、狂氣は苛立ちを募らせた。

「俺がお前に負けると?」

狂氣の眼が見開かれギロツと狂氣を睨む。

「ああ、負けるね」

対してフェイトは眉を上げ、ニタアと作り物じみた笑みを浮かべる。

その場に居た五人の少女達は一人が出す空気を吸つて、生きた心地がしなかつた。

ビリビリとした空気が肌を指す。

無意識のうちに目に涙が浮かんだ。

服を握りこんでその一瞬が過ぎ去るのを待つしかない。

彼女達の望み通りに一人は背負つ空気は直ぐになりを齧める。

二人はゆっくりとカップに口を付けながら談笑していた時と変わらない口調で喋り始める。

「まあ、実際のところやつてみなくちゃわからないのだけれどね」

「そりだらうな」

そんな二人とは対照的に、彼女達の顔からはダラダラと汗が垂れていた。

息が切れたように呼吸をしている者もいる。

狂氣とフェイト、二人と同じ空氣を吸うには5人の少女達ではしさか幼すぎた。

明かに疲れ切った様子の彼女達を気にすることもせず、二人は会話を続ける。

「で、要件はそれだけなのか？」

「まあ、もうひとつあるのだけれど此方の方が本題だからね。別に言わなくてもいいかな」

「気になるだろ？ もつたいてぶるなよ」

「そうかい？ ジャア、話そうかな。ボク達の目的について」

「なに？」

狂氣の眉が僅かに跳ねる。

「君が言つたことだらう？ ボクと君はいい友達になれるかも知れない。人間強度はさがつてしまふかもしれないが、君という戦力が手に入るならそれも良い。まずは解り合うことから始めよう」

「おい、フュイトふざけてるなら「ボク達の目的は
だよ」・・・なん、だと？」

「どうかな？君が守る物が　だといつのなら、協力するのも悪く
ないと思わないかい？」

「・・・・・」

「それに君には理由もある筈だ。あの世界を変える理由が。憎いと
思つたことがあるだろ？」「どうして笑つていられるのだと思つだろ
う？」「どうして、彼らが英雄彼らが讃えられるのだと、叫んだ事があるだ
ろ？」「・・・復讐も、立派な革命の動機だよ」

ガタンツ

椅子が倒れる音がして、立ち上がる狂気の姿をフュイトは見る。
掛つてゐる前髪の所為で、その表情は読み取れない。

「・・・・人形が人の感情を語つてんじゃねーよ

そう捨て台詞を吐いて、狂気はその場を立ち去つて行つた。

「な、なんだ、あの言い方は！失礼にも程があるぞ！」

狂気が居なくなつたことで元氣を取り戻した焰は握りこぶしを振り
上げながらそう叫ぶ。

「今日で一度目だね。ひむきこみ、焰」

フェイトの言葉で口を紡ぐ焰の代わりに調が口を開く。

「しかし、いいのですか？我々の目的まで明かしてしまって」

「調は彼が仲間になるのには反対かい？」

「……ええ、あのもの言にはどうも、好きにはなれません」

「一番最初に彼が言つた言葉なら気にしない方が良い。アレは別に君達を貶めるつもりで言つたわけではないからね」

「どうこう」とテス？』

首を傾げる環と同じように、皆が一様にわからないといつ表情を浮かべている。

フェイトは仕方がないのかな、と思いながら空を見る。

「彼はこの場にまともな人間がひとりもないといった。つまり、彼自身が自分を人間扱いしていないといつことだよ。ボクと同じようにな」

「あつ・・・」

「し、しかし…」

「それに境遇だって君たちとそつくりだよ。調べたところ彼もまた戦争によって故郷と呼ぶべき場所を失っている。……ボクの予想が正しければ、一度ね」

黙り込んで、狂氣が出て言つた扉を見詰めている5人。

フェイトは立ち上がると店を出ようと歩いて行く。すれ違う刹那に、静かにいった。

「彼はきっと此方側の人間になるよ。歩み寄る努力をした方が良い。なに、口は悪いけどなかなかに優しい男だと思つよ。ボクが話してみての予想だけれどね」

困惑する彼女達の横をわざわざ通り過ぎた後、フェイトは振り返える。

「じゃあ、帰るうか。いくら偽造が優秀でもこれ以上は闇の福音にバレかねない」

それぞれの返事を返す彼女達。

フェイトは会計を済ませて店を出ようとしたらどうで一人の女生徒とぶつかる。

「あ」

「あっ、『めん。大丈夫かい?』

「あ、はい。大丈夫です。『ちりこすいません』

ペコリと頭を下げた女生徒は店をきょろきょろと見渡した後、フェイトに訪ねた。

「あの、すいません。此処に田つきが悪くて黒い学生服を着た人が居ませんでしたか?」

「ああ、彼ならこまで行つた所だよ。近くを探せば見つかるんじ

やないかな？」

「あ、ありがとうございます」

もう一度頭を下げた後、女生徒は探し人を探しに走つていった。

パー・ヒー・フレイク（後書き）

出したかったフェイトハーレムズを無理やり出したたら、こりなった
ぜつ！ヽ(｀'')ノ
後悔はない。俺は俺のやりたい事を貫き通しただけだつ！（一。一）

弟子入り交渉（前書き）

なにも言わない。言えません……（一）ハウーム

弟子入り交渉

「僕を弟子にしてくださいー！」

「知らん。帰れ」

朝一番、ある日の日曜日、エヴァはベットの上で足を組みながら正座しているネギを見下ろしていた。

傍では茶々丸がチャチャゼロの髪を梳いていて、その視線は一切ネギには向けられていない。

紙を梳かれているチャチャゼロは何時も通りに笑っていて、瞳孔が開きっぱなしである。

三者三様の様子を言葉で並べるのなら、無愛想、無関心、無愛嬌であろう。

それぞれの反応は微妙に違っているが、共通点も大きい。
要は三人が三人とも、ネギに対して何の価値も見出せないといつぱんだ。

「そ、その、代償が必要なら、僕の血を渡します。いくらでも吸つて貰つて結構です！だから、お願ひします！」

「要らん。ボーヤの血を吸うくらいうら狂氣の血を吸うわ。私は弟子など取る気はない。わかつたらとつとと帰れ」

「僕に出来ることなら、何でもしますーだから、お願ひしますー！」

いつまでも頭を下げる続ける、俗称で「なら土下座を続けるネギの肩は振るえ悲壮感を滲ませる。

ネギには目的がある。父を捜しだし、立派な魔法使いに成るといつ生涯をかけてやり通すべき目的がある。

下げられた頭の所為で見えない筈の瞳からは、並々ならぬ決意と熱い思いが溢れ出ている。

ネギの後ろに立つ明日菜は小さくも大きいその背を見て何故だか顔が熱くなるのを感じた。

明日菜だけではない、誰もが今のネギを見れば心動かされるであろう。

そう言い切れるだけの魅力が、今のネギにはあった。

エヴァはそんなネギを見て、舌つちをする。

年端もいかない小僧に自分の心が動かされ悔しくて出た物。ではなく、ただ純粹に苛立ちの末に出された物。

「帰れ。答えは変えん」

始めに明言しておくが、エヴァはネギを嫌ってはいない。確かに、春頃に起きた「ざ」ひで一時はネギを殺そつとしたのは事実。

しかし、害された当人であるチャチャゼロは何も言わないし、田の前で行われたそれに殺意を懷いたであろう茶々丸も何の行動も起こさない。

なによりも、誰よりも憤怒に燃えたであるう狂氣が自分の言葉で矛を収めたのだ。

ならば、自分一人がいつまでもあの出来事に心を縛られて居る訳にはいかない。

エヴァの誇りがそんな女々しいことを許はしない。

故に、春先に起きたあの事件はエヴァ達の中では終わったこととして扱われている。

ネギに対する全ての感情がリセットされたと言つても良い。

無論、最初に戻るのではなくエヴァは昔惚れた男の子供だからと気遣う想いが消え、茶々丸にいたつてはネギに対する感情の全てが消えたという変化は存在する。

ちなみにチャチャゼロは最初から何も思つていなかつたため、ある意味では一番変わつていない。

「お願いします！エヴァンジルさん！」

「私は弟子など取らん。戦い方などタカミチにでも習えばよからう！」

「ちよ、エヴァンジルさん。ネギがこんな一生懸命頼んでるのに、ちよっとひどいんじゃない！」

ネギの後ろに居た明日菜が声を張り上げる。

『貴様らがしたことを見たのか？』

その言葉を飲みこんで、エヴァは恋々しそうに口元を歪めた。

「頭を下げるくらいで物事が通るなら世の中、苦労せんわ。大体、ボーヤを弟子に取つて私に何の得があるといつのだ。まさか、悪の魔法使いである私をタダで動かそうなどとは考えてこまいな？」

「そ、それは……」

「あの、もし僕に修行を付けてくれるなら、父さんの手掛かりになるかもしない情報を渡します。タカミチから聞きました、エヴァンジルさんはずつと父さんを探しているんですね」

ふざけるなと言いかけて、エヴァは言い淀む。

死んでいたと思っていた奴が生きていることは随分前に狂氣から聞いていた。

情報元はあのバグジャックだといつから、あまり信用できないが狂氣が自分に直接教えた情報なのだから真実なのだらうと思つ。

「それは本当か？」

エヴァの態度にネギは喜びの表情を浮かべる。

エヴァンジエリンさんの心を動かすなんて、やっぱり父さんはすごいんだ。

そつ思いをはせながら、まきまき声を出す。

「はい！実は京都で父さんの別荘に寄った時に色々と情報が手に入つたんです。中には麻帆良の地図もあって、暗号で書かれているそれを今解読中です。きっとその中に手掛けりがある筈です」

エヴァは考える。ナギに会いたい、そつ思いぬけ持ちはおそらく嘘偽りなくこの胸に。

しかし、それが15年前に懷いていた恋心かと問われれば、わからぬ。

自分は確かめなければいけないので思つて、胸に手を当てる。

・・・私はナギに会いたいのだらうか？
逢いたい、それは事実だろ。

・・・・私はナギが隣に居て欲しいのだらうか？
おそれくは、そつ。

・・・・私はナギが好きなのだらうか？
わからない。

ナギに逢いたいと思う、ナギが隣に居たら楽しいと思つ。
けれど、昔のよつに恋焦がれているかと聞かれたら、首を捻るしか
ない。

試しに私の隣にナギが居て、自由氣儘に旅にでも出る様子を思い描
いて見る。

楽しそうだが、何かが足りない気がする。

従者であるチャチャゼロと茶々丸もつれで行つてみる。

何故だか隣に居るナギが不自然に思える。

ならばと、奴の息子であるネギを足してみたらどうだらう。

・・・・駄目だ、壊滅的に何かが壊れた気がする。とてもじゃない
が旅を楽しめそうにない。

おそらくチャチャゼロや茶々丸と喧嘩をするだらう、それを私とナ
ギが止めて、なんとか仲裁する。
けれど、きっといつか止められなくなつてしまつ。

ならば、チャチャゼロや茶々丸と仲がいい狂氣も連れて行つたらどうだろう。

何故だが、煙つていた違和感が消えた気がする。

完全に近づいた実感がある。これなら旅を幾らでも楽しめるだろう。

しかし、狂氣は英雄^{ナギ}やネギが嫌いだ。

あの二人が居るというなら、ついて来ないだろう。
仕方なく、ナギとネギを連れて行かないことにしてみた。

すると、完全が完璧に変わったように思える。

私の後ろを面倒そうにしながらも狂氣が付いて来て、その頭の上にはチャチャゼロが笑いながら乗つていて。そして茶々丸が優しい声で全員の世話を焼くのだ。

なんて、なんて楽しそうなのだろう。

ああ、と納得して思わず笑みが浮かぶ。

そういうえば、誰かが言つていたな、初恋は叶わないものだと。
まったくもつて、その通りだ。初恋なんぞ、叶わない方が良い。

「わかつた。今度の土曜、弟子に取るかどうかのテストをしてやる。
それでいいだろ？」

「は、はいーありがと」「わこます！」

ネギと明日菜が帰った後のエヴァの家で、茶々丸が首を傾げながらエヴァに問うた。

「良いのですか？あのよつな約束をしてしまって」

「ふんひ、仕方ないだろ。私はナギに会つて確認しなければならないのだからな。私はもつ、奴のことを好きではないのだと。でなければ、」

エヴァは胸の内に居る彼のことを思い描いて、呟いた。

「アイシのことを、好きだと言えんだろ？」

おまけ 狂氣の学園での日常。

いつも通りの朝を迎える。田が覚めて時計を見れば、既に9時を回っていた。

一現目は9時から。完全な遅刻だ。

しかし、仕方がないことだろ。狂氣は田覚まし時計の田覚まし機能を使つていないのだから。

・・・・端から、起きる気がないのである。

大きく伸びをした狂氣は顔を洗つて歯を磨く。寝巻を着換えた後朝食を作り出した。

メニューは定番のトーストと田玉焼き、そしてホットコーヒーであ

る。

此処まで三十分。さらに新聞を読みながらもしゃむしゃと食べるので、もう三十分。

テレビの隅に映った時刻はただいま10時3分。

よし、と声を上げてから狂気は立ちあがつた。今から登校すれば丁度一現目の始まり頃には顔を出せるだろう。

狂気は寮の部屋を出て行くのだった。

学校に着いたのは読み通り10時28分、一現目開始の一日前だ。そして自分の席に着いた狂気はいつものように机に突つ伏す。

授業担当の教師が睨んでいるが、いつも通りの光景だ。

狂気は気にせず惰眠をむさぼり始める。

昼休み。ようやく狂気は行動を開始するようだ。

「・・・購買、行かなきや」

狂気は寝ぼけながらも懸命に身体を動かし、購買へ昼食を買いに行く旅に出ようとしている。

この冒険は正しく行きはよいよい帰りは恐いのであり、一度教室を出た狂気は教室に戻つてくることはなく、屋上か図書室で眠つてしまうことになるのだが今日はそうはならないようだった。

「ねえ。少し、話があるんだけど」

「なんだよ?」

教室を出ようとした狂気の前に一人の女生徒が立ちふさがった。

周りの生徒たちは戦々恐々と無謀なことは止めと忠告をするもの。止められなかつたと悔いを背けるもの。ためざまな反応を示す。ただ、ほぼ全ての生徒が狂気の前に立つた女生徒を心配しているようだつた。

昼食を取ろうとしたのを邪魔された形である狂気の不機嫌そうな顔に、汗を浮かべながらも女生徒は強気な姿勢を崩そうとしない。ふと、その女生徒の後ろを見てみると、もう一人の女生徒がいることに狂気は気が付いた。

姉妹かな？狂気はそう思いながら対峙する。

「用があるなら早くしてくれるか？購買のパンはコロッケパンか焼きそばパン食べないと食べた氣になれないんだよ」

なにを言つてゐるんだこいつ？といつ視線を女生徒は向けてくるが、狂気に取つては死活問題である。

購買で人気を一分する総菜パンであるコロッケパンと焼きそばパン。そのどちらかを狂気は手に入れなければならぬのである。

故に、購買に急がなければいけない。

余り物のメロンパンやコッペパンなど論外、百歩譲つて三食パンじやなきやなんねえ。

真剣な顔をする女生徒の前で、狂気はそんなどつでもいいことを考えていた。

「この前、この子と・・その、で、デートの約束したでしょ。どうして破つたのよ」

はて、と考えて狂気はようやく思い出した。

強気な女生徒の後ろで袖を引いている大人しそうな女生徒、何処かで見たなと思えば前に教室で自分を喫茶店に呼び出した子である。

フロイトのなんやかんやで忘れていたなど、狂氣は反省する。

「別に、破つた訳じゃない。俺はちゃんと時間通りに待ち合わせ場所にいた。時間が来てもその子が来なかつたから帰つた」

「いつもよりも、その子はこれなかつたんだろう。フロイトも人避けの魔法を使ってたから。

そう思ひながらも、当然のことだがそれを言葉にはしない。

「デートで女の子が少し遅れてくるのはしじみがないじゃん。待つてあげようとか思わない訳」

「一応、三十分は待つてたぞ」

「…………へ？三十分も待つてたの？一人さびしく？」

女生徒は思わず本音を漏らす。横を見れば自分の服の袖を掴んで顔を赤くし首を振つている友達の姿がある。

おそらく、自分を止めようとしていたのだろう。

此処まで来て、ようやく女生徒は自分の過ちに気が付いた。しかし、今さら引き下がれない女生徒は辛うじて強気の姿勢なまま腰に手を当てる。

「ま、まあ、ならいいわ。他にも聞きたいことがあるんだけどいい？」

「なんだ？」

「アンタ、好きな人とかいる？」

狂気の口元が引き攣つた。

何故俺はいま、クラスメイトがいる教室の真ん中でこんな恥ずかし
眼を受けているのだろうか？

考えた所で分からない。これで相手が男であつたなら殴つて黙らせ
るところだ。

しかし、相手は女生徒。しかも少し我が強よそうではあるが美少女
である。

そんな相手を教室の真ん中で苛々したという理由だけで殴るのは幾
ら狂氣でも躊躇した。

仕方なく、素直に質問に答える。

「好きな人はいない」

「そう。それでいいのよ」

女生徒は満足そうに頷くと、後ろの女生徒に笑顔を送る。
後ろに隠れた大人しそうな女生徒は何故か顔を赤らめ、泣きそうになつていた。

「じゃあ、次の質問ね」

「まだ続くのか？」

心底嫌そうな顔をする狂氣にもお構いなく、女生徒は急に自分の袖
を掴んでいた手を掴み返し、引っ張つた。

後ろに隠れていた大人しそうな女生徒は狂氣の前に引っ張りだされ
る。

急なことに動搖する友人を気にかけることもなく、女生徒は満面の
笑みで言った。

「 」の子の「 」とどう思つ? 可愛いと思わない?

途端、大人しそうな女生徒の顔は耳まで赤くなつた。
対して狂氣の口元はさらに引き攣る。

どうして、俺は教室の真ん中でこんな拷問を受けているんだ?
その問いに、答えてくれる物は誰もいない。

クラス中が注目する中で、もはや答えないという選択肢はない。
狂氣はじっと生贊に捧げられた可愛そうな女生徒を見る。
その女生徒の目に徐々に涙が溜まつていついた。

「 そ、だな。 可愛いと思つぞ」

「 本当にやつと思つ? アンタ好み? 」

「 ああ、 」

少なくとも、お前よりはな。

そう聞こえないように狂氣は呟く。

女生徒は隣で泣きそうになつていてる友達の背中を叩いていた。

「 よかつたね」

「 う、うん」

一体なんだつたんだ? 狂氣は首を傾げながらその様子を見ていた。
女生徒にとつて誤算だつたことは、狂氣が体质上、人間にに対するや
ういう感情が希薄だつたことだろ。

しかし、そんなことを知らないクラスの男子達の心は一つ。

「「「「リア充があああつー。」」」

弟子入り交渉（後書き）

いや、わかりますよ。亞たまが言いたい事はよく解ります。
けれどもここでよく考えてみてください。

ネギ君がエヴァ様に弟子入りしない場合はどうなりますか？

喰う寝るさんに重力魔法をならおうか。もしくは高畠先生を師と仰
ぎましょうか。

どちらにせよ、詰んでもせん？魔法世界編まで考えたら、原作崩壊
以前の問題です。

学園祭編ほどで完結するのであればそれでもいいのですが、長く続
けたい自分としては何とかそれは避けたかったのです。
なので、ネギ君をエヴァ様に弟子入りさせました。

言い訳染みていて申し訳ありません。

お嬢様と剣士の波瀾万葉抄・・・(前編)

前回の「ネギ君はエヴァ様に弟子入りさせたいがつー（。 。 ；
）ヌオオー？」という空氣読めない自分の発言まもつと罵讐雜言
を呼ぶかと思っていたらそんなことはなく、逆に師匠のまの優しさで
泣きそうです。（←→）。

これからもできる限り頑張っていきたいので、出来ることも出来る限り
付きました。ただければ幸いです。

お嬢様と剣士の扱いはじめに・・・

ある日のこと、刹那は緊張した面持ちで待ち人を待っていた。女子寮の前に生えた観葉植物の花の花びらを千切ってはブツブツと呟いている。

「来る、来ない、来る、来ない」

ぶつちやけ、傍から見ればとてもなく不気味である。常に冷静沈着である彼女が何故こんな楽しいことになつていいかといえば待ち人に原因があるのだ。

「ぐ、来る。よ、よし。大丈夫。お嬢様は来てくれる」

待ち人の顔を思い描いて、刹那は想いを馳せる。常に離れた場所から見守っていることしかできなかつた私。手が届く場所にいるのに決して触れることのできなかつたお嬢様。何度も想つた。どうしてお嬢様の隣にいるのが私ではないのかと。お嬢様の隣で笑う明日菜さんに對して卑しい気持ちを抱いたことすらある。

そんな自分が嫌で嫌でしようがなかつた日々、それがようやく終わる。

嬉しそうで思わず昔のよひに呟いた

「・・・」のちゃん

「なあに?せつちゃん」

「つらせひつ」

返事がない筈の呼びかけに答えた声を聞いて刹那は情けない声を出す。

横を見れば楽しそうな笑顔を浮かべた木乃香がいつの間にか立っていた。

「な、な、いつの間にいらしていたのですか。お嬢さま」

「あー、めだよ。せひせん」

刹那の問いには答えることなく木乃香は頬を膨らませている。この愛らしい表情が怒りを表していると理解するまで刹那は数秒の時間を要した。

「せいかく昔みたいに呼んでくれたのに、どうして变得ってしまったの？」

「それは私はあくまでも護衛という立場の人間です。お嬢様の立場を考えれば、このわやんなどと軽々しく呼ぶことはできません」

「む」

「むくれられたところで仕方がないことです」

「む――」

「そ、そんな表情をしても愛らしいだけです。私は氣にもしません」

「む――――――」

「…………わ、わかりました。しかし、せめて一人きりの時だけ
こなせてください」

顔を赤くして諦めたように言つ刹那の頭に木乃香は手を伸ばして撫で始める。

「えへへ、せつちゃんはいい子やね～」

「なあつーお、お止め下せー」

言葉では止めるようにながら身体を動かさない刹那に気をよくした木乃香はより一層楽しそうに刹那の頭を撫でる。

顔を真つ赤にしたまま動かない刹那が復活するまで、しばらく時間がかかるのだった。

340

あの後、木乃香が手を止めたことで刹那是すぐに復活した。
逆に言えば、木乃香が手を止めなければ刹那是停止したままだった
ということだ。

変な所で対桜咲刹那用捕縛術が出来たものである。

「せつちゃん。魔法について大事な話があるっていうたけど、何処に向かってるん?」

辺りを闇に包まれた麻帆良を刹那と手を繋ぎながら歩く木乃香は少し不安そうにいつ。

時刻は未だ、3時30分。早朝と云つより深夜と言つてもいいかも
しない時間帯。

「申し訳ありません。説明をしてしませんでしたね」

木乃香と手をつなぐといつ大事によつて失念していた刹那は頭を下げてから説明を始める。

「私達が向かつている場所はエヴァンジェリンさんの自宅です。もうすぐ付きますから、安心してください」

「エヴァちゃんのお家？あ、そつか。エヴァちゃんも魔法使いやつたね」

「はい。魔法界でも屈指の実力者である伝説の吸血鬼。私などでは足元にも及ばない存在ですね」

何かを含みながら笑う刹那に木乃香は頬を膨らませている。とてもわかりにくいやが怒つてているといつ合図である。

「せつちゃん」

「あ、はい。何でしょ？」

「やつやつて自分のことを蔑んで言つのは悪い癖や。夕映から聞いたんよ。せつちゃんは隠れてずっとウチのことを守つてくれていたつて。そんなせつちゃんが弱いわけあらへんもん」

「・・・お嬢様」

「ウチにとつてのせつちゃんは、いつでもかつていい大切な人や」

「・・・」のせつちゃん

何故か両手を握りあつて見つめあつている刹那と小乃香。ちやぢやを入れたら馬に蹴られるかもしないこの光景を見ながら、笑う影が一つあつた。

「ラブコメルノモ結構ダケトヨー。狂氣ハモウマツテングー」

「あ、お人形さんや」

「な、チャチャゼロわん」

いつの間にか付いていたエヴァの家であるログハウス。そこで気の手摺に腰をかけたチャチャゼロを確認した瞬間、刹那は思わず両手を離して驚いた。

喋る人形と言うファンタジーの代名詞に出会った小乃香は目を輝かせたが刹那に両手を離されたことで今は少し唇を尖らせていい。

「ウエッ、思ワズ砂糖吐キソウニナツタゼ。刹那ハソツチノ氣ダツタンダナ。ライバル減ツテイイケドヨ。応援シテヤルゼー。ケケケ」

「なつ、ちち違います。私はしつかりとお嬢様とは健全なお付き合いを！」

「女同士デ健全ト力言ツテル時点デイヤラシーゼ」

自分と木乃香の関係をどう思われたか悟つた刹那は慌てて弁明をしようとするがチャチャゼロは聞く耳持たずに手摺から降りると、ドアノブまで飛びあがり扉を開く。

「マ、トモカク入レヨ」

「あ、うん。ありがとう。えっと、チャチャゼロちゃんでいいんやろか?」

「チャン付ケハ止メヤガレ」

「じゃあチャチャゼロさんやね。ウチは木乃香でええよ」

キアリングドールであるチャチャゼロに臆することもなく笑顔で馴染み始めた木乃香を見て刹那はもう弁明することも忘れて普通に感心した。

私はあの笑顔を直視出来るまでしばらく時間がかった物だと思います。

「ジャア、茶^ヂテモ飲ムカ?」

「あ、いえ、お構いなく」

「冗談ダッツー。俺ガソソナ事スル訳ネー。元カラオ構イナンテシネ 三」

呆けていた所為で「冗談が通じなかつた刹那を見てチャチャゼロはカラカラと笑い、家の奥へと歩いて行く。

「付イテキナ。狂氣ガ別荘^{ヂマツ}テンゼー」

エヴァの家の中にあるボトルハウス、別荘と呼ばれているその場所

に狂気はいた。

周りには鬱蒼と生え茂る木々、人居るのには不釣り合いな場所。無論だが此処は最初に狂気がチャチャゼロに、此処で待っていると言つた場所ではない。

狂気がチャチャゼロに刹那と小乃香の迎えを頼み、此処で待つているといつた場所は別荘に入りすぐの一本道を渡った広場であり狂気が今立つ場所ではなかつた。

狂気は本来、待ち合わせ場所で待つと言いながら別の場所をふらふらするような男ではない。

しかし、ならば今は何故こんなところに居るかと言えば、全ては狂気の考えが甘かつたことに原因がある。

狂気がチャチャゼロ達を待つこと既に5時間。そう、狂気は5時間も待ち惚けている。

別荘と外の世界とでは時間の流れが違う。
別荘での一日が外では一時間であるように、外での數十分は別荘の数時間に匹敵する。

「なんで忘れてたんだろか」

広場で一時間の間、立つたまま待ち惚けた狂気がそう呟いた後、暇をつぶす為フラフラと出歩き出したことを誰が責められようか。いや、断じて責められまい。

そう言つて、現在待ち惚けること5時間と3分。

未だ独りきりで暇を持て余していた狂気は暇つぶしを思い付いたとばかりに懐から一枚のカードを取りだした。

それは狂気としては恥ずかしいやら情けないやらの思い出で一杯な

一枚のカード。

チャチャゼロとの仮契約カードだった。
パクティオ

「結局、このアーティファクトが何なのか確認してなかつたんだよな」

アーティファクトなど使わなくても狂氣は既に十分すぎる強さを誇つてゐるため、今までにはチャチャゼロへの魔力供給以外に使わなかつたカードを見て、狂氣は丁度いいかと思い呟いた。

「
アーティファクト
来たれ」

勝者ラスト・バトルこそが正義を語る場

出てきたソレを見て、一瞬呆けた狂氣だがそういう形状だったのかと納得すると辺りを触り始める。

「へえ～。そりやアーティファクトは武器だけじゃないとは知つてたが、こういうのもあるんだな」

そんなことを呟きながら、最初こそ何処か楽しげだった狂氣はソレの効力に気が付くと眉を顰める。

いや、まさかと思いながら確認を続ける狂氣の顔はどんどん苛立ちを含んだものに変わっていく。

ついには舌打ちをすると、自分のアーティファクトであるそれを蔑みながら呟つ。

「最低だな。チャチャゼロとの仮契約で出た物じゃなけりや、殴り

壊してゐる所だ。・・・・もう一度と出さねえ。去れアベアツト

チャチャゼロとの仮契約で手に入れた力があまりに嫌悪感を覚えさせる物だったことに顔を顰めている狂氣の耳に、当人の声が聞こえてきた。

『オイ、狂氣。何處一行キヤガツタ』

「あ、悪い。すぐ戻る」

カードから聞こえてきた声に慌てて返答するが、返事がない。少しの間首を傾げてから思いいたる。

『そついえば、仮契約カードの念話は一方通行だつたな』

顔には出さないが、狂氣はアーティファクトのことシヨックを受けているようだつた。

少なくとも、呆けてしまつほどには。

刹那と木乃香を迎えて行つていたチャチャゼロと急いで待ち合わせ場所に戻ってきた狂氣は合流した所でようやく本題が始まる。今までが何だつたか？行数稼ぎである。

狂氣は目の前にいる近衛木乃香を見る。その姿を見て思う所は数多くあると言つていゝだろう。

英雄嫌いである彼は紛れもなく彼女の父、サムライマスターを毛嫌いしている。

しかし、一人の親として子を案じる詠春の姿を自身が親父と呼ぶ彼と重ねてしまつたからこそ受けてしまつた彼女への手助け。

承諾したからには約束は守りつ。そう思いながら何処か怯えた様子の木乃香へ喋りかける。

「緊張はしないでくれ。自己紹介から始めるか、俺の名前は羅漢狂気だ」

「俺ハチャチャゼロ様ダゼ。ケケケ」

「あ、えと、はい。ウチは近衛木乃香と申します」

緊張しないでいいと言つたのに未だ固い木乃香を見て狂氣はため息を付き、定位置である頭の上に登ってきたチャチャゼロを見上げる。

「おいおい、お前が怖いから怯えてるだろ。取りあえずナイフはしまえ」

「俺ジヤネー。俺ハ前二自己紹介シテルカラ怯エラレル理由ガネーゼ。オ前ガイケネーんだヨ」

そうなのか?と狂氣は木乃香に目で問いかけるが、ビクッと身を振るわせた後、木乃香は無理やり笑顔を浮かべる。

どうやら、チャチャゼロの言つている通りらしかった。

木乃香の隣にいた刹那は様子を見て、フォローするように言つ。

「お嬢様。狂氣さんは確かに目つきが悪くてガラが悪く見える紛れもない不良ですが、怒らせなければ無害です」

「フォローニナツテネーゼ」

「そりでしょうか?」

狂氣の頭の上でやれやれと首を動かしそうに「チャチャゼロを見て、刹那は首を傾げる。
木乃香は未だ固い様子だし、狂氣の口元が引き攣っているのがそれを助走させる。

「刹那、いつの間にか天然になつたのは結構だが人を巻き込むのは止める。それと、近衛」

「は、はい」

「そう怯えないでくれ。・・・流石に傷つく」

「あ、あのウチ、別に怯えてへんよ。ただ羅漢さんがどつかで聞いたことのある容姿やから」

「やうなのが、ならいいが

唇に指を当てて首を傾げる木乃香は考える。

頭の上にお人形さんを乗せて、真黒い学生服の目つきが悪い男子高校生。

絶対何処かで聞いたことがあるんけどなー。と。
そもそもその筈だろう。

彼女のクラスである3-Aで時たま噂される幻の不良高校生こそ、目の前にいる彼なのだから。

しかし、噂を聞いたのが2年生のころの定期テスト前でありその後、色々記憶に残ることが多すぎたため木乃香はそれを忘れてしまつていた。

唇に指を当てて可愛らしきポーズを取る目の前の美少女を見て、狂

気は思つ。

よく、あの親からこんな可愛い子が生まれたな、と。

彼女が美少女であるということは狂気に取つて嬉しいことだ。

父親と容姿がに通つていらない彼女なら、父親と姿が重なつて見えることもない。

それはサムライマスターを毛嫌いしている彼にとつては僥倖だ。

狂気は何処か安心しながら再び喋り始める。

「少し姓名を嫌う理由があるから、俺のことはラカンじゃなく狂氣と呼んでくれ。その代わりに俺はお前を姓じゃなく名で呼ばせてもいい。いいか？」

「ええよ。狂氣さん」

「そうか、良かつた。木乃香。これからよろしく頼む。何か聞きたいい」とあるか？」

そういう狂気に木乃香は、はーい！と手を上げる。

狂気もそれに乗るようであるで生徒を指す先生のように言葉を返す。刹那はその様子を微笑ましそうに見ていて、チャチャゼロは時折笑いながら狂気をおちよくなつていた。

和やかな空氣のまま、木乃香は魔法のこと、狂気のこと、自分の立場など聞きたいことを全部狂気に問い合わせ、時間は過ぎて行つた。

それこそ口を通さなければ語れないほどの魔法についての説明と英雄の娘である木乃香自身の立場について語りつくした狂気達はようやく別荘を出て、刹那と木乃香を見送つていた。

「ありがとうございました。狂気さん。これでお嬢様も魔法と自分の立場を知り、道を踏み外すことはなくなるでしょう」

そつ言つて頭を下げる刹那の背にはいつの間にか寝てしまつた木乃香が背負われている。

狂気は首を振ると微笑みながら言つた。

「一応、約束したからな。言つのが辛いことだつて言つてやるわ。たとえ聞きたくない」とどとしても」

「・・・本当にお嬢様に魔法を教えるのがあなたで良かった。感謝します」

狂気の言葉を聞いて本当に安心した声を出した刹那はそつ言つて嬉しそうに寮へと帰つていつた。

「相変わらず律義な奴だよな。刹那」

「才前モナ」

それを見送つた二人は部屋へと戻つていつた。

おまけ

朝の「一ヒーブレイクを狂気とチャチャゼロが楽しんではいる」と、H

ヴァと茶々丸が帰ってきた。

「なぜこんな朝早くにお前が居るのだ？」

「前に言つただろ。木乃香に色々説明するのに別荘を借りるつて。
そういうH.ヴァは何処に行つてたんだ？」

「ただの朝の散歩だ。・・・・。そう言えれば狂氣、今度の土曜の
朝は暇か？」

「ん？ああ、別に大丈夫だが、なにがあるのか？」

「フフ、ぼーやの試験が決まった。面白い物が見られるかも知れん。
来い」

「・・・・。もの凄く、行きたくないな」

お嬢様と剣士の扱いがひどいわ・・・（後書き）

題名にも書きましたが刹那と木乃香の扱いはマジでビリひどいわ（

へーー）ウーム

刹那だけなら狂気側に引き込めばいいんですけど、木乃香は明日菜の親友だし図書館組でのどかとも仲が良いし、優しい子だし。

立ち位置が絶妙すぎる（――――――）ウーム・・・

宇宙人からの手紙（前書き）

超はネギま！の中でも好きなキャラクターですね。
チャチャチャゼロ、夕映に並ぶくらい好きです。

あの偽悪的に頑張る所が良い！応援したくなるヽ(ーーゞ)・・

(シ一)ツ

宇宙人からの手紙

宇宙暦103年。

こう書き出せば、きっと皆は笑うのだろうな。
けれど、私にはふざけている気もふざける気もないのだということ
をわかつて欲しいヨ。

確かにそういう時代はアリ。そう呼ばれた時代に私は生きていたの
だカラ。

魔法世界の崩壊。それによつてあぶれた人間達が生きた時代。
ああ、なんていう悲劇ダロウ。

人類が人類の生存をかけた人類との戦い。元は同族だというのに、
人と言う種はなんて愚かしいノ力。

共食いなんて犬でも切羽詰まらなきゃヤラナイネ。
けれど、人は簡単に喰らいアイ、殺しアイ、そして最後には簡単に
許しアイ、愛しアイ。

そんな茶番。自分で悲劇を模様しその悲劇に酔つ。戦争こそが人に
歴史ダ。

私はそれを否定しないヨ。むしろ面白いとすら思う。

なぜなら、その自己陶酔にこそ人間が種として生き残る本能が残さ
れているのだと思うカラ。

ホモ
Homo sapiens サピエンス 靈長類の長であり、既に現在この地球ど

ころか火星すら支配下に置いている人間世界最強の種族。

悪魔や吸血鬼、亞人や竜種など人種を超えた存在なら幾らでも居る
ヨ。

ケレド、彼らが世界の支配者かと問われれば、違う。
あくまで世界は人間の物ダ。だからこその人間界。

なぜなら人間には繁殖力がある。
チカラ

人間はそのチカラを以て他のチカラを淘汰して世界を支配してきた、
それはこれからもずっと続くのダロウ。

理不尽に不条理で不变不動な一大規律とシテ。
自分たちとは違うカラ、怖い、恐ろしい、理解できない、ああな
淘汰してシマエと。

現に私達は同じチカラでありながらも別のチカラだと烙印を押され
て受け入れられなかつた。

同士なら言わなくても分かるダロウ。あの時代を生きた同士ナラ。
いや、スマナイネ。話が逸れた。

私が言いたいことはつまり、そのチカラこそ人間の力でありながら
もその力こそ人間界を壊すチカラであるということが面白いといふ
ことダヨ。

言いたいことがわかる力ナ。わかるネ。同士は私と同じでとても頭
がイイ。

人間はチカラを使い続ければ増え続ける。当然だネ。日を灯せば明
るいのと同じくらいの必然ダ。

増え続けて、増え続けて、増え続けル。

昔はそれでもよかつたヨ。獣、疫病、天災、人を削る力は何処にで
もあつた。

ケレド、いまは違う。獣は駆逐され疫病は治療され天災は科学によ
つて抑え込まれタ。

殺せぬ獣は居るだろう。直せぬ病もあるだろう。人知の届かぬ天災
も起きてる。

ケレド、全ては総じて少なすぎる。

ソレデハ、人間の数に対抗できない。

人は増え続けてしまう。まるで蟻のように隊列を成して地球を覆う。

そしていつの日か地球という砂糖は喰らい尽くされてしまうヨ。

ほかならぬ人間の手で人間界はオワル。

そうツマリハ、そうしない為ノ、その為にアル同族殺しといふ人間のサガだ。

人間しか人間を殺せるチカラを持たない。なら殺しアオウ。増えすぎぬよう、砂糖を全員で仲良く分け合つために先ずはトモダチの数を減らしてしまえ。

その考えは愚かしくアリ、狂おしくアリ、馬鹿らしくアリ、まつたくもつて正しいネ。

自分で手を下す分、ある意味とても崇高だともいえる。

正しく裁きダ。神が雷を落とさないなら、自分で手を斬り落とせ。そうして切り落とされた手が私達だと私は思うのだケレド、同士はどう思うかナ。

見捨てられたあの時代、宇宙から人間が来て起こる急激な人口の増加を人間は受け入れなかつた。

ダカラ、地球人は我々を火星人と呼び人間とは呼ばなかつた。

ダカラ、我々も火星人として地球を侵略するほかにはなかつた。

おそらく同士はどちらも下手ない訳だというダロウ。

戦争はただの殺し合いであり正義は言葉遊びでしかなく英雄はただの殺戮狂だというダロウ。

けれど私はそうは思わない。

同士とは気が合い、良いパートナーになれると確信している私でもそこは違う意見ダ。

あの時代では確かに両者が正義を持つていた。

地球人達はタダ只管に故郷を守ろうとした。我々火星人は新たなる新天地を求めた。

そのどちらに間違いがアル。

守ることは悪イノカ？求めるることは悪ナノカ？

違う。

守護こそが力の正しい使い方であり、求道こそがチカラの正しいあり方ダ。

言いたいことがわかる力ナ。わからナイだろ。同士は私と同じで
とても頭がイイ。

頭がいいから考えてしまハズだ。別の可能性を探してしま。止めた方がいいヨ。後ろを振り返つて歩いて来た道に後悔するなど愚かしい。

私が言いたいことを素直に聞くがコロシ。

あの時代で同士は確かに英雄だよ。その両腕を血で染めて、同胞を守つてくれていたよ。ありがとう。

どう力ナ?ぐつときた力ナ?私は同士の心を掴んで離さない女になつた力ナ?

きつと今、この手紙を呼んで後ろにある未来というあの時代を思い出した同士が一番かけて欲しい言葉を選んでみたヨ。

怒つた力ナ?怒らないでくれ。不純な動機もあるけど紛れもない本心ダ。

修学旅行ではお疲れ様だったネ。

リョウメンスクナを倒したエヴァンジョンもさることながら、ご先祖様が倒す筈の彼を追い返した同士には惚れなおしたヨ。その凜々しくも雄々しい姿を見て、昔話を思いだしタ。

私が生まれる以前、100年戦争が開戦した当初に生みだされた最古の半人機兵。

史上最高の頭脳を持ち狂つた科学者マッドサイエンティストを祖父に持つた一人の少年の英雄伝をネ。

同士が私のご先祖様を嫌う理由も、英雄が嫌いな理由もそこにあると考えたガ、どうだろ?

同じ英雄だから君は紅い翼彼らが嫌いなのダロウ。

同じ道を歩む作られた英雄だから君はご先祖様を嫌うのダロウ。図星力ナ。図星だろと私は確信するヨ。

後付けの理由があるにせよ、同士の憤怒の奥底にある物はソレだ。

自己嫌悪、同族嫌悪、同士は自分が嫌い嫌いでしうがナイ。そういうだろう。

同士はとても人間らしいサガが滲み出でている。
共食いしたくて仕方がない

怒った力ナ？怒らないでくれ。私は事実を言つたまでだヨ。
それに前記したように私は人間のそういう愚かしいサガが大好きダ
ヨ。

手紙はもう破つてしまつた力ナ？

同士の性格を考えればそれが一番高い可能性だが、もしまだ破つていないのでなら読み進めて欲しいヨ。

ここからが本題ダ。

長々と書いてしまつたケレド、前ふりで言いたいことは一つだけネ。

同族嫌悪など止める。見ていて苛立たしいだけだ。

自分が嫌いだというのは構わない、けれど自分と他者を重ねて勝手に嫌うのは傲慢すぎる。

どうカナ。いや、聞くまでもないネ。こんな辛辣な言葉も同士の心は抉れないだろウ。

分かりきつたことを言つなと笑うのダロウ?

私のことなど枝葉にもかけないと言つのダロウ?
まつたく、同士は酷い男だヨ。傲慢ダ。我が儘ダ。理不尽で自分勝手な男ダ。

けれど、そういう所も私は嫌いではないネ。むしろ真っ直ぐで好意が持てる。

どうかな?天才美少女宇宙入力カラの愛の告白は嬉しいカナ?
嬉しいに決まっているネ。いまこうして手紙を書いている私の脳裏に顔を赤くする同士の顔が思い浮かぶよ。

意外と初心で可愛いネ。

怒ったカナ?出来れば手紙は破かないで欲しいネ。

続けるヨ。

真っ直ぐな同士は好きダヨ。同士に害意など無いし仲良くしたいと思つてている。

だから、伝えておくネ。

私は今年の学園祭の最終日にあの世界を救おうと思つてている。

どうカナ。とても大きい理想だろウ。普通は笑つてしまふ所だが、同士ナラ笑わないと信じている。

むしろ信じたうえで疑問を持つハズだ。どうして自分に伝えるのだろうと。

同士は仲間に害がない限りは中立だということを私が知つていると
いうことを知つているカカラ。

なら、どうしてなどと考えなくとも分かるダロウ。

私が行う計画が同士の仲間に少なからずの害を及ぼすカラだよ。
予告殺人と同じダ。まるで漫画のようだネ。

現実に名探偵がいないことが悔しいネ。それとも同士が探偵役をやるのカナ。

止めておいた方がいいヨ。正しさを見つけ出すなんてきっと似合わ

ナイ。

予告しておひづ。

私が行うことは同士を変えて、同士が幸せだと感じている価値観を壊すモノダ。

コレを聞いた同士がどういう行動を取るかは私には分からないね。今すぐに私を消しに来るカナ？止めて欲しいヨ。とても怖いネ。

同士が可愛い女の子には優しいと願つているヨ。

ソレと考えておいて欲しいネ。幸いにもまだ時間はあるのだカラ。なにをなどとは言つてはくれるなヨ。

分かつてゐるだりづ。私の問ひは一につに一つダ。

明日を取ルカ。今日に縋ルカ。そのどちらかだけダ。

私は迷うまでもなく明日を取るヨ。明日起きて悲劇を止めて見せる。その為の私、その為の力、その為の時代。

同士ナラ分かつてくれるだりづ。間違つても悲劇を忘れて今を生きようなんて言わないはずダ。

そんな理屈は奪われたこともない奴の戯言。今に満足している強い者の言葉。

正直に言つて虫唾が走るネ。

起きたことは忘れナイ。忘れられナイ。忘れてはならナイ。

未だ流れていなけれど、あのとき流れた涙は確かに存在したのだカラ。

同士はどうカナ。あの時代を好き好んでいないのはワカル。けれど、明日とも知れぬあの時代に同士にだつて愛した者がいたんじゃないカ。

長々と失礼したネ。これで筆を置かせてもらひづ。

最後まで読んでくれてありがとう。

の愛しい同士よつ

PS・もしよかつたら私と一緒に世界を救うおひ。

「オイ、狂氣。終ワシタミタイダゼ」

早朝早くにポストへ投函されていた手紙を呼んでいた狂氣が我に返つたのはチャチャゼロの声を聞いた時だつた。

世界樹広場に目を向けて見れば確かに言つ通り、全ては終わつている。

「結果はどうなつたんだ？」

「小僧ガヤリヤガツタ」

「はあ、それはまた」

何処か呆れたような。いや、これは事を成し得たネギを少なからず感心しているのだろうか。

どうにも掴めないため息を付いて狂氣は広場へと目をやる。

ボロボロになつたネギとその姿を見て何処か呆然としている茶々丸。ギャラリーとして集まつているいつか見た3・Aの生徒たちは喜びの声を上げているが、エヴァや一部の生徒たちは信じられない物を見たように唖然としている。

「ネギはどうやって勝つた？アレが茶々丸に一発入れる確率なんて1%未満だろ。油断でもしてたのか？茶々丸は」

「イヤ、妹ニ非ハ無カツタ。タダ、小僧ガ妙ナ拳法ヲ使ウノハ予想外ダツタミテ一ダゼー。ケケケ、マダマダ甘メーナ、妹ヨ。功夫ツタツケカ、アノ蛸ミタイナ動キハ」

「そうか、中国拳法か。確かにそれはアレに会つてゐるかもしないが」

途中で言葉を切りながらネギに駆け寄る生徒の内の一人である少女に目を向ける。

弟子から聞く限りでは一般人最強の部類の少女。
師としては一流と言つていいだろう。だが、しかし。

眉を顰めながら狂氣が言つ。

「たかだかその程度で茶々丸に一撃入れられるものか？よくて勝率の桁が一桁上がる程度だろう。元が〇コソンマ一%なら、ようやく百回に一度勝てる程度の奇跡だ。そんなモノが都合よくこの場面で起ころるものか」

狂氣とて戦いと言つ物を少なからずは熟知している。
だからこそわかる異常事態。

百回に一度勝てるかどうかの相手なぞ、勝てないのが当たり前の努力とか諦めないとかの問題ではない。これは可能性の問題だ。だつてそうだろう。百回に一度しか勝てない敵は百回に九十九回勝利する可能性を秘めているのだ。

ネギの百度に一度勝てる可能性と、茶々丸が百度に一度勝てない可能性が重なる時などという[冗談だ]。計算だつてやっていられないだろう。

無論、計算だけがすべてではない。

それは分かつてゐるからこそ、狂氣は頭の上に乗る戦いの先達に問

う。

チヤチヤゼロは「いか懐かしそうに田を細めながら笑つた。

「世ノ中ニハ居イルモンダゼ。万ニツノ^{ナセキ}可能性ヲ當タリ前一起口
ス大馬鹿ヤローガヨー」

「・・・つまり、アレは英雄の器か」

チヤチヤゼロの言葉を聞いて、忌々しそうに咳きながら狂氣は踵を返す。

確かにエヴァの言つ通り面白い物は見れた。それがエヴァの予想していた物であつたかは別として。

まったくもつて馬鹿らしい。けれど笑つてなどいられない。
勝てない筈の相手に勝てるなんて、どれだけ危険な存在だ。
傍迷惑も甚だしい。アレはあやつて勝ち続けながら自分だけは生き残るのだろう。

周りにいる誰かの何かを犠牲にしながら。

唾を吐きたくなる苛立ちを覚えながらも思いだすのは手紙に書いてあつた言葉。

「同族嫌悪か。確かにそうかもしれない。だが、だとしてもそれがどうした。お前が言つにはこれが俺の業なんだろ？」

含み笑いを漏らしながらそつそつと自分の頭を撫でる感触で我に返る。頭の上にいるチヤチヤゼロの手は冷たい筈なのに温かい。

ああ、これでいい。戦うことなど考える必要も無し。

所詮自分は逃げ続けてきた臆病者だ。だからこそネギのことなんて知つたことではない。

勝手に生きて、勝手に戦い、お涙頂戴の最後で勝手に死んで行け。自分には今が有ればいい。このまま惰性な日々を過ごしていく。

そして来年になればエヴァの呪いも解けるだろう。弟子である夕映だつて一人前になる筈だ。

そうなればもう自分を縛る物は此処にない。

約束通りエヴァ達と旅行に行き、そのまま何処へなりとも消えてしまおう。

それこそが自分が望んだことなのだから。

逃げて逃げて逃げ続けて、ようやく掴んだ安息の筈なのだから。

「なあ、チャチャゼロ。お前はネギを恨んでいるか？」

何気なく問われたこの問い合わせ後々にまで影響を及ぼす物であると悟つたからこそ、チャチャゼロは苦笑しながら首を振る。

「イヤ。恨ンジャネ。身体ヲブツ壊サレルノナンザ、昔ハヨク有ツタコトダシヨー。ソレニ、アル意味、デハ小僧ノ才陰^テ才前ト繫ガル事ガ出来タンダシナ」

「どうか。なら俺も忘れることにする。恨まないし怒らない。茶々丸のあの姿勢がある意味アレと対するには正しい姿勢だ。巻き込まれない様に無関心でいればいい。・・・耐えてやるぞ、一年くらい」

忌々しく苛立たしい限りだが狂気は決断する。
ネギには関わらない。そう言い切れば楽だろ？が恐いくらいもないかないだろうから無関心でいよう。

なにが起きようとも後一年は大人しく此処に居なければならぬなら、良いと耐えてやる。

エヴァと十五年も耐えたのだ。ならば自分も一年程度耐えてやろうじゃないか。

問題は山積みだ。だが誰ひとりとして俺に日常を壊すことだけは許さない。

救える物は救つても良い、力を貸してと頼むなら手を差し伸べよう。だが、そこまで。それ以上は許さない。

俺はあくまでも誰と争いたい訳ではないのだから。

「と言つてもな」

修学旅行のことを思い出して。今の決意もどこか無為に終わること未来が見える気がする。

自分の気性は自分が一番よく分かっている。だがこればっかりは仕方がないだろう。

苦笑しながら空を見る。明るみ始め太陽が顔を出した気持ちのいい朝だ。

「帰つてねるか。チヤチヤゼロ」

「一緒二力？変態ヤローガ」

「否定はしない。自分でもわかつて手を出すつてんなら、変態以外の何物でもないしな」

果たして手を出す対象がチヤチヤゼロなのか、それとも拳と言つ意味なのか。

今はまだ狂氣自身にもわからない。

宇宙人からの手紙（後書き）

後二三話やつた後に学園祭編に行ければ良いなーと思つてます。
え？ヘルマン襲来編？（――・・・なんのこじやらわ
かりませぬ。

語事の差（前書き）

（――）なにも無いひとは無い

「私は、こんなところで死ねない」

傷だらけの身体を引き摺つて田の前に居る敵を睨む。後ろにはお嬢様。ずっとお守りしたかった大切な人。

「私はまた守れないというのか」

思いだすのは幼き日の記憶。呪いのように私を縛る忌まわしい過去。強くなつたのだ。あの頃とは比べ物にならないほどに。なのにまた、守れないのか。

そんなのは嫌だ。我慢できない。

「私は強くなつたのだ！お嬢様を、このちやんを守るために…もう一度と守れない自分など許せないとそう誓つて生きてきたんだっ！文句がありますかっ！」

振るう夕凪は未だ敵には届かない。
ほんの数センチの距離が果てしなく遠い。

「……だれか、誰でもいい。私に力を貸してくれ」

今より早く。ただひたすらに速く。疾く。私にまだ力があるというのなら、覚醒してくれ。

その瞬間は今をおいては他にない。私にお嬢様を救う力を。
「のちやんが傷つかずに済む未来を。

「ぐだらん。強くなつた？その程度で奢るな。吹けば消し飛ぶ存在が思いあがるなよ」

幅のない音程の声。秘められる感情は憤怒と憐れみ。

お前は弱い。

放たれる拳はただそれだけを知らしめ、重圧が身体を軋ませる。

「誰でもいいから力を貸してくれ？笑わせるな。お前が守りたい誰かを守るのはお前しかいない。守りたいなら強くあれ。いつ何時も我を通すのは勝者だけだつ！」

叫びと共に怒りは加速し拳は更なる重さを生む。

拳圧だけで地面が砕け、避けた筈なのに風圧で飛ばされかける。他を圧する重さ、全てを碎く怒り。何だこれは、本当に同じ人間か。後退し駆ける足をどごめるものはただ一重に自分の後ろにいる存在。泣いている。もうやめてくれと敵に頭を下げている。ああ、私はまた泣かせてしまつてていると言うのか。

許さない。許さない。許さない。

このちゃんを守れない私など許せない。

「ざんがんけえええん！」

身体が軽い。あれほど体を蝕んでいた重圧をもう感じない。

敵の首を田掛けて刃を落とす。全身全霊、全力で、全ての思いと覚悟を秘めた一撃を。

私にとって最強と自負するに恥じない攻撃。これをしくじればもう一度田はないだろつと確信する。なのに

「軽い。軽いな。お前の剣には重みがない。守るだと。ふざけるな。

自身も守れないような存在が、誰かを守るなどと。なんど思っても、
なるなど言わせる気だつ！」

「なつ」

最強と自負した一撃は拳の皮一枚も断ち切ることは出来なかつた。
私の刃は狂氣さんになんの痛手も与えられない。
強くなつたはずなのだ。昔とは違い、私はお嬢様を守るための力を
手にしたはずなのに。

「私はまだ守れないといつのか」

ポツリと漏らした悲痛に答えるのは慄然とした声。
痛々しいまでの真実を無遠慮に押し付けてくる。

「それ以前の問題だ。誰かを守る前に先ずは自分を守つてみせろ」

剛腕が腹を打つ。何の受け身も取れないままそれを受けた私は上空
10mまで飛ばされて、無残に地面に落ちた。
氣を失う前に見た物は泣きながら私に駆け寄るお嬢様の姿だつた。

「な、なによあれ。なんのよあれ！」

修行の一部始終を見ていた明日菜は瞠目する。
真剣を本氣で振り回す刹那もさることながら、それ以上に狂氣のあ
り方に困惑する。

「あれば本氣の殺意。

そんなのを感じたことはない筈なのに確信する。

アレに比べればネギがエヴァと共に進行している修行はまるでお遊戯。

「・・・此処には入ると言つた筈だがな。神楽坂明日菜」

振り返ればそこに居たのはこの別荘の主。

勝つてに入り込んだ自分達を顔を覗めながらも許してくれた存在は
いま本当に怒つていていた。

自分がまずい物を見てしまったといつことは理解できる。
けれど明日菜はそれよりも狂氣を断罪するよつに叫んだ。

「なんのよアレは！こんなところでなにしてんの。ビリして止め
ないのよ。刹那さんが死んじゃひじゃない！」

駆け寄るつとする明日菜の手首をエヴァは掴む。
込められた力に明日菜は声を漏らした。

「止せ。あれは当人達の意思で行われている修行だ。他人が手を出
していくことじやない。刹那と木乃香の覚悟を踏み躊躇の氣か？」

「でも...」

明日菜がもう一度目を向ければ。

映る物は傷ついた刹那を必死に治癒しようとする木乃香の姿。

「プラクテ ビギ・ナル トウイ・グラーティヤス・グラー・ティア 汝が為にコピテル王の シジテ 恩寵あれ “治_ク
癒_ラ”」

「もつと魔力を込める。低級治癒魔法でこのお怪我を直そうと思つ
たら今の百倍は魔力を込めないと無理だ」

狂氣の言葉に返事なく頷く木乃香の頬には涙の流れた跡があり、このやり取りが初めてでないことを表していた。

明日菜は止めに入ろうとするがエヴァの力は強まるばかり。手首が砕けるんじゃないかと思つほどの痛みに明日菜は苦悶した後、涙目でエヴァを見た。

「痛いよ。エヴァちゃん」

「自業自得だ。それとちゃんと付けは止めないと言つた」

「刹那さんと木乃香はきっともつと痛いよーどうして止めちゃいけないの？」

「なんども言わせるな。アレは一人が選んだ事だ。……狂氣とて、本当はあんなことはしたくない筈だ」

苦々しく咳くエヴァが言つ通り、きっと狂氣が意地悪であんな真似をしている訳じゃないと言つことくらい明日菜だつてわかっている。明日菜に取つてよく知らない人ではあるが狂氣はなんどか助けてもらつたことがあるからこそ、その人柄が決して悪い訳じやないと分かつている。

けれど、あの惨状を見れば止めたいと思つのは当然じやないか。

「そら、早くボーヤとお仲間達の所に戻れ」

「・・・エヴァちゃんはどうするの？」

「狂氣がもう終わりにするみたいだからな、木乃香に力を貸して刹那を全快させてからも戻るぞ」

「・・・お願ひね

「お前に頼まれる」とじやないな」

「うそ。わかってる。けど、お願ひ

「ふん。わざと行け」

トボトボと歩きだした明日菜を見送つてから、エヴァは狂氣達の元へと向かった。

「まつたく、師匠はなにを考えているんですー。」

狂氣は刹那と木乃香の修行と言つたの苛めを終えた後、別荘の中でも比較的過ごしやすい石畳の間で正座させられていた。

弟子に叱られる師匠と言つ情けなすぎる構図には苛立つが、まあこれはこれで新鮮でいいかななどと考えながら狂氣は夕映を見上げた。

「なんです。その子が親に向けるとつと終わんねーかなー。無駄な説教マジハッ！みたいな目線はー！」

「感じた通りでいいんじゃねーかな」

ビシッ！と指を指し図星を射抜く夕映に感心しながら正座に飽きた狂氣は立ち上がる。

元より反省する気は皆無なのだ。確かにあの修行は過激ではあったが、決してやりすぎではないのだと狂氣は確信する。

だからこそ正座をしていたのはただの気まぐれであり、何時の世も女は強いといふ常識は通用しないようだつた。

「少しほ反省してください。私の時もそうでしたが師匠にはやりすぎる帰来があるのでありますから」

「なら、ああいうぬるま湯に浸かつた教え方が善かつたか？悪いな。俺にはあそこまで能天気に魔法界へ引き込むのは無理そうだ」

狂氣が田配せをした方を見れば生徒たちに魔法を教えているネギの姿がある。

流れる空氣は和氣藹藹。その風景の中に親友の姿を見つけた綾瀬は眉を顰める。

「魔法の秘匿云々は何処に行つてしまつたのでしょうか？」

「まあ、野菜^{ネギ}が植えられるついでに出荷されたんじゃないのか？」

「上手くない冗談です」

「だよな」

魔法は少なくとも笑いながら習つようなものではないと狂氣は考えている。

だつてそつだらう。初級魔法の魔法の射手ですら使い方によつては指先一つで人を殺せるのだ。

人間界で言つなら銃の様な物。銃の使い方を笑いながら習つ奴が何処に居る。

いるとしたらそれは精神異常者か精神未熟児のどちらかだらう。明かに後者であるネギと自分の師である狂氣を見比べながら夕映は

思つ。

違いすぎるです。あり方も考え方も教え方すらも正反対を歩いています。と。

優しく楽しいネギの教え方と厳しくも頼もしい狂氣の教え方、どちらが生徒のためになるかと聞かれたから答えるまでもないことだった。

だからこそ、夕映は言つ。

「師匠。のどかを救つては貰えないですか。ネギ先生の傍は危険すぎです」

弟子の頼みを聞けない自分に眉を顰めながら狂氣は言つ。

「殴つて済む問題なら俺を頼つてもらつても構わない。けど、宮崎はネギに惚れているんだろう？俺が色恋に聰い様に見えるか？」

「いえ見えません」

「やうじいじことだ。何かが起きてもしない限り俺に出来ることはない。何かが起きた時は修学旅行の時みたいに連絡しろ。助けてやる」

「はいです。ありがとうございます。師匠」

さまざまな物を溜めこみながらも笑う弟子を狂氣が誇りに思つているとそこにクーフェが現れた。

「およ？綾瀬は一人でなにしているアルか？」

「いえ、何でもないです。少し考え方を・・・」

会話を始めた一人を余所に狂氣は腰を上げその場を離れて行く。視界の端には小さく一礼をする弟子の姿、微笑みを返してから立ち去つて行つた。

「認識阻害魔法の応用とは恐れ入る。お前は殴り合いだけの馬鹿ならもう少し可愛げもあつたのだがな」

「なにを言つているのですか、マスター。狂氣様はいまも十分可愛らしいではないですか。今以上に可愛らしくなられたら、私は悶死してしまいます」

「覗キシ放題ナ魔法ダナ。ケケケ。ヨカツタジヤネーカ」

三者二様の言葉を受けて狂氣は深くため息を付く。何処か棘のある言い方はたぶんそういうことなのだろう。

「問題」とか?」

「ああ、お前にとつてのな」

忌々しく口元を歪めながらエヴァは舌打ちをする。

予想通りの返事に苛立ちながらも言葉を待つていれば何時の間にか頭の上へとチャチャゼロがよじ登り始めていた。

「爺直々のお呼び出しだ。お前一人で来いとな」

「・・・人がせっかく不干涉を決意してやつたのに、どうこうア見

だ

「知りんよ」

付いて行つてやうつかと問う視線に首を振つてから狂氣は空に向かつてしぶやく。

「うせえな。こいつのこと全部壊してしまおうか

（

）

怒りの理由（前書き）

いまやらだが前書きって何を描けばいいのかいまいちわからない。
（ - ）ンー

怒りの理由

羅漢狂気には嫌いな物がある。

当たり前のことだらう。誰にだって嫌いな物の一つや一つある物だ。何もかもを好いて愛せる女神なんて少なくとも狂気が生きるこの世界には存在しない。

誰かが嫌い、自分が嫌い、争いが嫌い、平和が嫌い、近しいところで言えばゴキブリや油虫、肥溜めなんかでもいい。

自分が嫌いな物を思い浮かべたうえで考えて欲しい。

そのモノの巣窟へ足を踏み入れることに幸福を覚えるだらうか。

答えは考えるまでもなく、否である。

だからこそ狂気もまた、ただひたすらに不快と感じていた。

エヴァの家から出てそのまま向かつた女子中等部の校舎、校門の前で夜空を見上げて息を吐く。

考えるまでもなく不快を表すそれを見た瀬流彦はただ苦笑いを浮かべるしかなかつた。

「あはは、そんなに怒らないでよ。狂気君。まさか君を学園長だつて取つて食おうと言う訳じゃないだらうしむ。案外大した用じやなくてすぐに帰れるかもしれないよ」

「本気でそう思います?瀬流彦さん」

「・・・・いや、「」めん。たぶんそう簡単にはいかないだらうね」

「ええ、わかつてますよ。貴方が迎えに来た時点で。知己を迎えて御機嫌を取ろうなんて政治家じみた真似をしますね。あの学

園ちよ、糞痴呆爺は

「別に言い直す必要はなかつたんじゃないかな?」

落ち込んでいる自傷染みた笑顔を振り払つてから勤めて明るく振る舞おうとする狂気。

その意を汲んだ瀬流彦はただでさえ温かに下がつてゐる目尻を余計に下げる場を和ませようとしていた。

瀬流彦は麻帆良学園に置いて狂氣が嫌つておらず、そして狂氣を嫌つていらない数少ない魔法先生である。

なぜ瀬流彦がガンドルフィー二やそれに追随する魔法先生のように狂氣を嫌つていなかと言えば、理由は一重に若いからでありそれ以外の理由はないもない。

たとえ魔法界全体が讃える英雄を狂氣が嫌つていようと、「それは個人の自由じやないかな?」と言えるだけの若さと言つ柔軟性を持つている。

それだけである。そう、狂氣との関係を保つにはそれだけでいいのだ。

英雄嫌いとして確かに狂氣は有名である。

しかし、狂氣が嫌うのはあくまで英雄本人。その友や家族を毛嫌いする訳ではない。

だからこそ普通にしていれば狂氣は誰か一個人を一方的に嫌う人間ではないと言うのが彼見た感想である。

たしかに近づきがたいオーラはあるが、何もしなければ何もしない。

むしろ黙つて見えないとこで力を貸してくれるような善人だ。

だからこそ夕映や刹那は彼と慕い。エヴァやチャチャゼロ、茶々丸や名前も知らない女生徒は彼に好意を持った。

何もしなければいい、普通に接しながら暮らせばいい、逆鱗にさえ触れなければ狂気は英雄以外の誰かを嫌うことなどあり得ない。しかし、此処にはその逆鱗に触れようとする者が多すぎる。

「ねえ、狂気君。君はまだ Gandalf先生のことが嫌いかい？」

学園長室に向かう廊下を歩きながら瀬流彦は狂気に問いかける。狂気はその隣を歩きながら頷いた。たとえ隣に居る瀬流彦の目尻が悲しそうに下がつたとしてもそれ以外の問いを狂気は持たない。

「ええ、嫌いですよ。アイツが見ているのは羅漢狂気じやないクルキ・ラカンだ。英雄の息子という型に嵌めこんで、狭つ苦しーたらりやしねえ。なに様のつもりだ」

「君は高音君やネギ君も嫌いだろ?」

「ああ、紅い翼が戦争の英雄だつてことを理解してもいねえ。あれの栄光は血脂と血涙で彩られた輝きだ。それを崇めるなとは言わない。ある意味莊厳だらうからな。けど、美しい? 格好がいい? ふざけるな」

もはや口調がボロを出し始めたことに気つきながらも狂気は断言する。

「これが聞きたかったんでしょう? 瀬流彦の意をあくまでも汲みながら。

「あいつ等は敗者の涙を見ちゃいない」

悲しそうに見えるその瞳。しかしその奥にある物は紛れもなく過激な感情だと瀬流彦は読み取る。

怒氣憤怒声怒轟 怒り。

そこまでは凡人でもわかること。だからこそ瀬流彦はその奥を読む。読み取つたその感情を吟味し悟つたからこそ瀬流彦は何処か冷たく言い放つ。

「敗者の涙か。最もだけれど、君が言うと何故か負け犬の遠吠えに聞こえるね。まるでどこかで（・・・・・・）自分が敗者であつたかのようだ（・・・・・・）」

その言葉を聞いて一瞬だけたじろいた後、狂気は口元に笑みを浮かべた。

「ああ、まつたくなんて正しい。だからこそ瀬流彦さん。俺は貴方を嫌う以前に尊敬できる。誇つてくださいよ。俺が自分から敬語を使いたいなんて思える先生は貴方だけだ」

「はは。あまり僕のことを褒めないでくれよ。調子に乗ってしまうだろう？僕なんてまだまだ半人前もいいところだ。君の力にもなれやしない。こうして言葉を伝えることしかできないんだ」

辿り着いた学園長室の前に瀬流彦は一度立ち止ると狂気へと向き直つた。

部屋の中から感じる気配は明らかに複数人の物。
きっとそこには狂気の味方は一人もいないのだ。「
目の前に立つ瀬流彦とて同じこと。彼はあくまでも中立だ。

麻帆良に置いて狂気の味方は数少ない。そして魔法先生で言えば皆無。

敵か中立しかいない。この状況が作り出されたのはある意味必然だつたのかもしれない。

けれど確かに狂気にも責任の一端はある。

だからこそ瀬流彦は狂気の眼を見据えながらいづ。

「はつきりと言つておくよ。朱に交われば赤くなる。ある意味それが賢者の選択だ。英雄嫌いは別にいい。けれどそれを声高に叫ぶのは愚者の選択。狂気君の言葉がどれだけ正しかろうと、この麻帆良では不協和音でしかない。君はこの学園を壊す氣かい？」

瀬流彦さんの言つことは何時も正しい。冗談抜きで狂気はそう思う。確かに自分は麻帆良に置いて不協和音。闇の福音たるエヴァですら紅い翼を嫌つていないのでからその異常性がわかるというものだろう。

そして修学旅行で見せてしまった自分の力。

ああ、わかつっていた。わからない風を装つていたけれど此處に呼び出された理由に心当たりはある。

修学旅行で現れたフェイトは紛れもなく魔法界でも最強クラスの魔法使いだろう。

悠久の風（AAA）である高畠や麻帆良最強の学園長ですら相手を出来るか危うい。

そんな相手と対峙できるほど強力な存在。そしてその者が魔法界の常識として崇めるべき英雄達を嫌つているとすればそれは不協和音どころじゃない。ただの不穏分子だ。

だからこそ瀬流彦さんは言つてくれているのだりづ。
今からでも遅くない形だけでも従順しようと。

けれど、それは無理ですよ。超からの手紙で再確認したことですが、俺は本当に英雄（俺）が嫌いなんですから。

「忠告だけは受け取つて置きます。けれど俺は俺にだけは嘘は付けません。自分の力は（・・・・・）自分だけの物、だから（・・・）自分勝手に（・・・・・）生きてみろ（・・・・・）。それが親父からの教えですから」

微笑みながらそういう狂氣をみて、瀬流彦は仕方なさげにしかしこか嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「そりゃかい。素敵なお父さんだね」

「いえ、まさか。だらしない糞親父ですよ」

学園長室に入った狂氣は椅子に腰かけていた。
瀬流彦は既に傍にはいない。壁際で微動だにせず直立していて、傍に眼鏡をかけた男性や小太りの教師がいる。
名前は知らないが恐らく彼らが狂氣にとつて敵ではない相手、瀬流彦と同じ中立者なのだろう。

敵ではない誰かが二人もいてくれるのなら少しは安心出来ると息を漏らしながら目の前に陣取る学園長を睨みつける。
傍に居る高畠には気を付けるが、なにやら自分を睨んでいるそれ以外の視線など気にするまでもない。
敬語など使う必要も無し、狂氣は口を開いた。

「で、なんのようだよ。学園長」

「ふむ、もう儂に敬語は使ってくれんのかの？ちと寂しいのぉ

「尊敬して欲しいならそれなりの態度を見せるんだな。少なくとも臆病者に払う敬意なんてねえよ。俺をエヴァから引き離して話したい？そんなに怖いのか。この俺が」

挑発に満ち満ちた言葉にも学園長は微笑ましい笑みを返すだけ。なにを考えているかがわからない。学園最強の魔法使いだとそういう話ではなく、この男はこういう掛け合いで恐ろしい。

だからこそ、狂氣は掛け合いでから逃げ出した。建前など知らぬ存ぜぬ顧みぬ。

本音だけを漏らし立ち合おう。腹立たしいことだが経験でこの狸に勝てはしないのだから。

「フオフオフオ 狂氣君が怖いかじゃと？・・・ああ、無論怖いぞ。タカミチ君が言つには全盛期の英雄達にも届くかもしれん力を持った君が敵になるかも知れんのじや。これが怖くなかったら正しく君が言つ通り儂は痴呆じゅうづ」

あくまでも笑みを絶やさない学園長に苛立ちながらも狂氣は安心する。

敵になるかもしれないということはまだ敵ではないことだろう。

ならば敵になどならなければいい。敵対することなど元より望んだことではないのだから。

ただひたすらに狂氣が求める物はそういうことから隔絶したなにかなのだから。

「学園長。これだけは約束できる。俺に敵対する気はない。今まで通り放つておいてくれればいい。不干渉を貫こう。勘ぐるというなら弟子の夕映も警備から手を引かせる。あいつに経験を積ませられ

ないのは残念だがな」「

「やうか。うむ、よかつた。狂氣君に敵意がないと儂は信じよつ。元々儂は君が腹芸の上手い人間じゃとは思つておらん。しかしの、言葉だけでは信じられぬといつ者もあるのじゃよ」

学園長の言つ物とは先ほどから自分に刺さるやうやうつたる視線を向けてくる奴らだらう。

部下を御せないのかそれとも御す氣がないのか、どちらにせよ尊敬は未だ出来ない学園長。

しかし学園緒もまた自分と敵対したいなどと思つていないとこつことは信じられる。

自分に害を成せば最悪いや必然、悪の福音とその従者達も敵に回すことのことなのだから。

意外と彼女達に自分は守られているのだなどどこか温かくなる。

「やうか、なげうすれば証明できるへ俺に敵意がないのだと」「

「決まつてゐるだらうー君も立派な魔法使い（マギステルマギ）を目指すのだよ。ネギ君と同じよつに。そうすれば私達も君に敵対するどころか協力できる」

そう答えたのは学園長ではなく狂氣を睨んでいた一人であるガンドルフイーーだつた。

その顔を、その態度を、その眼を見て思わず舌打ちを零す。

なんだアレは。学園長との対話に割り入つて来ながらまるで正しく自分は正しいのだといつたのか？

最悪だ。正しく自分が嫌いな人種に他ならない。

押し付けた善意。それが正しいのだということを疑わない思想も然ることながら何よりアレは考へることを放棄している。

ああ、正義は尊い英雄は素晴らしい。彼らのやる「」こと全ては正しく正義なのだ。

典型的な狂信者。学園長への評価を見直そう。狸は狸なりに頑張っているのだろう。

あんな奴大半なら部下を御せないのも仕方がない。

ガンドルフィーーに追随して何やらぼざいでいる声を止めようとする学園長より早く狂氣は言葉を漏らす。

馬鹿なことだとは分かっている。けれど止められない。誰に似たのかすぐ熱くなつて周りが見えないのでなく見なくなる自分。しかしこれこそが羅漢狂氣といつう一個人なのだから。

「立派な魔法使いを目指す？ネギのよつに？いい大人が笑わせんや。前も言わなかつたか？氣づけよ、いい加減。前はまだ救いがあつたのに、短い間にそれすら消し飛んだのか？救えねえな。憐れぎて怒る氣すら起きない」

「・・・君は、何が言いたいんだい？」

込められた意思を汲み取つたのだろう。声を震わせながら自分を睨む相手を前に本心からの憐れみを送る。

本当にアンタはどうしてしまつたんだ？

最初会つた頃はただの夢見がちな少年みたいな中年だったのに、何時からそこまで盲目した。

ネギが来てからか？自分が英雄に慣れないから英雄のこと育てるつていう栄光に眼を焼かれたのか？
だとするなら

「ほんと、憐れだよ。お前！」

アレにさえ出会わなければ夢から覚めたのに。

本心からの憐れみという優しさを目の前の彼らは受け取れない。それは彼らだけの問題ではなく、狂気にも非があるだらう。

言い方があまりにも挑発的すぎた。

「さ、君は何時もいつも何処までも私達を馬鹿にしているようだねつ！いや、私だけならまだいい。それは紅い翼かれらに対する侮辱でもあると気づいているのかい！君は英雄を貶める氣かつ！」

「そうだ。子供が知った風な口を聞くんじゃない！」

「我らは立派な魔法使い（マギスティルマギ）を目指す正当な魔法使いなのだぞ！」

「英雄の息子でありながら闇の福音などとつるむ下賤な身の癖に…」

「ああ、比べればわかる。ネギ君がどれほど眩しいか！欠陥品だなお前は…」

「英雄達が嫌いならとっとと出て行け！此処にお前の居場所なんてないんだよ！」

紡がれる言葉は罵詈雑言、口火を切った Gandalf ですら此処まで言つ氣はなかつただろう。

しかし、止まらない。止まれない。止めれば認めるということになるのだから。

英雄に成れる力を持ちながらそれを放棄したあの傲慢で我が儘な青年を。

それだけは 彼らの中で認めらない。

英雄に届かぬまでも英雄を育てることは出来るかもしない Gandalf 以下、英雄に成ることを諦める所かそんな夢も持てなか

つた凡人。
かねら

嫉妬、妬み、それが狂気への罵倒となつて紡がれる。学園長が無理やり口を黙らせる手段行使しよつとした刹那、言つてはならない言葉が紡がれた。

「俺達を怒らせる氣か！」

「怒る？怒るだと。なにを持つて俺に怒りを覚える」

いい加減我慢も飽き飽きだ。自分どころかエヴァまでも貶めることを吐くアレに我慢を覚える必要があるのか？

ああ、わかっている。此処で手を出せば全ては破綻する。敵意がないという言葉が嘘に成つてしまつ。

振りかぶつてしまいそうな拳を瀬流彦さんや数人の教師たちが止めようとしてくれている。

あの高畠だつて学園長が治めると声高に叫んでくれた。だが

「お前の全てにだつ！子供は子供らしく夢を見ればいい物を。届くかもしれない栄光に手を伸ばさないなんてなんて罪深い！俺が許さずとも正義がお前を許すものか！」

なんてうざいんだこいつ等は。

自分が怒る理由すら他者任せか。こんな奴らに、どうして俺が怒らねなきやならない。

怒るといつことはもつと

『無辜、無常、無用、無知蒙昧。ああ、極まればいつそ清々しい。良いだらづ、認めてやうづ。ボーヤのその理論。人間だから、人間

じゃない者を殺すことに罪はないと。やつらのだな！いいだろ？
なら！」

『ふざけるなです！勝手に付いて来た？そいつさせたのは誰ですか！
なにも言わずにはいなくなつたのは誰ですか！一言、言つてから出て
行けば私もフォロー出来たのに、それすらしなかつたのは誰ですか
！』

『……測りかねるね。けれどなるほど、理解は出来ないけれど知
覚はしたよ。つまり君に勝つには速いだけではだめ。ボクも本気を
出さなきゃいけない訳か。……顔を殴られたのは、初めてだよ』

『守る』とは悪イノ力？求める』とは悪ナノ力？違う。守護こそが
力の正しい使い方であり、求道こそがチカラの正しいあり方ダ』

『私は強くなつたのだ！お嬢様を、このちゃんを守るために！もう
一度と守れない自分など許せないとそう誓つて生きてきたんだっ！
文句がありますか？』

『ああ、わかつたぜ、糞ガキ。ぶん殴つてお前のことを止めてやる。
あと、一つ言わせてといてくれ。なんで真実を黙つていたつていった
な？恐かったんだよ！狂気に嫌われるのが！嫌だったんだよ！息子
を失うのが！眞実を言って嫌われるなら、騙し続けてやるつて思
つたんだよ！文句あるかああ！』

純粋でびりしそうもなく正しい自分の為のモノだらう。

「なんて軽い。それがお前達の怒りだと？はつ、なら俺とお前たち
とじや怒りの純度が違う。その怒りで？借り物の熱で？

』

俺を抑えてくれていた瀬流彦さんを振り払う。

例えどれほどの慶眼もついていても力じゃ俺には敵わない。制止の言葉を聞き流して身体に怒氣を纏わせる。

ああ、高畠。あんたの言いたいことはわかる。俺のことを疎ましく思つていても止めてくれるあんたは正しく善人だよ。見直した。同じ狂信者だが少なくとも目の前に居る肩共とは種類が違う前に出たガンドルファイニーを殴り飛ばす。

安心しる。見た目の割に痛くねえだろ。手加減はしてやつた。あんただけは肩共の中でただ一人自分の意思で怒つただろう？英雄（輝き）が穢されるのが嫌だった。相容れないけどそういう考えは嫌いじゃねえよ。

関係無い相手は遠ざけて、忠告もちゃんと聞いたよ。そして手加減をするべき相手には手加減をした。なら、もういいだろ？

久しぶりに根幹に根付く拳の声に耳を傾けても。

「　この俺を！俺の弟子を！俺の友を！俺の世界（輝き）を燃やそつだなんておもいあがつてんじゃねえぞオオ！」

溢れ出る怒氣と共にます圧力にその空間は四散する。高畠は額から滲む脂汗を拭うことも忘れソレを見た。

正しくあれは全盛期の英雄に追随している。今のネギ君なんて目ではない。

アレこそが英雄の力。万に一つの奇跡を起こし続ける、暴力的な力。ああ、だめだ。止めなければ。英雄達に修行を付けてもらつてこの僕が彼を止めなれば。

本当に彼の眼に映る誰かが死にかねない。

「止めるんだ！狂氣君！今ならまだ間にあう！今回の件は君に罵声を浴びせた彼らにこそ責任がある。それは僕たちの誰もが認めることだ！だから、止めろ！」

「ひるむな。自分の力は（・・・・・）自分だけの物、だから（・・・・・）自分勝手に（・・・・・）生きる（・・・・・）」

「つづ、この糞ガキイ！正直僕は君のことが嫌いだからどうでもいいが、僕の同級生だったエヴァが悲しむんだよ！エヴァは嬉しそうに言っていたよ！　君はエヴァを卒業させてやるんだろう！」

「

一瞬の動搖で無防備になつた瞬間を見逃さず、高畠は渾身の無音拳を狂気に叩き込んだ。

音もなく狂気が倒れたことで空間すら圧していた怒気が消えうせる。狂気の視線に晒されていた者は一様に気を失っているが外傷はない。それを見て安心したのだろう、気を使い果たした高畠もまた倒れた。

「まつたく、空間が歪むほどの怒氣を感じたから来てみれば。ジジイ、お前にいつに何をしたんだ？」

「学園長、正直にお答えください。返答次第では消します

「テメー、ヨクモ俺ノ男ボコッテクレタジャネーカ。コロスゾ」

「ま、待つのじや。儂にそんな気は・・・いや、言い訳は止やう」

言い訳をしようとした口を積むんで学園長は神妙に狂氣を見る。
彼は何も悪くない。約束通りに一人で此処に赴き、整然とした態度
をしておつた。

それに比べ儂はなんだ？周りを部下で固めその部下すら御せぬ始末。
なんて無様。

この上に言い訳など、出来ぬ。

言い訳ができぬ以上、彼や田の前の彼女にこれ以上の反感は持たせ
たくはない。

「全では儂の不手際じや。狂氣君には何の罪もない。君に無礼を働
いた者達は全て本国へ送り返す。そしてエヴァ、君を信じるから安
心して麻帆良で学業に励んでくれと、田が覚めたら伝えておいてく
れるかの？」

「ふん、まあいいだらう。で、何故これまで倒れているんだ？狂氣
とやり合つたのか？」の中年

腕を組んで学園長を見ながらエヴァは高畠の鬚面をぐりぐりと踏み
付ける。

それを見た瀬流彦は何かアブナイ光景だなと思い止めようと前に出
る。

あくまでも話し合いで、無理なら飽くまで踏んで居てもいいしきな
いだらう。

自分で闇の福音に敵うなんて思えないのだから。

「あ、あのー、高畠先生も狂氣君を止めようと頑張ってくれたんで。
足をどこしてもうえませんか？」

「ん？ 誰だお前は？」

「瀬流彦先生です。マスター。知つていいでしょ、狂氣さんが唯一尊敬していいるところの魔法先生です」

「へえ、なるほど貴様がか。確かに・・良い眼だ。面白い」

「幸薄ソウナ顔ダナ」

ニタアと笑う（瀬流彦視点）エヴァを見て笑顔の眼に涙が浮かぶ。狂氣君、僕は君の所為で彼女に眼を付けられてしまったよ。たぶん君に出会つてから初めて恨むよ。君のことを。

「まあ、良いだろ。もつ私達は帰る。」二つの後片付けはしておけよ」

「あ、うん。狂氣君にお大事について伝えておいてね

「わかった。じゃあな」

あの小さい体で狂氣を抱えエヴァが出て行つたことに安堵していると学園長から声がかかる。

なに？」とかなど返事をすれば聞かれたのはぐく簡単な問い合わせだった。

「どうして狂氣君に優しくするのか？ 別に狂氣君だけに優しくしていつもはありませんよ？ ただ、生徒を、私達から見ればまだ子供の彼らを導き指導し優しさを『教えるのが先生の仕事でしょ』

「確かにの。けど、狂氣君はただの子供じゃない。なぜ戸惑わずにいれるのじや？」

学園長の問い合わせの意味がわからない。思わず笑顔を崩し真顔で書いてしまった。

「狂気君はただの子供ですよ。自分からは意地を張つて言い辛いけど本当の自分のことを知つて欲しい。宝物を傷つけられればすぐに怒る。意地つ張りで利かん坊。本人の前で言つたら殴られちゃうかもしぬませんが、高校生の割にとても純粹で随分幼稚ですよ」

怒りの理由（後書き）

瀬流彦さん 何か格好良くしそうた（＊ ＊）

高畠 いいといじり ド （。口。：） ン！-

学園長 何がしたいか不明（：） ウーン

一クマソさん&教授 影が薄い

刀子さん&ヒゲグラさん 未登場

ガンドルフイーー があああんどおおるうふいいいにい（（”
（メ）プルプル

弟子は3人（前書き）

そろそろ学園祭を始めたい . . . ” () , ,)

弟子は3人

「…………どうするか」

麻帆良学園における最大のイベントと呼べる学園祭が間近に迫ったあの日のこと、狂氣は心の底から落ち込んでいた。

喫茶マカイは一身上の都合により閉店します。

御観戻してくださいましたの方々には申し訳ありませんが田舎へ帰ることとなりました。すまないね。

特に将来がとても楽しみだつた彼。君の趣味に口を出さない私の様な心が広いマスターのいる喫茶店を頑張つて探しなさい

マスター ヘルマン

ありのまま起こつたことを話そつ。

ある日、行きつけの喫茶店に行こうとしたら潰れていた。なにを言つているのかは理解出来る筈だ。

頭が正常なら考えるまでもない。

幻覚とか幻とかそういう物よりも日本経済が恐ろしいことじだ。

濃すぎる思い出のあるこの場所がまさか唐突に潰れると成るなんて考えてもいなかつた。

この間の学園長室で起きた事件よりも大きいかも知れない怒りが込み上がるが何処にぶつけていいのか狂気にはわからなかつた。

喫茶店に罪はないだらう。マスターにも罪はない。日本経済だつて悪くはない筈だ。

「結局、人間が原罪を見つけることなんて出来ないんだよ。なんだよリンゴ食べたら楽園追放つて。アダムとイヴだつてきっと腹が減つて仕方がなかつたんだ。神つて奴がちゃんと餌やつてなかつただけじやないのか？」

「師匠、唐突に強烈な戯言を吐かないでください。宗教方面から苦情が来たらどうするのです？碌に神学の知識も無いくせに」

「どうしたのですか？・・・と、これなるほど。此處は閉店しましたのですか。狂氣さんの行きつけだつたというのに、残念ですね。その気持ちは分かります。私も通っていたぬいぐるみ屋さんがこの間閉店してしまい・・・」

「あー、アレは仕方がないんとちやうへ通つているのせっちゃんしかいなかつたんとちやうの？」

「それは私の趣味が悪いことですか。お嬢様」

「うーん。藁人形を専門に扱うぬいぐるみ屋さんつて、趣味以前の問題や。だつてぬいぐるみがないもん」

なにやら後ろに付いて來ていた弟子三人が色々言つてゐるが狂気の耳には入らない。

もはや呆然と立ち尽くしている狂氣。動搖を悟られまいと無表情を装つてゐるが口元が開いてゐるのが余計に痛々しい。

「取りあえず場所を変えましょう」

そんな狂氣の手を引いて夕映はゆっくり話せる別の場所へと歩いて行つた。

「で、なんだこれは？」

引っ張られ連れてこられた先で狂氣は別の意味で愕然としていた。ゆっくり話が出来る場所でコーヒーの置いている店ということでは確かに目の前の喫茶店は条件を満たしているが、しかしなんとも入り辛い。

幻想喫茶店 ? f a n c y?

「頭痛が痛い並みの重複表現じゃないか。ふざけているのかこの店は」

店内から流れてくる雰囲気はピンク色。客層は9割が女性である。入りにくいにも程がある。ちらほらいる男性客は一様にそのファンシーさに口元を引き攣らせている。

止めよう。ただでさえオーラが黒い自分は目立つのに（自覚があつた）こんな桃色に入り込んだら浮くどころの話ではない。そう思い踵を返そうとした狂氣にいつの間にかテーブルについてた弟子たちから声がかかる。

傍らでは店員さんが二口二口と自分の方を見ていた。

「・・・なるほどふざけて喧嘩売っているのはあいつらの方だったか。

弟子が三人そろって下剋上とは、いいだりつ。受けて立つ

もはや自棄に成った狂氣はまるで戦場に向かつかのよつた勇氏でテーブルへと向かつて行つた。

「意外とコーヒーが美味しいのがまた腹立たしいな」

「だから言つたでしょ。」しきう所はレベルが高いのです。何せターゲットである女学生は味につるむぞ」ですかり」

「外装は気にくわないけどな」

「それは男性と女性の価値観の違いです」

コーヒーで一服し冷静を取り戻した狂氣は隣に座る夕映に話しかけていた。

目の前では刹那と木乃香によるケーキの食べさせあいが行われていて正直直視しにくい。

「これですか？女の子同士では結構普通ですよ？」

だとしても男の前で行う物ではないだろう。何とも言えない居心地の悪さを拭えない狂氣はもう本題に入ろうとテーブルの周りに魔法結界を張る。

途端に店内の喧騒は消えうせた。

「刹那、木乃香。ラブコメののも結構だが帰つてからこじる」

「なつ、い、いえ私は別に！」

「はーい。じゃあ、せつねやん。続きはウチの部屋で・ね?」

「おおお嬢様の部屋ですか!-?」

「・・・神楽坂さんとネギ先生の部屋でもあるのですよ?何を想像してこられるのです。やっぱり刹那さんはむりつけなのですね」

「なつ、違うぞ夕映!私はお嬢様とは健全なお付き合ひをだな・・・」

「・・・はあ」

女が三人集まれば姦しいとは聞いていたがまさかこれほどひと悁わづため息が漏れる。

変な所で刹那と木乃香の指導を受けたのを後悔していた狂氣だった。

もはや一転三転した処でようやく静かになつた。

その途端に弟子三人はまるで責めるような視線を田の前の師匠に送つていた。

「どうしたんだ?」

「師匠、実は私達は先日にてンジャラスな事件に巻き込まれていたのです」

「そやで。ウチ何回も助けを呼んだのに狂氣さん来てくれへんかっ

た。助けを呼んだらすぐ来てくれるつてこいつのは嘘だつたん? 「

「氣絶してしまっていた私が言つことではありませんが、元爵位持ちの悪魔の存在に狂氣さんは氣づけなかつたのですか? 「

元爵位持ちの悪魔といふ言葉に驚きが走る。自分もそつだがエヴァにも気づかれずに麻帆良に侵入したというのだろうか。

だとしたら確かに強力な悪魔に違ひない。だがしかし、侵入に気づかないまでも助けを求められて自分が気づかないといつのはどうだろう。

あり得ない話じやないのかとその事件が起きた日を聞いて納得する。

不運にもその日はあの学園長室での一件と日時が重なつていた。

「ああ、悪い。その日のその時間は俺も立てこんでてな。気付けなかつた。ごめん、完全に俺の落ち度だ」

頭を下げる狂氣を見て刹那の木乃香は夕映に驚きの視線を送つていったが、夕映は静かに首を振る。

自分たちの師匠はこいつら人なのだと、その顔はどうか誇らしそうな顔をしている。

「狂氣さん程の人人が立てこむ事体とは、いつたい何があつたのですか? 」

「いや、もう終わったことだし樂しいことでもないからな。言つ氣はないから聞くな」

「はあ、わかりました」

穢然としないその言葉に追及したくなる気持ちもあるが抑えて、刹
那は頷く。

「どうじう言おうが既に悪魔襲来も学園長室での一件も終わったこと
であるし、今日話したいのはそういうじやないと話を終わらせてから狂氣はよしやく本題に入る。」

「单刀直入に聞くが、現状のネギの様子はどうだ？」

あまりにも真っ直ぐな問いに戸惑いながらもまずは夕映が答えた。

「可もなく不可もなくです。先に出た悪魔を倒したのはネギ先生で
もあるのですが、逆にいえば私やクラスメイト達が悪魔に捕まつた
理由もネギ先生にある訳です。何故か応援も呼ばずに一人で戦おう
ともしていました。まあ結局は勝つたのですから文句を言つことで
もないのかもしれませんが」

「つまりガキは相変わらずガキのままってことだな。いや、この場
合ガキのまま強くなつてゐることなのかな？・・面倒だな。刹那は
どうだ？」

「そうですね。強くなつてゐるところには同意します。けれど、
私から見れば少し妙な気がするのですが・・・」

「どうじう意味だ？」

「はい。その強さに精神が伴つていない様に感じます。コレは少し
変ではないでしょうか？」

「それがそななら、確かにな」

元来肉体的な強さと精神面の強さは並行するものの筈、肉体を鍛える過程で精神面は鍛えられるしその逆もまた然り。

精神を鍛える為に肉体を鍛えもする。だからこそ肉体が強くなれば精神も強くなる。

それが普通の筈なのだが、夕映と刹那はネギの子供っぽさは変わっていないといつ。

だがしかし、子供が元とはいえ爵位持ちの悪魔を相手に戦える筈がない。

「英雄の息子だから、は理由に成るか？」

正直にいえばわからない。素質はある筈だが結果に結び付くとは思えない。

一応はネギの師匠であるエヴァが何らかの手を貸したのか。それとも別の理由が他にあるのか。

考へてもわからぬなら別視点の意見も必要かと狂氣は木乃香にも聞く。

「木乃香はどう思つ？」

「…………」

「どうかしたのか？」

此處に来て狂氣はよつやく木乃香の雰囲気が変わつてゐるのに気づく。

この感じは慣れ親しんだ物。怒りだ。
自分は何かしてしまつたのだろうか？

「なあ、どうして狂気さんはウチらにこんなスペイみたいな真似させとるん? ネギ君のことが知りたいなら直接聞けばいいんと違うの?」

「ああ、何だそんなことかと狂気は安堵する。

そういうえば木乃香はネギと同じ部屋に暮らしているんだつたなと思ひだし、ならこんな真似を不愉快に思つのも当然かと納得する。

「夕映もせつちやんもどうしていつも」と言つん? ウチにはよく変わらんけど、ネギ君のことを悪く言つてるのはわかる

「それは、」

「その、」

「止せ。一人を責めるな。全部は俺が頼んでいたことだ」

不機嫌そうに顔を顰める木乃香とは対照的に狂気はあくまでも冷静に、口一杯に口を付けてから話を始めた。

「どうしてネギに直接会わないのかと聞いたな? 簡単だ。逢いたくないからだよ」

「それがウチにはわかんないよ。ネギ君は狂気さんに会いたがつていたんよ。お父さんの手掛かりを知つてゐるかもしねりいつて」

「やうなのが?」

問い合わせれば他の一人も頷く。

「エヴァンジエリンさんや茶々丸さんにもしつこい歸匠の居場所を
聞こうとしていたみたいです」

「それは、エヴァに悪いことをしたな。今度一度だけでも会ってみ
るか」

木乃香の眉間の皺が深まる。

「ネギ君のことばかりも思わへんの」

「ああ、思わないな。・・・はあ、そんな顔をするな。なあ、木乃
香。お前も父親から少しは聞いているんじゃないのか？俺はお前の
父親やネギの父親が好きじゃないってことくらい」

「それは、知ってるけど。・・・じゃあどうしてウチには優しくし
てくれるん？ウチが女の方やからとか言つたら怒るよ」

眉間の皺は消えたが頬を膨らませる木乃香を見て狂気はため息をも
らした。

説明ごとも不幸自慢も好きじゃないんだけどな、と。

「親の罪に子は関係ない。それはわかってる。だから木乃香とは仲
良くできるししようと思う。俺がネギを嫌っている理由は単純にネ
ギの行いに不快感を覚えるからだ。アレが麻帆良に来てからしてか
したこと一から十まで並べて言つてやるうとは思わないが、少な
くともアレは俺に嫌われるようなことをしでかしたんだよ」

嫌な物を思い出したと舌打けを零す狂気は苦々しげに続ける。

「注意力散漫、覚悟未熟、責任不備、思考停止、厳罰逃避、甘言遂

行、実力不足、そして何よりネギは弟子を泣かせる理由を作った。
笑えるだろ？そんな相手を俺はまだ一度だって殴つてないんだぜ？」

自傷的に笑みを浮かべる狂氣を見て木乃香の肩が少し震えた。

怖い。狂氣を初めて見た時の感覚を思い出す。

「頼むから子供だからじょうがないとか言わないでくれよ？そのくだけりは聞き飽きた。ネギはお前達の教師で神楽坂や宮崎の魔法の師だ。年齢がどうだろうが責任を持つ立場に居る。その責任を負えないなら最初から教師にも師匠にもなるべきじゃなかつたんだよ」

何処までも冷たく突き放す狂氣の言ひとは正しいと木乃香は理解できる。

だが、しかしとネギへの優しさも捨てきれない。前に見たネギの過去が木乃香の胸を疼かせる。

「でも、ネギ君は昔すこし辛い目にあつてるんよ。それでお父さんを探そぐと焦つてしまつのは仕方ないことや」

辛そうにそう言う木乃香。その横に居る刹那もどこか沈んでいる。隣に居るタ映もそれだけはそうではないじょうかと小さく呟いていた。

それを見ながら狂氣は二度目のため息をもらす。
やつぱりこいついう流れだよな、と。

「ネギの過去なら俺も知っているよ。ヒヴァに無理やり見せられた。悪趣味だから止めろと俺は言つたんだがな。面白い物を見せてやると笑いながら・・・アイツもかなりの悪者だつて久しぶりに思い出した出来事だった。その上で、俺の感想を言つていいか？」

たぶん、かなりひどいことを言つたと前置きし「一ヒー」を口に含んで脣を濡らせてから言つ。音の高低のない平らな声で。

「血の一滴も流れない、なんてきれいな悲劇なんだろうって思ったよ。あんな悲劇しか知らないで、惨劇を知らないネギを羨ましく思い。そしてサウザントマスターの育児放棄振りには呆れかえった。悪魔を吹っ飛ばして姉ちゃんに少し手を差し伸べただけのアイツはアレで父親のつもりなのか？泣いてる子供置いてけぼりにするのが愛情か？アレと比べれば、確かに俺の糞親父の方が何十倍も父親やつてるよ。そして」

あの光景を見て思ったことをただそのまま口に出す。
幼かつたネギの行動は年相応の物で責められる部分はない。
しかし、あの出来事の後ネギはいつたい何を感じ学んだのか、それを考えた時狂氣は理解できなかつた。
だつてそうだろ？。父親を探すと声高に叫んでいる今のネギは間違つてゐる。
その前にやるべきことがあるだろ？。

「今、ネギがするべきことはあんな父親を探すことじゃなくて石化した村人たちを解放する研究なんじゃないのか？」

その言葉に二人は声に成らない声を零す。

狂氣が言つていることは正しすぎる正論なのになぜ自分達は気付けなかつたのか、彼女達にはわからない。
ある意味では気づいてはいけないことだつたのかもしけれない。
ソレに気が付いてしまつては今のネギの行動の全てが不自然なものに見えてならないから。

「ネギは過去と未来しか見ていない。それが俺の思ったこと。英雄である父親に焦がれて、自分もそうなれる未来を夢想している。今現在も呪われている村人達が思考から抜け落ちている。まあ、現在と未来しか見ていない俺が言うことでもないんだがな」

話し終えた狂気は何でもない様にコーヒーを啜るが他の三人は何処か呆然と固まってしまっていて、少し見るに堪えない。

三度目に成るため息についてから諭すように言つ。

「今のはあくまで俺の考えだ。ネギにも何か考えていることがあるのかも知れないから、あまり囚われるな。お前達はお前達で自分が思つたことをやれ。ネギに手を貸したいなら好きにしろ。手に負えなくなつたら俺が助けてやるから」

憮然とした声。だがどこか心に沁みわたる声に安心した三人はそれぞれ言葉を返す。

そしてそれを見た狂気は思えばこんなファンシーなどひりで随分と暗くなつていたなと魔法結界を切つた。

途端に周りの喧騒が戻つてくる。突然のこと驚いている二人を余所に狂気はごく学生的な話題を切りだすのだった。

「いきなりでなんだが、お前達のクラスは学園祭で何やるんだ?」

へたくそ過ぎる氣の使い方に微笑を零しながら三人は言葉を返し始めた。

おまけ

「盤匠のクラスはなにをやるか決まつてこるのですか?」

「ああ、うん、まあ、たぶん」

「なんだか釈然としないですね。狂氣をさらしきない」

「実は寝てたからよく覚えてないんだよな」

「あー、駄目だよ。変なものこきまついたらどうする?」

「大丈夫だろ」

「・・・・・・やつして次なるフラグを立てる師匠なのでした」

「ボソッと不吉な」と皿のは止めり

弟子は3人（後書き）

魔法会編

お前が作った新呪文、「雷速瞬動」「常時雷化」はどれをとっても一流魔法学校の教授が腰を抜かすような一級品だぜ　d（
）b　グツ

いや、なら村人解放する方法考えてやれよ　＼（－・）ビシッ

思わず突っ込んでしまった瞬間

初恋と陰謀の詰まつた麻帆良祭は始まる（前編）

麻帆良祭編開幕！ヽ（ ）ヽ ランラン

完結まで時間はかかると思つが頑張りたいと思つ！ダッシュ！

＜(* - -)ノ

初恋と陰謀の詰まつた麻帆良祭は始まる

「なあ、H'arinの園つじいつこつ出し物だよ」

「違つわ。H'tenの園へ失樂園よ。ちやんと最後まで読みなせこよ。馬鹿なの?死ぬの?」

「お、お姉ちゃん。羅漢君に酷い」と黙だまつた。

「別にいいじゃん。」こいつあんたが教壇に立つてゐる間も寝てたのよ?クラスからハづられてる不良に唯一手を差し伸べてる心優しい委員長の話も聞かないなんて信じりゃんない

「なあ、クラスからハづられてる不良つてだれだ?」

「あんたでしようが!」

椅子から立ち上がり自分を指さしてくる女生徒に欠伸を漏らしながら狂氣は焼きそばパンを齧る。

その様子をみて激怒する姉を辛つじて止めている妹の眼には涙が滲んでいた。

呆れたようだため息をつき、田の前で暴れる彼女を諫めるよつかと思つたが止めにして狂氣は口ロツケパンに手を伸ばした。

「こもつぶおをこじめふえたのしこのふあ?」

「口に食べ物をいれながら喋るんじやあつません!」

「ぶふお、げつほ、げほつ、口に牛乳突っ込んでんじゃねーよ。ついにや泣かすぞ！」

怒りだした狂氣を鼻で笑いながら女生徒は演劇のよつに腰に手を当て口に手を翳し勝ち誇った口調で言つ。

「あら、怖い。クラスの真ん中で女の子を泣かせるだなんて。そんなだからアナタはクラスからハブられているんじゃないって？」

「・・・なんかお前キャラ設定が滅茶苦茶だな」

「お姉ちゃんは演劇部だから」

「それはあんまり関係ないだろ」

そう漏らしてから狂氣は椅子に座り直す。

なんだかもう自分が怒つて『いる』のが馬鹿らしくなってきたと再びパンを口に運び喋り出す。

「で、結局何なんだよ。学際でのウチのクラスの出し物は

「だからそれはね。要是幻想を打ち碎く樂園。天使たちの爛れた日常つて感じかな。要是嫌がらせ」「頼もーつ！」「は？」

話の腰を折る形でいきなり教室の扉が開く。

扉の前に居たのは引き戸なのにまるで蹴破ったように足を振り上げた形で君臨する美少女だった。

一見人形の様な儂げな容姿をした少女の登場にポカンと立ち尽くすクラスメイト達を余所に狂氣は苦笑いを浮かべながらも平然と少女に喋りかけた。

「こんなところまでどうしたんだ? にかかったのか? ていうかよく俺のクラスがわかつたな。エヴァ」

「いやこれで扉を蹴破ったのは三回目だ

「おじおじ。恥ずかしい奴だな

その様子に口元を吊り上げながらエヴァはまるで自分の家であるかのように堂々と教室に入り込み、狂氣の手を取つた。

「行くぞ」

「ああ、」

極めて短いやり取りの後に立ち上がり荷物を纏める狂氣。状況がわからなくて固まっていた女生徒が動き出した。

「ああ、ひっちょつと一・午後の授業はどうある気なのよ

「サボる」

「そんな平然と・・つてこいつかその子は誰なのー」

その間に狂氣が答えたとした時、エヴァは満面の笑顔で言った。

「恋人だ」

その後もいつ色々と面倒だったからすぐさま退却をし、此処は既にHヴァーの家。

頭の上によじ登るチャチャチャゼロは何時ものことだから放つておこう、ため息を漏らしながら田の前に面するHヴァーを見る。

「で、何があつたんだ？ わざわざ教室にまで来るなんつったらの用があるんだろう？」

「ああ、もう耐えられんのだ」

「耐えられないってなにが？」

「なにがって、ボーヤだよボーヤ！」

うがーとよくわからない咆哮を漏らすHヴァー。

「なんなのだ奴はー真面目に修行する気はあるのかー」

「いや、どうしたんだこきなー」

急にキレだしたHヴァーに若干引きながらも狂氣は落ちつかと鎮静化を図る。

囁つたが、無駄だったようだ。Hヴァーは拳を握り上げるとダンシングを足で踏みつける。

「修行中に茶々丸の胸部を揉むは転んでスカートの中を覗き込むは連れ込んだ小娘共を押し倒すは終いにや私が入浴中の所を覗きに来るわで、アイツは真祖の変態か！」

「へえ・・・・・・聞く限りは度し難い変態だな。ていうかあれか？押し倒した小娘つて俺の弟子が入つてんじゃねーだろーな。そうなら流石に俺も殴るぞ。いや、茶々丸にセクハラしてエヴァの裸を見た時点で殺した方がいいか。待つてろエヴァ、全ての元凶を消し去つてくる。不干渉が何だとかもう言つてらんねえだろ」「

狂気の口元がつり上がる。こめかみは痙攣し血管が千切れんじやないかとおもうほど太い青筋が浮き上がつていた。

ふざけているのだろうかネギは？いや、ふざけているんじやないとしても許せない。

アレは周りにそういうイベントを垂れ流さなきゃ呼吸出来ないサメかなんかか？

イベントを止めた瞬間呼吸が止まるのか？なら是非もない、そのままで呼吸困難で死ね。

未だかつてないほどキレた狂気を見て流石にまずくないかとおもつたエヴァは慌てて手を振り鎮静化を図る。

心境はさしづめ火山の噴火を心配する島民か。

「あ、あれだ、狂氣。そこまで怒つてくれるのは嬉しいんだが、私も少し言いすぎたって言つたか何というか。確かに全ては事実なんだがなんともな。だからとりあえず落ち着け。ほら、流石に昨日の今日で問題を起こすのはお前もまずいだろ」

「ソウダゼ。幸イ、俺ハナニモサレテネーカラ、落チ着ケ」

エヴァの真摯な説得とチャチャゼロの何処かズレた説得で取りあえずは冷静を取り戻した狂気は取り乱したと謝つてから苦々しげに口を開く。

「なあ、ヒガア。ネギの修行止めないか？なんというか俺の見てない所でお前達がそういうことになつてるのは、なんだか嫌だ」

ネギがエヴァや茶々丸、弟子たちにそういうことをしている光景を思い浮かべると胸に感じたことがない苛立ちが募る。同時に何故だか胸が締め付けられるような、感じたこともない不快感が如実に表れ狂氣の心を狂わせる。

「ああ、私だつて止めたいのは山々なんだが一応は約束だからな。約束を破るのは私の性にあわん」

不承不承とそうため息をつくエヴァになぜだか苛立ちを覚える。どうしてこの女は自分の思い通りに成らないのだろうか。

「

わからない。こんな感情を自分は知らない。
だがこれはよくない感情だらう。ヒガアに苛立ちを覚えるなどいつことだ。

何か自分に起きている違和感を感じながらも頭を振り自我を持ち直す。

怒りではない。自身を焦がすこの炎のような感情を狂氣は知らない。

「そこで相談なんだが……つて聞いているか？狂氣」

「ん、ああ、聞いてるぞ。なんだ？」

「ほら、あれだ。昔お前の親父に貸した巻物があつただろ。アレを返してもらえないか？アレがあれば今の私が出張らずとも昔の私がボーヤの修行を受けられるだろう

ああ、と狂氣は思い当たつた。

前に親父にエヴァとの賭けに勝ちブンデッタと自慢された巻物。彼女はあくまでも貸しているだけだと意地を張つてゐるのかと微笑する。

「だがアレに居るのは人工精靈とはいえエヴァだらへどもしきにしろ不快なんぢやないのか？」

「はつ、大丈夫だよ。過去の私に取つてはナギの息子であるボーヤの修行を行うことなど御褒美でしかないさ。大笑して引き受けるだらうよ。まつたく、成長しないとは恐ろしい物だな」

凄惨な笑みを浮かべそういうエヴァ。

彼女の心にはもう過去など無い。惚れていた男がいたということすら田の前の男に塗りつぶされた。

なら初恋に萌える少女には精々役に立つてもらおう。嘗ての自分をネギに売り渡す。

第一、言つ通り現在の私が不快と感じてゐるネギの師匠といつ立場だつて過去の自分からしてみれば御褒美だらう。

なら何の問題もないではないか。エヴァはさらに口元を吊り上げる。そんなエヴァを見て狂氣はあり得ないことだが少しネギの身を案じた

「あのエヴァが守つてゐるのは確か禁術なんだらうへ下手をしたらネギが死ぬぞ」

「なんだお前はボーヤが心配なのか？それともボーヤに害を成し裁かれるかもしれんあの私が心配か？」

意外だとばかりに首を傾げるエヴァを見て、狂氣は自分でも首を傾

げた。

「いや、まさか。俺がネギを心配する筈はないし、そのエヴァには逢つたことも無いんだ。俺は何を言つてたんだろうな。ああ、わからぬ。だが、エヴァの話はわかつた。アレがあればお前が不快な思いをしなくてすむつていうならすぐに親父に送らせるよ。その辺に打つ棄つてたから別にそこまで大切にしている物ではないと思うし」

「・・・・あの馬鹿。私直筆の秘伝書をその辺に打つ棄つてただと！たく、あれの価値がわからのか！」

その秘伝書をネギへの人身御供にする癖にと思いながらも口には出さない。

面倒なことに成りそうだし、狂氣が大切なのはあくまで自身が出会った淡い友情を育んできた今のエヴァであり、過去など知ったことはないのだから。

「お陰で簡単に手に入るんだ。いいじゃないか」

「まあ、それもそうだがな」

なにが不満なのかむくれるエヴァとは対照的に狂氣は嬉しさのあまり笑みを零す。

ともかくエヴァがネギに関することが無くなるのだ。嬉しいじゃないか。

なぜだかネギにエヴァや茶々丸は近づけたくない。
いや、正直に言えば異性に近づけたくない。

自分の頭の上に居る彼女のように俺だけの物に成ればいい物を。
最近に成り芽生え始めたこの屈折した感情がなんなのか、今の狂氣

にはまだわからない。

この時代は嫌いだ。私から見れば全てが夢にしか見えない。

麻帆良学園口ボット工学部の最下層にその少女は居た。

両手は忙しくキーボードをたたき続け、目は田の前に映るディスプレイに釘付けになっていた。

13もの画面が集合したディスプレイの一つで覗いていた光景を見ながら田を細め笑みを浮かべる。

「くひつ、やつぱり私の読みは当たっていた力。アボトーシズ自己破壊因子は確かに同士を蝕んでいる田」

特徴的な笑いを零しながら手足をバタつかせ喜びを表すその眼は笑つていながら何処か危うげにゆれていた。

「ずっと考えていたヨ。私の計画に存在した唯一のイレギュラーである同士をどうするか。とても悩んで送ったラブレターも無視されて振られてしまった。かと言つて私に同士を斃す程の力はナイ。けれど、これで

計画の綻びは解消された。むしろより強く強固なものに成つたと笑

いながら画面に映る愛しい彼の顔を撫でる。

笑顔だ。笑っている。私ではない誰かの前で。

けれどそれもすぐに終わる。あと少し、学園祭が始まればあの笑顔を向ける相手は私しかいなくなる。

「ああ、」

感嘆の声を出しながら火照つた身体を慰めるように唾を呑む。

「正しく貴方は私だけの騎士。^{ナイト} 私を守るために未来から来てくれたんダロウ」

問い合わせに疑問符はない。元より答えなど彼女の中では確定している。

だからこれはある種の自慰行為。火照つた熱をさらに関ぐするための物。

「鋼鉄の徒、兵器の英雄。そうであつた頃の同士は壊れてしまつたヨ。今君が胸に秘めている想いなどインプットされていなかつた筈ネ。戦争を行う英雄^{キハイ}に必要な物は決まつていて。祖国への忠義^{アイ}、戦友への友情^{アイ}、戦場への渴望^{ソレ}。だから、恋心は捨てた筈ダロウ」

少女は笑う嗤う晒う。異性への執着、支配欲。

純粹すぎる恋心を抱くことを覚えた彼を見て胸を高鳴らせる。
もしその愛の全てが自身に向けられたら

少女の初恋は燃え上がる。非道な行い。彼を人とも思わない自分。これも全ては計画の為だと言い訳をして、そんな罪深い悲愛に酔いしれる。

「ああ、私も同士を愛してあげたいネ。けれど、今の同士は私を受

け入れてくれないのダロ。なら、愛する前に先ずは壊そう。くひつ、
くはは。あははははは」

天を見上げ大笑する少女の狂氣は止まらない。
13のディスプレイに映る物を見ながら笑い続ける。

第78回麻帆良祭日程

世界樹伝説

ロボット総軍戦力

鬼神機化プラン

時空跳躍プラン

世界樹を愛でる会

まほら武道会

鋼鉄少年英雄詩

半人機兵の成長と自己破壊因子の関係性について
アボトーシス

プロジェクト愛しい人

プロジェクト魔法露呈計画

最終プロジェクト 幸福は終わり

そして彼の笑顔

第一プロジェクトこれは彼を奪うための横恋慕。

そしてその成就とともに第一プロジェクトは動き出し、最後は世界を救い愛しい人との口づけで終わる感動喜劇

それが超の計画した全て。

「まずは同士、君は私への恋に落ちるπ。必ずネ」

麻帆良教師陣との関係悪化

育ちつつあるネギ・スプリングフィールド

エヴァの師弟放棄

そして狂気に芽生えた新たな心

それもまたまな要因を孕み、遂に麻帆良祭は始じまる

初恋と陰謀の詰まつた麻帆良祭は始まる（後書き）

ネギの成長はこれから展開上必要なことだつたつ！（・、＼、・）

がが二三のをハリと仰へさせしに特許の権利

老夫たゞに私は気が一したのだった。ハオオオオオオオオオオ

エヴァ様じゃなかつたと！

エヴァがネギを弟子にとる / () オーノー

嫌気がさして精靈エヴァに放り投げる（「。□。」）「オーラー！」

カンペキつ！（＊　—　＊）ふふん！！

卷之二十一

けれども、ある読者様が放った矢はすごかつた。

「闇の魔法を教えるのはエヴァのヒミツだしお」

「いや、口上よ。
なんなんだよ、もしかして私如きが考えるこれから的发展全て読み
れているのかあつ！」

てつなつた。

狂氣の沙汰 學園祭始まつの日（前書き）

学園祭開始（^ ^）

狂氣の沙汰 学園祭始まりの日

『只今より第7・8回麻帆良祭を開催します！！』

学園祭の開始を祝うよしに飛び回る飛行機、どこからともなく立ち上る紙吹雪と風船。

街道を練り歩く仮装パレードに田を向ければつい魅入るつてしまつ。柄にもなく高揚する気持ちを抑えながら出されている露店を見て回る。

普段は奇異な視線を向けられる頭に人形を乗せているといつ珍妙な格好も今この時だけは見事に雰囲気に溶け込んでいた。

「なあ、何処か行きたい所とかあるか？」

浮かれているのを理解しながらも抑えられない。

毎年のことだが人目を気にせず（普段から気にしてはいないうが）街を歩ける麻帆良祭が楽しくて仕方がない。

それはすぐそばに居る彼女も同じ様で普段なら返つてくる嫌味もなく笑顔。

「イヤ、御主人ト合流スル前二狂氣ガ行キテ一一所フ回ツタ方ガ良インジヤネーカ。付キ合ツテヤルゼ」

「そつか、そだな。なら適当にぶらぶらするか

特に行きたい」とはないのだが好きにしていいと言つなら好きにさせてもらおう。

フラフラと歩きまわり学祭を回つていいく。本音を言えば弟子達の出

す出し物を見に行きたいのだが、ネギに会つてしまつ可能性を考えればあまり進んでいきたくはない。

自分一人の時ならばいいのだがチャチャゼロが一緒では色々と問題がある。

万ーにも取り乱してしまつたら無様としか言いようがなく、そんな姿を見せたくない。

矜持の様な物は出来うる限り守りたい。今さらの様な氣もするが。

「お、見ろよ、チャチャゼロ。ティラノサウルスだぞ。ロボットだけど」

がおーっと吠えるそれを見上げながら感嘆する。

正直こいついうものは嫌いじゃない。子供っぽいと自分でも思つが恐竜とか実際に燃える。

魔法界には竜種がいるがそれとはまた違つたよさがあつていい。さらによこれは本物ではなくロボットという所が実に萌える。

「樂シンデルト」「悪イケドヨ。アレ、コッチ一突ッ込ンテ来テネー力？」

「マジか？ つーかマジだな。ははは、見ろよチャチャゼロ。あれ口の中にカメラがあるぜ。目じゃなくて口で視覚する。ああいう生物学上あり得ない所に萌えるよな。たすがロボット」

「才前ノ変態的趣味ナンテシラネーヨ。ティウカヨー、ロボット萌エナノカ？ ソウナノカ？ ダツタラ妹ガ心配ダナ。姉トシテ。手ヲ出シタラ切り取ルゾ。何処ヲトワ言ワネーケド」

・・・それはかなり危機的事態だな。男として。

不機嫌そう口調に若干恐怖を覚える。本気じやないよな？

「嫉妬しているんなら安心しろよ。チャチャチャゼロだつて十分萌えるぞ」

「…………キモツ」

「おい」

そんなやつ取りをして居る間にも暴走しているロボティラノは向かってくる。

既に周り似た人々は避難し街道の端に集まっている。
にげるー、危ないー、ワアアー、キヤー

騒ぐ声が遠くから聞こえ、近くからは問い合わせが聞こえた。

「ブッ ハウスカ?」

「いや、言つたろ。これには燃えて萌える。壊すのはもったいない
だろ」

踏みつぶさんと向かつて居るロボティラノ。
頭上で振り下ろされた後ろ脚をそのまま片手で掴む。

片足立ちの姿勢を取らせり、無理やり停止させた。
そして周りに居る白衣の学生達に声をかける。

「これってビデオすれば止まるんだ?」

「ええええっと。そろそろ電池が切れるから勝手に止まるかと

「さうか。つと、止まつたな」

そつ言つてゐる間にも停止したそれを横に寝かせてから手を離す。周りの視線が面倒だからすぐにでも立ち去るか。

「なかなかいい見せ物だつた。次はトリケラトプスとか作ってくれ

「あ、ああ。悪い。ありがとうな

頭を下げる学生達を置いて立ち去る。
頭の上ではチャチャゼロが笑っていた。

「ケケケ。イイノカヨ。アンナ田立ツ真似シチマツテ」

「ああ、毎年のことだろ。今日は外部の人間も招き入れる学園祭。いつもより強力な認識誤差魔法が麻帆良全体に効いてる。あの程度のことすぐに忘れる。だからチャチャゼロ、今日は普通に立つて歩き回つても大丈夫だと思うが」

「イインダヨ。俺ハ此處ガ氣ニヘッテンド。ソレトモ邪魔力?」

「是非もない」

俺の頭の上がお気に入りだといつチャチャゼロからの嬉しい言葉も聞けたし、面白い物も見れた。

今日はどうしようもなく気分がいい。だがやはり、苛立つ原因は其処ら中にござがつてゐるようで、

「サークスの動物達が逃げ出したーツ」

イヤー キャー パオーン クエックエツ

「ゾウガメかアレ？カメが走つてゐつてぞ。すげーな」

「優サシク受ケ止メテヤツタラドーダ」

「冗談。動物はネ以外好きじゃない」

足を上げ、下を踏み付けた。途端に地面にひびが入る。
動物は好きじゃない（茶々丸が好きなネコ以外）が賢いところは嫌いじゃない。

少し力を見せてやればすぐにどちらか強いか理解する。人間より御しやすくてい。

「動くなよ。踏みつぶすぞ」

「オオ、怖エー」

大人しくなつた動物達の横を抜けて行く。
まったく苛立たしいな。見せ物なら見せ物らしく大人しくしていればいい物を。

牙をむきたいなら野生に戻れというのだ。
飼いならされた動物という所に虫唾が走る。
だがそれ以上に苛立たしいのは、

「やつぱり馬鹿な人間か」

「んだあ！？」てめーは。てめーから死ぬかあつ・・・

耳障りな声を漏らす不良の一人を黙らせる。
どうしてこう進む先々で問題が起ころるんだ？

「話モ聞力ネーデ、先手必勝ドコロノ話ジヤネーナ」

「進む先にガラ的に確実に巻き込まれる問題が起きてんだ。火の粉が降りかかる前に潰すのは当然だろ。それに・・・祭りで騒ぐのは勝手だが場所を考えろつて話だ。時代錯誤の乱闘なんて道端でやるもんじゅねーよ。白けるだろ」

「お、お前いま何しやがあつつ・・・」

白けるからもう喋るな。会話に入るな腹立たしい。這い蹲つて地面でも舐めてりやいいんだ。全員な。

「お、おい。アリヤ あの羅漢だぞ！？」

「げつ、こいつがあのバイオレンスドールかよ。マズイ

「暴力機巧・・・・」

「ま、待て。俺達はお前とやり合つ氣はあつつ・・・」

「テメーらが舐められるから面倒なことになつてんだろ？這い蹲れ。うざい」

言つただろ？全員地面でも舐めてろつて。

「ホント、情ケ容赦ネーナ。才前ノソウイウトコロガ俺ハ大好キダゼー。ケケケ」

「人を暴力の権化みたいに言うな。俺は情けもかけるし容赦もする。

時と場合は選ぶがなぜ

這い蹲ることにも情けはかけなかつたが容赦はした。
じやなきや今頃全員腸ぶちまけて死んでるよ。
だといふのに周りは騒がしくなる。面倒で仕方がない。
怒らせたくないなら苛々させないで欲しいんだが、聞き入れてくれ
ないのだろうか。

「こつたいてお前はどうした？なぜ泣く？」

「えうー、う、うべつ」

「どうしたんだ？」

道端で泣いていた子供に喋りかける。

無視しても良いんだが、なんともガキ未満の子供の泣き声は嫌いだ。

「ひうー、うう、ママ・・・・

「母親が？」

「へへつ・・えう・・ビト・お・・

「母親がいないのか？」

「・・・えうー、・・

会話が成立しない。

しきりに声をかけているが、子供は泣く夢中。

俺の袖口をしつかりつかんでくるから、聞うことひきつけられてんだ

ろづが。

「母親が、何処に居るかわからないのか？」

「つづ、ひべつ、つー」

「君の名前は？」

「ひぐわ・・さがじてよお

「・・・名前は？」

「つええええんー」

「・・・・・・

数秒の沈黙ののち、俺の行動はあっさりしたものだった。
子供の手を振り払い、立ち上がる。

「行くか。チャチャゼロ」

「ホツトイティイノカ？」

「え？・・・・や、まつて、お母さん探して」

立ち去るとする俺の後を追い、子供が服を掴もうとする。
だが、触れない。軽く身を翻し、小さな手をかわす。
つんのめつて子供が転びかける。

「・・・あつ・・・

「なまえ、は？母親が君に付けてくれた名前がひやんとあるだろ？」

「？」

「・・・歩」

「せつか」

静かに身を返し、俺は子供のもとへ戻る。
両手を差しのべ、抱き上げた。

本当に面倒だ。最初から素直に話していればいいものを。

「母親とはぐれたでいいのか？」

「うん」

「そつか。なら探そつ。いいか？チャチャゼロ」

「アア、好キニシロ」

「狂氣モ存外ニオ人ヨシダヨナーハ」

「・・・人並みの優しさを持つていてなにが悪い」

責めるように言われたら怒ればいいんだが何処か嬉しそうに言うのは性質が悪い。

どう反応すればいいかがいまいちわからない。

「ア、アソコテ売ツテルトマトジュースガ飲ミテー」

「了解」

子供を送り届けた後、軽い食事でもと思い喫茶店入ろうと思つたんだが行きつけのあそこが潰れたことを思い出し、意地になつて行くのを止めた。

ある意味では食べ歩きこそ祭りの醍醐味であるのだからいいだろ。

「ほり、これでいいんだろ」

「オウ、アリガトヨ。・・ツテ、コレ上手クストローガ刺サンネイ。クソ、コノ、」

「おいおい、零すなよ。「ガアアアア、ウツゼツ——」・・・おい」

チャチャゼロ、コイツあるうことか放り投げやがった。
人の頭の上でジユースを放り投げればどうなるか?簡単だ。こうなるんだよ。

「・・・・・血塗レーニルナ」

「言ひ」とはそれだけか?」

「服ガ黒クテヨカツタナ。目タネーヴ」

「顔の血塗れが目立つて見えんだる。しかも服はぐぢゃぐぢゃで氣持ち悪いんだけど」

「アーッ、ソノ、ナンツー カ悪カツタ」

「最初から素直に謝りやいいんだ。たくつ、コレ着替えなきやどうしようもねーぞ」

全身トマトジュース塗れで学祭を回りたくなんてない。
仕方がないから一旦寮に戻つて着替えるか。

「イヤ、ソウシナクテモイイミテーダゼ。アレデ着替工テ来イヨ」

髪を引っ張られ向かされた方向を見てああと納得する。
確かにあれなら都合がいい。

貸衣装 ハロウイン・タウン

入ったがいいが、なんというか派手なのが多いな。
正直どれも俺に似合うとは思えないんだが、どうするか。

「オイ、コレナンテドウダ? ケケケケケケケ」

無視だ。あんな黒いウサギの着ぐるみを持つて爆笑してるチャチャ
ゼロなんて無視だ。

今さら何だがコイツは欠片も反省してないのな。そうじやないかと思つていたけどさ。

「ソレトモコツチガイイカ?」

「もういい。黙つてう」

明かに女性用のウサ耳付きの服を進めてくるチャチャゼロを押しの

けて服を探す。

ぶつちやけ碌なのがない。着ぐるみは論外、軍服なんかが一番マシか？いや、さつきからチラチラ視界に入る執事服もまだまともか。

「オイ、コレハドウダヨ？」

「つぬせこぞチヤチヤゼロ。後ろもつかえてんだ。真面目に探し…つて、いいなそれ」

「ダロ？」

渡された服を手に取る。

俺でもわかるがこれはおそれりく何かの漫画かアニメのキャラクターの服だわ！」

仮装じゃなくて「コスプレじゃないかとも思つが、軍服や執事服も同じ様ものか。

それにこれの黒を基調とした色彩は嫌いじゃないしいいか。

「これにする。着替えるから後ろ向いて」

「イワレナクシタテ覗カネーヨ」

「一応だ」

着替え終わり貸し商店を出た俺はわりとじっくり来る服に安堵しながらも問いかけた。

「どうだ？似合つてるか？」

「アア、「似合つてる。つーか、似過ぎだろ」ア？」

答えたのはチャチャゼロではなくどこかで見たことがあるような気がする一人の女生徒だった。

ジロジロ見てくるのは善いんだが若干眼鏡の下の目つきが怖い。

「ビブリオンの黒司書に本氣ではまつてた奴なんて初めて見た。これやると大概の奴は服に引っ張られてあの暗い感じが出ねーんだ・・・あの、『写真いいですか？』

「あ、ああ。好きにすればいいだろ?」

「うわ、口調までそっくりって完成度高すぎだら。じゃあ、ポーズお願いします」

いや、ポーズなんて知らねーんだけど。

「手ヲ胸ノ高サマテ上ゲテ直立ダ。チゲーヨ、掌ハ開イテ表ガ上ニ向クヨウ」。・・・ソウ、ソウダ!!」

「おっ、必殺技這い出る言祝のポーズですね。ありがとう!」やっこます」

「あ、ああ。・・・・なんで知ってるんだ?チャチャゼロ」

「妹ガ前ニ見テテヨ。コノ服ガ才前ニ似合ウンジャネーノツテ、気付イタノハソノ所為ダゼ」

茶々丸がね。意外だがまあ、微笑ましいな。第一アイツはまだ三歳の子供なんだし。

ネコ好きだつたりアーメ見てたり意外と子供っぽいところが多いよ

な。

家事全般が凄すきで普段は気づかないが。

「終わったか?」

「はい。ありがとうございました」

「いや、これぐらい向むかない。じゃあ、俺もつく

「あつ、ちょっと・・・」

立ち去る所としたら袖を摑まれた。

「どうした?」

「これから暇ですか?もし暇ならこれからゲリラ的なコスプレイベ
ントがあるんですけど、出ませんか?コスの完成度も高いですし・・・
」

上を見上げる。チャチャゼロは笑つてゐる。

エヴァと茶々丸に会流する夕方まだ時間もある。

「まあ、暇だから」

「あ、じゃあいいです。付いて来てください」

取つあえず付いて行つてみる」と云つた。

狂氣の沙汰 學園祭始まりの日（後書き）

千鶴ちひやん祭場！

若干、原作より社交的になってしまったがそれは狂氣のことを同族だとおもっているということです。

狂氣の沙汰 — 日田の終わつ（前書き）

最近忙しくていけない

時間がないから一話分を一話で投稿。

「それで黒司書は作品の中でもルーランルージュを一時独房送りにしたキャラじゃないですか。だからファンの間ではアンチ要員でけれどそしたのには理由が そういう経緯がありたてこともわかつて一気に入気が爆発したキャラなんですよ。けどコスプレするには難易度が高すぎてあんまりやる人がいないんです。いや、大会出れば上位は間違いなしですよ」

会場の図書館島に向かつている最中ずっと喋っていた長谷川の話は何故だか俺がコスプレしているキャラクターについて熟知していることが前提だった。

正直チャチャゼロがいなかつたら付いていけなかつたと思う。

ようやくするどこのキャラのアニメの立ち位置は、世界の本を守るために戦い続ける主人公たちと敵対する幹部の中でも上位の力を持ち外道の部類。情け容赦ないその行動は味方であるルージュという少女すら巻き込み害を成すのだが、その実、実はその全ての行動が同時に新しい本より古い本を至高とする考えに基づいた物らしい。

『新しき物が至高と誰が決めた！温故知新を知れ小娘』がキメ台詞らしい。

聞いていてわかつたんだが俺はコスプレしているこのキャラは嫌いじゃない。

まだよくは知らないがようはそいつにはそいつに守りたい物があつて悪事に手を染めたのだろう。

そしてそれを欠片も隠さず堂々としているところがいい。諦める奴やうじうじしている奴よりずっと悪人らしく格好がいいじゃないか。

「あ、着きましたよ」

見回せばなるほど、いつのをコスプレイベントといつのか。

長谷川が聞いたら怒りそうだが、俺が着ている服と見分けが付かない服を着ている奴らも多くいる。

とこいつか本国の巨神兵に似た何かもいる。魔法使いの服着てる奴はもいるし、なんだが見慣れたような光景もあるな。

「和気藹藹か。楽しんでるようすでなによりだな。で、此処はなんにする場所なんだ？」

「メインはもうすぐ始まるコスプレ大会ですよ。って、げ・・・ち
よ、いつち来てください」

「あ、おー」

手を引っ張られて本棚の裏に引っ張りこまれる。
なんだいきなり。チヤチヤゼロ、嫉妬深いにも限度がある。髪の毛
を引っ張るな。

「どうかしたか？」

「ええ、ちょっと担任とクラスの奴が居て。くそ、どうじていんだ
よ。つーか、人混みの中で人の名前連呼するなっ！」

あつやーん あつめやーん あれ、いないんですかーあつめやーん

「くうう・・・」

「同情しよう。アレは恥ずかしい」

といふか担任つてネギか。何故俺の周りにはアレのクラス関係者が多いんだろうな。

学園長あたりの陰謀だつて言つたら納得もできるんだが、そうじやなきや星の因果が狂つてる。

「あの、悪い。私はもう帰ります。アレと出会いたくないです」

「いや、だが大会はどうするんだ?出るんだろう?」

「・・・私は出ませんよ。私が出たつて結果は目に見えてますし。リスクの高い勝負はしない主義なんで」

じゃあ手に持つてる衣装と思しき荷物はなんなんだろうな。
コイツがこういうのを大好きなのは初対面の俺にあれだけ馴れ馴れしいことから歴然なんだから、今さらなに恥ずかしがつてんだが。
苛々する。

「つーか、なんだお前。俺は大会に出させて自分は高みの見物決め込むつもりだったのか?いい御身分だな」

「いや、そういう訳じゃねーけど。私はあんたと違つて素材的にいつて「ぐぐぐく普通の女子中学生で見栄えもよくならない。無駄なことですよ」

「素材?見栄え?無駄?意味不明だな。よくわかんないけどコスプレってアレだろ。別に他人に見せる為じゃなくて自分が楽しいからやるじゃねーの?」

「そりや、 そうだけど「問答無用。ヤレ、 チャチャゼロ」へ？」

「リヨーカーイ。ケケケケケ」

突如動き出したチャチャチャゼロに驚いている間に長谷川の服は切り刻まれた。

誤解しないように言つておくがやつたのはチャチャゼロだ。
そして俺はしつかり田を背けて置いた。

「な、なななあああ！？ちよ、犯罪だぞこれ！？つーかなんでその人形動いてんだ！？」

「突ッ込ンデル暇ガアツタラ着替工タラドーダ？人ガ集マツテクル
ゼ」

「ちつ、くそつ」

布の擦れるとかぶつぶつ零れる呪いの言葉を耳に挟みながら周りを見る。

ネギは・・消えたか？目的の人にはえなかつたから帰つたんだろうか。よかつた。

「・・・・・・・・・着替え終わつたぞ」

「そつか。似合つてゐるぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・他
に言つこと無いのかよ」

目が怖い。掛けていた眼鏡が無くなつてゐるぶん迫力が増している

気がする。

「破った服代は弁償しよう」

「違げーだろ！謝罪しよ謝罪！いきなり女子中学生の服切り刻んだんだぞ！謝れよ！」

「シャザイ？アヤマル？なんだそれは、俺の辞書には載つてないな。お前は知つてるか？」

「サア、シラネ。アンマウルセート、ヤツチマウゾ」

「・・最悪だ。なんだこのコンビ、バイオレンスすぎるだろ」

「」「Jのキャラの性格はそういう感じなんだろ？」

来ている服を引っ張りながら言ひ。『

長谷川が本当のコスプレは性格まで成りきる物だつて熱弁してたら従つたのになにが不満なんだろうな？

「そつだけども・・・これじゃあマジドルージュの心境がわかるぜ」

口元を引き攣らせながら(吉川長谷川)。

ルージュって確か俺がコスプレしてるキャラに酷い目に会わせられるキャラだよな。

その服がそんなんだろ？か。髪型まで変えて、なんだかんだいってノリノリだな。

「ウケルー」

「・・・だからどうして人形が喋つてんだよ」

「気にするな。好奇心で殺されるぞ。あそこで動いてる5㍍越えの巨人よりはまともだろ。アイボとかアシモとかあるだろ。あの類だよ。それそり早く行くぞ」

「そりや、確かに会話能力ぐらい普通かもしないけど・・・って、引っ張るなよ。私は大会なんてでねーぞっ」

「お前の意思が絶対と誰が決めた！弱肉強食を知れ小娘」

「セリフが全然違げ―――っ！」

「つるさいな。抱えあげてやるうか。

「ちよ、離せよ」

「馬鹿、危ないから暴れるな。あつ、」

そのままステージに放り投げる。

いや、そこまで強引にするつもりはなかつた。
ただあいつが暴れるから。・・・ステージの上で固まつてるな。

18番 長谷川千雨さん 19番羅漢狂氣さん

二人揃つてキャラクターはビブリオン敵幹部
「ビブリオ ルーランルージュ」と「黒司書」！！

放送が流れる。いつの間にか頭の上に居たチャチャゼロが居ない。

ナイスだ。
流石は俺のチャチャゼロ。

長谷川の横に歩いて行く。動かない俺達に会場はざわめくが、仕方ないさ。

俺はこのキャラのこと素人に毛が生えたくらいにしか知らないのだ
から。

正直長谷川だけが頼りだ。

ପ୍ରକାଶକାରୀ

訛
お前が頼りだ

「う・・・?あ・・あの」
訳 立てじやねーだひ馬鹿

「なんだその眼は？反抗的だな。早く立て」
訳 後で幾らでも責める。だから早く助けろ

「すっ・すいませつ・」「ごめんな・さい・」
ダ、ダメだ。顔絶対真っ赤。やべーよ、オイ！ 寄り付いてるよ

「ほら、立派なビルだね。」
「あ、うん。

は、涼子が涼子に語られるか、この御身分か？」

「わたし……」「めん……なさいつ……」

訳 うっぐ、最悪だーつ 人前に出るとどうしてこんな マジで涙

出てきた

「……もういい！ 好きなだけ泣いていろ。俺はお前の泣き顔が嫌

いじやない

演技で泣けるとはすごいな。流石プロ。俺は普通に感心したぞ

終わった。長谷川の奴は名演技として俺は痛い奴確定だな。
別にいいんだが。いや、良くはないがこれもこいつは無理やり出した天罰なら、甘んじて受けよう。

かわいー

「は？」

「へ？」

わーーーつーかわいー かこつー ちうちゃんー しじょさまー！

素晴らしいです18番19番！

敵か幹部でありながら引っ込み思案なダメ幹部と
それを苛める外道幹部を見事表現！
これには会場も大満足

！

ワーイー！　　ワーイー！

優勝は満場一致で　　18番長谷川千雨さん、19番羅漢狂氣さんです！！

「そ、そつか。こーゆーのもアリだつたな。てゆーかきほんがそー
か。フ・・すで観客のニーズにバツチリ答えてしまつとは、流石私
だなーーー！」

「なんかよくわからんが、流石プロ」

よくわかんないまま大会を優勝してしまった。

全ての称賛は長谷川に向けられるべきだな、正直俺は立つていただけだ。

そういう訳で大会も終わりいまはトロフィーを抱えた長谷川が目の前にいる訳なんだが。

「ありがとな」

「いや、礼をされることなんてしてない。優勝出来たのはお前の実力だろ」

「けど、アンタが居たからっていうのも大きいし。強引だったけど一応御礼は言つておきます。ありがとうございます。ありがとうございました」

「まあ、わかった。あと、すこい今さらだけど敬語じゃなくていいぞ」

「……けど、アンタの方が年上だろ。いいのかよ」

「いいよ、別に」

全然問題はない。大体、最初は敬語だったけど途中から怪しくなつて、最後の方はまんまため口だったしな。

それに年功序列とか嫌いだ。どうして数年かそこいら早く生れただけの奴に敬語なんて使わなきゃいけないんだよ。

「じゃあ、わかった。羅漢つと、姓名は嫌いなんだっけ?なら、狂気か。あんたも私の名前を呼ぶ時は千雨でいいから」

「チウタン、ジャナクテイイノカ？」

「あんたは黙つてろ人形。せつかくスルーし続けてやつてんだから！」

「まあ、落ち着け。千雨はもう行くんだり？」

「ああ、そうだつた。早く行かなきゃクラスの当番に間に合わねーや。またな」

「ああ、じゃあな」

もう一度と会つ」とが無い方がお前としてはありがたいんだりつよ。顔を見ればわかる。俺と似てるよ。平和といつかいまの日常を千雨は愛してる。
俺みたいな^{ファンタジー}非日常とは関わらない方がいい。だといふのに、

「・・・気付イタ力」

「・・・ああ、あれは天性のものだな。幻覚、錯覚系統の魔法に耐性がある。普段ならまだしも学祭中にお前が動き喋ることに疑問を持てるなんて、かなりの強度だ。認知誤差の結界が効いてない」

憐れとしか言えない。いや、千雨自身に何の罪はないのだから純粹に可哀想か。

どちらにせよ神とやらは好奇心云々の前に猫を殺すのが好きらしい。それからの天罰を甘んじて受けようなんて考えてた少し前の自分を殴りたい。

「助ケネーノカ？人並ミニーお前ハ優シインダロ？」

「関わつてどうする。千雨からすれば俺は遠ざけたい物の権化だ。確かにアイツが魔法を知らなければ面倒事に巻き込まれることは多いだろうが、少なくとも厄介事に巻き込まれることはないさ。それに俺は殴つて解決しないことは苦手なんだ」

いまの弟子たちとは違う。

千雨のあれは後戻りできるものだ。長くてもあと4年か？それまで我慢して、麻帆良から出て行けばいいだけの話。俺に関するよりそいつすることの方がアイツに取つて幸せだろ？

「そういう訳だ。行くぞ、チャチャゼロ。そろそろ日が傾いて来た。エヴァ達と同流する時間だ。待ち合わせ場所は・・何処だったつけ？」

「タシカ龍宮神社ダロ？」

「まほら武道会予選会場？」
ザワザワ・・・ザワ・・・ザワザワ・・・ザワ・・・

日も暮れてきた頃、エヴァと茶々丸と合流するために待ち合わせ場である龍宮神社に来たんだが、何やら騒がしい。
立てかけられた看板を見れば面倒事の匂いしかしない文字。思わず引き攣る口元で希望的観測を漏らした。

「まさか、エヴァの奴、これに出るとか言わないよな？」「

「そのまさかだっ！」

声のした方向を仕方なく振り返るとそこには茶々丸の肩の上で仁王立ちするエヴァの姿があった。

なにをやつてるんだろうな？スカートだから下着が見えるぞ。

「ほんばんは。狂氣様、姉さん」

「ひひひ、頭を下げるな茶々丸。落ちるだろがつ。バランスを取るのが難しいんだぞ！」

「はあ、だつたらそんな珍妙な真似をするな。お前は何がしたいんだ？」

「この人混みだからな。お前達を探してやつていたんだ。感謝くらいしる」

「それには感謝してやつてもいいが……」

飛び降り見事な着地を決めるエヴァに呆れながらため息をつく。

探し方はもう少し別の物があつたんじゃないのか？

周りの視線が少し痛い。別に気にすることでもないんだろうから、いいか。

「もういい。それよりエヴァ。もう一度聞くがお前はこの大会に俺が出るといつのか？」

「ああ、そうだ。キヤツチフレーズが麻帆良学園最強への挑戦だか

「らな、お説え向きだろ?」

「それはあれか? とてつもなく高度な冗談かなにかか? こんな大会に俺が出たら試合の意味が消えるぞ。一般人じゃ逆立ちしたところで俺に傷一つ付けらんねーよ」

俺の言葉にエヴァは笑う。声は漏らさず口元のみを吊り上げるそれはまさしく悲惨な笑み。

こうこう表情を見ると正しくエヴァは悪のラスボスって感じがしてとても可愛い。

しかしそいつ反面、継いで出る言葉が不安でしうがない。

「安心しろ。これにはボーヤ達も出るやつだ。奴らなら運が良ければお前に突き指くやつ追わせられるだろ? よ」

「…………一応はお前の弟子だら?」

「もうソレは過去の私に投げた。私の知ったことじゃない。いいから出で。公式にボーヤをボコれる絶好のチャンスだぞ?」

心の底からため息をつぐ。大方暇つぶしの類なんだつが悪い冗談だ。

そんな真似をして、失態を晒し瀬流彦さん達に借りを作つてまで立てた不可侵条約が消えうせたらどうしてくれんんだ。

「止めてくれ。どういう積りだ。俺を怒らせるのが愉しいのか?」

「む、まったく、わかつた、わかつたから睨むのは止め。冗談の通じない奴だ。やれやれ、私はお前をそんなキレやすい子に育てた覚えはないぞ」

「俺もお前に育てられた覚えはねーよ」

肩を竦めるエヴァの隣では茶々丸が微笑ましそうに笑う。頭の上を足蹴りされていることからわかるがいまの「冗談はチャチャゼロのツボに入ったようだつた。

「実はな、さつきや二で全身をロープで覆つた変態にあつたんだが
」

「ロリコンの変態に襲われた? ああ、そいつをぶつ飛ばしてこればいいんだな? なら何も武道会なんて面倒な真似をしてくともいまから殴り飛ばしてきてやるよ。安心しろ、ばれなきや犯罪じやない」

「……人の話は最後まで聞かんかつ。そして誰が変態好きするロリだ!」

田の前で手を振り上げ怒っている彼女以外に誰かいるんだろうか?

「いいか、アレが変態なのは間違えないがただの変態ではない

「…………度し難い程の変態なのか? 流石に俺もそれは恐いぞ」

「違う。アレは 英雄だ」

瞬間、血が爆ぜた。血液が沸騰し全身の体温を上げて行く。
情けない。この程度で取り乱す自分を恥じながらも抑えられない。
が、こればかりは仕方がない。

「どうこうじだ? 英雄だと? なぜそんな奴が此処にいる?」

「知らん。昔からアイツの思考だけは理解不能だったからな。ボーヤに何か用でもあるんじゃないのか？」

「そいつは誰だ？詠春や親父、ではないんだろう？」

「ああ、お前も奴から聞いた事くらいはあるだろ。大魔法使いアルビレオ・イマ、重力魔法の使い手で正直性格の悪さはナギ以上だ」

「アルビレオ・イマか」

親父から聞いた話を思い出すが、変態という印象しかない。あの変態親父が変態というのだから度し難い変態だと思っていたがまさか口っこンの変態だったとは。

「変態変態イイ過ギダゼ」

「人の思考を読むな」

「頭ノ上ダト読ミヤスインダヨ」

「なんだそれ、こわいな

「で、どうするんだ？」

割つて入る形で首を傾げるエヴァを見詰め、一考するが、どうする？英雄という単語には虫唾が走るが昔ほどではない。

親父に精神的にのされて以来、一応は衝動を抑えられるレベルにはなった。

此方に手を出さない限りは放つておくのも手なんだが・・・

「考へている暇があれば自分の田で確かめればいいだひつ。爺共も大会に出るくらいで可憐されたと騒ぐほど馬鹿じやあるまい。諍いを起にしたくないのはあつちも同じはずだ。ならなぜお前ばかりが氣を使うんだ。情けない」

「それは、確かにその通りだが」

「それにボーヤを殴れるまたとない機会だぞ？」

「お前はそればかりだな」

とても良い笑顔でそういうエヴァにため息をつく。
隣で何故か茶々丸も嬉しそうにしているのが若干怖い。

「狂氣が言つたのだろう?私の裸を見たり茶々丸にセクハラしたボーヤを殴り殺してくれると」

それを言われるとお終いだった。

「・・・わかった。出よう。確かにネギは一度殴つて置きたかったんだ」

「ふつ、それでいい。行くぞ!我々エヴァ一家の力を見せてやるのだつ!」

「おーーです」

「オーダナ」

手を振り上げるエヴァに続く一人。

「いや、待て。一人も出るつもりか？」

「いえ、私は実況の仕事がありますから」

「俺ハ出レルカナ?」

「流石に無理だろ」

「なにをしている！早く来ないか！」

大人しくエヴァの後ろを付いて行く。

「まほら武道会」予選会は20名一組のバトルロイヤル形式!!

AからHまでの各組より2名ずつが選出!!

合計16名が明日の本戦に出場となります!!

板張りのステージの上に立ちながら放送を聞く。

幸運なのかどうなのか俺のグループはA、見知った面子はだれ一人いない。

エヴァや何故か参加していた弟子のひとりと戦わなくてすむのは嬉しいんだが、ネギやイマのいるBグループならネギを殴りイマを締めあげれば目的達成で本戦なんて面倒なものに進まずに済んだんだがそういうまくはいかないようだった。

くじにより20名そろつた組から順次試合開始！！

定員160名に達するぎりぎりまで参加受け付け中！！

麻帆良の強者のみなさん奮つて「」参加を！！

「一千万か、エヴァは知らんが俺からすれば大金だな。卒業後の旅費の足しにでもするか」

周りが五月蠅い中でそんなことを考えていると視線の先に弟子一号を見つけた。

取りあえず手なんかを振つてみたんだが、苦笑いを返されるだけだった。

「『テ』弟子の奴、どうしたんだ？」

「ソリヤ、オ前ノ半径1m以内誰モ近寄ラネー光景ヲ見タラ笑ウシカネーノ」

「周りの奴らに根性がねーだけだる」

あからさまに挑発するが誰も殴りかかって来ない。

むしろ舌打ちを零した俺を避けるようにさらに誰もいない輪が広がつた。

わかつっていたことだが、若干傷つく。

今の俺の格好は着ていたコスプレ衣装から学らんに着替え頭にはチヤチャゼロ。

誰が言い始めたかは知らないが、幻の不良だかバイオレンスドールだが暴力機巧などと呼ばれている基本的な服装。

少しでも威圧できるかと思つたんだが、効果できめん過ぎたようだ。とこつかこの会場に居るガラの悪い奴は全員殴つたような覚えもある

るのだから仕方がないのかもしれない。
アイツらも馬鹿じゃないということだろ？。

「しかし、楽でいいな。このまま数が減るのを待つてれば……へ
え、やる気がある奴いたんだ」

飛んできたパンチを掴みながら感心する。

何処の誰だか知らないがその勇氣だけは褒めてやりたい。
そう思い振り向いた先に居たヤツを見て、思わず笑みを零す。

「ヤベエ、燃える。チャチャゼロ、ちゃんと捕まつてやるよ」

「アア、ケドヨ。アレ、多分妹ノ弟ミタイナモンダカラヨー。ヤリ
スギンナ」

「わかつてゐる。言つたる。ロボットは燃えて萌える。壊しはしない」

ロケットパンチを飛ばしてきた大柄なそいつに向けて突っ込んだ。
柄にもなく高揚する気分が抑えられない。日中みたロボティラノも
かなりの物だつたがコイツはそれ以上に俺の琴線に触れる。

「これくらには避けられるか？」

人間で言つといひの達人クラスの速さで放つた周り蹴りは両腕でガ
ードされ後ろに押されながらも耐えられる。
いい、すごいいい。避けられるかとは言つたがあの体型だ。
できることならその鉄で出来た身体でガードして欲しかったんだよ。

「固いな。さすがロボ。本氣を出せ。」いつも乗ってきた

「了解シマシタ。デハ初動カラパワー全開^{マックス}デ」

口が開口し出てきた何かからビームが放たれる。

やばい、ロケットパンチにビームとか最高に痺れて憧れる。

「は、ははーいいな。それでこそ口ボ。やっぱお前、最高に萌えるはつーそら、今度は避ける」

「了解シマシタ」

放った氣弾。それを「イツは背中からホバーを出し人外な速さで避けてくれて、なんていいい奴なんだうと思ひ。周りではコイツのビームでむさ苦しい男共の服が脱げ地獄絵図が出来上がっているが気にすることなく大笑する。

「あははは！いい奴だな、お前。その機動力は現代じゃありえねえ、やっぱ茶々丸の弟か？」

「ハイ。T - A N K - 3 田中トイイマス。才兄様ト才呼ビシタ
方ガイイデスカ」

「お兄様？よく分かんないが好きにしろ。次で終いだ。根性を見せろつー！」

「了解シマシタ」

放されたビームを搔い潜り間合いを詰める。

ボディブローを叩きこむが半身を逸らされ、かわされる。

向かつってきたパンチを正拳で返せば相手がグラつき姿勢を崩した。

「まあ、」じんなもんか

顎を突くように繰り出した拳を寸で止めながら息を漏らす。断じてため息ではなく、感嘆の息だ。よくせつたと褒めてもやりたい。

「お前を壊したくない。引いてくれるか？」

コイツもロボならなかしらのプログラムで動いているとわかつているんだが、一応言つておく。
殴りたくないのも壊したくないのも本音だ。

「ア解シマシタ」

「・・・いいのか？」

「ハイ、上位命令アスノア

「上位命令アスニ」

「禁則事項アス」

案外呆気なく退いた田中は直ぐにステージの上から引いて行き、俺は一人残される。

上位命令アスニという意味だ。もつ一度聞いたところで禁則事項だといつならアコイツは教えてくれないだろうが、気になるな。

「まあ、いいか。それよそろそろ雑魚の始末を」

皆様お疲れ様です

本選出場者16名が決定しました

「あれ？」

気付けば終了のアナウンスが流れ、Aグループに立っているのは俺だけ。いや、端の方に辛うじて立っている無駄に顔の濃い男だけになっていた。

「どうなってるんだ？」

「才前ガハシャイデル間ニ大半ノ奴ハ余波デ吹キ飛ンデタゼ」

「・・・・それは、御愁傷様で」

本戦は明朝8時より龍宮神社特別会場にて！

今さらだが明日クラス当番がある、午後からだから大丈夫か？

狂氣の沙汰 麻帆良武道会（前書き）

なんとなく一人称でやつてみたけど、無理だ。

ムズい。・・・（：）うーん

次から3人称に戻します。

狂氣の沙汰 麻帆良武道会

ある口気が付いた時から不快だった。

ああ、痒い。汚い。どうして俺の腕は赤黒く染まる。

俺の体は俺ものなのにどうして他人を救うために戦わなくちゃならない。

遠に疲弊していた精神はその日を境に擦り減り始める。

完全と言われた鋼鉄は小さな傷を重ね疊り始め、戦うための兵器は逃避こそが至上だと計算を叩きだした。

膨れ上がる。自己愛、自己愛、自己愛。

かの英雄は既に壊れていた。

鋼鉄少年英

雄記より抜粋

日が覚める。口中にはえもいえぬ苦みが広がり不快感を感じさせた。

頭を手に当てれば冷や汗による冷たい感触。

はあ 息を吐きながら天井を見上げる。

「嫌な夢を見た」

最悪な日覚め。覚えてはいけないが悪夢の類を見たと断言できる。麻帆良祭の中日、何故そんな日に不快感を覚えないといけないので

「まほら武道会。ああ、やうこえはそつだつた。なら悪夢の一つや
ひとつ見るか」

「まほら武道会。ああ、やうこえはそつだつた。なら悪夢の一つや
ひとつ見るか」

面倒だ。それが素直な感想。

だが、エヴァと約束したことでもあるからサボれない。
そして、事実気になることもあるのだから仕方がない。

アルビレオ・イマの存在。あれは何だ。なにをしに来た。

考えたところでわからないのだが考えてしまう。

自分と英雄は相性が悪いと分かつているのだから、今回も何か不吉
なことが起きる気がしてならなかつた。

「イマの意図を掴む。それが第一目標。ついでにネギを殴る。それ
が次点。武道会で俺がすることはわかりやすい位に明白か」

立ち上がり伸びをして田覚まし時計を見る。

こんな早起きしたのは何時振りだつと自分に感心しながら着替え
を済ませ部屋を出た。

「こつてきまーす」

誰もいない部屋にかけられた声に、無論返事をする物はいなかつた。

「狂氣さん」

声をかけられ、振り返った先に居たのは褐色の肌に流れるよつた黒髪の女性。龍宮真名だった。

傍にある時計を見ればまだ6時前、こんな時間に何をしていたのか。片腕にはバイオリンケースが握られていた。

「こんな時間に、こんな場所で何をしているんだ?」

「それは私のセリフだよ。貴方がこんなに早起きするとは珍しい。殆ど寝ていなんじやないか?」

「確かにいつもよりは早起きだが、寝ていないうは言い過ぎだ。数えれば7時間は寝ている」

「え、だが、昨日の夜は遅くなつただろう?」

「昨日の夜?確かにエヴァの家に行つたが、どうして知つているんだ?」

龍宮の態度に狂気は首を傾げる。

前々から妙に大人びていて変な奴だとは思つていたが、煮え切らぬい態度を取る奴ではないのだが、そんなことを思つてゐる間も龍宮は頻りに眉を顰めて何かを考えているようだった。

「ああ、そういうことか。　超の奴、なかなかどうして大胆なことを

「超鈴音がどうかしたのか?」

「いや、此方の話だ。気にしないでくれ」

「気にしないでといわれても、気になるんだが」

目を細め顔を見ると龍宮は困ったように笑いながら人差し指を一本立ていった。

「困ったな。仕事のことだからあまり言いたくはないんだが・・・ヒントを一つ言つなら、狂気さん。貴方はもう一人の自分というものを信じるかな？」

「もう一人の自分？世界には同じ顔の人が三人は居るとか、ドッペルゲンガーとかいう妖怪の話か？」

「どう解釈してもらつても構わないよ。ただこつして狂気さんが私と話している時、別の場所では別の誰かと話している別の狂気さんが居る。言い方が少しややこしいが、そういう現象を信じるかどうかということだね」

困ったような笑みは消え、どこか楽しそうな表情でそういう龍宮。いつも以上に意味が不明なその問いを一考した後、狂気は不満そうに眉を顰めながら返した。

「信じないな。いや、信じたくないか。『自分以外の意思で動いている俺』を信じるかということだろう？ここで言うところの『自分』をいまこうしている俺だとして、その意思以外で動いている『俺』なんて俺は認めない。それじゃあただの木偶だろう。俺の意思がない

考えた末に一蹴したような答えを出した狂気に一瞬だけ呆気に取られた後、龍宮は心底おかしそうと笑いを堪える。

「ヒントのつもりだつたのだけれど、まさか的を射てくるとは思わなかつたよ。しかし、答えがわかつたところで信じないというのなら意味はないね。超がそこまで考えての行動だといつのなら本当にすごい奴だよ」

「なにをぶつぶつと意味がわからない。どうしたんだ？」

「いや、すまない。仕事のことですね。これ以上は言えなによ」

意味が不明の質問をした上に笑いながらそういつ龍宮に苛立ちを覚えた。

狂気は眉を顰めながら田を細め言ひ。

「感じが悪いな」

「狂気さんが苛立とうがどうじょうが、私には関係ないね」

辛辣な言葉を何処か嬉しそうに言ひ龍宮。

本当にこいつは仕事人だな そう漏らしながら諦めたように息を吐いた。

「それよりも早く行こうか。まほら武道会、狂気さんも出るのだろう? そろそろ開場時間だよ」

「ああ、わかつたから手を引っ張るな。たくつ、なんか何時もより馴れ馴れしくないか、お前」

「そうだね。心境的には完璧超人だと思つていた人の少し情けない姿を見て、母性が刺激されたのかな?」

「・・・意味が不明だ」

「ふふ、いいから行くよ」

そのまま手を引かれながら、狂気は龍宮神社へと向かつて行く。

「控室にはいかないのかい？」

「ネギに余つからな」

「ああ、なるほどね」

群衆のなか立ちぬくへしているとアナウンスが聞こえてきた。

只今よりまほり武道会第一試合に入らせていただきます！

「茶々丸。隣いか？」

「あ、ええ。どうぞ狂氣様」

解説席らしき場所にいる茶々丸の少し横に腰をかける。

欠伸を噛みしめる程に眠い。だれか早起きしたのを褒めて欲しいくらいだ。

「珍しいですね。てっきり遅刻をなさると思っていました」

「一応な。麻帆良最強の座。そんな子供っぽいものに

興味

がないわけじゃない」

「ふふ、そうですか。微笑ましいものです。しかし、そんな心配をせずとも最強の座はマスターと狂氣様の一翼でしょう?」

「一応といった。本命は別にある」

選手席に眼をやればネギや見知った嫌な面はあるが、フード姿の男の姿はない。仕方がないなと頷いてから今は試合を鑑賞しようと舞台の上に眼をやつた。

「これは ? 小太郎選手信じられないスピードで間合いを詰め・・!?

「 い 今のは掌底アッパーでしょうか! ? 少女の体が10mは吹き飛んだ つ !

何処かで見た顔が上空に打ち上げられ、水の中へと落ちて行く。やつた方の少年の頭には犬耳がついていた。
仮装かそうではないのかはわからないが、多分本物だと思う。だとすれば狗族だろうか。どうしてこんなところに? 」

「かの少年はネギ先生のお友達らしいです。少し前に京都から此方へ越してきたそうです。たしか彼は修学旅行の時、木乃香さんの誘拐犯の一昧だったはずですが記憶にはありませんか? 」

「・・・・覚えてないな。だめだ、あの時はテロ弟子の泣き顔とフ

エイトの無表情、あとヒュアの異常なはしゃぎっぷつくりしか記憶はない」

その三つの衝撃が凄すぎて正直、今までフェイト以外にも敵が居たなんてことは知らなかつた。

「だが、元敵を友と呼ぶか。昨日の敵は今日の友と。笑えるほどに優しいな、アレは。流石は英雄あんなモノを目指しているだけはある。田に映るもの全部を救うつもりか？」

「あんな小さな手では何時か取りこぼすのでしょうか。その時、溢れる者が哀れでなりません」

そんな会話をしていると次の試合、龍宮の試合が始まる。
相手は「テ」弟子が言うに一般人最強の部類、クーフェといつ名の少女だった。
楽しい試合になりそうだ。

口元を歪めている狂氣の表情を、茶々丸は何処か懐かしそうに見つめていた。

彼は私にとってとても大切な人間だ。

他の何者にも代えがたい、かけがえのない人。
恩がある、などという一言ではすまされない、大恩ある相手だよ。
おそらく、私が彼に対して生涯を掛け、何をしたところで、これで恩が返せたなど思うことは一生ないだろう。

血の匂いしかしない間違えなくどん底の底辺でもがいて居た時、差

しのべられた彼の手は、大袈裟でも何でもなく、ヒーローの救いの手に見えた。

今でも私は、あの出来事を思い出すだけで、胸の奥に熱いものが込み上げる。

あの戦乱の世で、人が人を救うなどととても嘘臭いことだけれど、それでも私は、あの日、彼に救われたのだと思つてゐる。どんな思いがあつたにせよ、どんな打算があつたにせよ、その事実が私の中で揺らぐことはないだろう。

だから私は、地獄のような数カ月をへて、ようやく彼に頼られるようになつたことが、にやけてしまうほどうれしかつた。

主と従者という関係で彼と話が出来る、それだけで十分だ、満足だ。それ以上の関係なんて、とてもじやないがあの頃の私は望まなかつた。

私程度の小娘は、おそらく話が出来たというだけで感謝を捧げなければならぬ相手なのだと、嘘偽りも無く今も思つてゐる。

無論、かといって、彼がお高くとまつた男性なのかと言えばそんなことは全くない。

そこを誤解されでは困る。

むしろ、私は彼ほど善良な人間には生れてこのかた会つたことが無い。

それこそ、現代の物語で読むヒーローという人物の大抵はこれ以上も無く英雄然としているけれど、私の知るヒーローは、自分の所有する才能、能力をもつと自覚するべきだうと忠告してしまうほど、過剰なまでに誰に対しても公平だつた。

なにもないあの地で地べたをはいざり回つていた私に手を差し伸べてしまふほどに。

英雄の中の英雄。

誰からの受けもよく、仲間からの信用も厚い。

真面目である以上に、とても面倒見のいい性格。

少し女心に疎い位しか、あげつらえる欠点が思い付かない。

確かに、彼の夢は控えめに言つても夢物語で、大仰に言えば荒唐無稽な戯言の類。

けれど彼はそれを公言し続けた。自分でも叶わないとわかっている夢を追い続けていた。

恥も外聞も無く、言つてしまえば、私はそんな彼に惚れたんだ。

一目惚れだったなどと、言つつもりはない。

けれど、一度目に見た時には、もうすでに好きなっていたのだろうと確信する。

だから、あの輝かんばかりの笑顔を思い出す度に、私の目は何時も、彼の姿を探している。

好きといつ言葉なんて、もづ言ふる筈も無いのに、無意味な行為をくり返す。

私の初恋は叶わなかつた。いや叶うとか叶わないとかいう以前に、始まりすらしなかつた。

私がこの思いが恋心だと理解出来る年頃になるころには、既に彼は何處にもいなかつたのだから。

あまりにも理不尽な別れだつた。何度泣いたか分からぬ。

何度も泣いても、なんどあの名を叫んでも、もう彼が笑顔を私に向けてくれることはなかつたけれどね。

操を捧げようと思った。もう会えないけれど、私は彼を確かに愛していくて彼もまた私のことを大切な人だと言つてくれたことがあつたから。

理不尽な別れを恨んで、恨み続けて、この胸にあるあの思いは消えることがないのだと確信していたから。

けれど、どうやら私はそんなに綺麗な女ではなかつたのだと昨日理解したよ。

あの時、彼に対して抱いていた恋心は片時も離さず身に着けていた口ケツトから目の前にいる彼へと移ってしまった。

なあ、龍宮

そう呼び掛ける声は何時ものよつに撫然としたものではなく、口元は緩み、常に苛立ち映っていた目は何処までも禍々しく揺れていた。私は悟った。目の前にいるのは何時もの彼ではない。私の知っている彼じやない。

けれど、慄然を促すその声は確かに怒りに燃える彼が出す声だったから、これから紡ぐ言葉は本気なのだと理解した。

一つの世界を、救つてみないか？その胸に秘める愛で

私の初恋の彼は彼の様に禍々しくは笑わなかつた。

私の知る彼は初恋の彼の様に夢を語る人じやなかつた。

けれど、その言葉は紛れもなく彼の言葉で彼の声で語られた言葉だつたから。

私は彼に恋をした。人生で一度目の恋に落ちた。

彼の眼に映るのはたつた一人の女性だと理解しながらも叶わない恋に身をゆだねた。

「なるほど、浸透勁という奴か・・本当にやるじやないか。ク、見直したぞ」

「いやあ、まだまだアルよ」

腹部に叩き込まれた掌から内臓にかけて激痛が送り込まれるのを感じた、完敗だ。

羅漢銭なんて大道芸まで出したのにこれとは少し情けないが、いいだろう。

口元の笑みを絶やす必要はないさ、私は確かに彼の期待道理に動けたのだから。

古菲選手勝利　！　龍宮選手を下し2回戦に進出です！！

皆様　お待たせいたしました！！

板の張り替えが終了しましたので第五試合に移らせていただきます

それにしてもレベルの高い大会になつてきました！！

「狂氣様　出番です」

「ああ、わかつている。わかつているが、そつか。相手はアイツだつたな」

思わずもれる舌打ちを隠さずに舞台の方へと向かっていく。
背にかけられる慰めの言葉に手を上げて返事をしてから舞台上に立つた。

対面する形で向き合う東方には俺のことを親の敵であるかのように睨みつけている女が居た。

西方、聖ウルスラ女子高等学校2年

高音・D・グットマン選手！

東方、対するは神楽学園高等部3年
羅漢狂気選手！

互いに今回のような格闘大会に出るのは初めてな為
その実力は未知数だがしかし！
狂気選手は麻帆良最強と名高い不良生徒！
眞面目な委員長タイプである高音選手が何処まで喰らいつける
のか

第五試合ファイト！

何処かで見た、確か夕映と同じクラスの放送部部員の試合開始の合図が鳴つても対面した女は動かない。
思わず苦笑を漏らしながら声をかける。思つことはあまりないが、
これはただの嘲りだ。

「どうしたんだ？高音。お前が俺に勝とつたら、これはもう
開始直後の不意打ちくらいしかないだろ」

「ふざけないでください。不意打ちだなんて、そんな卑怯な真似を
私がする筈がありません！」

「不意打ちが卑怯か。まあ、その考えは嫌いじゃねーよ。けどさ、
好き嫌いで負けてたら世話をねーよな。お前じや俺の足元にも及ばない、
勝つ氣ないならわざと降参してくんねーか」

「あ、あなたは相変わらず私を怒らせるのが大好きみたいですね」

「まあか、んな変態じやねーよ。お前にそなんで顔紅くなつてんだ
？罵倒されて感じたか？マゾか？変態か？救いようがねーな」

「だ、だだだ誰が変態ですか！もつこです、喋るな馬鹿…その腐
った性根を殴り殺してあげます！」

「おこおこ、殴つた上に殺すなんて物騒なことこいつなよな」

「お、おーい お二人わん
試合を始めてください

解説者席、そこは文字通り試合を解説する者が座る席。

茶々丸と時代錯誤な学生服に身を包んだ漢、男ではなく漢、豪徳寺
はその席に座つていた。

「いやー、まさか羅漢の奴が出場しているとは驚きです。これは高
音選手の実力次第では面白い試合になるかもしませんね」

「豪徳寺さんは狂氣を、いえ羅漢選手のことを知つておられるので
すか？」

「ええ、絡繆嬢にはあまり馴染みはないかもしがれませんが高校生の
間では有名ですよ。羅漢の名は。バイオレンスドール、暴力機巧、
デス眼鏡高畠と並んで恐れられている存在ですからね。曰く、最強
の不良。かくゆう自分も一度喧嘩を挑んでぼこぼこにやられました
から。ははは」

「では、やはり羅漢選手が有利と考えていいのでしょうか？」

「はい。高音選手には悪いですが自分は羅漢の奴を押します。正直、アレは人間とは思えないほど強いですから」

「となると、この試合で羅漢選手の勝利。次の試合が順当に行くのなら勝者はやはり高音選手でしょうから、準々決勝では最強の広域指導員対最強の不良といつ好カードが切られるということですね」

「確かに、高音選手や坊主には悪いですが夢の対決が実現するでしょうね。正直、今大会最大の目玉になるかもしません」

以上、解説席からでした！

高音とぐだぐだやっている内にいつの間にか解説が流れていた。
とこりか茶々丸はアナウンサーやってたんだな。

この試合が始まるまでは俺が話しかけていた所為でなにもやってなかつたきがするんだが、悪いことしたかもしねない。

「にしても、随分アウェイだな、高音。いつもとは逆の立場じゃねーか。どんな気分だ？マギスティルマギ立派な魔法使い候補生」

「別に何も感じません。凡夫には好きに言わせておけばいいのです、正義の使者たる私が万人に受け入れられる存在でないことはわかりきっていること。私を讃えるのは私と同じ正義の炎を胸にもつ選民だけで十分ですし」

思わず浮かぶ苦笑いを止めない。選民、選民、正義の使者、選ばれた存在。

そんなことを声高に叫ぶ声には虫睡が走るが、あり方だけは嫌いじゃない。

目の前の奴には奴の信じる者があるということだけだろう。

それを押し付けてくるタイプの Gandalf なんかは大嫌いだが、そうしないコイツにはまだ好感が持てるというものだ。まあ、コイツからしてみれば正義や英雄紅い翼を信じない異常者である俺なんか枝葉にかける必要がないということなんだろうが。

「高音。お前は俺が嫌いだろうが、俺はお前がそこまで嫌いじゃねえわ。Gandalf 一一やネギが俺の敵なら、お前は好敵手だ。ライバルまあ、致命的な弱点を抱えちゃいるが」

「ふん、わかりきったことを言つていいく気にならないでください。私は正義の使者、あなたは傲慢な悪役。そんなこと 2 年前から知っています。ですから、覚悟なさい！ 今日こそ私の鉄槌があなたを潰します！」

叫びながら突っ込んで来る高音。速度からして戦いの歌カントウス・ベラーカスでも使っているんだろう。

繰り出される拳は黒い影愴で覆われ威力を増していた。当たれば岩石程度簡単に碎けるだろうそれを避けながら笑う。

ああ、本当にお前は好きじゃねえが嫌いじゃねえ。

これがもしネギなんかだったら観衆の中目撃されることも意に反さず、派手な魔法を使うんだろうが、高音はしつかりと周りを慮つていた。

「だから、なあ。それがお前の弱点だ。俺は悪役なんだろう？ それをお前は倒すんだろ？ なら、周りなんか気にすんじゃねえよ。意を通せ、塵芥誰かなんて氣にもせずめーの力に酔いしれてろ。それが、英雄ヒーローだろ。だが、出来ねえお前。優しすぎんだよ、高音」

大体、学祭中は世界樹の恩恵で強力な認識誤差が働いてる。
結構派手にやつたつて大丈夫だろーが。

そう耳元でささやくと、それに気付いた高音は狼狽する。
その様子を見ながらまた思つ。ああ、やつぱり俺は「コイツが嫌いじ
やねえ。

そして、カウンタ をいれるようにその顔面を殴り飛ばした。

観客からすればそれは見たことのある光景だった。
第一試合で吹き飛ばされた少女と同じ様に高音は吹き飛んで水の中
へと落ちへ行く。

ただ一つ違つ点があるとするのなら、それは吹き飛んだ理由が風圧
などといつ生優しいものじゃないということ、勝者は沈んでいく
敗者に助けようという気がまったくないという点だった。

会場が静まり返る。なんだ? どうしたんだ? 首を傾げながら周りを
見渡すが、理由はわからない。

何時までも見せものの様に舞台に立つていたくはないんだがな、審
判兼実況をしている少女の方へと振り返る。

「おい、俺の勝ちでいいんだよな?」

「え、ええ。っていうか、やりすぎでしょ! 女の顔を殴り飛ばすな
んで、何も感じない訳つー失格にするわよ!」

何処かで見たことがあるような奴は何やら一きなり喚き始めた。
なに言つてるんだろう? 「コイツ? とか思つ。俺は何もルール違反はし
てないんだがな。

「阿呆か。女の顔殴るのが反則なら、そう最初っから殴つておけよ
ため息をついてから舞台を降りて行く。背から聞こえてきたのは投
げやりな勝利宣告だつた。

「なあ、なんだこの空氣。周りからすげー睨まれてる氣がするんだ
けど、俺が勝つたんだよな? なんでなんとか起き上がりつた高音の方
が拍手されてるんだ?」

ネギと顔を合わせたくないから選手席に戻らず観客席に戻る。
水の中に沈んで行つた高音救出の為、一時試合中断させた暇をぬつ
て隣の茶々丸に当然な疑問を投げかけるが、茶々丸もわからないよ
うで首を傾げるだけだつた。

「そりや、当然でしょう。完全に悪役でしたよ。羅漢さん」

俺も茶々丸も首を傾げる中、答えてくれたのはいつの間にか傍に座
つていた千雨だつた。

昨日とは違い、服装は普通の学生服。その上で眼鏡を付けているか
ら、正直凝視しないと誰だか分からなかつた。

「そ、そんなに睨まないでください。私が言つたのは一般論なんで
すから」

「いや、別に睨んでいるつもりはないんだが、悪い。それより悪役
つてどういうことだ? 俺は何の反則も犯さずスポーツマンシップに
則つたつもりなんだがな」

氣も、羅漢シリーズも、魔法すら使わなかつた。手加減としては上等だし、事実高音も大きな怪我はしていない。
顔が大きく腫れあがつてゐるくらいだ。

「スポーツマンシップに則つた奴は女の顔面を躊躇なく殴つたりしませんよ」

「女の顔面は殴らないでくださいなんてルールには書いてなかつたぞ」

「ルール以前の問題といつうか、一般常識なんですけどね」

「長谷川さん。狂氣様に一般常識など求めてはいけません。この方は常識を超越していますから」

「あ、なんだロボ子、じゃなくて絡繆。お前、狂氣さんと知り合いでないに言うんじやねーよ」

「あ、なんだロボ子、じゃなくて絡繆。お前、狂氣さんと知り合いでないのか?どういう関係だ?“様”付けなんて

「ええ、実は・・狂氣様は姉さんの恋人でして」

「えつ?へ、へー、そなんだ。ふーん・・・・ていうか、お前に姉とか居たのか?ロボ子じやなかつたのか?」

「おい、何無視してんだよ。といふか、話が逸れてるだろ」

危ない方向に突つ込む始めた千雨^{フアンタジー}。コイツはアレだな、体质以外にもこういう好奇心とかも非日常に突つ込んじまう原因だわ。

そういう言えば有能くせーから手に負えねえ。

「あー、はいはい。相手をしてあげますから眼鏡を取らうとするな。まったく、子供みたいなことする人ですね。私の中の貴方に対するイメージが崩れましたよ、今」

「・・・俺だつてやりたくてやつてんじゃねーよ

お前の為に話を脱線させいやつたんだ。

「ならやらなきゃいいでしょ。で?何の話でしたつけ?」

「どうして女の顔殴つちゃいけないのかといつ話だ

「普通セツドシヨ?」

「なら、女は男の顔殴つていの?不平等だろ。時代は男女平等社会なんだろ」

「それは、まあ、そうですが。・・あれですよ、顔は女の命つているでしうつ

「それを言つなら髪じゃないのか?大体、命つていうなら金的も禁止をルールに入れるべきだろ。男の命だぞ?」

「あー、金つづ・・なに言わせる氣だつー

・・・おもつ糞顔面殴られたんだが、いいのかこれ?平手じやなくてグーだぞ。

「狂氣様、長谷川さん。漫才はそれくらいにして、そろそろ次の試合が始まる様ですよ」

茶々丸の言葉で舞台上に田を向ければ、ネギと高畠が立っていた。
高畠は何やら気色悪くにやけて居て、ネギは緊張しているのか固くなっている。

それではみなさまお待たせしました

第六試合 ナンバーワン！

そうして、最高最悪の試合が始まった。

「お、おこ。なんだよアレ」

隣にいる千雨の顔が青くなっている。

たくつ、ネギがどうしようも無いのはわかつていたが高畠まで気づかなかつたのか。

幾ら世界樹の加護があるつとも、認知誤差結果が効かない奴だつているんだぞ。

「オカシイダロー今リアルタイムトンデモ衝撃映像・・・つかなんで周りの奴誰も気づいてねーんだよー！」

「ひめむせこや、千雨。田立つている」

「だつて、あんなの高畠死んだんじゃねえかーて・・・なんで無事なんだよー！」

「黙れ。死にたいのか？」

「うへ、」

立ちあがつた千雨を無理やりに座らせる。

「なこにも気づくな、疑問を持つな。今の光景は全て泡沫の夢だと
思え。そもそもば、喰われるぞ。お前が大嫌いな現実に^{リアル}」

「ど、どこの意味だよ」

「疑問を持つなど言つたらう。好奇心はお前を殺すぞ。今日の前に^猫
起きているもの全て、ヤラセだ。それで納得しろ」

「・・・・・」

うなだれるより、いや恐怖心からか膝に顔を埋める千雨。
やつきれいな。今は麻帆良での俺の立場が前より不安定な所為で、
派手な動きもできはしない。

「学園祭が終わつたら、納得させてやるから。今は耐えろ」

学園祭が終わつたら、全て忘れさせてやる。

「ああ、わかった」

霸氣のない声が耳障りに聞こえる。
ああ 苛立たしい。

狂氣の沙汰 麻帆良武道会（後書き）

次回、武道会編完！
・・・・て、2話しかやつたねえw(˘◡˘)wおおっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3692x/>

バグキャラを継いだチートキャラ

2011年11月20日08時23分発行